
もしかしたらの神様。

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしかしたらの神様。

【Zコード】

Z1568E

【作者名】

takao

【あらすじ】

お堅い理系女子大生の前に、中学時代の一つ年下の後輩が突然現
れた。可愛かつた筈の少年は青年へと成長し、やたら彼女を口説い
てくるが、そんな彼の隠された真意とは……？コミカルで甘甘な展
開ですが、「もしかしたら」の言葉をテーマに、まだ大人になりき
つていらない大学生の恋や性に対する心理や不器用な葛藤などを描け
ればと思います。

第1話 再会（前書き）

時にR15レベルの性的な表現や、不倫、家庭不和に関する表現が出てきますので、苦手な方はご注意ください。（シリアルスなシーンもありますが、ストーリー自体は明るく進行し、コメディ表現もあります。）

第1話 再会

『もしかしたら……かもしないじゃないか』

たつたひとつの一言葉が人の心の一番弱い部分に入り込んで、幻を見せる。

「なかつたこと」を現実のように見せる。

それは、人をそんな風に惑わせる魔法の一言葉。

五年前のあの日、少年を、少女を惑わせた言葉。

・・・・・

某国立大学内の新しい校舎が立ち並ぶ中。築三十年にはなるであろうにいつまで経っても建て直しの計画が無い、貧乏理学部棟のとある研究室にて……。

「だー、もー！ お前ら邪魔！ 何もしないなら出てけ！！」

肩までの軽くウェーブの掛かった黒髪を二つに分けて束ねている、ロングスカートに白衣姿の女性が、研究室内の青年たちに怒鳴りつける。

「何もしねえならつて……そんじや今日のテーマは『美味しいコーヒーの淹れ方』ってことで。ゼミ長、コーヒー淹れて」

研究室の中央でだるそうに頬杖をつき、ノートパソコンを触つていた、両耳に五つのピアス、短い赤髪の青年が、小さく人懐っこい眼を彼女に向けて言う。

「誰が淹れるか！ 第一、光、今日はホストのバイトとか合コンと

か援交とかいいの！？」

手伝わない上に人を顎で使うなら出て行つて欲しいと心から思つたその白衣の女が、赤髪^{ヒカル}の遊び人・光^{ヒカル}に怒鳴ると、

「そんじゃいいよ。弥栄^{ヤサカ}、淹れてー！」

光は祇園の質問を無視して、この狭い上に物が多い研究室では居るだけで場所をとる、身長一八〇センチをゆうに超えた横幅も広い大柄な青年に向けて要求する。

弥栄と呼ばれた青年は、アルバイト先の塾のテスト採点の手を止めるとのつそりと立ち上がり、三人分のコーヒーを淹れ始めた。

「……ゼミ長、ブラックでいい？」

「なんでも、いーよ……」

弥栄にゼミ長と呼ばれたその白衣の女・高野祇園^{タカノギヨン}は、マイペースな二人に頭を押さえながらふらふらと隣の実験室へと入つていった。

そしてセットしておいた分析機器の残り時間を確認するのだが

。

「たつだいまー！ 愛しき生徒たちよー！ お土産だよー！！」

隣の研究室でそれ以上にマイペースな男の声が響いた。

「おかげり教授ー」と言う光の声を聞きながら、いい加減彼らの相手をするのも疲れるので、このまま静かなこぢらの部屋に居ようかと思っていた祇園であったが、

「祇園ちゃんー。おやつだよー！」

とその新しく入ってきた中年男があまりにもひつるさいので、

「お帰りなさい……斯波^{シバ}教授」

彼女は渋々と狭苦しい研究室に戻るのであった。

今回はインドネシアの山奥に行つて來たといつ、よく日焼けした四十代後半には見えない若々しさを持つ理学部教授・斯波がコーヒ

ーを啜り、土産話の武勇伝を語るのを、何故か沖縄名物のちんすこうをお土産として食べながら、祇園は耳半分に聞いていた。

愛想がいい上に、女を口説くためだの携帯小説のネタにするためだのと言う光と、これでも将来は教師を目指しているという口下手の弥栄は、いつものとおり適当な相槌を打ちながら斯波の「太話を聞いている。

その間に彼らの関係を説明しよう。

「Jの大学では大体どこの学部でも三年生になると卒業のための所属ゼミを決めるのであるが、この研究室、通称・斯波研では特別に一、二年生をゼミ生として迎え入れていた。

しかし斯波研究室におけるその研究内容は、単位にも卒業研究にも関係ない。シーラカンスの飼育方法だの世界七不思議を探るだのとう、まるで子供の夏休みの一研究のような、教授である斯波の道楽、いわば趣味の研究に付き合わされるだけのゼミなのであった。昨年、前ゼミ長に騙されるようにこの研究室に所属してしまった祇園であるが、サークルに入る暇もないほどこの教授に呼び出される羽目となり、彼が飛び回って居ない間も謎の研究の代行をさせられていた。

一年生の祇園と同学部の弥栄、そして何故か人文学部で同じく一年生の光が、今年のこの斯波研のメンバーなのであつた。ちなみに五月現在、新入生は居ない……。

ふとこの先を思い、来年になつてもまだ呼び出されたらどうしようかと祇園が軽くため息をついた時、

「そいや駅で青井に会つたけどさー、」

斯波が口にした『その名前』に、彼女は思わずビックリとしてしまった。

「今度飲みに行こうって言つてたぞー」

斯波が三人を見渡して「前ゼミ長」からの伝言を笑つて伝えた。

「あいつも要領もいいからなー。もう地元で就職決めたみてえだし」

元斯波研ゼミ長であり、祇園を此処に引き入れた本人、現在四年生の青井広太^{ヒロタ}の地元は県外である。

斯波の話は前に本人から聞かされていたこともあり、予め覚悟はしていたものの、予想以上にがっかりする想いに祇園の心が逸り出します。

前に会つたのは何週間前だつたか……。

祇園が思わずその長身の青年を思い出し、ほんやりとしてしまうと……、はたと気付けば、男三人が揃つてじいーっと彼女を見ているではないか。

やばい、と祇園は焦つた。最近会えなかつたからついうつかり顔に出でしまつたか？

彼女がそう思つた時、光が口を開いた。

「……あれ？ ゼミ長つてさあ、もしかして元ゼミ長のこ」

「弥栄氏コーヒーお代わり！」

デリカシーのない光の言葉を遮り祇園は慌てて適当な言葉を叫んだ。

彼女に気を遣つたらしい弥栄もコーヒーのお代わりを淹れに行つてくれたが……今この瞬間、三人の心の中にひとつのみ假定が浮かんでしまつただろう。

「もしかしたら、祇園は青井のこと……」と。

「もしかしたら」　ただこの一言でそれまで思いもしなかつたことを意識するようになつてしまつ。今までゼロであつたことでも、長年そうであつたかのような錯覚を起こし、その幻想こそが眞実であるかのように惑わされてしまつ。

それこそ祇園が最初に、青井には彼女が居るにも関わらず、「も

しかしたら自分は」と口の気持ちに気付いてしまったが最後、それに囚われてしまったように。

言えずの秘めた片想いを知られたかもと慌てる祇園に対し、氣を遣つたのか各自何事もなかつたかのように分散していく。

しかしこの騒ぎに彼女は気付いていなかつた。

自分の運命を変える瞬間が今まさに訪れようとしていることを。

彼らがいつものように騒いでいると研究室のドアが叩かれた。

「どーぞー」

斯波が呑気に声を掛けるヒドアが開き、一人の青年が現れた。
「ご注文の品持つてきましたー」

「ありがと。そこに置いといてー」

おそらくまた怪しげな実験器具でも買ったのだろう。

文具用品から食堂までを経営する学生生協のアルバイト生だろうか。爽やかな好青年の声を聞きながら、祇園は少し赤い顔をして弥栄が淹れてくれたコーヒーを啜る。

……すると、ふと視線を感じて祇園はそちらを振り返った。

そのアルバイト生である、短く髪を刈り上げたまだ少し少年らしさを残す青年が、何故かじいと祇園を見ていた。

意外と整つたその顔の主からの視線に、祇園は「な、なんだ」と少々おののいてしまうが、こちらが引いてしまうくらいの強く真つ直ぐな視線には遠い記憶の中、どこか覚えがあつた。

こんな顔だったか?と思つほど目の前の主とは面影が異なつていたが、遠い昔の記憶の中、ひとりの背の小さな可愛らしい少年をふと思い出す。

五年前の、思い出。

忘れない思い出と忘れられない想い。

まさか……！？

祇園が愕然と相手を見返していると、なんだ？と様子のおかしい一人を見守るギャラリーの中、相手の青年が口を開いた。

「祇園、さん……？」

そんな呼び方をするのは、過去にただ一人だけ。

五年前の記憶の鍵はかちりと音を立てて開かれた。

祇園は思わず唇を噛んで呟いた。

「早海……」

第2話 一人の関係

祇園にとつてその少年は、絶対に「会ってはいけない」人物だと思っていた。

でないと自分が「死んでしまう」と、思っていたからだ。

それは今から五年前のこと……。

「祇園さん、一緒に帰りましょつよー」

まだ声変わりしていない少し高い声が、中学三年生の祇園の後ろから聞こえてきた。と思うと、彼女より五センチほど背が低く、目の丸い可愛い顔立ちの少年がことことついてくる。

「部活は……」

「テスト前だから休みです」

「あつそ」

にこやかな彼とは正反対に、祇園は無表情のまま、彼の方を見もしないで冷たくあしらう。

少年に対して祇園の風貌はと言えば、女の子といえども成長期は終わりその背は低い方ではない。顔立ちは悪くはないが色気もなく、黒く長い髪を一本の三つ編みにきっちり束ねた様は、成績が学年主席のうえに無愛想であるので、同年代の男子生徒からは一目置かれると同時に一線を引かれていた。

しかしこの一つ年下の少年・白川早海は、

「つれないなあー。そういうばこの前の図書委員会ですけどねえー、太田のやつが……」

と彼女に対し臆することなく、聞かれもしないことをペラペラと喋りながら、自分を無視して歩いていく祇園と一定の距離を置き、おり

構いなしに後ろからついてくる。

彼としてはこれで「一緒に帰っている」ことになるらしい。

祇園はその話を聞き流しながら、何故ここにはこんなに自分に関わるうとするのか、と今日も不思議に思つ。

去年、中学二年生の時に、成績がよく素行も真面目であった祇園は、図書委員長を任せられた。同じ図書委員であつた早海は当時一年生で、今よりも更に小さく小学生のようであつた。

そして一人は当番日が同じであることが多く、それをきっかけに話をするようになったのである。

彼には母親がいないらしい。実は祇園にもいない。そして二人とも兄弟がない。

そのあたりのことは図書当番の時に話をしていて分かつた。だから彼は自分に親近感を覚えるのだろうか、と彼女は自分に懷いている早海を見ては思つっていた。

そして一年後の現在、早海が図書委員長になつたわけであるが、「相談」と称してこうしてよく祇園の前に現れる。

中学生だと言うのに、このようにべたべたしていたら、普通からかわれたり、いじめられたりしそうなものであるが、この早海という少年はそういうことをされない不思議な男の子であつた。

まずその見かけがとにかく可愛い。小学生のようなあどけなさがありながら、性格も穏やかで明るく、そのくせ頭もよいので空気を読むのも上手い。よつて老若男女問わず、誰からも好かれる雰囲気を作り出すことに成功していた。

だからと言って決して女々しくもない。陸上部である彼は小柄なくせに足が速く、大会でも成績を修めているらしい。更には学校の成績も悪くない。

しかしそれらを鼻に掛けることもなく、努力もしている。これだ

け揃つていれば、隙もないと言つるものである。

祇園の場合、運動神経は特別よいわけのないものの、先程のとおり早海と同様成績はよく、だが口数が少ないので人にそれを自慢することなどはしない。よつて、変に目立つたりからかわれたりすることはなかつたが、逆に愛嬌もないため、早海とは正反対で特別人に好かれることもないものであつた。

だからどうしてこの子がこんな自分にこれほど懐くのかと、少女には理解しがたかった。

図書委員会の話と部活の話とクラスの話を、今日もひととおりする早海をくるりと振り向くと、祇園は深いため息をついて言つた。
「みんなに変な風に思われるから。私なんかにそんなに関わるな」「えー。やすよー。おれ祇園さん、すきだもん」

「……」

まるで天使のように眼をきらきらとさせてそのままひつひつ早海の言葉に、
祇園はがっくじとうな垂れた。

「一体この言葉も何度聞かされたやう。最初はどきりとしたものだが、最近この子にとつてこの言葉はきっと、カレーが好きとかそういうレベルなのだろう、と祇園は思うようになつてきた。
そしてやはり理解不能だつた……。

「……知るか、バカ」

祇園は口汚くそう言い残し、またスタッタと歩き出した。

「待つてくださいよー」

少年はこここと笑いながら懲りずについてくる。

自分にここまで懐いてくる早海に対し、びついたらよいのか分からぬ祇園は、正直対応に困っていた。

だが「もしかしたら」、「一人つ子で父親の仕事が忙しい祇園にと

つて、こんな風に誰かが常に自分を気にかけてくれる」とは、嬉しいのかもしない？

祇園はそう思いかけて、それを否定するように首を横に振った。

もしかしたら、だなんて、そう思つと、その思いに囚われてしまふ。だから祇園はそんな仮定は考えないようになっていた。

「早海は『お喋りでよくわからん鬱陶しい後輩』だ」と、少女はそう思うようにした。

だが、こんな穏やかな毎日がずっと続くよつの錯覚も、同時にまた起こしていたのだつた。

それは今ではもう、戻らない優しい日々のこと。

・・・・・

そして舞台は五年後の、某大学の学食に戻る。

「それにしても。『んなとひりで会つなんて、奇遇ですねー。同じ大学だつたんだ』

アルバイトは先程の仕事で最後だつたという早海は、そのまま昔話に突入しようとしていたが、あの場で話すのは光達の眼が気になり仕方なかつたため、祇園は彼を引きずるように連れ出したのであつた。

じゃあ立ち話もなんだから学食でお茶でも飲もうと彼に誘われ、此処へとやつてきた次第である。お茶と言つても自動販売機の紙力ップの飲み物であるが。

学生達でざわめく午後の構内にて……いつもと同じ風景の中、五

年前に別れたきりのあの小さな少年と一緒にいるところだが、祇園は不思議でたまらなかつた。

第一、二人の出身中学は隣の県にあり、祇園はその土地から離れて此處で一人暮らしをしているのだから、尙更中学時代の知り合いがこんな場所にいることに違和感があつた。

そう思いながら、祇園は今度はココアをすずすつと啜り、眼の前の青年をちらりと見る。

人懐っこい眼はそのままだが、身体は大きくなっているし声は低いし、なんとなく面影はあるものの、どうにも祇園の中のあの男子とイメージが合わない。

だがこれは、あいつ本人なのだ。

祇園が黙つて彼を見ていると、早海と眼が合つてしまい、彼女は慌てて逸らした。

「祇園さんは、変わつてないっすね」

早海はコーヒーを口にし、田を細めて笑つた。

「背も伸びてないしな」

祇園はつづけんどんにそう言つた。実際そのとおりであり、彼女は顔立ちが大人びていたのもあり、当時も高校生などによく間違えられたものであった。

「でも、やめたんですね」

何が、と祇園が再び上田遣いで彼を見ると、

「三つ編み」

と早海は彼の日焼けした首の後ろを叩いた。確かにあれは小学校時代からの彼女のトレードマークではあった。

「あんなダサいのしてられるか」

祇園はぶすりと言つた。

当時の色気のなさは彼女も自分で認めるが、流石に高校、大学と経て友達に刺激され、考え方的成长する中で、頑なだった「女性らしくあることへの抵抗」が少しあは和らいでいた。それでも同世代の女性に比べれば、淡白な方ではあつたが。

とりあえずその黒髪は肩まで短くし、量も多かつたので薄くした毛先に、軽くウエーブを掛けている。たすがにもうきつちり縛った三つ編みで、ところどころではない。

研究室にいる時は一つに分けていたそれも今は解き、愛用の白衣も脱いできた。

しかし祇園のその言葉に、短く笑うと早海は言った。

「うん、綺麗になった」

「……」

……このヤロウ、と祇園は早海を睨んだ。

「ううこうことをあつさつと言えるこの口は昔と全く変わつていない。

あの頃はまだ声も高く、可愛い顔をしていたからちょっとくらいこんないやらしい言葉を言われても気にならなかつたものの、こんな生物学的に「成体」となつてから軽々しく言ひ台詞ではない……と彼女は頭が痛くなりそうになつっていた。

そんな昔と変わらない相手に、ため息をつきながら祇園は言った。「ううこうこと誰にでも言つてんじゃなによ」

相手の姿はあの頃と全く違うものの、会話の流れが同じであるので、久々の再会であったが、祇園の口調も五年前と同じ、歯に衣着せないものに戻つてきていた。

しかし早海はきよとんとした顔をすると、あつさつ言い放つた。

「誰にでもなんて、言つてしませんけど」

「…………」

のおおおおお！－！この天然タラシがあああ－！－！

そのセクハラまがいの言葉に、祇園は発狂したいようなイライラに見舞われていた。

「お前、なあ！　いい加減　－」

と、赤い顔をした祇園が机に手をついて立ち上がった時、

「何騒いでんのよ」

数冊の本に紙カップの紅茶を持った一人の女性が偶然通りかかり、祇園に声を掛ける。

「どしたの？　もしかして、痴情のもつれ？」

いくら一般的な女性らしさを身につけたと言つても、この祇園が斯波研メンバー以外の男性と仲良く一人きりで会つたりしないタイプであることを、この通りすがりの女性　祇園の友人・橋之江美幸はよく知つている。

だから珍しいと思つたのかもしねないが、いきなりその発想はないだろう、と祇園はがくんとうな垂れる。

だがそんな彼女を蚊帳の外に、早海同様人当たりがよく、順応性の高い美幸は、どうもどうもと呑気に彼と頭を下げ合つている。

ちなみに美幸は祇園と同じ学部と学科になる数少ない女子だ。触らぬ神に祟りなし、と彼女は斯波研には所属していないが、誰とでも仲良くなれる女性なので斯波研メンバーとも顔馴染みであるうえに、こういう言動をするあたり彼らとも気が合つてしているのである。

「赤の他人！　ちょっとした昔馴染みだつて！」

美幸に向かつて、慌てて叫ぶ祇園だが、

「そーなんですよ、昔の彼女」

一方の早海は更にとんでもないことを言い放ち、再会一日目にして彼女は彼に殺意すら覚えそうになる。

「せうなんだー。この子をうこいと何も話さないかい」とあつたと信じる美幸と早海は再びにうこいと微笑み合ひ、勝手にそうちことされてしまつてこる。

「なワケないだろーー！」

実際に彼を殴るわけにもいかないので、祇園は必死に訂正するしかない。

「まあまあ照れちゃつて」

美幸も本気なのかどうなのか、笑いながら祇園の肩をぽんぽんと叩いた。

「照れてない！ つづつか、早海、お前、一体ジーゆ一つもりだよ！？」

もうらうがあかないと、自分をひたすらからかう青年を祇園は睨みつけるように振り返る。

しかし座つたまま彼女を見上げている青年は、慌てる」とも臆するにもなくうつ言った。

「いやいい機会だから、本当によう戻そつかと思つて

「…………？」

……付き合つてもいなかつたのに、何言つてんの、コイツ！？
私に何か恨みでもあるのか！？ 恨まれるようなこと私した！？
と、突然現れた青年の謎の宣言に、祇園はただただ愕然とするばかりであった。

そこそこに平穏だった筈の彼女の毎日が、足元から崩れていく予感がしていた……。

第3話 爽やかストーカーと切ない片想い

美幸はそのままレポートを書くと言つて隣に座つたが、これ以上彼女に突っ込まれる前に、アルバイトの時間だと言い訳をし、祇園はその場から逃げるよう立ち去つた。

しかしその祇園の後ろを、きつちり一メートルの距離を空けて早海がついてくるではないか。

五年前の光景が祇園の脳裏に過ぎる。しかしその後ろにいる者が、子供ではなく自分よりも背の高い青年であることが、奇妙にすら感じじる。

……お前はストーカーか……！

と祇園は言いたくなるが、自分をストーキングしているのが胡散臭いほど爽やかな青年であり、またわけのわからないことは言つもの、プライベートな空間など、踏み込んで欲しくない領域は相変わらずわきまえているようなので、嫌悪感を抱いているというわけではない。

「ここまでついてくるわけ……」

背後の早海に向けて、苛々したように祇園は言つた。

「折角会えたのに、つれないなあー。まだ何も話せてないじゃないですか」

「話すことなんかないし」

「ありますよ？ とりあえず俺のこととか」

そして彼は聞かれもしないのに、自分が工学部のナントカ学科の一年で、高校はどこそこを卒業して……ということを流暢に語り出した。

そのノリはやはり五年前と変わらないが、祇園はふと、その頃と

は何か違う、と思った。

その口調は、子供の頃のお喋りな高い声とはまた違っていた。ゆっくりとした落ち着いた喋り方で相手に聞き入らせ、低すぎず、高すぎない声の響きには心地よさすら覚えそうになる。

何者だ、コイツ……！

昔から妙に人を惹きつける力はあったが、大人になつてまた進化したな、と祇園は思わずその天然タラシぶりにそら恐ろしくなる。また彼女も、自分も少しは女性として成長したと思っているもの、基本的には見かけも中身も何も変わらないといつこの、彼の変化は田まぐるしく、それには悔しさすら感じてしまう。

しかし祇園はそこでまた疑問を覚えた。ぴたりと足を止めると、今度はそれを口にする。

「……会つて早々、よくそんな風に昔みたいに気軽に話せるね」

五年間の空白が一人の間にはある。しかも祇園は中学卒業と同時に県境の町に引越しをしているため、話をするどころかその姿を見ることも、彼のことを誰かと話題にすることすら一切なかつた。

何より、別れ方もあまりいいものではなかつた。あの日の事は、祇園にとつてもう一度思い出したくないものであつた。

それなのに、まるで昨日まで一緒に居たかのように笑つて話す彼が、祇園には不思議に映つたのである。
訝しげに眉を顰め自分を見上げる彼女を、きょとんと見下ろしていた早海であつたが、やがて短く笑うと呴いた。

「……祇園さんが、変わつてないから、だろーな」

その笑顔は、何故か酷く切なげなもので、祇園の胸まで痛くなり、聞いてはいけないことを聞いたような気になつてしまつた。一体この五年間に、彼に何があつたのか　と祇園が少しばかり心配にな

るほどだった。

しかし彼女はそんな感傷を誤魔化すよつこ、眼を逸らしながら言った。

「か、変わつてなくて、悪かつたな！ だったら、それでいいじゃないか。昔みたいに話せれば、それで。よりを戻すつてそういうことじゃないの！？」

ただよく話をしていた先輩と後輩、一人の五年前の関係はただそれだけであった。

祇園のことをからかったのか、昔の「彼女」だと、よりを戻すとか、どういう意図でこの男が言つてゐるのかまるで彼女には分からぬが、そういう悪ふざけも含めて、昔のように話せればそれで済むのではないかと祇園は思つていた。

「うーん、そう言えばそつなんだけど……、もつといつ特別で、既成事実みたいな確かなものが欲しいんですね」

今のかなげな表情は何処へやら、早海は腕を組み、演技掛かつたような困つた顔をしてそんなことを言つ。

祇園は「カンゼン二、イミフメインンデスガ……」と呆氣にとられてそれを聞いていた。

……しかし……。

「もしかして……」

早海の言葉からふと思い当たつた祇園は口を開いたが、その声に彼の方を見た早海と眼が合つてしまい、その「仮定」に恥ずかくなつた彼女は俯いて黙る。

中学生の時はただ話をするだけの仲であつても、「特別な関

係」と言えた。よく話をする男子とそうでない男子の差は子供には大きい。

しかし、大人になれば恋人でなくとも一人きりで出かける時がよくなるようになる。第一、斯波研のメンバーは全員男性であり、光とも弥栄とも祇園はほぼ毎日、下手をすれば女性の友人よりも会話をしている。ということは……彼が求める「特別」だつたり「既成事実」とは一体何を指しているのだろうか？

祇園は早海の言葉の意図を想像してみるが、もしかして、の後は恐くて口にすることが出来ない。

もしかして、まさか、付き合いたいって、ことじやないだろ
うな……つー?

再会したばかりだが、一応顔見知りではあるので不可能なこともないが、わざわざ彼が自分にそんなことを申し入れる理由が分からぬ。

しかし一度「もしかして」と考えただけで、この相手を意識しそうになる。だからそんなわけないだろつ、と祇園は必死にそれ以上考えないようにしていた。

そんな彼女の動揺を知つてか知らずか、早海は「とりあえず、」と携帯電話を取り出す。

「番号とアドレス教えてくださいよ
につこりと笑つて言われたそれに、

「嫌、だ」

祇園は反射的に言い返した。

「即答ですか」

ちえつと言いながら早海は携帯電話を閉じる。やはり意味不明な言動をする男から顔を背ける祇園だが、これくらいで尻尾を巻くような可愛げのある男ではない。

「そんじゃ伊藤さんとかに聞くからいいよ」

と早海はあの赤毛の光の名前を挙げるではないか。

「知り合いなの！？」

「んー。ちゃんと話したことはないけど、こちとら生協バイト生ですかね。顔だけは無駄に広くて……他の人も相当有名な人ですよね」

五年前の天使のような可愛らしい微笑みから、爽やか好青年スマイルとなつたその笑顔でどこか含みのあることを言つてのける青年。確かに光ならば面白がつて教えそうなどいふはある……と思い祇園はぞつとした。

「お前はストーカーか……」

「かもしませんね」

どんな嫌味を言つても無駄に終わり、あつさり返されるつえに、元気の果てにはストーカーだと軽く認められ、祇園は再び怒りが爆発しそうになつた。しかし、

「でも、祇園さんがビーしても嫌だつて言つんなら、やめます」

「……」

最後には優しい口調と苦笑で返され、返す言葉を失つてしまつ。

空氣を読むとかいう問題ではない、と祇園は思つた。

掴めないことばかり言つ早海であるが、昔から祇園がどんなに汚い言葉で冷たくあしらつても怒ることなく呑気に笑い、他人の心を傷つけるような言葉は絶対に遣わない。

空氣を読むというスキルとは別に、彼はいつもどこか冷静で落ち着いていて、人に對して優しいのだ。

それは五年前から変わつていなかつた。寧ろ彼は変わつたように見えて、この部分だけは全く変わっていない。だからこんな風に、自分も直ぐに昔のように話せてしまうのだろう。祇園は今、その

ことに気がついた。それにはどこか安心させられる思いになつた。
だからと言つて、どうすればよいのか、彼女には分からないが……。

祇園が困つてしまい眼を泳がせると、幾人もの学生が一人の横を通り過ぎていく中、正門の方向からひとりの男が歩いてきた。

「あ……」

それを見た瞬間、どくんと祇園の胸が高鳴った。身長は早海よりも少し高いだろうか。髪も彼よりは長い。落ち着いた、だけどどこか勝気な、自分よりも大人びた雰囲気を感じさせる男の姿を、祇園は一週間ぶりに見た。

その男は祇園の視線に気がつき、すれ違ひ様に手を上げた。

「よお。今日はもうお役御免になつたか？」

笑つたその顔はやたら子供っぽく見える。彼が祇園を斯波研に引きずり込んだ時も、こんな風に悪戯っぽく笑つていたことを、彼女はいつも思い出す。

「バイトくらいは行かせてもらいますよ……」

祇園はその青年に、ふてくされたようにそう答えた。それはきっと相手には、斯波の相手に疲れているように聞こえるだろうが、内心はそうではない。

相手への知られてはいけない気持ちを隠すように、こういった無愛想な態度になつてしまつただけであつた。

「お疲れ。あ、明日あたり研究室に顔出すよ。常春堂のシュークリーム用意しあつて、弥栄に伝えといて」

「冗談染みた口調で笑つてそう言つと、その男 斯波研、先代ゼミ長の青井はひらひらと手を振りながら理学部の第一棟へと歩いていった。

はあ、と祇園はため息をつく。毎日会っていた頃はそうでもなかつたが、久しぶりに話せるとなると、やたら緊張してしまう。

隣に早海がいたことは、なんとも思われなかつただろうか。美幸みたいに誤解しなかつただろうか。

祇園は心配になるものの、誤解されようがされまいが、この気持ちは届きはしないのであるが……。

そう思い、彼女が今一度ため息をついた時、「ふーん」と早海の小さな咳きが聞こえてきた。祇園はすっかりその存在を忘れていた彼の方を見上げる。

彼は青井の消えていった方向を、面白くなさそうな顔で眺めていたが、その不機嫌な視線を彼女の方へと向けた。

「今の人のこと、好きなんだ」

迷いのない断定と真つ直ぐな視線に祇園の胸がどきんと高鳴った。「もしかして」と前置きすらしない早海の言葉から、穏やかであつてもどこか強い信条を内に秘め、己の直感に自信を持つ様子が伝わってきた。そしていつも笑顔だつた彼から、笑みが消えていることにまた驚かされた。

二人の間に突如、緊張の糸が張り詰める。

何言ってんの。好きだの嫌いだのって、子供じゃあるまいに。祇園はそう言おうと思ったが、口が動かない。その指摘にただ恥ずかしさが込み上げ、呼吸すら不自然になり、早海の顔を身動きも出来ず凝視していた。

二十歳にもなろうつというのに、なんでこんな中学生のような純情な態度になつてしまふのかと、情けない気持ちで一杯になつていた。

それこそ青井への片想いのきっかけは、ちょっとした出来事から

だった。

憧れの気持ちから始まり、気がつけばあの男の傍に居たいと思うようになっていた。しかし、既に仲のよい恋人の居る相手にそれは叶うことはない。奪い取つてでも、などと望むことはなかつた。青井に嫌われたくないから、ただ黙つていようと思つていた。それなのにこんな持つてはならない気持ちが、自分が未熟で隠せないばかりに皆に知られていき、祇園は悔しくて恥ずかしくて仕方がない。

「……すみません」

すると急に早海が謝つてきた。その顔は怒つたものから少し切なげなものに変わつて、祇園を見ていた。

どうして？と祇園は思うが、それは彼女が泣きそうな顔をしていたからだということに彼女自身は気付いていなかつた。だが彼が謝つたということは、それが図星であると祇園が認めていることに気付いたからだらう。そう思つた祇園は、それを否定する為、重い口を開く。

「好き、なんかじゃない。青井先輩には、彼女がいるんだから……」

それは、祇園が何度も心の中で唱えてきた言葉だつた。

自分でその想いを認めていても、他人がどことなく気付いていても、自分以外には認めてはいけない、と祇園は思つていた。

いくら「もしかしたら」と人に仮定を抱かれても、祇園自身が肯定されしなければ、眞実は誰にも分からぬ。彼女が他人に対しこの気持ちを認めないのは、巡り巡つて青井本人に「もしかしたら」と自分の気持ちに気付かれてしまうことを恐れているからであつた。

避けられたくない、今の距離がいい。だから頼むから、口にしてくれるな。

口で嘘をつくことなど、なんでもない。いつそ嘘通りに、この気持ちが逝けばいいのに。

そんなことを思いつめて呟いた祇園の言葉に、早海は少し驚いたように眼を見開いた。

横恋慕をしている女に呆れたのだろう、と祇園は思っていたが、意外にも彼はまた元のように笑うと嬉しそうに言った。

「じゃあ何も問題ないわけだ」

何が！？？

張り詰めた空気が消え去ったのはよいが、また意味不明のことを言い出す相手に祇園は愕然としてしまう。

そう言つと、不敵に笑つた早海はスニーカーの足を祇園へと一步踏み出した。よく分からぬまま、思わず本能的に祇園は後ずさる。彼がそのまま口を開いて何か言つ前に、祇園は慌てて叫んだ。

「こここれからバイトだから！ 家一度帰るから、もうついてくんなよ！？」ついてきたら、ストーカーだつてケーサツ呼ぶからなーっ！」

そして彼女はぐるりと背を向けると、早海の顔を見ずに脱兎の如く駆け出した。

走りながら、彼女はぐるぐると頭の中で混乱する思いに翻弄される。

格好悪い、と大人になりきれない自分を恥じる。自分はある日と同じ、五年前と変わらず、逃げ続けているままなのだと。

彼女はそんな自分を五年前に置いてきたつもりであった。変わりたいと、思つていた。

それなのに、何故彼は現れたのだろうか。何故祇園に、そんな彼女を思い起こさせ、それを追いかけ、受け入れる「ふり」をしよう

とするのか。

そんなことをされたら、きっとまた「もしかしたら」と思い、その言葉に惑わされる。あの時無かつたこととした筈の、「あの気持ち」を思い出してしまう。

胸の中で一人の男の存在が入り乱れてしまった祇園は、それを振り払うように家までの二十分の距離を、スカートのまま全速力で走つて帰つたのであった。

第4話 見えない真意

「たかのせんせー、ビーしたのーー!？」

夕方六時。スーツ姿で算数のテキストを前に、はあ、とため息をつく祇園に、小学校高学年の子供たちが寄ってくる。

「もしかして、恋のなやみー? ?」

女の子となると、ませたことを言つてくる。といつよりはそういうことに結び付けたい年頃なのだろう。

祇園は発達のよい女の子を横目で見ながらそう思つていた。

……相手が男であるから、あながち間違つてはいなかかもしれないが、別に恋愛関係にある相手ではない。

ある意味、ストーカー被害というか……。しかし早海のことだけではなく、今日久々に青井に会つたことで、彼のことも気にしてしまつており……。就職して地元に戻つてしまえば、青井とももう会えなくなるわけだし、だが彼には彼女がいるから自分にはどうにも出来ないし、でも会いたいし……。

そんな答えの出ないことを悶々と考えているので、結論的に祇園はため息をつくことしか出来ない。

「こら教室戻つてろー」

そこへのんびりとした男の声が響き、子供たちは素直に返事をしてばたばたと事務室から出て行つた。

「……ゼミ長、大丈夫?」

現れたのは同じくスーツ姿の、斯波研メンバーの弥栄であつた。彼は縦にも横にもボリュームがあり、二十歳にして貫禄を持つてるので、こういう服装になると親父くさくも見えるが、妙に似合つていると祇園は思つてゐる。

「ありがと。多分、大丈夫……」

休憩時間だからと言つて気を抜きすぎてしまつた。子供や弥栄に心配されてはいけないと、祇園は頬を両手でぱしんと叩いた。

ここは小さな学習塾であるが、祇園が時給がよいアルバイトを探していた時に、弥栄に紹介してもらい勤めることになった。

ちなみに彼女はここからの派遣で家庭教師のアルバイトもしていたが、学費以外に父親が仕送りを僅かなりとも送つてくれているので、週に何日か夕方働くほどで祇園の日々の生活費は賄えている。もつとも弥栄の方は弟が下に何人もいるらしく、塾で毎日アルバイトをする上に、土日は土方などもして稼いでいるらしい。

それはさておき、なんとかカラ元気を出そつとしている祇園を心配そうに見ていた弥栄であつたが、

「もしかして、……今日来てた人のことで？」

と鋭く突つ込んでくれるので、祇園は忘れようとしていた早海の顔を嫌でも思い出させられてしまつ。

「ちちちち違うー！ 何の関係もない！！」

しかし嘘のつけない彼女は、思い切り動搖しながらそれを否定するので全く誤魔化しきれていない。

だが話したくない事情があるようなことは弥栄にも伝わってきたので、祇園をこれ以上追い詰めではないと配慮したか、彼は黙つた。

そして祇園も話題を変えようと、わざと明るく話し掛ける。

「そーいや青井先輩が、明日だか明後日だかに来るから、常春堂のシュークリーム用意しとけつてさ」

「そちらが土産に買つてこいよと言つ」

弥栄の人の良さを知つての青井の「冗談半分本気半分の言葉だと、

彼も祇園も分かつてしているので、一人して苦笑した。

しかしそこでふつと真顔に戻ると弥栄は言った。

しかしそこでふつと真顔に戻ると弥栄は言った。

「でも、ゼニア長もそれ好きなんじゃない。買つてこようつか」

おそらく元気のなかつた祇園を慰めるつもりで申し出たのだろう。

「ありがと……。弥栄氏って、いいヤツだねー」

早海のストーカーまがいの攻撃と、青井への片想いの切なさに打ちひしがれていた祇園は、斯波研メンバー唯一の良識人であり、真面目で思いやりに溢れる青年の言つことに、内心では感動の涙を流していた。

それこそ美幸にしる、光にしろ、もちろん祇園にはない魅力があり刺激は受けるが、如何せん突つ込みを入れさせられることばかりであり……。

トラブルメイカーの彼らを思い出し、また祇園が頭痛を覚えそうになつた時、それを予見したかのように彼女の携帯電話のバイブが鳴つた。

着信の番号は、見たことが無い番号であつた……。

アルバイト中だつたのでその電話は取らなかつた祇園だが、嫌な予感がするまま今日の授業を終わらせた午後七時三十分。これから高校生の家に家庭教師に行くという弥栄に別れを告げ、中古の軽自動車に乗つた。

するともう一度、今度はマナーモードを解除した携帯電話の着信メロディが鳴つた。

ディスプレイには先程と、同じ番号が表示されており……やはり嫌な予感がする中、祇園は電話を取つてみた。

『今日はどーも』

聞こえてきた声は、低くなつたものは今日初めて聞いた、やたら
爽やかな男の 早海の声。

「IJの電話は現在使われておつません。もしくは警察に通報します」
祇園はあえて機械的な声でそう言い放つた。完全に付きまといの
域だな、「トイツ、と祇園は怒りを覚えそうになつたが 相手が『
祇園さん、ひでー』と快活に笑い出すので、思わず毒氣を抜かれて
しまつた。

付きまとこと言えども、一応相手は中学校時代の後輩で、思い出
したくない特別な思い出などもある仲で……やうにつけたことからや
はり嫌悪感や恐怖心は不思議となかつた。

彼女は寧ろこのやりとりが懐かしいとさえ思つていた。もちろん
そんなことは、認めたくないのだが……。

「つむなんで電話番号知つてるわけ！？」

『あれから斯波研行つて伊藤さんに聞いてきました。教授自らお茶
も淹れてくれましたよ』

「勝手に仲良くなつてんじやない！」

あつけらかんと云ひこの順応性の高すぎる後輩に、祇園は車の中
と言つこともあり電話口で怒鳴りつけた。

そして祇園の予想通り、面白がつて早海に電話番号を教えたであ
る、伊藤光に對しては明らかに怒りを感じる。

「光に変なこと、言つてないよね……」

『昔の彼女とか？』

「そういうありもしない話ー。」

『言つてませんよ』

早海の言葉に祇園はほーっと安堵のため息をつくが、

『あ、でも、俺が居た時に橋之江さんが来て「あらまあかわね
つてことになりましたけどね』

その後の言葉に彼女はハンドルに頭を打ち付ける。

光と波長が似ている同じ美幸のこと、早海を光にどう紹介したか想像つき、だからこそ余計に光も自分の電話番号を教えてやろうと思つたのかもしない……、と祇園はハンドルに頭を置いたままふるふると震えていた。

斯波研になどもう恥ずかしくて行きたくない。本当に弥栄の買つてきてくれるシュークリームだけが、明日の彼女の癒しとなりそうである。

祇園は大きなため息をつくと、まるで少年のように頭をぱりぱりと搔いた。

「つたく！ 目的は何なんなんだ…… 私に恨みでもあるの？」

思わず昔のように元に乱暴にそう言つと、相手の声色が少し変わつた。

『目的、ね……』

そのまま黙られてしまい、祇園は少しどきりとする。

……本当に恨まれているのだろうか、とすら思わされた。

そして彼女は、五年前のことを思い出してみる。一人の間には何もなかつた筈だった。何も……。

そうなる前に、祇園は彼から離れたのだから。

だが、もしかして、そのことに気が付かれていた ？

「もしかしたら」と一度思いついた仮定は、祇園の胸へ投石のように、嫌な予感の波紋を作る。

突然、自分の前に現れた、彼の真意は何処にある ？

それが本当に恨みだつたりした時、自分はどうすればよいのだろ

うか。

祇園は早海の優しさは本物だと昔からどこかで信じていたが、相手の顔が見えない今、少しばかり不安になりひやりとしていると、彼は急にまた明るい調子に戻った。

『ところでメシ食べました？　まだならこれから』

「結構」

しかし軽いことを言われてしまうと、反射的に切り捨ててしまうのが祇園の性分。惚れてもいない女にそんなことを言つ男は、尙更気に食わない。

祇園は思わずそのまま電話も切つた。節約にもなるので、家に帰つて自炊して食べるつもりでいたからだ。

またどつと疲れ果て、帰ろうかと祇園が思つた時、再び彼女の携帯電話が鳴つた。今度はメールの受信である。

見るとそれはやはり早海からで、『それじゃまた。気をつけて帰つてくださいね』と一言だけ書かれていた。おそらくアドレスを登録しておけという意図なのだろう。

さてどうしたものかと思いながら、祇園は何度ついたかわからないため息を吐き、携帯電話を閉じた。

・・・・・・・

祇園は母親を小学生の時に亡くしている。それから家事をして父親を助け、一人で生きてきた。

彼女の父親は、斯波に少し似た男だった。明るく、自由奔放で、好奇心旺盛に行動する。それは仕事においてもそうだった。

祇園が中学を卒業する頃、彼は栄転だと言つて県外の支所に転勤となつた。父親は娘の高校進学を考えて住む場所は県内に留め、職

場に近い県境の小さな町としたが、それでもまだ子供である彼女にとっては、とても離れた町への引越しに感じていた。

しかし母親を、妻を亡くしていた一人は、互いを一人にはしておけないと思つており、祇園も大人しく父親に従つたのである。

新しい土地での高校生活は、それなりに順調であった。彼女は身を持ち崩すことなく、友達も作りながら家事も勉強も両立させ、その隣の県の国立大学に無事合格した。

祇園が高校を卒業すると同時に、今度は父親は全国を飛び回り始める。もう彼女も大人になり独り立ち出来ると父親は判断し、彼女もまた自分の生き方を探している父親の自由にさせてやりたいと思つていた。

そして一人は住んでいた借家を引き払い、祇園は大学の近くにアパートを借り、父親は現在、再びの転勤で沖縄の何処かの島にいるらしい　　という次第である。

こうして別居はしているものの、父親は娘にたまに会いに来ており、学費もしつかりと払つてくれている。

高野親子は決して仲の悪くない父娘であると言えた。

そういう訳で一人暮らしをしている祇園は、今日もアルバイトを終えて六畳一間のアパートへと戻ってきた。

今日一日で、色々なことがあつた。就寝前、布団の中に膝を立てて座り、祇園は今日の夢のような、衝撃的な出来事を思い出す。もう一度と会うことの無い……寧ろ、「会つてはいけない」と思つていた男が彼女の前に現れたのだ。その偶然に、非常に驚いていた。

会えただけでも驚いているというのに、彼は五年間の空白があるにも関わらず、その事実を無視してあの頃と変わらず祇園と接しよ

うとする。

この五年間、互いに何も連絡を取らず、互いを必要とし合わなかつたといつた。

それどころか彼は今、「特別な既成事実が欲しい」などと云って、祇園に対し何かを求めていたようであった。

彼の　早海の目的は一体何なのだろうか。自分みたいなつまらない女をからかって、何が楽しいのだろうか。祇園はそう不思議に思っていた。

それは五年前にも思ったことではあるが、此処に来てまた同じことが起こるとは、彼女にとつては予測不能なことであった。

青井への片想いだけでも思い悩んでいたのに、これ以上の厄介ごとで悩まされることが、非常に煩わしく感じられる。

しかし早海に聞いても軽い答えしか返つてこず、解決にならない。祇園に好意を持つているような素振りを見せるが、今見せているそれは多分、彼の「本心」ではないのではないか、と彼女は直感していた。

だからと言つて、嘘をつくような男でもないと信じてゐるのであるが……。

そんなことを考えながら、祇園は六畳間に敷いた布団の上にそのままじろりと横たわり、豆電球の明かりを見上げる。

そう言えば、彼も母親が居ないとついていた気がすることを思い出した。「おそろいですね」と出会つて間もない中学生の時に言われたのであつた。

同じ大学で、同じよつとアルバイトをして、彼の家も自分の家と同じ境遇なのだろうか……。ふとそんな風に想像してみた。しかし、

あれ？ そうだつたつけ……？なんか、そつじやない気がする

……。

そこで彼女は何か古い記憶を思い起こしかけた。短い会話だつたので余りよく覚えていないが、何か彼とそんな話をしたような気がしていたことを。

自分の家のような状況は、早海の家には当てはまらないと、何か遠い記憶が彼女にそう知らせていた。
些細なことなので思い出せないが、何か、とても、悲しい話だつたよつた。

……思い出せない。だけどそれは、今日見た、あの、

『祇園さんが……、変わつてないから、だろーな』

そつ、あの切ない笑顔に似た感じの……。

彼との忘れたい思い出がたくさんある中、祇園にとつてそのことは当時の彼女にとつて取るに足らないことであつたのか、あまりよく思い出せなかつた。

しかし何であの男のことをこんなに考えねばならないのか、もう考えるのをやめよう、と思つた彼女はそれを再び忘れ、眠りこつこうとした。

明日光を何と語つてとつちめてやうつ、また早海は自分の前に現れるのだろうか……と、困つたよつて眉を寄せた。

この、彼女の記憶から欠落している、大したことはないと思つていた思い出が、全ての始まりになつてゐることなど知らないまま、祇園は呑気に眠りについた……。

第5話 選択肢

伊藤光は、斯波研究室の本棚に挟まれたスペースに置かれた机の上で、ノートパソコンを開いていた。

彼の場合、ここで携帯小説だのブログだの更新をしていると言うのであるが、実際2ショットチャットでもやつていそうな雰囲気もある。しかし、優しい斯波研メンバーは誰も追及したりなどしない。

この研究室も大学構内の規定に沿つて、勿論禁煙であるが、ヘビースモーカーである斯波は、祇園に怒られつつこつそり煙草を吸っている。

よつて光も自宅同様、煮詰まつてくるとパソコンの前で煙草を咥えてしまうのである。

実際二十歳になるまであと一月半あるのだが、大学生はそのあたりグレーゾーンで無法地帯……などと光が考えていた時、彼の前にゆらりと人影が現れた。

「此処は禁煙だろーが……。頭から水掛けようか……？」

光が見上げた先に、苦虫を噛み潰したような顔をして立っていたのは、白衣を着たこの斯波研のゼミ長、祇園であった。

「へーい」と言いながら煙草を消す光に、更に彼女の不機嫌そうな声が降る。

「人の電話番号、勝手に教えやがって……」

その声に、光は再び視線を上げて祇園を見た。

「元力れなんしょ？ すぐえじやん、大学まで追つかけてきてくれて。愛されてるねー。ちつたあ優しくしてあげたら？」

「違ーう！ ただの後輩！ そしてストーカーだ！」

こんなに怒つているのなら、斯波研に顔を出すこともさぼつてしま

まえぱよいものの、眞面目な祇園は昨日の分析で採取したデータのグラフ作りをするべくやってきた上に、今日は実験がないからと使わない実験器具を塩素水で洗浄しているほどの几帳面ぶりなのだ。

手伝ひ気もなければ反省もしていない光に苛立つ祇園だったが、たつた今到着した弥栄が、

「ゼミ長、シュークリーム買つてきただからとつあえずお茶にしよう」と、彼女をなんとか宥めようとする。

「元気だなー。若者たちは」

そこへ適当な授業を適当に終わらせた、適当な中年の斯波が戻ってきた。

「おお、祇園ちゃん。カレシとヨリは戻ったかい」

彼はドア付近で荒い息をしていた祇園に対し、まるで娘の成長を喜ぶ親のように、無精髭の生える日焼けした顔を綻ばせた。

「じゃないって言つてるでしょーがっ！」

研究室棟なので叫べはしないが、出してよい最大音量で祇園は叫んだ。

そんな彼女の手に、「どうぞ」と弥栄から紅茶が渡された。

「ありがとう」とそれを受け取り、少し熱いそれを口にした祇園だが、

「でもやつこやそつだよなあ。だつてゼミ長のこ…」

…

落ち着く間もなく「だーつ…！」と叫ばれそうになつたと同時に息を飲んでしまい、祇園は熱い紅茶を思い切り咽た。

熱さと痛さと苦しさに、つづくまつて咳き込む祇園の細い背中を、弥栄が分厚い手でさすつてやる。光もそれ以上は言わずに黙つたが、それは開いたままのドアの前に新しい人物が立つたからであった。

「なーんか賑やかだなー。新しい人でも入つた？」

そして更に現れたのは……、昨日予告したとおり、祇園の想い人、青井広太その人であった。

うずくまつっていた祇園は、今の話を聞かれたかと焦るが、光の言葉は途中で終わっていたし、大丈夫であつただろうと思つことにした。

「そ、そうゆう、わけでは……」

祇園は思わず答えたが、青井が彼女の方を見たため、その胸が急速に高鳴る。

狭い研究室の入り口にたむろしていては青井が中に入れない為、祇園と弥栄は立ち上がりて彼が入れるスペースを作る。

「つて、ホントに買つて来たのかよ、いくら？」

と言いながらポケットから財布を取り出そうとする青井に、

「いえいいです」

と弥栄がやんわりと断りながらお茶を淹れている様子を横目に入れ、祇園は光の座っているデスクに腰を凭せ掛けた。

光はちらりと祇園を見たが、パソコンに視線を落とした。その姿勢のまま、また何か思いついたのか口を開いた。

「新入つていや、あの一年、斯波研に入つたりしねえの？ ゼミ長」

青井の前で早海を「元カレ」と言わなかつたところに、光の良心を祇園は初めて見た気がした。流石、女には困つていなだけはある。

だがこれ以上の心労は要らない。早海が此処に来ることだけはお断りである、と彼女は思つ。

「あいつは、いーよ……」

祇園が先程淹れてもらつた紅茶を、今度こそゆっくり飲みながら疲れたように呟く。

「照れちゃつて」

そしてぼそりと呟いた光を鋭く睨みつける。

「何の話？」と言いつつ、青井が祇園たちの方を見るが、彼に隠し事をするのは嫌だが、早海の存在は知られたくない祇園は何も言わずに俯いて首を振った。

青井もそれ以上詮索せずに、珍しく教授席に座っている斯波に卒業研究の相談をし始めた。

謎の研究を無報酬で学生に手伝わせているこの斯波研は、学業に忙しくない一、二年生を、単位にはならないが卒業研究のスキルアップに繋がると甘言を用いて引きずり込んでいるが、実際に四年生以上で斯波を担当教官にして研究に取り組む学生は、殆ど居ない。

斯波がよく研究室にいないことと、このいい加減な性格から、不真面目な生徒はアドバイス不足で研究論文をまとめることが出来ず、また真面目で研究員を目指すような生徒は、功名でもなく大きな研究室や大物教授との繋がりもない、アウトローな斯波の元では研究をしたくないようである。

それに斯波は祇園たちに片棒を担がせている、それこそ何に使うのかと言つような実験の結果を、どこか怪しい組織に送つて研究費を得ているという噂もある……。

此処にいる全員、いつかお縄になつてしまふのではないかと祇園も時々不安になるのだが、最近ではそのスリルもまた、平凡な大学生活の刺激となり、密かに楽しいかもと思つてしまう始末。

そんな自分は、青井への義理でゼミ長 その仕事は斯波との連絡役や、ゼミ費（主にお茶代）や鍵の管理程度だが までなつてしまつたが、大分、此処の雰囲気に毒されてしまったのだろうか、と少し泣きたい気分にもなる。

さて青井と言えば、他の教授の元で卒業研究を行つてゐるが、斯

波の（一応）授業で教えているような専攻内容も関わって「」といらしく、こうして時々斯波研に顔を出しにくるのである。

ちなみに彼以外にも元斯波研メンバーの先輩は若干居るのだが、四年生は就職活動や大学院試験などが忙しいと殆ど会うことなく、大学院生は別の大学へと行ってしまった。

それに彼らの中でも、青井は最も面倒見がよい男であった。だからこうして、後輩三人の様子をよく見にくるのだろう。

はつきりとものを言つところもあるが、毒がなく温かい。

口下手で照れやすく、気が利かなかつたり逆に気にしそぎて空回つたりしてしまった祇園は、自分にはないその姿に会つてほどなく憧れたのであった。

光はパソコンに向かい、弥栄は本を読み始め、とそれぞれに勝手なことをし始めた。祇園は好物のシュークリームを口にすると、時折笑顔を見せる青井の横顔に、思わず視線を送つてしまつ。きっと恋人ならば、人前ではあえて距離を置くのだろうが、祇園の場合はこうした機会しか同じ空間に居られない。自分でも呆れてしまつただが、だから自然に眼が追いかけてしまう。

しかし青井に対して感じているこの甘い感情は、五年前、早海と一緒に居た時や、昨日再会してから感じているものとは全く違うものであると祇園は思つた。

青井に向けて持つてゐる、この切ない感情が恋といつものであると思つていた。

そうなると、五年前の思い出したくないあの説明のつかない感情や、「会つてはいけない」と思つほどだつた痛々しい気持ち そして今の早海に対するこの違和感や戸惑いは、一体どんな名前の気持ちだと言えばよいのだろうか。

きつとそれを上手く伝えられない限り、あの一途な早海は納得せず、自分に付きまといつのではないか。祇園はそのように考え、少々憂鬱になっていた。

気がつけばショークリームは殆ど食べ終わっており、美味しさを味わったのは最初の一〇二〇であつたことを思い出した。

勿体無い……と思いながら、彼女はもう一度青井を見上げる。斯波とは話が終わつたのか、祇園の視線に気付いたようにこちらを見た彼と、彼女の眼が合つた。

ドキドキしながら口を動かしていた祇園を見ると彼は笑い、「俺も食おう」と長い指を菓子箱に伸ばす。

祇園があの手に触れられたいと思つたことは、一度だけではない。

だがこの甘い瞬間に、何故か昨日自分に笑いかけた別の青年の顔が、声が上書きされており、祇園は焦つた。

久しぶりに青井に会つたといつのに、彼が眼の前に居るのに、どうして違う男のことを考えねばならないのか。忘れてしまいたいのに、どうしてなのか？

祇園が一人で焦つていると、更にこの飽和状態の研究室に来客が現れた。

「祇園、いるー？ いたらお昼食べに行こー？」

現れたのは美幸であった。時間はまだ少し早いしショークリームを食べてしまつたが、学食が混むよりはいいかと祇園は思い、立ち上がつた。もう青井と別れてしまつのは寂しいのだが……。

そう思いながら、祇園は弥栄と話している青井にまたちらりと視線を遣る。美幸がそんな彼女に気付き、何かを言おうとした時、

「そんじゃ、俺行くわ。弥栄、こちそーさま」

青井は弥栄に礼を言つと、斯波に「失礼します」と一礼し、タイミ

ングよく研究室を去つた。

「私も行こつか」

それを見た美幸も、祇園に声を掛けた。

「で、昨日の兄さんはなんのよ」

理学部棟の前で青井と別れてから早速、美幸が祇園に尋ねてきた。

「こっちが知りたい……」

「けんなりしたように祇園は言った。

「仲良さそうじやない」

「昨日五年ぶりに会つたんだよ」

祇園のその言葉に美幸は驚いたよう、睫毛の長い一重瞼の眼を見開いた。

「そつは見えなかつたよー。こちやこちやしきやつて」

「……」

「こちやこちや……そんな甘いものではなく、非常に疲れるやつとりであつたのだが……。

祇園は昨日の出来事を思い出し、大きなため息をつく。

「でも五年ぶりに会つた風には見えないよ？ よつぱり仲のいい彼氏だつたんだねー。中学生で、か。すごいなー」

現在彼氏が居て、そのうえ学部でも男性に人気のある美幸であるが、羨ましそうに唸る。

「いや、全然想像と違うんだけど……」

早海が昨日あることないと言つてくれたおかげで、彼女達の中ではもう「もしかしたら」レベルの話ではなく、確定に近い形で彼と祇園の関係がイメージされている。それをこれ以上どう訂正すればいいのか分からぬ祇園だが、美幸の言葉からふと思つた。

確かにあれほど男子とテンポよく、気を遣わず話せたことはあれ以来ない。

たとえば光だったりイライラさせられる」とはしょっちゅうで、彼自身、突然話に興味を失つて白けてしまつようなどいろがある。弥栄の場合は安心して話せるが、逆に毒にも薬にもならない無難なやりとりしかしていない。

青井の場合は……残念ながら意識してしまって、ろくな会話にならない。

そういう意味では早海は昔馴染だからといつべきか、そうは言つてもあの頃も他の男子とはそこまで仲良く話してはいなかつたので、彼とは何か馬が合うものがあるのでどうか……。

だが今日は朝から電話もメールもなければ、あの顔も見ていない。やはり昨日のあれは気まぐれであつたかもしれない。

また思わず彼のことを考え始めた祇園に向けて、美幸は食堂のドアを開けながらやりと笑うと言つた。

「でもさ、報われない片想いよりも、自分のこと好きでいてくれる人と付き合いたいってのが人情つてもんじゃない？」

祇園はその言葉にぎくりとしながら、振り返った美幸を見た。鋭い彼女のこと、祇園が秘密にしている青井への気持ちも……疾うに気付いているのだろう。

「どういう、意味……」

どう返答してよいか分からず、祇園は動搖したように咳く。

「だから見込みなさそうな人のこと考えて悩むよりも、別の人があい寄ってくれるなら、祇園が嫌いじゃなければそつちと付き合つてみればつてこと。早海くんなら、申し分ないでしょー！」

「……」

祇園は黙つて何か言いたげに美幸を見た。美幸はそれが分かつた

かのように言葉を続けた。

「まあどうしても好みでないなら付き合えなんて言わないし、中学生の時と違つて（いや今は中学生でもそつか）付き合つと色々あって自分の体が傷つくかもしれないなら、余程信用できる相手じゃないと嫌だろうけど」

トレイを持った美幸の苦笑に、祇園は神妙な顔で「くんと頷いた。美幸の言つことも一理ある。寂しい、のだろうか、誰かが傍に居て自分を認めてくれれば嬉しいから、祇園とて彼氏が欲しくないと言えば嘘になる。

青井には憧れだけでなく、そういうた何かを求めたのかも知れない。ただそうしたいと思った相手に、既に相手がいただけで。

だつたらこの寂しさを埋めるには。美幸の言いたいことはそういう意味だろうと、祇園は思った。実際、早海がどういうつもりで自分に近づくのかがよく分からないので、選択肢に入れてよいものかどうかも分からないのであるが。

何より大学生の場合、「付き合つ」ということになれば、特に一人暮らしならば、ほぼ百パーセント無傷では終わらないだろう。美幸が示唆し、祇園が心配している「色々」とは、体の関係のことを指している。

祇園ももう二十歳となり、大人の区分になるのであるから、早海の言つとおり「既成事実」を作るとなると、中学校時代の二人と違い、「そういうこと」も考えられるのだろうか？

……と言つても、あの早海とそういう関係になるのは想像もつかないので、本当に彼がそういう意図で自分に近づいているのか不思議でたまらないのであるが。

一瞬、思わず祇園は彼との「それ」を想像しそうになってしまい、厨房のカウンターにトレイを押し付け、ぶんぶんと頭を振った。

「からあげ一個、おまけしきますねー」

すると突然聞こえた早海の声。

祇園が、はつと前を見ると食券と引き換えに自分にからあげ定食を渡す食堂の青年は、見覚えのあるあの顔で、爽やかに笑って祇園を見ているではないか。

「うひょわあああ！！」

祇園は妙な奇声を上げるとその場につづくまつてしまつた。思い切り「その人物」のことを、しかも変な風に考へていた時なので妙に驚いてしまう。恥ずかしいなあと美幸に窘められ、祇園は動搖を隠しどうにか立ち上がる。

「今日は朝っぱらから入つてたんですよ。だから連絡も出来ないで寂しい思いさせてごめんなさい。あ、橋之江さんにもおまけね。今日だけですよ」

大学生協の中で、朝八時から開店している「はまなす食堂」のトレードマークのナスのエプロン姿にタオルを巻いた青年・早海は、祇園の苦惱も知らず、勝手なことを快活に笑つて言つてのける。

「何が寂しいだ！　ばか！」

上手い返し言葉も見つからず、祇園は赤い顔で子供のように罵る
と、からあげ定食（みぞれ掛け）を受け取りテーブルへと向かつた。
「あとでメールしますねー」

という能天気な声を背中で聞きつつ、周囲の不思議そうな視線を浴びながら、もう自分はどうすればいいんだと、祇園には折角の昼食の味も分からなくななりそうだった。

第6話 告白…？（前編）

さて。舞台は変わり、一ヶ月後の某県の山中にて。

太陽は一年で一番高く昇りさんさんと照りつけ、流れる川面はその光をきらきらと反射している。

川原では頭にタオルを巻いた大柄な青年が、川魚を七輪で焼く香ばしい匂いが漂い、その隣に居るのはビーチパラソルの下、アウトドア用のリクライニングチェアで眠る、麦藁帽子にサングラスを掛けた赤毛にピアスの男。

「だーかーら、お前ら一体何しに来たー！」

広大な自然の中、三人しか居ない川原で、祇園の叫び声は青々とした山へと吸い込まれていった。

どこのレジャーに来たのかという残り一匹の斯波研メンバーに対して、祇園と言えばTシャツ短パン姿に手には軍手、頭には気合の為にタオルを巻いて髪の毛を束ね、川原の石を拾い起こしては、眞面目に石に付着した藻だの虫だのを採取していた……。

六月も終わりの暑くなつたきた中、何故このメンバーがこのよくな山中の河川敷にいるのか。

ここに至るまでは、早海が祇園の前に現れて一週間後のことから説明することになる。

・・・・・

「おめでとー！ 楽しい六月巡検の日程が決まつたぞー。第四週の金曜土曜にかけてだよ。喜んで空けといでねー！」

一本の電話を切つた後、斯波が嬉しそうに、白衣の祇園といつもどおり好き勝手なことをしている光と弥栄に向けて、ぐるりと椅子を一回転させて高らかに宣言した。

「今年も……」

「行きますかー」

弥栄と光が口を揃えてそう言った。

……また、去年みたいなことになるんだろうか、と祇園は一抹の不安を覚えながら既に頭が痛くなつていた。

斯波研での通称「巡検」は六月と十一月の一回、行つてゐる。斯波の所属する……つまり祇園や弥栄が所属している学科は、新設と言つこもあり、理学部の中でも少々変わつてゐる。

実験室での分析も行つが、そのサンプルは土や川、植物、時には動物など、常に野外の自然物を採取し、そのシステムを化学的に解析する云々……ということを研究目的にしてゐる学科なのだ。言い換えれば、数学等の科目と異なり肉体勝負で実験材料を得る学科なのである。

しかし斯波を見れば分かるように学科内にはやる氣のある教官もおらず、授業としては野外調査も少なく樂なのではあるが、斯波研は自由奔放な斯波自らが趣味で外に飛び出し、時に斯波研の学生メンバーも強引に刈り出される。

特にこの「巡検」については他の謎の実験と違い、斯波の「本業」大学での表向きの仕事であり、正式に学会に出せるような研究なのであつた。

よつて学会提出用に年毎のデータが必要になるらしく、毎年一回、決まった時期に同じ場所　近県の山中で学生たちにサンプリングをさせている。

内容は一日中河川の様子を記録したり、石にこびりついた藻や虫を採取したり、水の成分を分析をしたりという地道なもの。

それでもこの巡検は、斯波研で唯一と言つていいほど「まつづらな仕事」であり、そういう結果も残さねば「教授」という立場上、彼も自由な研究はさせてもらえないであろう。

彼らの口頭の様子から、眞面目な研究には見えないと言われてしまうものの……。

そしてそういう意味では、このまともな研究である巡検は、青井の卒業研究にも関係する内容らしく、彼が来てくれるかもしれない、という期待が祇園にも持てるのだ。

だから祇園としては嫌そうな顔をしつつも、少々楽しみなのである。

更に斯波は偉そうに胸を反らして言つた。

「しかも今年は、教職員組合のクジ引きで当たった温泉宿泊券で、なんと近くの温泉宿に君たちを招待してやろう！」

その宣言に、ははー、とノリよく光と弥栄が頭を下げる。祇園は昨年の悪夢を思い出し、その言葉に心から安堵する。

去年は雨の中、川原でキャンプ、という散々な六月巡検であったのだ。眼が覚めたら、眼の前まで増水していた……といつぞつとするオチである。

そう思えば、この貧乏教授の下で今回は温泉に泊まるなど非常に幸運であると言える。

もちろん巡検 자체は二十四時間体制で行うので、数時間おきに誰かが河川まで行かねばならないのであるが、風呂と温かい食事が与えられるだけで女性としては非常に嬉しい。

祇園がそう思つていると、隣の実験室から機械が止まるブザーが

聽こえた。

今日は新種の菌類を増殖させる作業をさせられている。彼女は「はいはい」と実験室の方に向かつ。

そして祇園の居なくなつた研究室で、ふと思いついた弥栄が斯波に相談した。

「でも温泉宿となると、夕飯とか深夜のサンプリング……どうします？」

気の利く彼としては、温泉宿なら全員が一緒に食事を取つた方が宿の方も楽ではないか、しかも温泉宿なら酒好きの斯波研の面々、忙しく食事を済ましたり、ゆっくり呑めないのもつまらないのではないか、と心配になつたのである。

しかし斯波はそれを聞くと、ふつふつふつと不敵な笑いを浮かべた。

「それなら、ダイジョーブ。手は打つつもりだから……」

そんな斯波の思惑も知らず、祇園は静かな実験室で、まだ熱い機械から培地の入つたフラスコを取り出し、湯銭で地道にほどよい温度まで冷ます。

温度計を見ながらぼつぼつと待つていると、携帯電話にメールが届いた。

湯銭も機械に任せているので、手が空いていた祇園はそれを確認するが、それは……早海からであつた。

しかもそのメールは実に一日ぶりのものであつた。

彼と再会してから一週間。彼もまた本物のストーカーのよう、二十四時間祇園に張り付いているわけではない。時には丸一日以上音沙汰の無い時もある。

アルバイトが忙しいのか、気を遣つてくれているのかは分からないが、それこそ家までつけてくることなどなく、祇園の前に現れるのは意外と人の居る場所 学校内だけのことであった。

彼女が学食で昼食をとろうとすれば、アルバイト中のくせに声を掛けてくるし、時には抜け出したりもしてくる。

またアルバイト以外にも、工学部のくせに何故か理学部の授業をちゃっかり受けたりする。

そういうしている内に、早海は美幸以外の祇園の友人知人にまで顔を覚えられてしまい、特に女性の人気を得て仲良くなっている始末である。

「こんなところで何やつてんだよ！」

そんな早海を祇園が影に引っ張つていき説教すると、美幸あたりに、「あらあら今日も仲がよいことだ

と冷やかされ、益々げつそりさせられる。

祇園がつい反応してしまつから早海も余計にからかつてくるのだろうが、彼女にとつては実に疲れる毎日であった。

だが完全に無視したくなるほど嫌悪感はなく、それを出来ないでいるのは、やはり昔馴染みの世話の焼ける後輩だと、彼女自身思つてゐるからだろうか。

それにこうして現れない日が続くと、今度こそ早海も自分に見切りをつけただろう、寧ろそうして欲しい、と祇園はどこか安心するのだが、何故か焦りも感じてしまうのであった。

もう連絡もこないかもしない。

もしかして、自分に失望したのかもしない。

一度そのように「もしかして」と仮定すると、それを望んでいた

筈なのに、妙な不安が祇園に広がる。しかし不安になつていても、また彼から連絡が来るので。

そしてそのこと、どうしてだか安心してしまつ。…… またすぐに苛立ち、怒鳴られるものの。

だが不思議なことに、これは青井に会えて緊張したり、ようやく会えたと嬉しく思うのとはまた違つ安心感をもたらすのであつた。何か心から安心するような、救われるような、もつと本質的な……。

だがその気持ちは、五年前に置いてきた筈であつた。そこから眼を逸らし逃げてきたものを、じつして思い出す必要があるのかと祇園は抵抗していた。

それを認めたくないなら、このままどうつかずの態度のまま、表面的に彼の相手を続けるしかないだろうか。そのうち、彼も飽きる時が来るのだろうし。

そんなことを考えながら、祇園は憂鬱な気持ちで携帯電話を見る。早海からのメールの内容は、いつも他愛もないことである。バイト先の店長の犬が猫を産んだとか言うホラ話から、腹減ったからメシ食べに行きましょうというものまで。

数日に一度なので、祇園もそつ鬱陶しいとは思わない。そのあたりの駆け引きも上手い男である……。

なのに今日は珍しく、「会いたいです」と、ただ一言しか書いていなかつた。

「……」

どんな気持ちで彼はこんなメールを打つのだつたか。確かに一日間全く顔は見ていないものの……。

祇園は、ああもう、なんだかなあと頭を搔ぐ。

なんでこんな風に、彼は自分のことを求めている「ふり」をするんだろう。

それを確かめるのはやはり恐い、と直感的に思い返信に困つてしまつた祇園は、携帯電話をそのまま閉じた。

しかしメールの内容がやはり気になつて、祇園はぼーっとしながら、謎の菌を植え付ける作業を行う。

その間に弥栄はアルバイト、光は合コン、斯波も久々に家族と食事をするとそれに帰つていった。彼女が気がつけば、辺りはもう薄暗くなつていて。本日の作業を終了した祇園は、片づけを終え研究室に鍵を掛け、午後七時、理学部棟を出た。

今夜はアルバイトもなければ友達と約束もないのに、帰つて一人分の夕食でも作つて食べよう。祇園がそんなことを考えながら、理学部棟を出て直ぐの駐輪場となつてゐる通路を横切ると、其処には一人の青年がヘルメットを首の後ろに掛けて原付に跨つていた。

「何してんの……？」

六月上旬の宵の口は、夏至が近いので七時でもまだオレンジ色の空が、暗い闇から逃げるように光を残している。その闇に佇んでいた早海に祇園が問い合わせると、彼は「別に」と肩を竦めた。

てつくりいつもの彼からして、「待つてたんですよ」と軽く言うかと思っていたので、祇園は少し拍子抜けすると同時に、光の加減か彼の笑顔には陰りがあるような気がしていた。

先程のメールが蘇り、祇園の胸が騒ぐ。

しかし早海は直ぐにいつものように笑うと、わざとらしく困った顔をした。

「女性をこんな時間まで一人にしつぶなんて、いけないなー」

「……まだ七時だろ？が。それに夏だから明るいし」

祇園は呆れたようにため息をつく。

それこそ卒業研究で遅くまで残っている女子学生もいるのだし、アルバイトや飲み会があれば真夜中に帰ることもあるところ、「んのう」と思ったからだ。

「歩いて帰るんでしょう？ 送つてきますよ」

「いらない」

家なんか知られたあかつきにはどうなるかと、祇園はきつぱり断つた。

「……って、俺もこれからバイト行かなきゃなんんですけどね」

しかしそれは半分冗談だったのだろうか、それとも祇園が頼めばアルバイトはどうする気だったのだろうか。早海は苦笑するとヘルメットの紐に手をやつた。そして祇園の方を見ると、彼はぽつりと呟いた。

「でも会えて、よかつた」

「」

なんだ？

祇園の胸にまた違和感が広がり、そのことが彼女の本能に警鐘を打ち鳴らす。

昔と変わらない明るい調子で自分を口説き、しつこいくせきまとう早海だが、時折こんな風に見ていけない気にしてせりられる、「陰」の一面を見せる。

だがこの一面こそが、祇園に「何か」を警告していた。

思い出せうとしない、過去に置き去りにしてきた何かときつと関わってくることで、祇園自身があの時の自分にもう一度向かい合わなくてはいけないような大事なことであり、それこそが眞実である

ような……。

しかし、それ以上は考えたくない。

自分は青井に、報われない綺麗な片想いをしていればそれでよかつた。もう、いい加減にして欲しいと思う部分があった。

だから祇園は思わず口走ってしまった。あの日のように、自分が彼から逃げる為に。

「もう、いい加減に、したら……。なんで、私なんかに、そんな付
けあとのうの？ 私に、どうして、欲しいわけ……？」

第7話 告白…？（後編）

夕暮れの人気の無い校舎の影で、早海は少し驚いたように眼を見開いたが、携帯電話をちらりと見て時間を確認すると電話を再びバッグのポケットに入れた。そして彼は、短く息を吐き出した。

怒っている、とまではいかないが、聞いてはいけないことなんだろうか、と祇園は心配になってしまった。

しかし理由も告げず自分に迫るのは早海の方なんだから、と開き直ることにした。

そこで早海は、いつもどおりの穏やかな笑顔になると緊張している祇園を見た。

「そうですね……。昔みたいに話したいと思いましたよ。実際、話せて楽しいし。あの頃も楽しかったし」

祇園とて決して彼と話すことは楽しくないわけではない。そう思いい、黙つて早海の話を聞いていた。

「別に話すだけなら誰でもいいんですけど……やっぱ祇園さんは、面白いですよね。少し変わつてて」

「失礼な」

祇園は生意気なことを言つ後輩を見上げながら睨む。彼は微笑むと、言葉を続ける。

「だから、これからもそうしたい……けど、それだけじゃ嫌なんです」

よく分からぬが、何処か含みのありそうな言葉と、徐々に真面目なものになつてきた声に祇園はどきりとし、何故か身体の奥がじゅんと疼いた。

「最初に言つたじやないです。何か特別なものが欲しいって。既成事実みたいなのが」

その言葉の意味を考え、彼と再会してから「もしかしたら」の仮定に翻弄されている彼女は、ただ頷いた。

「ガキの時みたいにただ話してるだけじゃ、他の人と変わらないじゃないですか。それこそ斯波研究室の先輩方と」

……確かに。早海に付きまとわれていると言つても、あそこに入り浸つている光や弥栄と過ごす時間は、一日のうちで彼と過ごす時間よりずっと長いと祇園は感じている。

祇園がそう思つて彼を見上げた時、薄暗くなつてきた中、早海が彼女を真つ直ぐに見つめて唐突に告げた。

「だから、付き合いませんか?」

どくん、と祇園の心臓が波打つた。

五年前、どれほど周りから勘ぐられてもこの言葉だけは互いに口にすることがなかつたのに、あの頃のように他の人間よりも「特別」な関係になりたければ、大人になつた今はこういう意味合いの関係でないとそれが成し得ない、としつかりと要求されてしまった。

やつぱり、と思う絶望の気持ちと、でもどうして自分を?…という混乱の気持ちで、祇園はどう答えてよいか分からぬ。

『自分をいいと言つてくれる人と付き合つちゃえればいいのに』という美幸の言葉を思い出す。

遂に本当に提案されてしまつたが、どうすればよいのだろうか。
第一、自分はこの男のことが「好き」ではない。

「別に……早海のこと、好きじゃないし……」

だが本当に「好き」な相手とは付き合えない状況にある。困ったように言つ祇園に早海は肩を竦めた。

「好きだから付き合つてばかりでもないでしょーが。この年だともう

美幸の言葉もそういう意味であり、祇園の周りにもなんとなく流れたり、一緒に過ごしたりしている内に身体の関係になつて、そのまま彼氏彼女になつている知り合いはたくさんいる。子供のよう前に告白して、OKもらって……などとこつ順当な流れは、この年になれば確かにないようと思つた。

だからと書いて、祇園が今すぐ早海とそいつ出来るかと言えばそつでもない。

「でもそれじゃ、上手くこきつひないと困つ……や、それになんで私なのわ？ それこそ好きじゃないのに、付き合つて欲しいなんて、口だけだつたりするんぢゃないの？」

祇園の言葉に早海は眼を丸くすると、また笑顔を消して口を開き、何かを言おつとしたのを、彼の方など恐くて見ていられない彼女は更に遮つた。

「それに、ダメでも、こんな風に好きでもない人と付き合つようなの、青井先輩に、知られたく、ない……」

眞面目な祇園は自分の不実を青井には知られなかつた。好きでもない男と一緒に居る「女」の自分を、彼に見せたくないと思つてゐる。

片想いが報われないから、相手に見せ付けてやろうなどと思つタリでは、祇園はなかつた。

そんな「嘘」をついているようでは、憧れたあの強い彼の前に、自信を持つて立つて居られないと彼女は思つたからだ。

すると祇園の耳に、早海の舌打ちが聞こえたので、再びどきつとして彼を見上げた。

「彼女居る相手なんだろ？ 略奪するか諦めるしかねえのこと。何、操立ててんの？」

聞いたことのないような彼の少々乱暴な言葉に、祇園は自分が失言したような気にさせられたが、彼女とて自分の気持ちが間違っているとは思っていないし、そのように言われたくないと想つ。

「早海には、関係ないし」

祇園もまた、売り言葉に買い言葉のよつて言い返す。

「そーですか」「

いつもの温厚な雰囲気はどこへやら。敬語は戻ったものの、どことなく冷たい態度になつてゐる早海に、私が何か悪いことしたのかよ……と祇園の方が戸惑つてしまつ。

早海はそう言いながら頭にゴーグル付の小さな白いヘルメットを乗せた。

「俺、バイト行きますけど……送れなくてすみません。明るいところ歩いて気をつけて帰つてくださいよ。なんかあつたら電話ください

」態度が硬化した割には、相変わらず祇園を気遣う彼は、本当に時間が迫つてしまつたらしく、そのまま原付のエンジンをかけて行つてしまつた。

祇園はそこにぽつんと一人で取り残される。

今のは、告白なのだらつか……。

彼女はそう思つたが、よくよく考へると違つ氣もした。

愛の告白と言つよりは、「付き合つ」という形だけを目的としているような、そんな意味合いに感じられた。

逆に言えば、じゃあ自分と付き合つ田的はなんなの、と祇園は問い合わせたくなる。だが、こんなに緊張する空氣はもう御免なので、聞きたくもない氣もあるが……。

夕闇の中を祇園は重い足取りで歩き出す。

彼が自分に何を求めているのか知りたく、その答えは返つてきた

のだが、却つて彼の真意が分からなくなってしまった……。ある意味、この「告白」で誤魔化されてしまったような気がしないでもない。

本当に付き合ってみれば早海の考へていることが分かるのかも知れないが、青井のこともあり彼女には抵抗がある。

「……早海の、ばかっただれが……」

こんな言葉は五年前にも吐いた。

次彼に会つたらどんな顔をすればいいのか、彼に何と答えればいいのか、彼は自分を諦めてくれるのか、逆にこれで気まずくなつて元のように話が出来ないのではないか。

空腹であるものの、夕食を作る気力もなくなり、祇園はどんどんよりと暗い気持ちで帰路についた。

・・・・・

五年前、冬。

今日はバレンタインデーだつた。中学生であれば大抵皆浮き足立つものだが、別に好きな人も居ない祇園はどうでもよい行事だと思ひ、帰り道を一人で歩いていた。

冬の弱々しく、長く伸びる夕焼けの中、白い息を吐いていると、

「祇園さん！」

いつもの高い声の少年が追いかけてきた。

なんだよ、と鬱陶しそうに振り向くと、「はい！」と、彼は喜色満面の笑みで可愛らしい包みを渡すではないか。

「……なんだこれ」

「ばれんたいんです」

「……お前、男だろ」

「え？ 今日はすきな人あげる日なんじゃないですか？」

ちなみに外国では男性からとこう風習のある国もあるらしいが… それはさておき、大きな眼をきらきらとさせて言ひ、少年のセリフには相変わらず呆れてしまつ。

しかし食べ物を無駄にするわけにはいかないし、甘い物は嫌いではないので、祇園は仕方なくそれを受け取つた。

「ありがとー」ぞこます」

早海の方が満面の嬉しそうな笑みで礼を言つ。

「お返し待つてますね」

「はあ？ あるわけないだろ…？ 第一その頃、公立の受験……、だつづーの……」

祇園は早海に「受験」という言葉を吐きながら、日程は県内の高校ならば統一されているが、この地区内の高校を受けるわけではなく、自分は来月には遠くの地へ行つてしまつことを思い出した。面倒だからと、彼女は引越しのことを誰にも話していなかつた。

勿論、彼女に鬱陶しいほど懐く、早海にもだ。

祇園と一緒に成績が学年トップクラスの早海は、

『俺も北高行きますからね、一緒に通いましょうね』

などと一年の時から、本気か冗談か言い続けていたことを少女は思い出す。

約束なんかしてないけど、そういうわけにはいかないんだよ。

その笑顔に祇園は少し胸が痛んだが、彼がこうこうことをしてくれるのは気まぐれだらうとずっと思つていた。だからそこまで深刻に考えることはないと思つていた。

好きだ好きだと言われても、子供のような笑顔で素直に言われれば、少女漫画の彼氏彼女のような男女のそれではないような気がしてしまった。

それこそ、同じ母親の居ない田上の自分に懷いている小学生のようないのではないか。本当に、自分のことが「女」として好きでこのように言い寄つてくるのではないのだろう。

実際にだからこうして、後腐れなく軽口を叩き合つて付き合つていられるわけなのだが……。

少女だった祇園はこの時、そう思つていた。

忘れない嫌な日が訪れたのは、この少し後のことだった。

そして、五年後の現在。

あれも、告白と言えば告白の部類に入るんだろうか……。

風呂上り、冷たいお茶を前に、祇園はまだ濡れた髪をがしがしと拭きながら、そんな昔のことを思い出していた。

そう思うと、早海に「告白」されたのは二度目になるわけである。しかしそれはバレンタインデーのチョコレートであつたり、「付き合いたい」という恋人同士の形式を祇園に要求しているだけであつた。それは言葉だけで、彼自身の本心は未だ見せていないような気がしているのだ。

祇園のこうした部分は美幸や光あたりが彼女を面白いと思つ所以であるのだが、あながちこの勘は間違つていなかつた。

彼女は子供の頃からそついた他人の感情の悲喜に、敏感な方であつた。

感情を見せずに、形を求める彼。

自分に好意があるふりをする彼。

その目的は、何なんだ？

恐いくせに、自分が早海を無視出来ない理由は、何だ？

その答えが出ないままに、早海はどんどん祇園に近づいてくるので、どうしてよいか彼女は今宵も分からない。

しかし夕闇の中、自分を見つめた彼を思い出すと、切なく苦しいものが祇園の胸の中で、弾けていく。

付き合って欲しいと言ったあの声が彼女の胸の中を、反芻している。

・・・・・

その次の日、早海は祇園の前に現れなかつた。

少し不機嫌そうな彼が思い出され、怒らせてしまつたのかと、いつも優しくされていた分、祇園は不安になつてしまつた。それでも返事を迫られても困るので、どこか安心もしているという、彼女自身よく分からぬ心境に陥る。

だが、二日くらい経つた後に理学部棟へ行くと……、早海が美幸と仲良さげに立ち話をしているところに行き会つた。

山積みのダンボール箱に腕を乗せて話をしている様子から、彼はまた何処かへ教材を届けに行く仕事をしていたらしい。

自分の学部の授業もきちんと受けているようだが、常に働いているイメージのある男である。本当に学生か？と祇園が内心思いながら、気まずいのでそのまま通り過ぎようとするが、「考えてくれましたー？」

と早海の方から、こつもじおつに「やかに声を掛けてくれるではないか。

「何の話ー？」

と美幸にも突っ込まれ、祇園は心から苛立たしょくな恥ずかしいような思いにさせられる。

「知るか！ バカ！」

美幸の前で話すな！ といふ思にもあり、口汚くそう言い残すと、祇園は赤い顔をして急いで立ち去っていった。

それからも彼はまた元のようになり、祇園の前に現れるようになったのである。

あの時の真剣な顔が嘘のように、「告白」したことすらいうして軽い調子でネタにしてくる早海だったが、やはり祇園は不思議に思つた。本当に好きならこんな風に冗談みたいに口説くだらうか、彼の本心は何処にあるのかという疑問は益々膨らむ。

だから「告白」についてもどう反応してよいか、この違和感を早海にどう説明すればよいのか祇園には分からぬのである。

困った彼女は結局その返事をうやむやにして、幸いなことに早海も彼女に無理に迫ることとなかった。

そして一人は、表面的には今までと同じ中学時代の先輩後輩のまま、あの夕方の「告白」は互いの胸の内の秘密として、複雑な感情を隠し合ひ、時は流れていったのであった……。

そしてそれから一週間が過ぎ、六月巡査の日がやつてきた。

今日の活動は学外であるので早海も現れないだろう、と祇園は内心ほつとしていた。

マイペースな仲間たちに、相変わらず突っ込まれつつも、最近のこの変な感情や関係を忘れて、山中の川のせせらぎとマイナスイオンに心を癒されたいといふのである。

だが祇園のこの淡い期待は、脆くも崩される どころか、彼女を搖るがすような大きな出来事がこの巡査中に起きるとは、この時彼女はまだ知らずにいた……。

第8話 巡査、開幕！

舞台は再び某県の山間部へ…… 斯波研の六月巡査へと移る。

標高七百メートルの盆地であるこの地は、六月といえども湿気の少ない気持ちのよい空気が特徴的である。朝夕の気温は都会よりは低いが、昼間の太陽の照りつけは標高の分、却つて麓よりも厳しく感じる。

ただ祇園は川の中にいるため、暑さはそれほど感じていなかつた。

「ゼミ長ー、岩魚焼けたよー」

そのせせらぎの中、祇園の耳に弥栄ののんびりとした声が聞こえてきた。釣りが趣味だという彼は川が俺を呼んでいふと言わんばかりに、この巡査を利用して渓流釣りに勤しんでいた。そして釣ったそれを自前の七輪で焼いている。

そういうや腹も減つたな、と高くなつた太陽を見上げた祇園は、区切りの良いところで作業を中断し、川から上がつた。そして彼女が後ろの一人を振り向くと、既に匂いで眼を覚ました光が先に、串に刺さつた岩魚をかぶりついている姿が目に飛び込む。彼の右手には器用に携帯電話がある。今日も携帯小説とブログの更新は忙しいらしい。

「コイツ何しに来たんだよ……と祇園は思いながら手ごろな大きさの石に腰掛け、バッグから自作のおにぎりを取り出し、弥栄から渡された岩魚を受け取る。

「午後からは俺入るよ」と弥栄は言つものの、「うんにゃ」と祇園は食べながら首を横に振つた。

「うなればヤケだ。最後まで自分がやつてやる」と、彼女は変に意地を張つてしまつていた。実際光を引き摺り下ろして、あの気

持ち良さそつた黄色い椅子で昼寝でもしてやうがとこつ氣持ちもないことはなかつたが。

「今夜はビール美味しいだろーなー」

そして何もしていない光が伸びをしながらそつ言つた。
ちなみに彼はいつも何もしていないように見えるが、流石、人文学部の携帯小説作家というべきか……。

斯波研では野外調査以外にそれこそゼミも行つており、その内容は、例えば「生まれ変わつたら三葉虫になる為には?」などという奇天烈なテーマで各自論説をまとめて斯波に提出する（それを斯波は怪しい研究所に送るらしい）というものもあるが、この男はそういう時に、最も説得力がある論文を展開することができるのであつた。よつてこんな彼でも、実は斯波研には不可欠な人材なのである。

それはさておき、昼食を食べていた祇園は、「そろそろかな……？」と期待していたのだが。

「あ、青井さんだ」

石の上に干しておいた釣竿を片付けていた弥栄が、祇園の期待通り川原を歩いてくる若い男を見つけた。

そう、本日の巡検は卒業研究にも使用できるデータだからと、午後から多忙な青井が参加する上に、温泉宿も一緒に泊まると言つのである。祇園にとつて、これ以上の喜びがあるだろうか。

片想いであり彼が四年生となつてからは中々接点のないことを思えば、鬱陶しい早海も居ない上にこの幸運。彼女は心の内では泣いて喜んだものだった。

「悪いな、遅くなつた」

彼は自然が好きだからこの学科を選んだという話を祇園は聞いたことがある。更に、色々なことを知りたいからと、斯波が面白いからという理由でこの研究室にいるらしい。

野外調査以外でも、趣味で山に登れば海にも潜れば波にも乗る青

井は、そのジャージに白いTシャツ、くたびれたデイバッグ姿も堂に入っている。

それでも祇園には格好良く見えるわけであるから、恋とは不思議なものであると彼女自身、思う。小学生の時に好きな男の子が五分刈りだつたり、中学生の時に好きな人がえんじ色の学校指定ジャージ姿でも格好良く見えるのと同じ原理だろう。

ただこういう時、青井はいつも紺色のキャップを前後逆にして被つてくるので、二十一歳である筈の彼も祇園には少年のように見える。

青井は礼を兼ねて後輩たちに飲み物や冷たい食べ物を次々に手渡すと、弥栄が準備よく渡した岩魚を片手で持つて齧りつきながら、誰にともなく言った。

「次のサンプリング、何時？」

「最初が十時スタートで、次は午後一時です」

まともに仕事をしているのが祇園だけなので直ぐにそう答えると、青井は彼女の方を見た。

好きな人の視界に入ると嬉しいと思うのが乙女心。しかし恥ずかしさが先に立ち、一瞬眼が合つただけで祇園はそれを逸らしてしまう。

青井は「そんじゃ、そつからやるか」と言うと、あつとこつ間に岩魚を頭から食べ終わり川の方へと足を向けた。

まだおにぎりを食べていた祇園は、先程まで頭に巻いていたタオルを肩に掛けて青井をぼんやりと見上げていたが、彼は通り過ぎざまに被つていた帽子を何も言わずに彼女の頭に乗せ、自分は腰のタオルを頭に巻いた。

祇園が帽子も何も持っていないと思ったのだろう。そのまま青井はざばざばと音を立てて川へと入つたが、顔を真っ赤にして、被せてもらったキャップのつばを目深に傾けた彼女には、その後ろ姿は

見えていなかつた。

祇園はその表情を恥ずかしさから帽子を深く被つて隠しており、残つた青年二人も、子供のように騒ぎ立てたりなどせず見ないふりをしてそれぞれの作業を再開していたが、恐らく彼らに青井への気持ちを知られている以上、彼女の今の心境など一人には伝わつていることだろう。

そう思つた祇園は、しばらくその場から動くことも出来ずにつづくまつっていた。

絶対に先輩も天然タラシの部類だ……。

誰にでも優しく明るい彼に対し、彼女はそう思つていた。

一年前の春 。

入学したばかりの祇園が、不慣れな理学部棟を彷徨つていた時のことだつた。

彼女が所属する学科は女子が少ないこともあり、綺麗だがさつぱりとした気性の橋之江美幸という女性とすぐに仲良くなることが出来た。彼女はラクビーが好きだと、早速ラクビー部のマネージャーになるため入部したという。同じクラスの皆も続々とサークルに入している。

しかし、祇園と言えばそういうものにあまり興味がない方だつた。

中学生の時は、全員が部活に入部しなくてはいけなかつたので合唱部に入つていたが、高校生の時は友人に誘われ地学部に籍だけ置いたものの、家事と勉強を両立するため帰宅部同然であつた。

大学でも既に友達も何人か出来そうであつたし、コンパや会合にいちいち参加するのも面倒臭いし、特に得意なことがあるわけでもないし、父親の仕事も先行き不透明で、生活費はアルバイトで稼ぎたいし……と思つた祇園は、結局サークルには入らないつもりでいた。

そうした考えの彼女であつたが、その日はたまたま一人で興味のあつた二年生の授業を聴講しにいつたのだが、まだ不慣れな校舎内だったので、帰りに迷い出口を間違えてしまつた。

遠回りとなつてしまつたがなんとか戻り方も分かつたところで、祇園は折角だからと日当たりが悪く、少し薬品臭い古い研究室棟を物珍しさもあつて歩いてみることにした。

祇園の所属している学科の研究室棟には、総合的で多岐に渡る分野について学ぶという名田のとおり、地質図から生物の標本までがごつた煮のように並んでいる。

そのうちのひとつ水槽には懐かしのウーパールーパーが居た。アルビノ体で、白い身体に赤いつぶらな瞳が人々に見るとやたら可愛らしい。

癒されるな……と思い、祇園が薄暗い中それを見つめていると、

「そういうの、好きなの？」

と突然、知らない男性に声を掛けられた。

おや、いい声、と祇園が思つて彼を見上げると、其処にはこれまで祇園好みの顔立ちの長身の青年が屈託なく笑つて立つていたのであつた。

無愛想で成績が良く女らしくもなかつた彼女は、中学時代、男子から距離を置かれていた。別に媚を売りたくもなかつたから、それでいいと思っていたのだが。

そつは言つても高校生の時に理系を選択してからは、男性と会話

をすることは避けて通れないことと、祇園自体、様々な友人に出会
い少し頭が柔らかくもなり身なりに気を使うようになってきたこと
もあり、徐々に男性とも会話をするようになってきた。

そうは言つても無表情でスタッフと歩く彼女は、街でも男性に声
など掛けられたことなどない。こんなウーパールーパーを見つめる
自分なんかに声を掛けるなんて、かつこいいのに変なお兄さんだな
あと祇園は初対面の感想として思つた。

「時に、シーラカンスの生態とかに興味はある？」

更にはナンパ！？にしてみれば、彼は不思議なことを聞いてくる。
祇園は、は！？と思ひながらも生真面目に答えた。

「……三葉虫の方が好きですが」

その青年は一瞬、きょとんとして表情の乏しい祇園を見ていたが、
その途端、大声で笑い始めた。

先に聞いたのはそつちだらうが、と祇園はややむつとしたものの、
仕事の忙しい父親と長年一人暮らしで、その後は独り暮らしをして
いる彼女にとって、このように楽しそうに笑う男性は妙に印象的に
映つた。

「マジで？　いや、いい！　實にいいキャラ。そーゆーの好きなら
ウチの研究室あいで。シュークリームあるから」

と男はまるで子供を誘うように笑つてそう言つと、すぐ傍のドアを
ガチャリと開け、祇園の肩を軽く叩いた。

その所作にも男性に触れられたことのない奥手な祇園は驚いたが、
彼の開けたドアの先では、見たことのない赤毛の男がシュークリー
ムにがつついており、その隣では授業で見たことがあるような気が
した、まだ話したことのない大柄な青年が茶筒を手に祇園を見てい
た……。

これがあまり他人との関わりに積極的でない祇園が斯波研に入つたきっかけであり、青井との出会いと言つわけである。

斯波研の面々は男性が殆どであつたが、斯波を筆頭に先輩や同級生も含めて、裏表の無い明るい青年たちばかりであつたので、祇園も気がつけば飾り気のない「素」の彼女で彼らと接しており、怒鳴りつけるまでに至つていた。

しかしこの仲間たちの中で、あの時自分を勧誘した「ちょっと変わったお兄さん」を祇園はそのまま好きになつてしまつたのであるから、恋とは本当に分からないな……と、彼女はそんなことを思い出しながら、川の中で弥栄と何事かしては快活に笑う、その青年を眺めていた。

「……一途だねえ……ケータイ小説のネタになりそーだ」

後ろから聞こえてきた光の声に、椅子の上で煙草をふかしながらまた携帯電話をいじっていた彼を、祇園は大きなお世話だと言つようく素早く振り返つて睨みつけた。

そんなこともありながら、午後もまつたりとした時が流れしていく。一時間起きに河川の様子を野帳に記入し、写真に收め、石をひっくり返して藻や虫を採取し、水を掬つて薬品で簡易分析をし、おやつにアイスを食べ、少々早いがハウスもののスイカを食べると一足早い小学生の夏休みのように、斯波研の面々は川原での巡検の一日を過ごした。

そしてやや日が陰り、空の青が薄くなり別の色に変わらうとし始める頃。

「ゼミ長ー、腹減つたー」

午後は暑いからと海パンで水浴びをし、水質分析くらいは若干手伝つた光が、海パンの上にシャツを着ながら本当にレジマーに来た

子供のように祇園に訴える。

「もう少し待つてろ！ 斯波教授がもうすぐ来るって。夜のサンプリングの『秘策』とやらを持つてくるから、宿に移動するのはそれからだつて」

学生達にこの作業をさせておいて、当人は何処へ行つたのか……。

斯波曰く、フィールドの開拓や面白い研究材料を探すため、地元の里山の持ち主へ営業に行く、という名目で、実情は地元のオジサンたちと採れたての農作物や手作りの漬物を挟んで、和気藹々とお茶を飲んでいるらしい。実際それでまた新しいフィールドに引っ張つていかれるのは、祇園たちであるのだが。

そんな斯波が今日は何処まで行つたか知らないものの、先程「営業」が終わつたといふ彼から、『もう少しで行くから待つてねー』と祇園の携帯電話にメールが入つた次第である。

そろそろかな、と祇園が顔を上げると、彼女達が車を止めている土手の方から白衣の中年男が歩いてくるのが見えた。

ちなみに研究室の外でも彼が白衣を着ているのは、初めて会つおじさんたちに「ガクシャ」とあると一日で分かつてもらう為であるという。

青井の時と違い、斯波が来ようとも感動はない祇園は、白衣だけを確認すると徐々に荷物を片付け始めた。ちなみに青井の帽子はまだ名残惜しそうに被つている。

よつて祇園は斯波と一緒にもつ一人、青年が歩いてきたことに気が付かなかつた。

「あ、ビーもビーも」

と頭を下げる声が近くで聞こえ、ふと祇園が顔を上げると、そこに居たのは。

「な、な、……なんで早海がここにいるんだよーーー。」

青井の前と書つことも忘れ、ちやつかりとそこに混じっていたその相手 早海に向けて、祇園は思わず失礼ながら指をさして叫んでしまった。その大声は、再び緑の木々が繁る山へと吸い込まれていった……。

「こらこら祇園ちゃん。夜のサンプリングをお願いする人にそれはないでしょーーー。」

斯波が冗談染みた口調で苦笑し、光は当然と言う顔をしてビーチパラソルを片付けており、弥栄は早海に採取や分析の方法を説明しているところだった。

「何の、話ですか……。」

祇園はふるふると震えながら斯波に問い合わせた。

「んー？ 生協の食堂部でも購買部でも書籍部でも、働き者の早海くんには僕もお世話をなつてもらひたい。もつとアルバイトしたいって言つてたし、たまには手伝ってくれる研究室のみんなにゆつくりご飯食べさせてあげたいし、たまたま居合わせた橋之江さんも薦めてくれたしで、夜の分の調査は早海くんにお金払つてお願いすることにしたわけ」

給料を払うので、早海のことは一人だけ川原に残しておいても、これは彼との「ビジネス」だと斯波は割り切つているらしい。

逆に日頃無料で働かせている学生たちにひと時の楽しみを与えてやり、何より祇園の「カレシ」をここに呼んでやるなんて、僕ってなんて粋なヤツ？とばかりに、彼は自慢げにその薄い胸板を逸らした。

祇園が拳を震わせながらちらりと早海を見ると、彼はいけしゃあしゃあと、「とこづわけでよろしくお願ひします」と彼女ににこやかにこな

かに頭を下げるではないか。

知つていながら自分に内緒にしていた美幸にも、適當なオヤジの斯波にも、恐らくこの企みを知つていてあらう光や弥栄にも、何よりこんなところまでのこのことやつてきた早海に何よりも怒りを抱きながら、祇園は叫び出したい気分になつていた。

そして彼女が青井を振り向けば、今度は意味深な表情を浮かべた
彼と眼が合い 。

憧れの先輩と一つ屋根の下、ドキドキ楽しい巡検旅行、となると
これが波乱の展開が予想され、祇園は大きな大きなため息をついた
のであつた……。

第9話 振り子の心

本当にアルバイト生一人だけをこんな寂しいところに残して行ってしまうのかと、早海であることは関係なく祇園は心配になつたのだが、「あとはよろしくー」と男連中は荷物を片付けてしまつてゐる。

「……本当に大丈夫なの？」

口も聞きたくないと思ったが、祇園は思わず早海に尋ねた。

「心配してくれてるんですか？」

しかし嬉しそうに笑つて聞き返されるので、余分なことを言わなければよかつたと彼女は心底思つた。

「分析の方が心配なだけ」

祇園はぶすりとそう返し、早海に「ひでえ」と苦笑される。

そんなやり取りを横に、斯波が光達に向けて言つ。

「一応、メールで僕と連絡取り合うことになつてるけど、宿から歩いて来れる距離だし、君らも気が向いたら見に来てあげてねー」

「はーい」と言う光や弥栄の声を聞きながら、祇園はぼんやりと考える。

実際、早海も「仕事」として斯波にそれなりの金は渡されているのだろうし、この川原もサンプリングの場とするくらいであるから荒れた人目のつかない場所であり、車もここまで入つてこれないので、余程のことがなれば不良悪漢に襲われはしないだろうが……。

また、梅雨時であるが最近は雨も降らずに増水の心配もない。野犬なども火を焚くようであるし……大丈夫かな、と祇園は早速、一晩此処で寝泊りする準備をし始めた早海を見るともなしに眺めていた。

彼はザックの上から薪を一束、ザックの中からはテントだの椅子だの飯盒だのを出し、手際よくセッティングしている。

「一体、何者だよ……」

その手際よい様子に祇園は思わず呆れたように呟いた。

「こーゆーこと、慣れてますからねー」

早海の言葉のとおり、飯盒は古びたものだった。祇園は聞いた割には興味なさそうに「ふうん」と頷いたが、そう言った彼の笑顔には僅かにひっかかるものがないでもなかつた。

空白の五年間に、こうじうことを彼はしてきたと言つのだろうか。あの頃は女の子のように可愛い顔をしていたのに、遙しくなつたものである。

だが、それはただの趣味かなんかだろう、と祇園はそれ以上疑問には思わなかつた。

「それじゃ、白川くん、よろしくお願ひします」

最後に斯波が早海に頭を下げ、「がんばってねー」と斯波研の面々も彼に手を振り去つていく。そして来た時と同様、弥栄の車に祇園と光が乗り、斯波や青井はそれの車で今夜の宿へと向かつたのであつた。

荷物が多いので車で移動したのだが、宿までは車で五分もかからなかつた。先ほどの川原まで歩いても一十分はかかるない距離である。

また温泉宿と言つても、所詮斯波が教職員組合のクジ引きで引き当てたものなので、老舗旅館などではなく、遠くから温泉水を引いてきただけの大浴場を持つ、ビジネスホテル風の建物であった。

それでも昨年のようなテント泊を思えば、女性の祇園としては広い風呂にのびのびと入れるだけでも嬉しいものだ。確かに早海には感謝もしたくなる。

……一度くらい、何か差し入れでもしてやるか……。

冷酷になりきれず、眞面目で世話を焼きな一面がある祇園は、湯船にとぶりとつかりながらそんなことを考えていた。

そういう彼女であるから、つい仕事を引き受けてしまったり、懐いてくる早海も切り捨てられなかつたりするのだろうが。

祇園が風呂から上がり、食事が準備された部屋に行くと、既に斯波がひとりで出来上がっていた。

祇園も含め、他の人々は流石に何かあれば川原まで行けるようにというのもありジャージ姿でいたが、斯波は浴衣で開襟状態になっていた。彼こそここで最後まで飲んだくれている気らしい。訴えられるようなことだけにはならないで欲しい……と切に願う祇園であった。

とりあえず六時のサンプリンングを終えたと言つ早海からの定期連絡が、斯波の元にメールで届いたらしい。

それを聞きひとまず安心した人々は、一応巡査の打ち上げということで、実際、二十四時間体制なので明日の午前九時まで続行されるのであるが、開宴した。

「バイト君、飲めなくてかわいそーだなー」

と光は言うものの、実質早海はまだ十八歳なので、既に新入生歓迎会などでアルコールは飲んでいるのではないかと思われるが、この場に居ない方がいいだろうと祇園は思つていた。

そして飲むと饒舌になる斯波研メンバーは斯波を中心に賑やかな盛り上がりを見せ、食事が済み、男性陣の部屋で二次会が開催されてもそれが続いた。

昨年はまだ女性の先輩も一人は居たものだが、今年は祇園が女性

一人で泊まつて いる状況である（宿泊部屋はもちろん別であるが）。しかしおちゃらけていても、家庭もあり最終的には全責任を負うつもりの斯波と、一見ふざけていても何處か眞面目で紳士な一面もある斯波研メンバーの性分と、祇園のキャラクター性の問題で、女性一人が飲んだくれる男共に囮まれていてもおかしな雰囲気になる様子もない。

いつも彼らを怒鳴つており変な研究の片棒も担がされているが、こういう明るくさっぱりした空氣であるのも、怒りつつも祇園が毎日此処に来てしまうほど居心地のよい場所だと感じる所以でもあつた。

祇園も酔つてきていつもよりは口数が多くなつたものの、それ以上に賑やかな斯波や光には敵わない。ちびりちびりと日本酒を飲みながら、彼らの話を聞いたり突っ込んだりとしている。酔いも回り彼女の頭もふわふわとしているが、そこまで酒に弱くないのでまだ眠いということはない。

祇園が時計を見ると午後十時を過ぎようとしていた。お喋りな彼らと居ると、いつも時が経つのが早く感じられる。

その時、開いていた携帯電話を閉じた青井が不意に立ち上がつた。

「 ちょっと俺、川原の方見て来るよ」

それは一人取り残してきたアルバイト生 つまりは早海の様子を見に行くということであつた。

それを見た祇園は、酔つた勢いもあり咄嗟に口を開いた。

「わ、私も行く 」

その言葉に青井は驚いたように振り返り、他の三人も少し驚いたように祇園を見たが、青井の方が早海と彼女の関係に納得したか、あつたりと「いいよ」と答える。彼女は慌だしく立ち上がり、彼の

後ろに続いていった。

それを無言で見送った残された三人の男達であつたが、やがて光がスルメをもごもごと噛みながら、

「結局、ゼミ長つてどっちのことが

と微妙な話題を口にしかけて、その口を閉ざした。

そして更にその微妙な沈黙を破るように、

「ま、そんなことより飲もうよつー。麻雀するー？」

と斯波が再び騒ぎ出し、

「つて面子足りないじゃないつすかー」

「宿の人呼んできますー？」

と同じく気まずい空気が苦手な一人も、それに乗じる。

かくして不安定な心境の一人の女が、片想いの相手と共に微妙な関係の相手の元へと、夜の闇の中、足を踏み出してしまつたのであつた……。

・・・・・

行き先は早海のところであるのが好ましくないものの、片想いの先輩と二人きりになれるチャンスなどないと、酔つた勢いと一人にしてきた早海が少し可哀想なのもあり、祇園は思わず立候補してしまつた。

しかし青井は祇園の気持ちには少しも気付いていない。

「あのバイト君つて、祇園の彼氏なの？」

早海への差し入れを持ち、暗い夜道をペたペたとサンダルの音を立てて歩きながら、彼は祇園に問い合わせた。こういう話を一人で余りしたことはないが、青井もまた少し酔つているらしく、この間から何度も祇園の傍で眼にした斯波研のメンバーではない一年生を、彼もまた「もしかしたら」そうではないかと思つたらしい。

「ち、違いますよ！－！」

叶わない想いであつても好きな人にはそう思われたくない、と祇園は慌てて否定した。

彼女がこんな風に人を想つたのは初めてのことである。それは一人で生きていると気張つていた少女の頃の中学生、高校生の時には生まれなかつた感情であった。

大人になつて視野が広がり、それまでよりも柔軟に物事を受け入れられるようになつた時に、自分の世界をこの人ならばもつと広げてくれると、青井に対し思つたからだろうか。

しかし祇園の言葉にやにやと笑う青井は、彼女の態度が照れているとしか映つていよいよ見えた。

……確かに、こんな夜にそこまでして「彼氏」のところに行きたいのかと、普通誰もが思うだろうな。そう思つた祇園はため息混じりに呟く。

「中学の時の後輩です……それだけですよ」

美幸あたりにも、それだけの関係で、あんなに　と何度も言われてきたのだが、それが真実なので他に言ひよつもない。

どうして早海もこんな風に周りに誤解されても、五年間の空白があつても、昔のように「祇園」でないと駄目だと言つのか。いつも教えて欲しいと尋ねたが「告白」で返されてしまい、祇園はどうしてよいか益々分からなくなつてしまつたのだ。

「それだけで行きたいなんて言つたかー？」

生憎、青井にもそう言われてしまった。

がつくりと来た祇園は、隠しているものの自分の気持ちに何も気付かない男が憎らしくすらなり、酔った勢いもあって彼の広い背中をぺしと叩いた。青井はまた声を出して笑うと、一、三歩前に踏み出した。

それからまた、二人は他愛もないことを話していった。

優しくて、いつも明るくて 祇園は青井と話している時間がとても好きだった。だが彼が、自分との特別な時間を楽しむために外出たわけではないと知っている。

一人で歩いている内に、昼間サンプリングを行っていた川原に、いつの間にか辿り着いていた。

そこで遠目に早海の焚き火を確認し、祇園は残念な と言つよりはある種、妙な罪悪感や緊張感が広がった。

青井の前で、彼と居るところを見られたくない。

逆に彼の前で、青井と居るところを見られたくない。

宿を出るときはそこまで考えなかつたが、そんな変な焦りが祇園を襲つた。

早海は自分にとつて邪魔者ではなかつたのか？

それはどちらに対しての罪悪感なのか。どちらに何を見抜かれることを恐れているのか。

祇園には、分からなかつた。だが、早海と自分が何の関係もないことを青井に証明する為にも、祇園は彼と一緒に川原へと降りて行

かざるを得なかつた。

川原は暗闇だつたが青井がライトを持っていたことと、早海が焚き火を焚いていたこと、梅雨にしては珍しく満月に近い雲ひとつない夜だつたことから、夜だがその姿がぼんやりと確認出来た。

早海が二人の姿を確認し、ライトを消して持つていた本を閉じたのが祇園にも朧気に見えた。斯波研の誰かがたまに此処に来ることは予想していただろうが、それが青井と祇園の組み合わせであったことに、彼はやや驚いたような顔をしている。

「お疲れさん」

と青井が持つててきた差し入れを早海に差し出し、

「ありがとうございます」

と彼はにっこり笑つてそれを受け取る。

そのやりとりを見ながら何故かひとりでひやひやしてしまつている祇園であつた……。

第10話 反対仮想のまやかし

祇園の眼の前に居るのは、片想いをしている憧れの先輩と、そして成長した姿でいきなり自分の前に現れ、「付き合いたい」などとぬかした、因縁のある後輩の、二人の男。

一人で勝手にどきまぎしている祇園は、自分でも馬鹿みたいだと思ってきた。

彼らは彼女の複雑な感情など何も気にせず、愛想がよい者同士、他愛なくサンプリングのことなどを話しているといつに。

そもそも何故、こんなおかしな気持ちになっているのか、祇園には自分で理解出来なかつた。

報われなくとも好きだという自覚があるのは、青井の方だ。つまりこの場合、早海が居なければこの状況は作れなかつたが、彼は邪魔者であると言えるのだ。なのに、どうして青井と一緒に居る自分を、早海に見られたくないと思つたのだろうか。

……きっと美幸が変なことを言つたからだ。

青井の方が酔つているからか、言葉を殆ど交わしたことなどないくせに楽しそうに会話している男性一人を、祇園は焚き火の明かりの中少し睨むように見ながら、この居心地の悪さを仕方なくこの場に居ない友人の所為にする。

『見込みなさそうな人のこと考えて悩むよりも、別の人言い寄つてくれるなら、祇園が嫌いじゃなければそつちと付き合つてみれば

?』

美幸の言葉を、祇園は再び思い出す。

別にどうしても彼氏が欲しいわけでもないが、一人きりで暮らす忙しい毎日、それこそ美幸など周囲の幸せそうな女性をふと見れば、年頃の彼女がそれを羨ましく思わないわけがない。

だがそんな理由で、好きでもない相手と関係を結ぶというのも祇園は納得いかなかつた。

それでも自分にそのように言い寄つてくる男性は今一人しか居ない為、選択肢などなくそういう対象として祇園は早海を意識してしまふのではないか。

それならば、五年前と同じである。

祇園はそんな単純な理由で早海を気にしてしまう自分が許せなかつた。

……「好きな人」は、青井先輩だもん。

祇園がそう思つて青井を見上げた時、突然早海が彼女に話を振つた。

「それにしても、祇園さんまで来るのは思わなかつた」

「そ、それは……」

早海の笑顔に彼女は何も言つことが出来なかつた。祇園がちらりと青井を見ると、彼はそりや当然だよなど言つ顔でにやりと笑つている。

青井が祇園と早海がそういう仲だと思つてゐることくらい、彼女も知つてゐる。それを否定したくとも、眞実は口に出来ない。

こんな話を青井の前でする早海に、祇園はやはり怒りすら覚えそうになり言葉を失つていると、早海は拾つてきた流木を焚き火に放り込み、更に笑つて呴いた。

「でも、夜道で一人つきりなんて、あやしいなあ。もしかして

……」

「！？」

祇園は驚いて早海を見た。

何を言つつもりだ？もしかして……。

彼女は焦つて口を開こうとしたものの、言葉を発したのは早海が先だった。

「もしかして、祇園さんのこと、好きだつたりします？」

早海が真つ直ぐに視線を向けたのは、手頃な大きさの石に座つていた青井の方だった。

「な……っ」

てつくり自分のことを冷やかすと思っていたが、思いも寄らない彼の言葉に祇園は顔を真つ赤にして絶句した。

早海も知つている筈なのに。先輩には彼女が居ることを。どうして、そんなことをこいつは聞くんだ！？

祇園は困惑したが、青井が少々困つたように笑つていたので、彼のそんな表情を見たくなく、そして彼の口から否定の言葉をどうしても聴きたく、以前早海に言つたことと同じ言葉を口にした。

「だから、青井先輩には彼女が居るって言つてるじゃないか！」

口にするのも嫌な事実に、砂を噛んでいるような気分になる。祇園の言葉に青井は肩を竦め、早海の方を見るといふ言つた。

「そういうことだから、大丈夫だよ。誤解させて、悪かったな」「……」

青井のことを困らせたくないが、きつぱりと言い切る彼の様子に哀しくなるのが乙女心だ。

祇園の彼氏かそれに準じる相手だと思つてゐる早海に謝る青井の声を聞きながら、祇園は内心、胸が締め付けられる思いになつた。

嫌な沈黙が三人の上に降りそうになった時、青井の携帯電話の着信メロディが鳴った。その表示を見た青井は、また困ったように頭を搔くと二人の後輩の方を見た。

「悪い。電話してきてもいいーか？」

本当は先程から……ホテルに居た時から、彼が携帯電話を気にしていたことは、祇園は疾うに気付いていた。気付いていたが、気がせいであつて欲しく、視界には入れてこなかつたのだ。

その着信の相手が誰かだなんて、聞くのも愚問だ。こんな時間にどうしても電話に出なくてはならない相手など、彼にとつて一人しかいるまい。

その電波を通した向こうに居る相手のことを、彼がどんな想いで辿りうとするかなど、彼女は考えたくもなかつた。

青井が一人を氣にして電話に出ないうちに、着信メロディは一度止まつた。

「……すみません、私ついてきちゃつて。電話、したくて外に出たんですね。行って来てくださいよ」

今までの青井の仕草から全てを悟つた祇園は、無愛想に咳いた。しかしそれは、少しふつきら棒な彼女の「いつもの表情」であつたから、青井は気にしないでいてくれる筈だと思つてゐる。

「あー、別についたのはいーんだけどさ。……悪い、ちょっと長くなるかも」

「酔い醒ましに丁度いいですよ。」じゅっくり

祇園を連れてきてしまつた以上、責任持つて一緒に宿まで戻らねばならないと尚も困つたように頭を搔く青井に、祇園は誤魔化すよに早海の真似をして流木を焚き火に放り込みながら、少し作り笑いを浮かべてみた。

祇園と早海の仲を怪しんでいる青井は、彼女がそう言つてくれるのではなく、彼と二人きりになりたいからではと思ったのか、彼は「悪いな」ともう一度呟くと高速電話を掛けながら、闇の中へと消えていった。

川原沿いを、後輩一人に会話が聞こえない場所まで移動するようだ。その行動は祇園と早海の両方に、電話先の相手を確信させる。

そして青井の姿が見えなくなり、電話をしていた声すら遠ざかり、川の流れる音と木のはぜる音だけが聞こえる中、二人は取り残された。

「すみません」

口を開いたのは早海の方からであつた。

「謝るくらいなら、最初から言わなきやいいだろ……」「

彼の言いたいことが分かつた祇園の声は、ため息混じりの諦めきつたようなもので、怒りは余り含まれていなかつた。

早海はそのことに、少し驚いたように祇園を見た。祇園は緩くウエーブの掛かつた髪を、指先でいじる。

「こんな夜に、何かあつたのかな。電話かけてあげるほど、仲いーんだよ。だから青井先輩が私のこと、なんてそんなわけ……、絶対に、あるはずない……」

早海が冷やかしても冷やかさなくとも、青井の想いが変わることはない。それは分かりきつていたことだつた。だから祇園は彼を怒る氣にもなれなかつたのである。

勿論、万が一にも青井が自分に想いを懸けてくれたら嬉しいと彼女も思う。しかし実際、彼が浮気を簡単にするような男であつたら、此処まで好きにはならなかつただろうとも思うのだ。

もしかしたら、彼女を大事にしている青井の姿こそに、自分は憧れたのかもしれないな、と祇園はふと思つた。

そのように最初から諦めなければならない恋と分かつてはいるのに、何故早海は青井が否定することを分かつていてあえてあんなことを言つたのか。

不思議に思つた祇園は、遠くで電話をしている青井に聞こえない

よつに囁いた。

「でも、なんで、あんなこと先輩に言つたの?……」

その言葉に早海が視線を向けたことが分かった祇園は、思わず顔を上げて隣にいる彼を見上げた。

焚き火の明かりの中、早海は少し笑つた。揺らめく炎の陰影が、その表情の意味を分かりづらくなる。

「……妬いた、のかな」

その言葉に先日の「告白」を思い出し、祇園の胸がぞきつと高鳴る。

「もし、あの人人が祇園さんのこと好きだつたら、もつ俺にはどうしようもないじゃないですか」

それこそ諦めたような苦笑を、早海は祇園に見せた。

「だからってあんなこと」

「言いますよ」

祇園の言葉を早海は遮つた。その彼の笑顔はいつの間にか消えていく。

「『もしかしたら』って言われば、誰だつてもしかしたら本当はそうじやないかって、少しくらい思うじゃないですか」

祇園の口を見て、早海は彼女に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。「心に一瞬、隙が出来る。一瞬でも、『まさか』と自分自身を疑ってしまう」

その「仮定」の中で、本来、そして今までには有り得なかつた過去と未来の自分の幻を、自分自身の中で作り出してしまう。

その幻に、囚われるか、囚われないか。人の弱い心に掛けられる、まやかしのゆさぶり。

「もしも、深層心理で少しでもそう思つてれば、その人のことがきっと気になる。それを俺は知つていてるから、確かめてやる」と思つ

た、それだけです」

その、仮定してみた気持ちが当人の心の何処かに少しでもあれば、必ずその言葉に、その幻想に、囚われる。

徐々に、毒に蝕まれるよつて、相手のことが気になつていくだらう。

祇園は固唾を飲んで、早海の不思議な言葉を聞いていた。
嫌な過去を思い出しそうになる。

彼女は五年前、その経験をしそうになつたのだ。『もしかしたら』の言葉に、彼女も惑わされそうになつたことがある。
だから、もう一度と早海に会いたくなつたのに。いや、もしかしたら、彼はその「秘密」を知っているのだろうか？

思わず闇の中で見つめ合いながら、祇園はぼんやりとそう考え、
その思い出やその『もしかしたら』の仮定から逃れようと話を戻した。

「で、でも、青井先輩は囚われなかつたじゃないか。それは逆に、
私にそんな気持ちが少しもないからでしょ？ 倉崎さん一筋だもん。
青井先輩には、迷いなんて全然ないから」

彼の恋人の名を祇園は辛い気持ちで口にした。

祇園が自分もそつなりたいと思うくらい「彼自身」を信じている
青井だ、冷やかされたくらいで揺らぐわけなどないだろ。

寧ろ早海のその言葉に囚われたのは祇園の方だ。もし、そうだったら もし青井が少しでも自分に好意を抱いてくれていたら嬉しいのにな、と有り得ない夢に一瞬心をときめかせた。

しかしそれをきつぱりと否定されたことで、却つて絶望に突き落とされてしまった。

「だから、早海がそんなこと言えば、私が慘めになるだけなのに。
ひどいよ。何で、そんなこと言つんだよ。逆に私の方が、もしかし

たらそりだつたら つて、期待しちやうじやないか

祇園が拗ねたようにそつ言つて俯いたその時、

「……確かに、青井さんの本心を探りたかったつてのもありますが、

「

早海もまた少し不機嫌そうな声でそつ言つて、隣に座っていた祇園を、突然自分の方へと強引に引き寄せた。

「 な、何！？」

混乱して思わず小さな悲鳴を上げた祇園の耳元で、早海が囁く。
「何で、彼女居る相手、いつまでも追いかけてんの？ いい加減もう、やめりやいいのに」

「やめ……っ」

耳に熱い息が掛かり、ぞくりとしながら、祇園はとにかくこの突然の束縛から逃れようと抵抗するが、彼女の身体を抱く早海の日焼けした腕はびくともしない。

初めてこれ程の距離に近づいた彼の胸板の熱や厚さ、汗の匂いを祇園は触覚や嗅覚で感じ取り、それらが彼女に、今眼の前にいる彼はもう、「思い出の後輩」ではなく「生身の男」と訴えてくる。こんな経験が今までにないことから、その生々しい現実に祇園の胸は壊れそうになる。

なんなんだ！？どうしてこんなことされているんだ！？？

しかし早海はそんな風に驚いている祇園に尚も、彼女が怯えてしまつよつなことを囁いたのだった。

「 暴れたり、デカい声出すと、青井さんに聞こえますよ……」

「 ！」

第1-1話 キケンな夜

『祇園さん祇園さん』

声変わりする前の高い声で自分を呼んでいた、女の子みたいに可愛かった少年のことを、祇園はふと思い出していた。

初めて彼女に触れた早海の腕と胸は、彼女の想像以上に厚く頑丈で、骨ばっているものだった。同時に、汗臭い男性特有の匂いが彼女を包む。

嗚呼、「男の人」になってしまったんだ、と。そして何かの形で自分を求めているんだと、そう実感することにより、祇園の身体は内側から熱を帯び始める。

どうして、自分なんかを 。

その理由は祇園にはまだ分らないが、青井がすぐそこに居るといつのに、この状況は勘弁して欲しいと思つた。

「離して……」

弱々しい声で彼女は訴えるが、

「嫌だ」

と彼に益々強く抱き締められる。

青井はまだ電話をしているだろうか。こちらの様子は見えていいだろうか。早海に言われたとおり彼女は大声も出せず、暴れることも出来ず、ただ硬直してなすがままになつてている。

こちらからは青井の姿が確認できないので、互いに死角の位置にあると思いたい……。

祇園はそんなことを心配しながら、初めて男性に触れられた羞恥と、好きな人にこんな現場を見られてしまうかもしれないという恐

怖と緊張で、壊れそうなほど胸を高鳴らせていた。

やがて、早海が小さくため息をついた。それが何のため息なのか、祇園にはよく分からぬ。だがどこか、安心したもののようにも感じられた。

しかし祇園が考える間もなく、彼の悪戯な手が動き出す。彼女が其処に居るという存在そのものを確かめるように、彼女の背をなぞり、髪を梳いてくる。

早海の優しい手の動きに、祇園の身体がぞくりと震える。彼女自身、驚くぐらい身体の一部分が疼き、熱く反応していた。

「いーかげん、俺にしてくれりやいいのに」

更に耳元でまた囁かれ、祇園の身体がびくんと動いた。自嘲的に笑つたその声に、また美幸に言われたことが蘇る。

どんなに好きになつても青井には振り向いてもらえない。だつたらもう、この大きな手に縋つてしまえばいいではないか。

もしかしたら、それで寂しさが埋まるかもしれないじゃないか。

早海のこの態度はふりではないだろうか？本当に自分を大事にしてくれるだろうか？

祇園は「こんな流されるようなことはいけない」という葛藤と、その初めてのぬくもりに縋り付いてしまいたい女の本能の狭間で呞いた。

「だつて、なんか……嘘っぽいんだもん。本当に、付き合つたら……その、私なんか、大事にしてくれれるの……？」

早海はその手に力を込めて頷く。

「そりゃもちろん」

「……うつそくさ……」

しかし祇園に同時に言い返され、彼はがくんと力が抜けたようであつた。それでも抱き締めた彼女の身体は決して離されなかつたが。

「信用、ないです」

ため息混じりに、それでも明るく早海は嘆きながら、祇園の背に置いた手を、彼女の細い腰から撫で上げた。少しくすぐつたいと感じた祇園の身体が、またびくんと反応する。

その振動で動いた早海の手が、今度は彼女のTシャツ越しに背中に浮き出た下着の線に触れてきた。

「……」

彼は黙つてそれを指でなぞる。

「！？」

女性特有の部分を守るために、布越しであるが手を掛けられて、どういった反応をしてよいか分からぬ祇園であったが、その行為で羞恥心だけは益々煽られる。

拳句の果てに彼はそれを、Tシャツの上からぴんと引っ張つて弾いてくる。

「やだ……あっ！」

経験のない祇園はたったそれだけのことで恥ずかしくなり、早海の胸を突き飛ばそうとした。しかし彼女の抵抗はまた徒労に終わり、相手は微動だにする様子がない。

「そういうこと、するから、信用失くすんだろ？」「…」

胸は苦しいし、喉はカラカラだし、逆に変なところが熱くてぐしゅぐしゅになってしまっているし　と、祇園はパニックに陥つていた。

やはりこんな恥ずかしい姿は誰にも見られたくない。ましてや、好きだった人には　。

「……あれ？」

今の自分の言葉の中に違和感を覚えた祇園は、ふと冷静に考える。

しかし早海が次に笑つて囁いた言葉に、そんなことは直ぐに忘れてしまった。

「もしかして、初めてだつたりします？」「うううの」

「わ、悪かつたね！！」

余裕綽々（しゃくしゃく）な相手に腹が立ち、そして別の恥ずかしさが彼女を苛む。だが、

「いや、可愛い」

その落ち着いた声に自分の單純さを情けなく思つが、また身体中がずくんと甘く疼く。

きっと、錯覚しているだけだ。初めて男の人に、そう言つてもらえたから、だから嬉しいだけであつて、気になるだけであつて、この男が恋しいわけじゃ。

祇園は自分の浅ましい性欲の所為でこんな風に思つのだと思い、決して早海の顔を見ないようにしていた。

だが、彼の身体が不意に自分から離れたので、この嫌な時間は終わつたのかと祇園は思わず顔を上げて彼を見た。

その思考と裏腹に身体は物足りないと思つてゐることを、本当は何処かで自覺していた。彼女はそんな自分を否定したいように、わざと早海をそのまま見上げていた。

意外にも彼は笑顔もなくじいっと祇園を見つめている。

それは再会してから何回か見た、あの、何処か陰のある表情に見えた。

それでもその眼は祇園を見ていた。彼女を求めていた。その意味は分からなくとも、それだけは、互いの本能が感じ取つていた。

そして早海の顔が、祇園にゆっくりと近づいてくる。

「！！」

何をされるのか、予想がついた彼女は、その恐怖に肩を竦ませ顔

を逸らす。

しかし彼女の腕を掴んでいた早海はやや強引に彼女を引き寄せ、一方の手で彼女の頸を捕らえると、その唇を、奪つた。

あ……。

恐い、と思った。その温かくぬるついた感触に加え、彼の顔が直ぐ眼の前にあり、その息遣いすら分かることは何か恐いことだと祇園には感じた。

そしてそれは、今年二十歳になる彼女にとつて、平均より遅いながら初めてのそれにあたるものであった。

青井がすぐそこに居るのは分かつている。いつ、戻つてくるか分からぬ。

だけど動けない、と恐いのに何処かで祇園は思つていた。

しかしその時、祇園の携帯電話が突然鳴り始め、それは間抜けにも、有名時代劇のテーマソングであり、我に返つた一人は思わず身体を離し、彼女はわたわと携帯電話を探し始めた。

このテーマソングは、斯波研用であったのだ。慌てて電話をポケットから出したものの、着信メロディは止まってしまった。そしてその後、すぐにメールが一件届いた。それは弥栄からであったが、その文面は。

『「祇園ちゃん！ どうしたの！？ 何かあったのおおおー！？」
by 斯波教授 だそうです。大丈夫ですか？』

と斯波からのメッセージを中心に書かれていた。

おそらく電話に出れば、同じことを斯波が泣きながら訴えてきただろう。祇園はぽつりと呟いた。

「斯波教授が……」

「え？」

「あんまり遅いから、心配してるらしい」

それを聞き、早海はきょとんとした顔をした後、声を立てて笑つた。

「その心配、当たつてますね、思い切り」

「……」

それは、今しがた彼が彼女にしたことを意味しているのだろう。重ねられていた彼の唇など見える筈も無く、祇園は赤くなつて俯いた。

それに斯波がするほど 祇園も今のこととは驚きはしたが、不思議と傷ついてはいなかつた。それは早海が、強引に「それ以上の事」に及ばなかつたからというのもある。

変なことはされたものの、被害を受けたとまでは思わない。……セクハラの範囲ではあるかもしれないが。

「訴えます？」

早海が苦笑して肩を竦めた。

「……知らない」

祇園自身、この気持ちがよく分からぬものの、「泣き喚くほど嫌ではなかつた」という内心も早海に知られたくなかつたので、ぶりとそう言つうとそつぽを向いた。

「……」

そしてまた妙な沈黙が訪れた。焚き火の音は、川の水の音に消されていく。

……今の、ファーストキス、なんだよなあ……。

祇園はそう思い呆然として座つてゐるが、それは想像以上に幻のように儂いものであつた。

今のは夢だつたのではないかとすら思つ。恋人でもない、中学校時代の後輩とこんな形で経験することになるとは思わなかつた。しかしつ青井が戻つてくるか分からず、早海にもうその手は動かして欲しくないものである。……妙に身体は火照つたままだ。

そしてその唇も、もう何かを言つ為に動いて欲しくはないと思つていた。今何か、変なことを聞かれたら、祇園は茫然自失としたまま頷いてしまいそつた。

それこそ、『付き合いませんか』などと、今のタイミングでもう一度聞かれたら。

「

しかし、早海が息を飲み口を開いたのが祇園には気配で分かつた。

だめ……！

彼女が身を縮めた瞬間、がしつがしつと石を踏みしめる音が、闇の中から聞こえてきた。

「……そつち、行つてもいいーい？」

「いいいいいに決まつてるぢやないですかーー！」

青井の声に祇園は叫んで立ち上がると、近くまで彼を迎えに行つた。

「なーんか、光からメール来てさー。教授が滅茶苦茶心配してゐるつて

「……こつちにも来ました」

「俺の所為で、悪かつたなー。戻ろうぜ」

青井の苦笑に、祇園も少し引きつり笑いをして、「はい」と頷いた。

つい先程まで、好きでもない男と抱き合い、キスをしておいて、今もう好きな男と向かい合つて笑うことが出来る。

祇園は自分でも知らなかつた自分の「女」の一面に、内心ではぞつとしていた。

祇園と青井が二人で宿へ戻ると、予めメールに返信をしたからか、斯波は心配していた割には光と弥栄、そして宿の従業員らしき男性と麻雀を囲んでいたが、祇園の顔を見ると、

「大丈夫だった？ 事故とかなかつた？」

と安心したように顔を綻ばせた。

実際女性としては、何かあつたところがありましたと言えるわけもないが（実際あつたのだが……）、青井のことは斯波も後輩二人も信用しており、早海のことは祇園の彼氏のようなものだと思つてるので、どちらかといえば事故に遭つていなかを主に心配していたようである。

「俺が長電話してたもん…… 心配かけてすみませんでした」

青井が素直に理由を述べて頭を下げ、この件は決着した。

無理矢理麻雀の仲間に入れられていた宿の従業員も帰つて行き、「さあ四次会だ、飲み直すぞー！」と斯波に誘われる男性陣をさておき、祇園は温泉に入り直したいと言つて彼らと行動を別にした。

脱衣所で服を脱ぐ際、濡れた下着が太股に触れ、祇園は自身に嫌悪感を抱いた。彼に触れられ、今までの人生にないほどその部分が熱く落ち着かなかつたことを思い出す。

そんな穢れたものは見たくもない。川に落ちてもいいように、着替えは余分に持つてきた彼女は、予備の下着に取り替えることにした。

身体の全てを清めてもう一度湯船に浸かつた祇園は 、気がつけばまた早海のことを考えていた。

先程のことは、本当に恐かつたし、緊張した。それなのに身体が火照り、逆にそのぬくもりに安堵もしていた。

この感情は一体何なのか。

彼と付き合つてこのことは、その感情を追求するところだらう。

しかし、やはり好きになる前に付き合つなどといふことは、眞面目で奥手な祇園は抵抗があった。だから「この先の行為」は有り得ない筈だった。

早海は自分をどうしたいのか　それが分かっていない相手に自分の全てを委ねる勇気は、祇園には無い。そして好きでもない男なのだから、それを確かめる必要すらないと彼女は頑なに思っていた。

誰も居ない深夜の露天風呂で、祇園が湯船に映った大きな月を見下ろすと、振動で立つた小さな波が小ぶりな白い胸に当たる。先程彼に、胸の下着を外すように引っ張られたことを思い出し、また彼女の全身が熟してくる。

彼に抱かれる自分を想像しそうになり、祇園はひとりで首を振りそれはしたない妄想を追い出した。

……恥ずかしいけれど、きっと、したことのないセックスに興味があるだけだ。だから身近で、自分なんかに興味を示してくれる男性が気になるだけだ。

祇園はそう信じていた。

だからこそ、流されてはいけない。向こうの気持ちなど関係ない。自分は早海のことなど想つてなどいない。だから、気にしなくてよい。

もう一度と、「もしかしたら」なんかに囚われるものか。

祇園はひとつ頷くと湯船から上がったしかし無人の脱衣所で服を着ながら、彼女がふと携帯電話を見ると、早海からメールが入っていた。

先程の軽い情事を思い出し、祇園の胸がどきりと高鳴る。深呼吸をしてから携帯電話を開けた。

彼は自分にあんなことをしておいて、どんなメールを送つてきたのだろう……。

祇園はそう思い緊張したが、メールに書かれた言葉はただ一言、『おやすみなさい』

とあつた。

「……」

はあ、と大きなため息をつくと、彼女は手近な籐の椅子に座り、扇風機を強風にした。どうしてこんなにがっかりとした気持ちになつているのか、彼女自身にも分からなかつた。

だがあの情事が気まぐれではないと言つよつこ、こうして彼女を氣にしてメールをしてくれたことは、正直嬉しいと思つ。

逆にこんな当たり障りの無い内容でよかつたとも祇園は思つた。もしこれが「やっぱり付き合つて欲しい」や、「今からもう一度来て欲しい」というようなものだつたら……祇園とてこの変な気持ちに流されて、何をしてしまつたか分からぬ。

絶対にもう、五年前の、あの冬の終わりの日のようだ、「もしかしたら」なんて、言葉は思い浮かべるものか。もう、そんな幻には、まやかされない。

だが祇園の決意と正反対に、その胸は甘くときめいてしまう。

彼女はそれを抑えるように、唇を強く噛んだ。

第1-2話 忘れたい想い出

祇園が、「もしかしたら……」のまやかしに一度と囚われたくないと思つてゐるのは、五年前の記憶に遡る。

彼女は中学一年生の時に、彼女よりも背が十センチも低い、小学生のような中学一年生の早海に出会つた。図書当番の時や帰宅途中、学校行事の際に他愛のない話をし、やたら彼女に懐いてくる彼を祇園は適当にあしらつていた。

なんの変哲も無い、そんな穏やかな日々は一年以上続く。
彼は祇園のことを日常的に「すき」と言い、今年はバレンタインデーのチョコレートまで渡してくるほどであった。

祇園はそんな彼に、寧ろ呆れるほどであった。何故自分なんかに懐ぐのか、と。

しかし彼女は父親を支えて家事を切り盛りしているつひて面倒見がよくなつてしまつたのか、後輩の彼を邪険にも出来ない。

彼が自分を見つけて、話しかけてくる。それに答える。いつの間にか、そんな日がずっと続くような錯覚を起こしかけていた。

『北高、一緒に通いましょうね』

何年もの先まで一緒に居られるかのよつた、そんな言葉すら彼は笑つて言う。

彼のその言葉は、どうせ口約束だらうと思つていたが、この先何年も、こんな風に誰かといつも一緒に居られるような そんな希望を孤独な少女は抱きかけてしまつた。

彼はどうせきっと、何も考へず子供が懐くよつこ「すき」だと連発しているだけなのに。

自分だって、彼に特別な感情は持つていない。だから別にこんな

日が永遠に続かなくとも、どうと言つ」とはない。祇園はさう自分に言い聞かせ、その錯覚を追い払つた。

「この優しい時の終わりは、現実にもう見えているからであつた。

祇園が卒業するまであと、一ヶ月もない。それを境に、早海とはもう永遠に会うことはないであろう。父親の転勤で、彼女は中学卒業と同時に同じ県内でも遠い町へと引越し、もう一度とこの街に戻つてくることはないのだ。

ただの後輩である彼と、友達のように連絡をとる必要もないと彼女は思つていた。

生まれ育つた土地を離れることは、少女にとって本当は寂しかつたが、そのようにあえて冷徹に考へ、何も未練を残さないでおこつと思っていた。

祇園がそんなことを考えていた、卒業間近の夕方のこと。

帰り際の昇降口で、卒業前に好きな人に告白するかどうかを、延々と悩んでいる友人の話を聞かされていた彼女は、ふとその友人に問い合わせられたのであった。

「祇園こそ、どーすんの一?」

どうするつて何が、と祇園は靴を取り出しながら、その少女を眉を寄せて見上げた。身体を曲げた祇園の背中から、長い三つ編みが落ちる。

「一年の白川早海くんどだよー」

怪訝そうな表情をした祇園に、他に答えはないというように友人はその名前を自信を持つて挙げた。

「……別に、かんけーないし」

ただの懷いてくる謎の後輩なのにな、と思ひながら祇園は深いため息をついた。

「そーお? そのわりには、仲いーじゃん。祇園があんなカツコ

カワイイ子と仲いいなんてうらやましいよおー、意外」

少々失礼な言い方であるが、この三つ編みと無表情ではそう思われて当然であるうと祇園にも合点が行く。

現に噂で、祇園よりも小さくてずっと可愛らしい、一年生のテース部の少女が彼に告白したらしいが、断られたという話を聞いたことがある。その理由までは伝わってこなかつたが、祇園としてはまだ男女の付き合いなど早海は幼くて考えられなかつたのだろうと、彼の可愛らしい容貌から予想した。

「それに、特別仲よくもないし」

祇園は不機嫌そうに再び吐き捨てるど、あと何日かでおさらばである上履きと下履きを取り替えた。しかし恋に悩む同志を作りたいのか、その友人は尚も祇園を追求してくる。

「そーかなー。バレンタインのチョコ交換したとかゆうウワサあるよおー」

なんで知つてんだよーと祇園はあの時のことと思い出し、何でもないふりをしていたが、急にあの日のことが恥ずかしくなる。

『好きな人にあげる日なんじゃないんですか?』と言つた早海の純粋な瞳を思い出し、いやまさかそんなことはないだうと、祇園はその言葉を心の中で慌てて取り消そうとする。

本当はそれが嬉しかつた　　？いやそんなわけない！！

「そ、そんなの、か、かんけーない！」

その時はあえて気にしようとしたが、改めて冷やかされると祇園も恥ずかしくなつてしまつというものである。

彼女の雰囲気から、周囲にもまさか早海が本気で彼女を好きなわけはないと思つていていたので、今まで誰にも突つ込まれなかつたのではあるが、流石に一年半にわたるこの二人のやりとりは、やはり不思議な関係に映るようであった。

祇園が突然の冷やかしに対して焦つてそう言つと、その友人は更

に、今まで浮いた話の無かつた祇園をからかってきたのである。

「あやしーなあ。もしかして……祇園つて早海くんのこと、好きなんじやないのー？」

「……！」

その瞬間、それは何氣ない言葉であったにも関わらず、少女の胸には、ごとん、と重い石を投げ入れられたように、衝撃が与えられた。何かで自分を覆われたかのように、呼吸や時間さえも止められてしまつたように感じた。

そして何か熱いものを飲まされたように、じゅわりとした甘く恐ろしい何かが少女の全身に広がっていく。

自分が！？早海を！？
好き、……なのか！？

友人の仮定は祇園にとつて、今まで全く考えたことのないものであつた。それ以前に、そんな感情を異性に抱いたことがないのだ。なのに、少女にとつては晴天の霹靂であつたそのたつた一言が、「そんな甘い感情を抱く自分」の幻を初めて祇園に想像させた。

だが、自分が「そう」なのかと問われれば、答えは分からなり。

何より少女にとつてそれは、「恥ずかしい」気持ちであると認識されるものであつた。そんな「恥ずかしい」気持ちを持つ「女」の自分を、祇園は否定したいと抗つた。

そんな乙女のような自分になりたくはない、だからそんなことは有り得ないと、少女はその初めてのときめきから逃げ出そうとした。

なのに、友人のその「もしかしたら」の言葉は、まるで祇園の心の鍵穴に合致してしまったように彼女の「何か」を開いてしまい、そこから得体の知れないものが広がり、心の中から溢れ出してしまいそうになる。少女にとっては、それが何故かとても恐くて哀しいことのように思えた。

今ならまだ間に合ひ　　！

「もしかしたら」と言われて、今まで考えたこともない妖しい幻影が祇園の胸に腐毒のように広がり、彼女を支配しそうになつたが……そんな筈、無い、自分が女として、あんな小さな後輩を男として好きになる筈がない、と祇園は必死に自己に暗示を掛ける。

そんな恥ずかしいこと早海に対して、考えている筈が無い！
まやかしに惑わされ、冷静な判断も自己分析も出来ず、ただ羞恥と戸惑いからそう思つた祇園は咄嗟に大きな声で叫んでいた。

「そんなわけない！　あんなチビ、好きな、わけ、ないっ！」

しかし、次の瞬間、

「あ……」

友人が呆然と祇園の後ろを見ていたので、彼女が後ろを振り向くと、長く伸びた三月の夕日が差し込む三年生の昇降口には帰り際の祇園の元へと来たのであるう、一年生の背の小さな少年　早海が、いつもの笑顔などなく、ただ呆然と佇んでいる姿があつた。

その眼は見たこともないような暗い眼をしていた気がしたが、彼女には彼の顔など見られない。

「ごめん！　私、帰る！　！」

と友人に言い残すと、祇園は早海の顔も見ずにその横を通り過ぎ、走つて帰つていつたのであつた。

中学校の卒業式はその十日後のことであった。

あの日から、早海は祇園の前に一切現れなかつた。人数の多い学校だったので、卒業式の日も一年生との交流などなく、祇園もクラスの子によく引越しの話を知られ、どうして言わなかつたのと次々に泣きつかれていたことから、早海と会つともなく卒業式を終えたのであつた。

あれだけ話をしていたのに、最後は呆気ないものであつたが、彼に会つたところでどうしてよいのか祇園は分からなかつたが。ただよく話をしていただけの関係の後輩なのだから、「さよなら」すら言う必要もないだろうと思つていた。

上辺だけで言葉を交わして別れていき、一度と会えない大勢の人の中の一人。きっと早海も、自分のことはそう思つてゐる筈だ。祇園はそう信じていた。

少女はそのうえ、あの時友人に「もしかしたら」と言われた時に感じた恥ずかしい気持ちを、もう一度と思い出したらもなかつたのだった。

早海に会わなければあの、嫌な熱い気持ちは思い出さなくて済む。そしてそんな気持ちを抱いているのではないかと自分を疑う、早海の顔も見なくて済む。

少女にとって、それらは永久に葬り去つてしまいたいほど嫌悪感のある思い出となつてしまつた。

それから祇園は、新しい土地に引越した。

中学校時代までの人間関係はリセットされ、同窓会で会える同級生はまだしも、他の学年の生徒には一切会うことがないので、祇園は早海のことは忘失できると思っていた。実際もう考へないでおこうと、彼女は自分をコントロールしていた。

そんな彼女も高校でまた新しい友人に出会い、現在のとおり「女

であることを周囲の影響と精神的な成長から、徐々に受け入れられるようになったのである。

そして理系を選択したことで男子生徒と「コミュニケーションを図るようになり、頑なだった彼女も少しは柔軟になっていく。「男」とは根本的に違う、「女」である自分を認められるようになってきた。

あの時祇園が、「女」である自分を強く拒絶したのは、思春期の照れだけでなく、母親を亡くし父親も忙しく、自分一人で生きていかなくてはいけない、強くならなくてはいけないという思いもあってのことであった。しかし大学進学が決まる頃には、自立できる準備も整い精神的な安定もするようになり、彼女は更に自分自身を受け入れられるようになってきた。

こうして祇園は五年経ち、少しあは大人へと成長したが、それでも中学生時代までを過ごした場所にはもう戻れない。いくら郷愁を感じても戻る場所がない。

ならばもう、あれらの出来事は忘れるしかなかつた。全てを無かつたことにするしかない。早海のことだけではない。あの日あの場所に生きていた、自分の存在までも。

自分が関わつた、自分の存在があつた全てのものを、人を、無かつたことにして、忘れよう。

新しく、自分を始めよう。

祇園はそう決め、父親と住んでいた借家も引き払い、現在通う大学のある県に一人で引っ越してきたのであつた。

再び孤独になってしまった彼女であつたが、斯波研究室や理学部で、少し変わつていて明るい仲間に出会え、共に楽しく慌しい日々を過ごし始めた。

そして、青井という青年に会つた。

成人へと成長し新しい世界に踏み出した祇園は、今度は素直に男として頼りがいのある青井への憧れを認め、恋心を抱き、今に至るのであった。

それなのに……。全てを新しくする筈のつもりであつた彼女の眼の前に、五年ぶりに突然、早海が現れたのであつた。
彼女にとつて、これが驚かずにはいられるだろうか。

そのうえ彼は、再会した祇園に「付き合いたい」と宣言してきた。しかも大学生と言う立場で……それは今の祇園と、男と女の関係になりたいということを示していると奥手な彼女にでも分かる。現に彼は巡検の最中に、祇園に性的なアプローチを仕掛けてきた。

彼の目的は一体何なのだろうか？

あの時のことはどう考えているのだろうか？ビックリして今更、なのだろうか？

祇園の疑問は募る一方である。当時から分からぬ男であつたが、今も飘々と笑っているだけで、彼女を狙う本心は告げない。
もしかして、自分のことが好きなのか？と思つてみようともしだが、その仮定を抱く勇氣すら祇園にはなかつた。逆にそうなのかと尋ねれば、彼はあの頃のようにそつとあつさり答えてしまいそうだつた。「本当の彼」を見せないままに。

祇園は直感で、五年間の空白に何があつたか分からぬが、彼のあの頃の笑顔と今の笑顔は何処か違うもののような気がしていた。

しかし早海の真意など、祇園には関係なかつた。彼女はあの最後の日の、自分の胸に熱く灯つた何かを忘れたかつたからだ。もう一度とあんな苦しく恐い想いをしたくないと、それがトラウマになつていた。

だから彼女は、早海の真意を追求することもせず、彼を受け入れたくないと怯えているのだ。適当に交わし続けて、いつか自分に興味を失うのを待とうとしている。

だが彼は祇園を求め、彼女は流されるままに彼にその身体を一瞬委ねてしまった。

それは半分強引なものであつたが、どうしても抵抗した結果、といふものでもない。最終的には、祇園自身が彼を受け入れてしまつたと言える。

そうしてしまつたのは、朴訥とした彼女もしつかりと持つていた性欲や、未知のセックスへの興味からであろうか。それはそれで、潔癖な祇園は自分が許せなかつた。

青井のことが好きなのに、身体だけが男を求めたというのであるうか、とまた自分に新たな嫌悪感を抱く。しかし逆に、己があしてしまつたことに、感情的な意味があつても祇園は困つてしまつた。であった。

どちらにせよ、これ以上の関係になることは、彼女にとつて恐くて仕方がない。とは言つても、今度はここから逃げるわけにもいかず、祇園はこれからこの大学を無事卒業し、社会に出なくてはいけない。

もし逃げたところで、相手ももう子供ではない。ストーカーと自称したように、祇園が逃げ続ける限り早海も彼女を追つてくるような気がしていた。

そして更に、子供の時のように彼を傷つけるような言葉を吐き捨てるのもどうかと、眞面目な祇園は考えていた。

結論的に、どうしてよいのか分からぬまなのであるが、あの巡査の夜に「何か」は動き出してしまつた気がする。

賽は投げられた。

この先、自分たちは、自分はどうなつていいくのだろうか。

どうすれば、よいのだろうか……。

・・・・・

巡検も一日目を向かえ、早めの朝食後、斯波研の面々は早海と交代をした。しかし祇園は明るい場所で、彼の顔をまともに見るには出来なかつた。

そして午前九時までのサンプリングを終え、二十四時間体制の巡検を終了した斯波研メンバーは、各自の乗つてきた車で帰宅していく。

弥栄の車に揺られ、後ろで「うげええええ」と気持ち悪そつな一日酔いの光の声を聞きながら、祇園は怒涛の巡検を終え、ぼーっとそんなことを考えながら元の生活へと戻つていったのであった。

夏の初めの高い太陽が、その熱をぎらぎらと彼らに焼き付けようとしていた。

第1-3話 女の嫉妬と優越感

斯波研の巡検から戻った次の日、祇園は持ち帰った川の水や藻、虫などの分析等を行いそのデータをまとめた。

そんな作業を通じて（一部弥栄が手伝つたが）、ああ日常に戻つたんだなあと、彼女は日焼けでまだ少し火照る顔を土産にぼんやりと考える。

実際これだけの量の分析を行つていれば、確かに勧誘の時に言われたとおり、卒業研究の練習にはなるだろう。ただし意味不明の実験でのこじつけたデータの作り方や、してはならない器具の使い方なども時に混じつていたりするので、鵜呑みにしてはいけないのだが。

光は一日間留守にしていたため、「お姫さん」の女性と連絡がつかないと学校を飛び出し、弥栄も午後からは土日出来なかつた分のアルバイトに行くと言つて、祇園に片づけを任せて帰つてしまつた。午後の晴れた青空を、日当たりの悪い実験室の窓から眺めながら、白衣を着た祇園は試験管を長いブラシで、もしゅもしゅと音を立てて洗つていた。そして巡検以降、何度漏らしたか分からない吐息が彼女の口からはあ、と誰も居ない実験室に零れる。

祇園の頭の中では、早海と唇を交わしたことが、繰り返しフラッシュバックされていた。

自分は変態ではなかろうか、こんなにいやらしい人間だつただろうかと、祇園はそんなことばかりを考えている自分が情けなくて泣きそうになるが、それでも意思に反して、思い出すたびに胸が疼いてくる。

五年前の嫌な思い出は忘れようと暗示を掛けてきたが、このよう

に身体が触れ合うほど衝撃的な出来事は、中々理性だけでは消し去ることができない。

動悸がまた速まり、片想いのくせに青井にも悪いことをしているような気になり、祇園は不可解な切なさと恐ろしさに包まれる。そして何よりおぞましいことに、この「罪悪感」がどこか「心地良い」のである。

自分は一体どうしてしまったのかと、祇園は突然自覚めてしまつた自分の「女」の部分に戸惑っていた。

すると突然人の気配がしたので、彼女は実験室の入り口に眼を向けた。

「あ、おじゃましますー。使っていいかなー？」

高くゅうくりとした口調で声を掛けながら入ってきた小柄の女性は、倉崎 露花(シロカ ルカ)という同じ学科の四年生で、青井の恋人である女性、であった。

露花は斯波研とは離れた場所にある研究室に所属していることもあり、また一年生の祇園は他の研究室にはあまり顔を出さないこともあり、顔を合わす機会が少ない一人であるが、女子が少ないので学科では学年が違つても互いの顔は見知っている。

そのうえ祇園は「あの斯波研究室」に所属している青井の後輩といふことで、露花にも印象深いらしい。

「あ、全然。どうぞ使ってください……」

彼女を見るたびに複雑な心境になる祇園であるが、先輩としてはよく声を掛けてくれ優しい彼女のことは、嫌いにはなれないのであった。

祇園は水道から離れようとしたが、

「ううん、ちょっと乾燥機使えばいいの」と、露花はここにこと微笑みながら歩いていく。

この女性は祇園よりも十センチほど背が小さく彼女と同様に瘦せている体型であるが、それでも野外実習も元気に出かければ、徹夜の分析も行う遅しさも見せ、のほほんとした笑顔と話し方の割には芯の強い部分も見せる女性なのである。

そして青井とは一二十センチ以上身長が違うのであつたが、彼が長身を折り曲げて仲良く話す姿は学科内でよく見かけた。

自分と違つて、可愛らしく、女性らしく、そして凛として迷いがない。

勝てるわけ無い、と祇園は露花に対し常に劣等感を抱いていた。

青井は面倒見もいいが、姉がいるからか少年っぽいところを残していると祇園は思つてゐる。だから彼は「後輩」として可愛がつてゐる臆病で不器用な祇園よりも、抜けているようでしつかりしてゐる同級生の露花に憧れを抱いてゐるのだろうと、一年間二人の様子を観察してきたのでそれが分かる。

つまり自分なんかの付け入る隙は全くないのだ、という結論に彼女は随分前から達してゐたのだった。

露花に会つたびにそんな劣等感に苛まれる祇園は、複雑な気分で試験管に純水を掛けたが、そんな祇園に機械をセットし終えた露花が話しかけてくる。

「斯波研の巡検、お疲れ様ー。休まなくて大丈夫? 高野さんは、頑張るねー」

茶色で長く、量の少ないさらさらの髪の彼女は、祇園を見上げて屈託なく笑いかける。馴れ馴れしいほどでもなく、だが後輩にも気軽にこうして話しかけてくれることはありがたいことだと、少々人見知りをする祇園は内心ではそう思つていた。

「^{ヨウ}広さんがお世話になつたって言つてたよー。それに、高野さん、

眞面目だから、いつも褒めてる

「広さん」と、「広太」という青井のファーストネームから露花は彼をそう呼ぶと、少しうらやましそうに、ふふっと笑った。

その言葉に、たどたどしく礼を言いながらも、祇園は一瞬どきりとした。

もしかして、青井が自分に少しでも想いを懸けてくれたりするのかな、などと、くだらない幻想をまた抱いてしまう。

巡検中、青井が帽子を被せてくれ、彼女が借りていた帽子を、「次いつ会えるか分からぬから」とそのまま彼が持ち帰った出来事を祇園は思い出す。

しかしその仮定を、彼女は直ぐに心の中で嘲笑した。

青井は誰のことも公平に扱うだけだ。彼女が居ても後輩は大事にし、認めるところは認めてくれる。そして彼には、思つたことを正直に言う部分もある。きっと露花に祇園の話や、光や弥栄の話もしており、その内容に裏表はないだろう。

自分の居ないところで青井が自分の話をしていると思うと、祇園は少しくすぐつたい気持ちになり、また愚かな期待すら抱きそうになるが、青井と露花の親密な関係を考えるとそれは有り得ないことが多いので、やはり胸がずしんと重くなる。

昨日終わったばかりの巡検のことを、露花が既に色々知っているということは、一昨日の夜の電話で話しただけでなく、早速昨夜、青井と彼女は会つたのではないだろうか。

二人とも県外出身者で一人暮らしをしている。同棲しているという噂は聞かないが、露花の地元は青井の地元の隣の県になるので、彼女も故郷に戻つて就職するという話を祇園は聞いたことがあった。ということは、結婚も視野に入れているのではないかと予想される。付き合つて三年目という二人は当然、身体も重ね合わせている筈

だつた。

青井はどんな表情を見せて、どんな言葉を掛けて、彼女を抱くのか。

考えれば考えるほど、自分など蚊帳の外であることだけを自覚し、祇園は落ち込んでしまつ。それが、今までの彼女の「日常」であった。

なのに、不思議なことに今田はそれほど苦しくはならなかつた。苦しいことに変わりはないが、何処か「救い」があつたのだ。

あれ？ なんだ？

会話が途切れで沈黙が訪れ、露花とも眼が逸らされた祇園は、洗つた試験管を伏せながらそんな自分を不思議に思う。祇園は露花に、ずっと「女」としての劣等感を抱いていた。それが緩和された気がするはどうしてか。

それは「いいもん、私にだって」と、子供のように自分と他人とを比較し、優越感を得られる部分を見つけて精神の安定を得ようとしているからではないだろうか。

自分だって誰かに必要とされている、「女」として見られているという、微かな醜い自信を与えたから、青井への欲求が叶えられないという葛藤を、それで無理やり昇華しようとしているのではないか。

昨日までなかつた筈のこの不思議な優越感の所以は、ひとつしかなかつた。

「あー、やっぱ此処にいたんですか」

……この、後ろから聞こえてきた声の主　こそが、原因。

突然の早海の声に、どきんと胸を波打たせてしまった祇園は、思

わざ試験管をシンクに落としてしまい、静かだつた実験室にその音が響いた。

彼の顔など見られたものではないが早海は、「昨日はお疲れ様でした」と言いながら、背後から祇園に不用意に近づいてくる。

来るな、バカ……

先程までの優越感とやらは何処へやら。祇園は当人を眼の前に困惑してしまい、試験管をシンクに転がしたまま、シンクの縁に置いた拳を握り締め身体を硬くしていた。

ふと視線を感じて前を見ると、露花が意味ありげに笑つて祇園を見ている。眼が合うと彼女は少し、首を傾げた。

……青井がきっと早海のこと、彼女に話しているのかも知れないな、と祇園は思った。

実際、祇園に他の男の影など相変わらずない為、これだけ仲のいい男が居ればそれこそ「大人」なのだし、誤解されても仕方ないな、と残念ながら納得も出来る。

何より、事実早海は、遂に小さな一線を越えてしまった相手なのであるから。

「部外者が、勝手に、……入つてくるな……！」

放つておけばいいものを、思わず叱りつけてしまつのは、祇園の習性であるかもしれない。

顔など見られないと思いつつも、彼女はつい反応してしまった。言つた後、祇園は気まずさを誤魔化すように試験管を再び洗い始める。

「はーい、すみませんー」と言しながらもちつとも悪びれた様子もなく、早海は祇園の斜め後ろに立つ。

彼の視線が彼女には痛かった。抱き締められたことばかりを思い出てしまい、緊張で手が震えそうになる。

彼はあれから何を考えたのか、今、どんな眼で自分を見ているのか。

祇園はそんなことばかりが気になり、露花への劣等感はいつの間にか彼女の中から消え失せていた。

「ごめんねー。あと一分で終わるからねー」

一人の邪魔をしてはいけないと思ったが、申し訳なさそうに露花は皺を寄せて苦笑し、「いえお構いなく」と言つ早海と笑顔を交し合っている。

意志の強い内面を持ちながら、胡散臭いほどの穏やかな笑顔で、誰とでも呑気に会話をする点ではこの二人は似ているかもしない……と、笑顔など浮かべる余裕も無い祇園は苛立たしくさえ思つていた。

息苦しい空氣の中、露花は一分後に、「ごめんね。お邪魔しましたー」と言いながら、乾燥した植物を持つて立ち去つて行つた。光も弥栄も居ない今、実験室には祇園と早海が一人きりで取り残されてしまう。

「何しに来たんだよ」と聞くのも恥ずかしく、ようやく試験管を洗い終えた祇園は、白衣のポケットに忍ばせておいたハンドタオルで無言のまま手拭いた。

「巡検バイトの給料、ゲンナマで貰いに来たんですよ」

聞かれもしていないが、今し方斯波に貰つたという給料の入った封筒を早海はぽん、と掌の上で叩いた。

「バイト代も入つたし、飯でも食いに」

「行かない」

二人きりになりたいわけなどない、と祇園は即答で早海を切り捨てた。

「つれないなー」

早海が苦笑しているところには、顔を見ずとも彼女に伝わってきた。

「それにしても……昨日の今日なり、祇園さんも偉いですね」「早海は祇園と試験管を見比べながら、感心したようにそう言った。

「……そっちこそ……徹夜したのに、やたら元気だし」

基本的に夜中も一時間おきにサンプリングをしていた筈なので、眠つたとしても断続的である。それなのに彼には隈ひとつ出来ず、昨夜一晩で回復したのか、爽快に笑っている。

「そりゃ若いですから」

一つしか違わないのだが、高校を卒業したての十八歳の若さは確かに祇園にも伝わってきた。

そういう中学校の時も、持久走大会や陸上部の練習の後でも、辛そうな顔ひとつせずに、にこにこと爽やかに笑っていたな、とある種化け物のような体力を持つ彼のことを祇園はふと思い出して、笑つてしまいそうになってしまった。　が、慌ててその笑顔を消し、無表情を保つた。

しかし次の早海の言葉で、その無表情は崩れてしまうのであった。

「なんでこっち見ないんですか？」

「……」

……当つたり前だろーと祇園は思つが、その理由を口になど出来ない。

彼女は無言のまま急いでこの場から逃げ出そうとしたが、早海の横をすり抜けようとした時、通せんぼをするように、とん、と彼に進行方向に足を置かれ、それ以上進めなくなってしまった。

動きを封じられた祇園は、身体を竦ませて俯く。そんな彼女に、早海の小さなため息が聞こえた。

「俺が、恐い？」

向かいの研究室に恐らく座っているであろう斯波に聞こえないよう、祇園に少し顔を寄せながら、低く、彼は囁く。

迫られて、困らされて、恐いに決まってる！と思つた祇園だが、何故か「恐い」と言い切るのも違う気がしていた。

彼の顔は未だ見られないし、未知の男女の関係は恐くて仕方ないが、彼女はそこまで「彼」自身に嫌悪を感じているわけではない。そう誤解されるのは嫌だな……、と思った祇園は、そろりと早海を見上げてみた。

齧すような声の割には、彼もまた困ったような眼をしていたので、それには彼女も少し驚いた。

祇園は早海と眼を合わせながら、視線を彼の脣に自然と泳がせる。思わず湧いた唾を、彼に聞こえないように、こくんと飲み込む。

早海が居ない時に、青井や露花に会えば、青井への想いに祇園の心は温かくなったり切なくなったりすると言つのに、早海が眼の前に居る時は、途端に青井に掛かる想いの比率が低くなることを、祇園は自覚し始めていた。

少なくとも今は一人のことよりも、早海のことだけを考えて緊張していた。

好きなのは青井先輩なのに……、と言い聞かせてきた筈の言葉も、一昨日の受け入れてしまつたキスにより、祇園自身がそれを踏みにじつてしまつた。

自分は一体、どうしてしまつたのだろうか。この卑怯で汚い心はなんなのだろうか。

そのように惑う彼女であつたが、心配そうな早海が見ていられなくて、思わず呟いてしまつた。

「こわく……ない……」

言い終わつた途端に祇園は、はっと気付き、慌てて口を手で覆つ

た。早海はそんな彼女を意外そうに見ていた。

「なんでもない！」と祇園が言おうとした時、「祇園ちゃん、終わつたならちょっと頼まれてー」斯波ののんびりとした大きな声が、研究室から実験室の方へと聞こえてきた。

第14話 妖 あやかし

「この気まずい空気が呑氣な斯波によって壊されたことは、祇園にとって幸いだつた。

彼女は通せんぼをしていた早海を押しのけるようにして、彼もまた、斯波に呼ばれたとあればどうする?とも出来ず、通り過ぎる彼女を見送つた。

今の早海とのやり取りは斯波に聞かれてはいないだらうと祇園は思うものの、隣の部屋に教官がいるような状況でのような雰囲気になつたことには、少しの罪悪感があつた。

「な、なんでしょうか……」

彼女は斯波の顔がまともに見られなかつたが、彼は祇園の様子は気に留めず、研究室中央のテーブルを指差しのんびりとした声で言つた。

「悪いんだけどさー。その資料、森さんのところへ返してく
れないと?」

森とは祇園が所属する学科の、斯波と同じ四十代だが彼より若干若い教授のことである。

斯波が指を差した方向には、数冊の本と薄い論文が置かれていた。そして一番上には、「請求書在中」と書かれた封筒が。

「教授、これは……」

祇園が思わず突つ込んでしまつと、斯波は悪びれずに笑つて答えた。

「んー? 一年近く借りっぱなしの本でさー。なんか噂で今度の学
会の前に必要だつて探してゐて聞いたからさー」

「いや資料の話じゃなくて……」

斯波があつけらかんと笑つて言つるのは資料の件についてのみで(それも酷い話であるが)、その上にちやつかりと置いた請求書に

ついてはわざとらしく触れない。

「ま、森さん、女の子には優しいから大丈夫」

それで学生をダシに使うというのだから、紳士な森と違ひこっちの教授は相当あくどいな、と祇園は思う。

「……請求書もですか？」

一応確認してみた祇園に、更に斯波は悪びれずに言つた。

「うん。こいつと一緒に渡してきて。巡検のアレも入つてるからねー」

笑顔の斯波に、アレって何なのか……薬品代ならまだしも、交通費であつたとしてもまあ、百歩譲つて許したとしても、昨日の宿の飲み代などであつたりしたら、自分までトラブルに巻き込まれるのではないか と祇園は少々ぞつとしてしまった。

しかしそれも退屈な大学生活へのスペイスだと自分に無理矢理言い聞かせ、それ以上は恐ろしいので突つ込まないことにする。

そして白衣を脱ぎ、そのまま帰ろうとした祇園に、斯波がふと声を掛けた。

「全部終わつたのー？」

「あ、はい。終わつてます。今データ出しますか？」

「んーん。急いでないから今度でいいよ。こち方さん。ゆっくり休んでねー」

何を考えているか分からぬ教官であるが、このように時々言葉に温かみがあるので、祇園を筆頭とした斯波研の面々は、ついいつも言つことを聞いてしまつのであった……。

祇園が頼まれた資料を持ち、少し早いが流石に今日ほこのまま帰るかと廊下に出ると、そこには早海が壁に凭れて立っていた。呆然としている彼女に彼は視線を向ける。

「終わりました？」

「……って、なんで待つてんのー！」

早海の笑顔をぽかんと見ていた祇園であつたが、先程までの顔も見られなかつた緊張も忘れ、当然のように立つてゐる青年に思わず突つ込んでしまう。

「流石に俺も、今日はバイト入れてなかつたもんで」

彼はそう言いながら身体を起こすと祇園の前に手を出した。「持ちますか？」

「いらない！ これだけしかないんだし。一人で行ける！」

恥ずかしいやら呆れるやらで、祇園は怒つた口調で言い捨てるど、足早に廊下を歩き出した。

「元気ですねー」

その後ろをやはり呑氣なことを言しながら、早海がついて来る。

「ついてくんna!!」

どういう対応をしてよいか分からず、それでも無視も出来ずに祇園はぎやんぎやん叫びながら、斯波研究室を後にした。

「……若いつていいいなあ……」

その賑やかな声を聞きながら、残された斯波はパソコン画面を前に、研究室内では禁止されている煙草に火を灯した。

・・・・・

「だからもう、ついてくんna！ 変態ーー！」

変態とまでは言ひ過ぎであるが、経験のない祇園としては「手を出された」という感が否めない。しかし早海は祇園の口の悪さは昔からのものなので気にならないのか、彼女の後ろから階段を昇りな

がら笑つて返す。

「俺の進む方へ祇園さんが歩いてるんですよ」

「嘘つけ！ 早海が何で森教授に用事があるわけ？」

「御用聞きですよー。今まで器具とか搬入しますし、生協のバイト生の御用聞きなど聞いたことないと祇園は怪しく思うが、この働き者というか謎の男ならやりかねないなとも思った。どうせつらくなれば、彼の所属する学部でPRを兼ねてすればいいと祇園は思うが、彼は理学部棟近くの食堂で働き、こちらの学部をよくひひひこしている。

実際、彼も毎日理学部に居るわけではなく、会わない日などは、別の学部で仕事を引き受けていると彼女も聞いている。が、これだけアルバイトをしたいなら、と不思議に思った祇園は少しの嫌味を込めて尋ねた。

「そんなに働きたいなら水商売とかで儲けたらいいじゃないか。早海なら人気出るんじゃないの？」

学生生協でそこまでアルバイト料を彈むとは考えづらい。実際光は、そういう得意の分野のアルバイトで、短時間で儲けているからだ。しかし、

「んー。祇園さんはそーゆーバイトしてると男とは付き合いたくなさそうだから。あと学校でなら授業の間も出来るし、祇園さんに会える確率も上がるし」

と彼はいともあつたり言い返してくれる。早海の方を振り返りもせず、三階から六階までの階段を昇りきつた祇園はそこで思わず脚を止めた。

……いけしゃあしゃあと、よもまあ恥ずかしい」とを……一

早海の口ひこひこひこひと全く変わつていない、と祇園は心底思つた。

と言つて彼は空氣も読まずに誰にでも子供染みたことを言つてはなく、祇園限定でこいつは馬鹿なことを言い、からかつていてあらうことは、斯波研の面々と彼とのやりとりを見て分かつている。

「だーから、そういう恥ずかしいことを言つた！」

からかつてゐるのか何なのか、祇園には早海の考へてゐることが分からぬ。だが、からかつてないと結論付けたかったのにあのようない行爲をされてしまい、彼女はどう反応してよいか分からず困っているのだ。

いや、あの行爲 자체が自分をからかつたのかもしれないが。

ふとそう思つた祇園の胸がちくんと痛んだ。

「……」

「どうしました？」

急に黙つてしまつた祇園に、早海の怪訝そうな声が掛かる。

「べつに！」

そうであつたとしても、あれは隙のあつた自分がいけないのだ。キスだけで済んだのだし、犬に噛まれたと思って忘れよう、祇園はそう思つとまた早足で歩き出した。

斯波研究室は三階に位置するが、森研究室は最上階の六階にあつた。この古びた理学部棟も六階となると、木などの邪魔もなく外の光が入るのか、斯波研究室周辺よりも明るい雰囲気になる。

そしてそれは斯波と同世代の割には、男の渋みを感じさせ洗練された物腰を持つ、美幸もそうらしいが密かに女性ファンも多い、森教授との人間性の違いにも祇園には感じられた。

しかし祇園が森研究室のドアをノックしても、返答はなかつた。ため息をついた彼女が、もう一度斯波研究室に戻ろうとすると、

「確かここに……」

と早海がドアの横にあつた戸棚に入れ何やら漁り、「はい」と祇園に合鍵を渡してきたのであった。

「なんでそんなの知つてんのさ……」

「研究室の人教えてもらいました」

眉を寄せて訝しげに尋ねる祇園に、早海は相変わらず読めない笑顔で答えるが、ふと祇園の女の勘が働いた。

「女人？」

「さあ」

この天然タラシが……と祇園は早海に疑念を抱くが、このような嫌な請求書は森教授の顔を見ながら渡したくとも思い直し、彼女は合鍵で研究室のドアを開けた。

すると、そこで祇園が目にしたのは、予想もしなかつた驚くべき光景だった……。

「え……？」

無人だと思つていた研究室に森が居た。

それだけならまだしも、その隣に立つていた女性は　。

「美幸……？」

友人の姿を確認し、祇園は呆然と呟いた。

一人は、特に美幸は驚いたように、そして申し訳ないような、泣きそうな顔で祇園を見ていた。男　教授である森の手は美幸から離れていたが、寄り添うように立つ二人の姿と、慌てて乱れを直したと見られるブラウスの裾が妙に妖艶に祇園の双眸には映る。

「すみません！」

祇園はそれだけ口にすると、一人から眼を逸らした。そして一番近くにあつたテーブルに資料を置き、慌てて研究室から飛び出した。

詮索のしそぎだらうか。

突然の出来事と衝撃的な情報に、祇園の頭は整理できない。だが明らかに、今の光景への嫌悪感はこびりついている。

第一鍵の掛かつた研究室に一人きりでいること自体がおかしく、あの様子や美幸の表情からしても、森に強引に迫られたわけでもなさそうであり、二人の間に何かおかしなものを感じずにはいられなかつた。

しかし美幸には彼氏がいる。そして森には確か妻子がいた筈。

よく分からぬ。だが最低な現実に、眞面目な祇園の頭はぐらぐらと揺れ、吐き気すらもよおしそうな気がするが、彼女は理学部の階段を一気に駆け下り、最後にはバランスを崩して少しよろけそうになりつつも、更に理学部棟を出て走り出そうとした。ところを、ぱしつと音立てて、半袖から伸びた腕を捕らえられた。

「意外に……速いですね」

彼女を追つてきたのだろう。祇園が振り向くと早海が彼女の腕を取り、苦笑していた。その顔を見た途端、祇園の中で何かが爆発した。

「……早海の所為だ……っ！」

祇園はそう言つと、気が抜けたように、外通路であるにも関わらずその場に座り込んでしまつた。流石に涙は流さなかつたが、彼女

は泣きたい気分で穿いていた麻のスカートを弄り、俯く。

「早海が、あんな鍵なんか見つけなければ……」

ただのハツ当たりであることは、祇園にも分かっていた。鍵を開けても開けなくとも、あの場に美幸は居たのであるから。あの二人が本当に関係を持っていたとすれば、今日だけのことではない可能性もあり、それを美幸が祇園に隠していたことにも変わりはない。頼りにしていた友人の不貞行為を眼にして、元々潔癖だった祇園はショックを受けてしまい、丁度今眼の前にいる、このおぞましい秘密を共有する男に甘えてしまっているのだ。

だがそれは、今傍に居る人なら誰でもよかつたのだろうか？

早海が付き合って欲しいと言つた男だから？自分に初めて触れた男だから？

違う。 そうではない。

祇園はそこで、ある確信を抱き、相手の本性を探る意味も込めてひとつの言葉を呴いた。

「早海の、ばか……っ」

巡査での出来事や、それ以前からの彼に翻弄されている恨みも込めて、祇園はそんな暴言を彼の顔も見ずに吐いてみたのであるが、早海は彼女の腕を決して離さず、

「それはすみませんでした、」

と巡査の件も含まれていると分かったのか、祇園に付き合つてその場に膝をつくと、ため息混じりに、それでもやはり苦笑して答えた。

だがそれは祇園が「予想していたとおり」の答えであつたのだ。

複雑な感情から泣きそつた気分である」とには変わりないものの、そのことに彼女は非常に安堵させられた。

本当はずっと前から　それこそ五年前から、祇園には分かつていたのかもしかなかつた。

早海は自分に、どうしてか絶対的に優しいことを。

それが演技なのか本心か、彼女には分からない。だが本当は、どちらでもよかつたのだった。

女性によつて態度を変える男性もいるが、少なくとも早海は、誰に対しても穏やかな態度を崩さない。こんなに勝手で嫌な自分など嫌えばいいのに、怒つてもいいのに、と昔から思う祇園がどれほど彼に冷たくしても、どれほど意地の悪いことを言つても、必ず掴めない笑顔のまやかしに包み込まれる。

きっと、それは、五年前から。

だがその感覚は、彼女にとつて決して嫌なものではなかつたのである。

この優しさがまやかしでも本物でも、祇園は内心ではそれにいつも救われていたことに気付いた。臆病にもそれを利用する割に、認めようとしないのだが……。

あんなことをしている美幸のことを一瞬軽蔑しそうになつた祇園だが、そんな卑怯な自分もあまり変わらないのではないだろうかと、彼女は自己嫌悪すら深めた。

だが卑怯であることをたとえ自覚したとしても、今、ここに「彼」が居てくれてよかつた……と思つてしまつたことはやはり内緒にしておこう、とその腕を握っている青年の手のぬくもりを感じながら、祇園はこゝそりとそんなことを考えていた。

「……って、こんなところに座つてたら邪魔ですよ？」

しかし少しの間の後、早海が周囲を見渡しながら祇園に声を掛け

る。

我に返つた祇園が顔を上げれば、今は四限目の授業中なので人影は少ないものの、たまに通り過ぎる学生たちが自分たちを振り返つていく。

「奢るから、甘いもんでも食べに行きませんか？」

とにかく今はショックが大きく、甘い物は大好きだし、気がつけば昼食を食べそびれお腹が空いていたし、何より今は胸がぐちゃぐちゃで、この秘密を誰かと共有することで緩和し、昇華したくて。

そう思った祇園は、昼間だしお茶を飲むくらいなら襲われることはないだろう、と素直にこくりと頷いた。

第15話 ふたりじめ（前書き）

不倫についての章になりますので、不快になる恐れのある方はご注意ください…。

第15話 ふたごじゆ

生協食堂で十分だと思った祇園であったが、「折角だからもつと美味しいもの奢りますよ」と早海に促され、余りのショックに逆らつ気力もなく、正門への道を彼の後ろについて歩いていた。

改めて見るとその背中も身長も、大きく逞しくなったものだな、と早海の後ろ姿を見上げながら祇園は現実逃避のように考えていた。自分よりも可愛いんじゃないかと思つていた少年は、やはり何処にももう居ないのである。

彼女がこんな時にそんなことを考えてしまうのは、巡検での衝撃的な出来事の上に、更にショックな出来事が重なり、心がかなり弱つているからに違いないと思つた。

だけど他の男性だつたら 青井は別として もしかして、こんなに頼りにはしなかつたんじやないのかな、と祇園が思わずそんな仮定を想い描いていると、早海はぐるりと彼女を振り返つた。

「よかつた、ついてきてた」

そして彼は、安心したように微笑む。

私のこと、からかつてたんじやなかつたのかな……。

祇園は早海の笑顔を不思議に思いながらも、彼が足を止めて待つていたので、そこからは彼の横を歩き始めた。

こんな風に一人きりで喫茶店などに行けば、傍から見ればカップルにしか見えないのではないだろうかと祇園は思つたが（実際それで周囲は二人の仲を誤解しているのだし）、現に斯波研究室のように大学では男女の友人関係もたくさん成立しているので、祇園は開き直ることにした。

今は余分なことを考えず、美幸の件についてのみ悩むことに

しょ。)

そう思つてひとり頷く彼女が早海につれられていつた先は、大学から徒歩十分ほどの一階建ての洋菓子店「常春堂」であった。

「つて、ここじゃん」

祇園が意外そうに店を指差した。斯波研究室ではお茶の時間はこの店のシュークリームが定番となつてゐる。金銭的な問題で月に数回の話であるが。実際に生クリーム入りのそれは、掘り出し物の美味なものであった。

「ここで食つたことがあります?」

早海の問いに祇園は首を振つた。パッケージでその名前を見るだけであり、シュークリーム以外の甘味にも興味はあつたが生活費の節約もあり購入したことはなかつた。また、店内で飲食が出来ることも知らなかつた。

「今年から一階で食えるようになったみたいですよ。けつこー評判いいし」

早海はそう言つと自動ドアの前に立つ。空腹であり、甘いものが好きな祇園は、食欲に負けて素直に彼に従つことにした。

一階へと上がる前に注文をしたが、ケースに入つた綺麗なスイーツには、祇園も確かにそそられた。

ただ余りに気分が滅入つてゐる彼女は、通常なら それこそ美幸とどれにしようかと盛り上る前の前でも、ため息ばかりついてしまい、結局、あんみつプリンチョコレートパフェなる、とにかく甘い代物を注文してしまつた。

ちなみに此処には可愛らしい菓子ばかりでなく、バケツいちじくりんなどの不可思議な人気商品もあるという。

それはさておき、コーヒーだけを注文した早海と共にそれほど広くない一階へと階段を昇り、テーブルについた祇園は改めて大きな

ため息をつく。彼は何も言わずに頬杖をついて、窓の外を眺めていた。

「……さつきの、誰にも言わないでよ……」

やがてスカートを弄っていた祇園が口を開いたので、早海は彼女の方を見た。

「言いませんよ」

思つた以上にそれが真面目な声であつたので、流石に彼はそういう男ではないか、と五年前のイメージでしかない部分もあつたが、祇園は彼を信じることにした。

また無言になる一人であつたが、それほど待つこともなく、コーヒーと大きめのパフェが運ばれてきた。

「実物、初めて見ました」

早海がブラックコーヒーを手に、仲間内で噂であつたらしいパフェを前に笑う。

祇園はじりじりと彼を睨むと、あんことチヨコレートのとにかくこつてりと甘いハーモニーを醸し出すそれを、一口食べた。

確かに甘い。非常に甘い。

この甘さでこの憂鬱が麻痺されないかと思い、祇園は味わいもせずに一心不乱にそれを口に運んだ。

「ネタにしたいから、一口ください」

そんな祇園に、早海が少し軽い口調で提案する。しかしスプーンは一つしかなかつた。

「……やだ」

祇園はまた早海をじらじると見ると、眼を逸らしながらぼそりと言つた。

「えー。そりや残念」

しかし早海はそこであつさり引き下がつた。いつもの彼なら間接キスがどうこう言いかねないと思ったので、祇園はほっとしつつも意外に思つたのだが、それはやはり友人が不貞行為にショックを受

けている自分を気遣つてくれているのだろうかと、ふと思つた。

祇園は再び大きなため息をつくと、甘いパフェを食べながらぽつりぽつりと語り出した。

「美幸には……彼氏がいるんだ。ラクビー部の人で、仲よかつたつて思つてた」

「……」

祇園から早海に話し掛けることは、昔から少なかつた。彼は頬杖をつくと、彼女の方に視線を向ける。

早海は昔も今も、特に祇園に返答を求めることはせず、ただ同じ時間を共有していることだけを楽しむように話し掛けてきた。今の祇園もまた早海に答えなどは求めず、ただ自分の心を占めているもやもやしたもの整理したくて、秘密を共有する男の前で自分の思うところを口にしているのであつた。

「それで教授には……奥さんも子供もいた筈だ」

祇園はそこで声を潜めた。年配の女性客が賑やかに笑う声の方が大きい為、他に座っていた同じ大学の生徒には聞こえていないようだつた。

「なんで、そうなつたかは美幸に……話してくれればだけど、確かめるしかないんだけど」

「好きな人よりも好きでいてくれる人と付き合えば」と助言してきたくらいの彼女のことだ、ただ何も考えず男性と関係を持つているわけではないような気が祇園にはしていた。

だが頭も良く頼りになる、憧れていた友人である。さっぱりしていて、裏表もなく、それでいて処世術も心得ている。だが自分を大事にしている女性であると、祇園は信じていた。

ただ言われてみれば、美幸にもどこか寂しそうな顔をする時もあったような気もし、彼女の過去に触れては話をしていないので、こんなことに至つた経緯までは分からない。

しかし華やかで正反対に見える彼女が、地味な自分とこれだけ仲がよいということは、何か自分に求めるものがあつたのではないかということに、祇園は今更ながら気が付いた。

そしてその寂しさも、女友達では埋められなかつたということだわづか……。

森を責めればいいのか、美幸を責めればいいのか。

確かに年齢と立場、そして家族の思いを考えれば、森の罪は重い。許されることではない。美幸とて付き合つていてる青年に対し、裏切りを働いたことになる。

それはきっと一人にも分かつていてことだわづか。

「教授のお子さんのこと考えれば、すごく悪いことしている　つて分かるんだけど……、単純に、あなたが悪いって責められない……」

彼女に正論を突きつけ、罪を責め立てねばならないと言つ者もいるかもしれない。だが美幸がどういった気持ちでそうしたのか分からぬ以上、祇園には罪だと分かつていてもそうすることは出来なかつた。

祇園は苦しそうに早海に向かつて吐き出ると、彼の顔を見ないままいつしか食べることを忘れてパフェを睨みつけていたが、彼はそんな彼女をじつと見ていた。

「友達、ですからね……」

やがて早海もまた、ため息と共に呟いた。その言葉は何の解決にもならなかつたが、祇園はこくんと頷いた。

そして早海がやや明るい声で、「溶けてますよ?」と言つので、はつと我に返つた祇園はこんな状況であるが、食べ物を粗末にしてはいけないとパフェを食べることを再開した。

溶けることによつて益々気持ちが悪いほどの甘さが増しており、このやるせなさをこの異常な甘味でやはり麻痺させるしかなかつた。

そして祇園は食べながら、どうして美幸を責められないと思うのか、の結論にふと行き当たつた。

「でも……ちょっと前なら、不倫なんて絶対に気持ち悪くて嫌だったんだ」

祇園の言葉に、早海はコーヒーを飲みながら不思議そうな顔をする。

「今は、嫌じゃないんですか？」

「い、嫌じゃないってことはない！ そりや子供のこと考えたら、絶対にいけないことだし、子供育てる責任ある大人が恋にうつつを抜かすのは馬鹿げてるし、」

父親と言えども「男」であることには変わりなく、何十年も同じ女に恋が出来ずに気の迷いが生じたのだろうか。それは美幸も同様で、誰からも祝福される相手がいるのに、結ばれない相手に何か同情を持つて、身を任せてしまつたかもしれない。

その間にはどんな心情が働いたのだろうか。祇園は推察してみると、想像もつかなかつた。

だが自分とて好きな男が他にいるのに、報われず寂しいなら、好きでなくとも自分に言い寄る男と付き合つてみると言われて、正直心が揺れた。

五年前、自分より小さかつたはずの少年が「男」になり自分の前に現れ、抱き締められて口付けされて、心が惑わされている。

二人の男を同時に想つてしまつ、この気持ち この、「よくなき気持ち」は確かに祇園の中にも存在していたのである。

人の心の弱い部分に潜む、哀しく虚しく、愚かな欲情は、抗えない性なのであるうか。

「だけど正しいとか正しくないとかじゃなくて、もう一人は、……してしまったかもしないじゃないか。正しい倫理観とか誰かを哀

しませるとか裏切りとか分かつて、その瞬間はその相手を選んだんじゃないかな。今の自分の立場も切り捨てるここと出来ずに、相手と

そういうことがしたいためだけに

今もしも、青井と自分が付き合つていれば、自分は田の前の男に對してこんな気持ちにはならず、拒絕していただろうか。 早海を拒絶、出来ていただろうか？

五年前の昇華出来なかつた、あの嫌な気持ちをやはり思い出してしまい、苦しんでしまつただろうか。自分は早海をどう想い、どうなりたいのであらうか。

「ずるいって分かつていても、卑怯だつて分かつていても、その瞬間の寂しさみたいな空白を、誰だつて埋めたい。もしかしなくとも、それは許されないことなんだろうけれど、何がその人の救いになるか分からぬじやないか」

言つてゐるうちに、祇園はまたパフェの存在を忘れていた。スプーンを握つた手に力が込められてしまつた彼女であったが、やがてそれに気付き、残つたパフェをもそもそと食べ始めた。

祇園を黙つて見つめていた早海だったが、しばらくして静かな声が彼女の耳に聞こえてきた。

「分かつたよくな分からぬよくな話だけど……少し、分かるような氣もする。その空白を埋める救いが、何かなんて、そんなのそいつにしか、分かんないんだろーな。それが正しいことじやなくともれ」

何か噛み締めるよくな早海の言い方が、祇園はふと耳に留まつたので顔を上げた。

彼は一瞬、いつか見たよくな不思議な笑顔をしていたが、直ぐにまた肩を竦めからかづけ言つた。

「どうり」とは、祇園さんもどうこう気持ちになつたことがあるんですか?」

-

祇園は一瞬、チョコレートのアイスクリームがじろじろに溶けたもので咽そうになつたが、どうにか堪えて早海を少し睨むと、茶色く汚れた空のガラスの器にまた視線を落とした。

「あるわけ、ない」

本当は眼の前の男に揺らがされているのだが、それは五年前と同様認めたくないと祇園はまだ頑なになつていた。

それは自分の不実な心を人に言いたくないといふのもあつたが
それだけでない。

祇園は誤魔化すように最後の一 口を食べると、水を一 気に飲み干し、男性のように勢いよくコップを置いた。

それを見ていた早海に、「何か飲みたかったらビツヤ」とメニュー表を手渡された彼女は、それを見るともなしに手にしていたが、そこで彼がまたふつと笑った。

早海はそう言つと何かを思い出すように、また窓の外を見た。その横顔は明らかに、祇園に告白してきた時のような、何処か不安定なそれになつっていた。

祖園はその表情をする時の早瀬の本心が分からなければ、彼の言葉が今ひとつ信じられなかつた。だから今日は、彼のことを探るようじつと見てみた。

自分に触れてきた男のことを探いながらも、知りたいと思つていつたからであつた。

「早瀬……してやることで、愚のうへ？」

その横顔が示すものが余りよいもののような気がしなかつたので、祇園はメニュー表を下に置きながら不安そうな声で尋ねる。

彼はゆっくりと彼女を見た。祇園は少々恥みそうになつたが、これが公共の場であることが幸いし、視線を逸らさず彼の顔を見ていた。しかし視線を逸らしたのは、早海の方が先であった。

「いいつつうか……ガキの頃から親が当たり前のようにしてたからなー」

それはきっと「素」の彼の表情なのだろう。そう言って、再び窓の外を仰ぐように見た早海の冷笑に、祇園は冷や水を浴びせられたようになりきとした。

しかしそれは自分に告白した時の表情と余り違わないものに感じたので、これが彼の隠された本心に近いものだと思いたい気持ちもあつた。

「ごめん……」

祇園は俯くと小さな声で呟く。悪いことを聞いてしまったということと、五年前も早海がそういう家庭環境で育つっていたことなど気付ず接していた、という謝罪も兼ねていた。

その言葉に早海がこちらを向いたようだったので、祇園は申し訳なさそうに身を縮めた。しかし彼は、ため息混じりにこいつ尋ねたのであつた。

「覚えて、ねえの？」

第16話 見えてくるもの

早海の声に祇園は驚いて顔を上げたが、話題の気まずさと、彼が自分を真っ直ぐに見据えた視線に再び俯く。

此処が店内でよかつたと心底思つた。今の彼の様子では、また何をされてしまうか分からぬよつた気がしていた。

「な、何を……？」

しかしその言葉に本当に検討もつかなかつたので、祇園は思わず尋ね返した。早海は少しの間の後、自嘲的に笑つた。

「何でも、ないですよ」

奇妙な間が訪れた。思い出せそうで思い出せない、祇園はどこかに眠る遠い記憶を探つてみたが、眼の前の早海の静かな威圧感に緊張したのもあり、おぼろげなそれを思い出すことは出来なかつた。なので彼女は早海の言つとおり、大事ではない記憶か、いつそ彼の勘違いではないだらうかと思おつとした。

それにしても、と祇園はちらりと視線を上げると、また窓の外を見ている早海の横顔を視界に捉えて考える。

祇園にはこの青年には「陰」と「陽」がある気がした。

自分が子供だったからか、彼も子供だったからか、五年の間に何かあつたのか……。昔は陽気な彼の姿しか見ることがなかつた。

今も基本的にはそうであるのだが、自分を求めよつとする時や、彼の本心らしきものが現れる時には「素」の彼になるのではないか、と祇園は思つていた。

それに彼自身、そういう時は少なくとも敬語ではなくなりつまり、「後輩としての早海」ではなく、一個の男として祇園に何かしらのアクションを起こしていることが分かる。

しかしそれは今のようじ、甘い恋情と云つては、どうか恨みにも似た気持ちにすら感じられた。

じから立ち、今田はたまたまそこに居て、自分を追いかけてきてくれた早海に八つ当たりし、子供を犠牲にするような森の行動をきつぱりと否定もせず、早海自身の事情も知らずに嫌なことを思い出させたことには変わりない。そして彼の最後の質問に答えられなかつたことも、確かなのである。

- 100 -

祇園は余計に陰鬱な気持ちになりながら、謝罪する。すると早海は驚いたように彼女を見た。

「あ、別に気にしてませんから。すみません、余分に落ち込ませちゃって」

陰の自分を見せたものの、それは祇園を追い詰める目的ではなかつたらしい彼は、いつもの調子に戻ると少し焦つたように笑つてそう言つた。

時折影を見せるからと言って、彼は祇園に攻撃的になるわけでもなく、最後はやはり彼女を笑顔にしようとしてくれる。「優しい」という印象には変わりなく、元の空氣に戻つた早海に祇園はこゝそり安堵のため息を漏らしていた。

逆に自分のこの中途半端な態度や、「何か」を思い出していないことが彼をあんな風に豹変させているのかもしれないな と密かに反省すらしてしまつ。

そんな祇園に早海も気を遣つたのか、一もひとつ何か食べますか？」とメニュー表を指差してくるので、彼女は首を横に振ろうかとしたが、一瞬ケーキも美味しそうだななどと呑氣にも思つてしまつたその時、彼女の携帯電話が鳴つた。

マナーモードでも振動で分かつたそれを、祇園は鞄から取り出して確認する。

メールが一件受信されていた。それを見た彼女は、思わず早海に報告した。

「…………美幸からだ……」

彼は何も言わず、頬杖をついて彼女を見ていた。その内容は、「今夜、家に行つてもいい?」というものであった。

「メールしても、いい?」

祇園は早海を伺い見たが、彼は「ジーぞ」と彼女に促した。その間に店員が、食べ終わつたパフェの器を片付けに来た。その音を聞きながら祇園は短いメールを打つた。もちろん返事はOKである。

「今夜、美幸と話してみる

携帯電話を片付けながら、一応相談らしきものをして相手なので、祇園は再び早海に報告した。

彼女もまた一人暮らしであるので、お菓子を持ち寄り夜中まで話をするということは今までにもあつた。その時の楽しい話とは、今夜の用件は全く違つのであるが……。

「そうですか」

早海は静かに呟いた。短すぎる返答に、他にないのかな、と一瞬思つてしまつた祇園は思わずため息混じりに尋ねてしまう。

「私は、どうしたらいいこと思う…………?」

この衝撃の事実がひとりで処理出来ず困つてゐる。祇園は思わず弱音を口にした。

「…………」

早海は珍しく甘えてくる彼女を、頬杖をついたままの姿勢で見ていたが、やがて身体を起こすと、首をこきりと鳴らして口を開いた。「ま、とりあえず、橋之江さんの話を聞くしかないですよね。向こうが話したいつて言つてくれるなら、尚更」

そうだよな、と思つた祇園は頷いた。眞実は美幸しか知らないことであるのだから。

「祇園さんが、どれくらい嫌悪感があるかはわからんねーけど……とりあえず、感情的にならないで、最後まで話聞いてあげたら?」

いくら友達だからと言つても、森と結婚したいなどと美幸が言い出したら、流石に祇園も賛成は出来ないと思つた。子供を泣かすような真似は、これ以上させたくない。

だからと言つて悩んでいる彼女を、正論ばかり突きつけて、追い詰めたくも無い。

やはりこれからも今までのように行き合いついていたいと思うし、あのようなことをしたからと言つて、彼女を気持ち悪く思うわけではないからだ。

ただ確かに、それこそ早海が幼い頃苦しんだと思われるように、子供のことを考へると肯定してはならない関係ではあるので、感情的にはなつてしまふかもしない。だがそれでは、祇園と美幸の二人の間に亀裂が走るだけなのである。祇園は早海の言葉に、再びこくりと頷いた。

「素直ですね」

早海は意外そうに言つと、短く笑つた。その笑顔は今までと変わらないものに戻つてくれていたが、ふと別の不安も感じた祇園は、蒸し返したくは無かつたが彼に確認してしまつた。

「早海は……美幸のこと、嫌なやつだつて思う?」

友人を貶されるのは辛いが、親がそういうことをしていた彼にしてみれば、そんなことをする人間全般が許せないのかもしれない。祇園が心配そうに尋ねると、彼は首を振つた。

「別に。俺、二人のことよく知らないし。今の話だけじゃ、状況よく分かんないし。それに、橋之江さんは橋之江さんでしょ」

眼を逸らすことなく祇園を見て、穏やかにそう言つた彼の言葉に、不覚にも彼女は何か大きな安心感に包まれそうになつてしまつた。

「どうか。」

違うことを見たかった質問から、偶然にも祇園自身がどうすればよいのかを、この後輩に教えられてしまった。

確かに、美幸は、美幸なのだ。

どこか落ち着かなくなり、祇園は俯いた。これが青井だつたり、弥栄だつたり、光だつたりしても、同じ答えが聞けただろうか、と新たな「もしかして」を仮定しそうになりながら。

そこで会話は途切れ、「帰る」と言ひてそそくさと祇園は立ち上がり、早海も残念そうに苦笑したがそれに従つた。

しかし祇園が割り勘で払おうとしたところ、彼にやんわりと断られてしまつた。徹夜までしたアルバイト料なのだし、だったらもつと安いものを食べたのに……と彼女はとても悪いことをした気になる上に、彼に借りを作つたような気がしてしまつのも悔しかつた。

「だから払うつて言つてるのに……」

大学まで一緒に戻る途中にも、祇園は早海にぶつぶつと訴えるが、彼は笑うばかりで取り合ってくれはしなかつた。

二人はそんなやりとりをして学生生協近くの駐輪場まで一緒に歩いてきたが、そこに彼の原付が止めてあるのでそこで別れることがある。

祇園は少し躊躇つていたが、彼女を慰める意味も含めて実際、パフェを奢つてもらったことには変わりない。だからほつりと色々な意味を込めて、彼の方を見ずに呴いた。

「ありがと」

また俯いてそう言つ祇園を、小さなヘルメットを頭に乗せながら早海はきょとんとして見ていたが、

「頑張つてくださいね」

と大きな手で、彼女の頭をやおら撫でた。

「――！」

不用意に触られ、祇園は飛びのいた。頭を押さえ、何するんだ！

という抗議の視線で早海を睨むが、彼はただ笑っていた。

完全に遊ばれている……と、彼の前で弱音を吐いたことを後悔しながら、祇園は踵を返して帰ろうとしたが、早海が原付に跨りつつ突然提案してきた。

「そんじゃお礼とか、貸しにしたくないって言つんなり、」

確かにそういう負い田を彼に對して感じたくないと思つた祇園は、ぴたりと足を止め、やや赤い顔で早海を振り返る。

「俺、来週誕生日なんですけど、なんかお祝いしてくれませんか？」

「はあ！？」

いきなりのお願いに、祇園は思い切り嫌そうな声を上げた。早海はがつくりとわざとらしくハンドルの方に頭をぶつけると、そこに両肘を掛けて祇園と目線を同じ高さにした。

「駄目ですか？」

「……」

最早何も言い返す氣力も無く、祇園は無言で早海を睨む。しかし流石に今日は彼も引き下がりが早かつた。

「ま、そういう目的で優しくしたとか思われたくないし。また来週お願ひにあがります」

彼は自己完結したように頷くと、身体を起こす。祇園が何と言つてよいやら分からず早海を見上げると、彼は笑つてこう言つた。

「七月七日ですよ。俺の誕生日。　祇園さん、おんなじ月の二十七日でしょ？」

「なんで……っ」

何で知つてんだよ！さすがストーカー！？と祇園は突つ込みたくなつたが、

「二十日間、同じ年ですね」

彼の笑顔に、五年前の記憶を蘇らせた。

『一十日間、同じ年ですね』

ぶがぶかの夏服を着た彼は、そう言って祇園を見上げて笑っていた。

こんなにチビなのに、自分と同じ年であることが不思議だと祇園は確かに思ったものだった。

早海は身体を起こしながら、そう言って眼を細めて笑った。実際、たつた一つしか年下ではないのであるが、そう言って笑った笑顔が、「後輩」ではなく自分と対等の青年である気がして、妙に祇園の心が騒ぎ出す。

そして、「じゃ、気をつけて帰つてくださいね」と言い残すと、早海はあっさりと原付に乗つて消えていった。

祇園は呆然とそれを見送る。いつの間にか、独りでいられるほど心は落ち着いていた。美幸とこれから話をすることを思えば正直気が重かつたが、少しは冷静になれた気がしている。

きっと、誰が傍に居ても同じ気持ちになつた筈だ。

彼女はそう思おうとしたが、今日の礼も含めて、結果報告くらいは早海にしてやってもいいかな……、とそんな風にも思い始めていた。

そして七月七日の夜、アルバイトが入つていてかどうかを一瞬考えてしまいそうになり、祇園は首を横に振った。

友人のことを心配しているのに、不謹慎である。

早海の消えていった方角を気がつけばじつと見ていた祇園であったが、我に返つて家路についた。美幸が来るまでに家を片付けなくてはいけないと考えながら。

しかし一人きりの帰り道で、先程不思議な表情を見せていた早海のことが、やはり気になつて考えてしまつた。

「同じ年」だと言う早海の嬉しそうな笑顔から、彼にも母親がおらず、「おそろい」と言つていたことをふと思い出す。

彼が自分に求めているもの、言葉にはじづらいものであるが、その正体がそれをヒントにほんの少し見えてくるような。そんな気が祇園にはしていた。

そして更に祇園は先程の知られざる彼の過去から、彼が見せる陰の表情や、語ろうとしない本心、彼に起じついていた出来事……などにも想像も出来ないが思いを馳せてみる。

それらを彼が思い出す時と、自分に手を出そうとしてくる時の雰囲気がどことなく重なつてゐるような気がし、祇園は早海のことが徐々に気になるよつた、知りたいような気分にさせられていたのであつた。

第17話 割りきれないもの

美幸が祇園の家にやつてきたのは、彼女が服飾店のアルバイトを終わらせた夜九時のことだった。一人暮らしであれば特に、アルバイト後にこうして遊ぶことはよくあることなので、時間が遅いからと言つて祇園が迷惑に思うことはなかつた。

やつてきた美幸に紅茶を淹れ、彼女がお土産にと買つてきたケーキを開き……昼間のパフェを思い出しながら、こんな時間にこんなに食べて太るよなとふと心配になつた祇園だが、今日くらいはいいかと開き直つてそれを二人分皿に並べる。

そして明日の講義のことなどどこか空々しい会話をし、ケーキをひとつ食べた後に、やがて美幸は大きなため息と共に吐き出した。

「ごめんね」

「……」

祇園はどう返してよいか分からなかつた。しかし美幸は即座に言葉を繋いだ。

「つて謝る相手が違うけど。正面切つて家族の人に全部打ち明けて、滅茶苦茶にするのもどうかと思つてる……」

祇園は黙つてカップを抱えると、紅茶の表面を見ていた。

「そうだね……」

そう言つことしか出来なかつた。祇園には判断出来ない。森の家庭状況も分からぬ。少なくとも、美幸は彼と話してそういう結論になつたのだろうと思つた。

もしも関係を辞めるのであれば尚更、元の生活に何も無かつたように戻りたい筈だらう。

これで関係を終わらせると、もう一度と罪は犯さないとこのに正

直に話し、後にしこりを残しても家族に謝罪すべきなのか、卑怯でも誰も傷つけず嘘をつき続け、己の行動と心だけを悔い改めることが正しいのか、祇園には分からなかつた。

だがもし、今後も関係を続けると言つならば流石に。

そう思つた祇園が美幸をちらりと見た時、彼女は笑ひと、少し早口に言つた。

「でも、もうこれで終わりにする

祇園はそのまま顔を上げて、美幸を正面に見た。

「祇園に見られて、我に返つちやつた。踏ん切りがついたよ」

それを聞き、そんなにあつさつと終われるものなのかと逆に不思議 そうな表情を祇園がすると、美幸は真っ直ぐに視線を合わせてき た。

「自分でもよくないって、分かってるし、別に結婚したいとかそんなんじゃなかつたし。いつかは終わりにしなきやとずっと思つてた し、ちよつどいい区切りだと思つて……。思い切つて終わりにする ことにした」

「でも、どうして……」

相手のことが好きでたまらないからこそ、よくない関係と分かつ ていても求め合つてしまつただろうに、そんなに簡単に終わりに出 来るものなのだろうか？

それは真剣な恋愛だったのかと、ショックを受けた割には祇 園は疑問が募り、美幸を問い合わせた。

「そりや確かに、よくないことだけど、そんな簡単に割り切れるも のなの？ それで後から爆発したりまた同じことしちやつたりしな い？」 美幸は 好き、だつたんじょ？」

「ここで遊びだつたと言い切られるのも もしかしたらそちらの 方がまだましなのか、それすら分からないが、それは美幸と言う自 分が信じる女性の価値を下げてしまう気がして祇園は嫌だと思つた。

「すつじぐく、好き、だつたよ。だからいけないって分かってて
も、付き合つたんじやん」

だが返ってきた美幸の迷いのない言葉に、祇園は何故か安心してしまった。

「一年の冬くらいからいいなつて……最初は尊敬してて、それからどんどん話がしたくなつてこつそり通つた。祇園が斯波先生のところに居てくれたから、私も来る口実が多かつたし」

そこで「ごめんね」と呟くと美幸は肩を竦めた。

「一緒に居たい、もつと知りたいつて思つちやつたの。年回りが違つたら、違う形で出会つてたらつて、思ったよ。渡とも別に喧嘩したわけでもないし、いいヤツなんだけど……なんでだろうね、『オジサン』がよかつたのかな」

「渡^{ワタル}」とは、同じ学年になる美幸の恋人の名前である。学部も違うので、祇園は数回しか会つたことはないが、元気な青年であった印象がある。

確かにまだ二十歳になつたばかりの彼にはまだ、「オトナの魅力や包容力」はないかもしないな……と祇園は内心納得してしまつた。

祇園が渡の色黒の顔を思い出してみると、美幸の言葉が続けられた。

「でもだからと言つてこれ以上の関係なんて有り得ないんだよ。教授も小学生の息子さんのこと大事にしてるし、……私のこと、好きになつてくれたけれど、私の願いも叶えてくれたけど、私は『家族』にはなれないし、それ以上にもなれない。彼は家族を一番守りたいしそこに居たいから、本当はこの関係、終わらせたかったんだよ。私もそれでいいと思った。だから、いいよつてすぐに言つてくれた」

それが多分、二人の間の事実の全てなのだろうが、祇園には理解できない世界である。

だが早海の声を思い出して、最後まで口を挟まず彼女の思いを口にさせていた。

その間に横たわっていたのは、純愛というものではないだろう。だからと言つて肉欲という一言でも片付けられない気が、祇園にはしていた。

最初は互いに抱いた、ほんの小さな憧れからだつたのではないか。落ち着いた中年への、逆に若くはきはきとした女性への。

互いのパートナーでは抱けない憧れは、余りにも甘美で、毒だと分かつていてももつと味わいたくなつた。そしてそれには不義の罪を伴うが、たつた一度しか人生なのに、どうして一生同じ人間に恋をしなくてはいけないのか、一生同じ人間としか生殖を行つてはいけないのかと、身勝手な言い分と動物的本能が働いたのかもしけなかつた。

ただし日本人の場合、「常識的に」「道徳的に」そこは理性で抑えないと、社会にも人们も認められないのであるが。

しかし一人は、その禁を犯した。

そして罪悪感と裏切りの事実だけを残し、その罪を最初から無かつたことにすると言つ。

確かに真実を森の家族に告げ、家庭が崩壊し裁判にでもなれば、二人は「加害者」にはなるであろう。しかし相手に馬鹿正直にこの事実を打ち明け、それにより子供を含めた家族を傷つけることも、また耐えられないことであつた。

だつたら秘密にしている方がよいのでは？

「何」が正しいのか、祇園には分からぬ。それはつきりしない

感覚はとても気分が悪いものであつたが、これは美幸と森が互いの幸せと、互いの大事な人の安寧を思つて決めたことなのだろう。

「渡には……まだ話すか決めてないんだけど」

それも、どちらがよいのか祇園には分からない。けじめをつけて彼とも別れた方がよいのか、話して彼に判断してもらつた方がよいのか、彼を苦しめない方がよいのか。

だがもしも、祇園が渡の立場だつたら。もし早海が彼女に言い寄りながら他の女もキープしていたら、彼を信じられなくなるな、と祇園は思った。

逆に「もしかしたら」と今度はそのことが心配になつてきて、彼女は益々落ち込んでしまった。

実際祇園は青井が好きだから、早海が誰と付き合おうと関係ない筈なのであるが、本気にさせようとしてるくせにそんなことでは、こちらも馬鹿にされたようで腹が立つというものである。

しかし、青井のことが好きでありながら、寂しいからと他の男に傾きかけている点で、祇園も美幸や妄想の中の悪い早海と変わりないのかもしぬれなかつた。

誰かに傍に居て欲しい、癒して欲しい、救つて欲しい、自分を常に一番に認めて欲しい。そんな欲求がある。

それが常に欲しいと、たつた一人の人以外にまで求めることがある。浅ましくも、今の幸せでは物足りないと。

その自己顯示の欲求は精神的にだけでなく、肉体的にも関係を結ばないと満たされないと、誰かを傷つけるのが分かつていても衝動に突き動かされる。

なんと醜い人の心の弱さだらうか。

答えの出ない問題に、祇園がひとまず落ち着こうと紅茶に口を付

けると、美幸が苦笑して問い掛けた。

「私のこと、軽蔑したでしょ。嫌いになつた？」

しかし、祇園は首を振った。美幸のしたことは罪なのだろうが、これも早海の言つたとおり、美幸は美幸であるので、「彼女」の人格そのものを否定する気はない。

「祇園は、優しいね」

美幸は泣きそうな顔をして笑つた。しかし涙は見せなかつた。森や、もしかしたら渡との別れ話にならうとも、彼女はきっと泣かないのだろうなと祇園は思つていた。

「優しくなんか　ない。きっと、私も、ずるいんだ」

祇園はぽつりと呟いた。頭の中ではずっと、早海のことばかりを思い出していた。初めて自分の身体に触れ、自分を求めたあの男のことが気になつていた。

それこそ彼に五年前から抱いている認めたくないような、不思議な感情の正体は未だ分からぬものの、本当に彼の言葉どおり大事にしてもらえるなら、寂しいし付き合つても　などと一瞬でも考えてしまつたことは、事実。

自分がこそ早海に失礼なことを考えているのかもしれない、と彼女は思つ。ただ早海の目的がもしも自分を苦しめることにあるならば、自分を騙して裏切ることもあるかもしれない　と、男性に対し慎重な祇園はそんな最悪の仮定さえ描いていたのだった。

そんな祇園の様子を見ていた美幸は、じそつと尋ねた。

「それって……早海くんのこと？」

「……」

祇園は黙つて俯いた。

「他に好きな人いるのに、付き合つの悪いなーって思つてるの……？」

美幸はその相手が青井だとは言わなかつたが、間違ひなく勘付い

ていることだわ。祇園が唇を噛んでいると美幸の笑い声が聞こえたので、顔を上げて彼女を見た。

「そんなそれこそ、祇園や早海くんに決まった相手がいるわけでもないなら、私なんかの問題と同じに考えなくていいんじゃない？」

祇園は気になくても大丈夫だつて」

その言葉に美幸と自分の恋愛経験の違いの差を感じたが、確かに家庭のある人間が絡んでいるわけでもなく、露花と付き合っている青井を寝取ろうとしたわけでもないので、そこまで潔癖に考えなくともいいのかかもしれない、と祇園は思い直した。

逆にそこまで頑なに考えるということは、ただ単に早海と付き合わなくて済むような言い訳を、自分が探しているだけなのかもしれない と考え思えてくる。

それこそ青井は、露花との仲のよさや、来年以降のことを考えても、いつかは諦めなくてはならない相手なのだ。だから早海と付き合いたくないという理由は、余程彼氏など要らないとか、早海が嫌いであるということがない限り、本来祇園にはない筈なのである。しかしやはり五年前のトラウマがネックとなり、自分が彼をどう想っているかについては、それ以上考えたくないと臆病な祇園は心を開ざすのであった。

ほんの少しずつ、彼のことを知りたいとは思い始めてきていたが

……。

・・・・・

結局美幸に、「祇園はこれからなんだから、頑張ってね！」と真剣に応援されることになってしまった。そして彼女は最後に、「嫌な気持ちにさせて、こんな私で、ごめん」

ともう一度謝罪してきた。

もう別れると決めた彼女たちに、祇園はこれ以上何も言えず、早海の過去のことも彼がああ言ってくれた以上、秘密にしておく。よつてこの件があつたからと言って、美幸と友人としての距離を置くつもりもないので、

「別に……いいよ……」

どうな垂れる彼女の肩に優しく手を置いた。

そうは言つても心に苦いものの残る一件であつたが、もうこの件は、もし今後何か起こっても森と美幸が解決することであり、祇園はただ忘れるしかないようであった。

時計が午前零時を刻む頃、家賃は安いが、駅から遠く不便な場所にある祇園のアパートから、美幸は車で帰つていった。夜通し話をしていくかと思つたが、流石に不倫相手と別れた今夜は、彼女もひとりで考えたいことがあるのか、祇園も引きとめはしなかつた。

そして一人きりになつた部屋の床に座り込み、彼女は考える。
先程描いた不安　もしも、早海にふたごころがあつたら、と。

祇園に言い寄るもの、彼女は彼のことをまだ何も知らなかつた。見てくれも人当たりも悪くないどころか、彼女が知つている男性の中でも上方の彼なのだ、既に付き合つていてる女性がいてもおかしくないだろうと考える。

第一、五年前から彼女は疑問に思つていたが、こんな愛想のない女にどうして優しくするのか、気があるふりをするのかが分からず、違和感がある。

もし自分に触れた彼に、ふたごころがあつたら　？それを想像すると祇園は胸がぎゅっと締め付けられるような恐さに囚われる。

自分自身は、別の男のことを考えながら早海に心を揺らしているのに。しかしそにはそうであつて欲しくないと思うのは、ただの我

が假か？それとも。

……もしかしたら、今、女の子と居たりするのかな？

祇園はふと嫌な仮定を抱き、やはり美幸の件で精神的に弱つていいからか、あっさりとその幻想に惑わされ不安に陥つた。そして彼女は心配以外にも、あんな告白をしてきた彼の「本気」具合を試そくという気分になつてきていた。

そこで「美幸のことを報告するんだ」といつ言い訳を盾に、祇園は思い切つて携帯電話を取り出してみる。

女がいないか確かめるなら、メールよりも電話がいい、と祇園は思った。しかし彼に電話を掛けることは初めてなので、妙に緊張してしまう。

既に零時を回っている。この時間でも友達なら電話やメールをやり取りすることもあるが、距離のある相手には失礼な時間帯ではある。

若干、その不安はあつたものの、普段は深夜バイトもしている早海である、普通の大学生ならまだ起きているだらうと祇園は判断し、登録してあつた彼の電話番号を初めて表示させた。

あの優しさは嘘なのか、本当に「自分」を見てくれているものか

祇園は何処か祈るように、電話のボタンを押した。

しばらくしてホール音が聞こえてきた。三回、五回……十回を超えても駄目だつたので、やはり女でも居るのではないかと、祇園がその疑念の暗雲に覆われそうになつた時、

『ビーしました？』

少し驚いたような、だが躊躇いもなければ慌てた様子もない落ち着いた早海の声が、受話器の向こうから聞こえたので、祇園はどうん、

と大きく胸を波打たせた後、ほーっとため息をついて床に置いてあ
つたクツショーンに身を投げ出したのであった。

第18話 Telephone Girl

とりあえず電話に出てくれたところでは、少なくとも自分からの電話が迷惑でなかつたり、いかがわしいことの最中ではなかつたのだろうと、祇園は思わず胸を撫で下ろしてしまつたが、それを素直に口にする気にはなれなかつた。

「えつと……今、いいの……？」

緊張しながら尋ねると、『いいですよ』とあっさり答えられてしまい拍子抜けすらしてしまつ。

「か、彼女とかそこに居るんじゃないの？」

聞きながらもしかしたら其処にそういう相手が居た方がよいのかかもしれない、と祇園は思った。居たら居たで嫌だと思うのだろうが、彼が自分に言い寄るのは「本気ではない」という証明が出来る。そうすれば彼を拒絶する理由ができるのでは と。

『……』

しかし早海は少し沈黙を置いた後、突然笑い出した。

「何笑つてんだよ！」

祇園はクッショングから身体を起し、それを殴りながら、電話越しにも関わらず早海を怒鳴りつける。

『もしかして、それ心配して電話してきただんですか？』

「」

次は祇園が黙つてしまつたが、

「そんなわけ、ないつづー！」

と深夜であるにも関わらず少々大声を出してしまい、慌てて口を閉じた。

確かに、もしかしたら早海にふたごいろがあるのでないかと疑つたのがこの電話の発端であるのは事実だが、そのように思われて彼にこれ以上弱味を握られたくなかった。

『ふーん。じゃ、なんでこんな夜中に電話してきたんですか？』

「……てゆうか、早海今、一人なの？」

『一人ですよ』

早海の質問に答える前に自分の疑問をはつきりさせたかった祇園であつたが、その答えに思わずまたほつとしそうになり、慌ててクツショーンをぼすぼすと呴いた。

「別に。い、今美幸と話し終わったから 森教授とは別れるつて！」

聞いておいてまた話題を変えると、祇園は早海に先程のことを見告した。

『……そーなんだ』

「うん……一人で決めたんだってや」

早海はまた『ふーん』と返事をした。今日彼に相談したから報告する、と言つこの電話の大義名分はこれであつさりと完結した。

それこそ美幸ともこの話はもう終わつたことであり、後は美幸と森との問題であるから、早海と祇園が話すことなど、これ以上何も無いのである。

「……」

会話が途切れ、奇妙な沈黙が流れてしまう。

どいか気まずい祇園は『あのー、』と早海が口を開いたとした瞬間、

「そんじゃあね！」

とあつさり電話を切つとした。しかしその直後、

『つてひでー！ もう切っちゃうんですねか？ つうか、電話代氣になるなら掛け直しますが

電話口で即座に抗議され、「あーもーつるわー」と祇園はこの口の減らない後輩に閉口してしまつ。

「別に、電話代はお互い様だから、こーんだけど…」

いちいち掛け直されていては、逆に気兼ねをしてしまひ……と考えた祇園だが、逆にこの先も電話を掛け合う予定があるのか?と自問自答してしまい、またクッシュションをばんばんと叩いた。

「でも、話すこと、ないし……」

そして自分を落ち着けるよつて、ゆつくりと言葉を吐いた。

『……そんじや、わつきのこと、もう一回聞いていいですか?』

すると電話口の向こうから、少し真面目なトーンになつた声が聞こえてきたので、祇園は思わず動きを止めた。

「わつきのつて……?」

『俺が、誰かと居るかと思つたの?』

その言葉に祇園は黙り込むと、相手の顔が見えないのに俯いてしまう。

『そーゆー風に見えるんだ』

そして呆れたような相手の物言いに、彼女は思わず顔を上げて言い返した。

「だつて、あんな、軽く言われたら、本当なのかなつて……私、なんかに……」

思わず正直に不安を口にしてしまい、しまつた、と祇園は口を覆う。

それを聞いた早海がふつと笑つた氣がした。その嘲笑にも聞こえる響きに、きっとまた彼は「あの表情」をしてくるのだろうと祇園に思わせた。そして、

『じゃあ真剣に、言い寄りましょーか?』

はいいいいー??

呴かれた彼の真剣な、と言つよつは挑発するような声に、祇園は再

びクッシュョンに頭を打ち付けてしまつ。

真剣に、言い寄るつて、そつなるじぢうなるんだ！？ つて
か何言つてんの！？ こいつ！

その低い声を聴いた瞬間、川原での出来事を再び思い出し、今傍
に彼が居たらきつとその続きをされていたのではないかと思つた。
彼女は真っ赤な顔をクッシュョンに叩きつけた。息苦しくなつてきた
が、どうにかこうにか祇園は言葉を搾り出す。

「い、いいです……」

思わず敬語になつてしまつた彼女に、また早海の明るい笑い声が
聞こえてきた。

『まあ、確かに。そんなことすると、祇園さん、恐がつて逃げてく
よつな気がするからやめときます。安心してください』

読まれているといふか、氣を使われているといふか……彼に子ども
も扱いされているのは自分の方ではないだらうか、と思いながらも、
祇園は早海の言葉に正直安心してしまつた。

そしてこれほど恐がりながらも、どうじてのよつて電話をした
り彼に近づこうとするのか、彼女は自分でもよく分からなかつた。
しかしあはり彼に迫られることが恐いと思つ限り、付き合つなど
とこう男女の関係までは遠そうだな……と彼女は考えていた。だが
真剣に言い寄られたら、どうなるのか と一瞬想像してしまい、
また一人で恥ずかしくなる。

そんな彼女に更に追い討ちをかけるように、早海は提案してきた。

『でも何かあつたわけじやなくてよかつたですよ。突然電話くるか
ら、驚きました。 そんな夜中に電話掛けてくるほど心配なら、
今からそつち行きましょうか？』

明るく軽い口調であつたが、きっと田は笑つていないのでない
か、と今までの彼の様子から、祇園はふとそんな気がした。

「そ、それもいい。やめとく……」

この状態で、そんな彼が家に来たら。深夜に男女で、しかも家中で一人きりになつたら。流石に祇園もそこまでは無用心ではなかつた。いくら容姿に自信はなくとも。

それなのに、このような電波を通した声が、どこか無機質な感じがして物足りなさを覚えていた。

『そりや残念』

しかし早海は先程の宣言どおり、無理には口説かないことにしたらしく電話の向こうで苦笑したようだつた。

そんな話をしながら、こんな時間に電話して、確かにまるで恋人同士みたいだな……と祇園は予想外の変な気分になつてきていた。それを誤魔化すように彼女は必死に叫ぶ。

「だから美幸のこと話したかつただけ！ 今日、話聞いてもらつたし！」

早海はまた、『ふううーーーん』とからかうような間延びした返事をする。その返事が何かを見透かしているようで恥ずかしく、祇園は「今度こそ、じやあね！」と電話を切ろうとしたが、早海はそれを遮るように口を開き、

『で、来週の誕生日は祝つてもらえるんですか？』

美幸の件に片がついたと判断したのか、またそれを引っ張り出していく。

「！？」

時間は深夜零時半。恥ずかしさにもう電話を切りたいと思つた祇園は、そうだ、電話を切りたいからだ、と自分の心に言い聞かせ、

「か、考えとく！」

と断る時の常套句とも、逆に肯定ともとれる言葉を口にするとい、電話を一方的に切つたのだった。

閉じた携帯電話をクッショーンの上に投げ出し、祇園まどりと疲れたようなため息をつく。遅くなってしまったが、さつさとシャワーを浴びて寝ようと思った。

電話越しの声だが耳元で囁かれ、何故か身体の一部が充血していった。

とりあえず、彼女らしき存在はない、と信じていのだろうか。本気で、自分に言い寄るうとしているのだろうか……。

そう思ふと、彼女の鼓動がとくんとくんと速くなる。今日食べたあんみつプリンチョコレートパフェよりも甘く美味しいものがじわりと胸に広がり、それを何度も蘇らせ、味わおうとしている自分が居る。

こんな経験は初めてなのだが、これに身を任せてもいいものかどうか、祇園には分からなかつた。

それでもまだ、「騙されてるわけじゃないよね?」と頼りないところもある父親と一緒に生きてきた祇園としては、どうしても慎重になつてしまつ。

しかし夜中の電話に応じてくれたり、何かあればいつでも駆けつけると言つてくれそうな男性が居るところは、ひとりぼっちの彼女にとつては力強いことであった。

そのうえ、表面的な印象でしかないが早海は決して不真面目ではないし、责任感もある方だと働きぶりを見ていて思う。そして祇園のことも誰のことも彼の物差しでは責めず、感情的に怒ることもない（時々いやらしくはなるけれど）。

祇園の中での彼は、「信頼できる男」と評価されつづつあった。

この電話番号をお守り代わりにしてよいものか、やはり信じてはいけないのか。彼女は未だ、迷っていた。
恐かったのだ。

父親も仕事で忙しく、家庭をひとりで切り盛りしてきた少女時代。そして今まで、父親の援助は遠くから受けながらも、一人でどうにか生きている。

それに差し伸べられる大きな手を、弱い心は取りたくなってしまっている。それに縋ることが、誰か一人の存在を信じ、頼りにすることが　彼女は恐かったのだ。

祇園はやるせないと、妙に火照る身体を洗い流そうと、重い身体を起こして風呂場へと向かつた。

余りにも色々なことがあった、長い長い一日がようやく終わった

……。

次の日は一限からの講義であったので、祇園は朝食も食べずにぎりぎりまで眠っていた。講義は空腹のままどうにか受け、昼食は美幸や学科の友人共に生協食堂へと向かう。

他の友人も居る手前、彼女は昨日のことが無かつたかのように祇園に接し、祇園もいつものように彼女に笑いかけようと努めた。

そして食堂では、昨日の出来事があつたので思わず「彼」が居ないかな、と彼女は探してしまった。理学部棟では青井を探すことが日課であつたが、いつの間にか此処では「彼」を探すようになってしまっていた。

しかし見当たらず、祇園が少々がっかりしながら食事を貰いにカウンターに立つと、カウンター越しに、タオルを頭に巻いたいつものエプロン姿の青年が笑顔で現れた。

驚いている彼女と眼が合い、彼　早海は笑いかけてくる。

昨夜の電話で、顔も見えないのに傍に居るように感じられた、あ

の存在感のある声を思て出してしまって、祇園は早海の顔がどうも見られずにいた。

「それで誕……」「…

からかうつもりなのか、いきなり早海が公衆の面前でそんな言葉を口にしたので祇園は、

「だあーーーーー！」

と奇声を上げ、美幸や顔馴染みとなつた学科の女性陣は、「あらあらどうしたの？」「

と祇園と早海を見比べる。

自分は何をやつてゐんだ、どうなりたいんだ、と訳がわからないまま、そして少しずつ答えが見えてくるような気がする中、祇園は今日も胸をどきどきさせて、味のよくわからぬご飯を食むのであった。

第19話 筒の葉、せりや

時は流れ、早海の誕生日まであと二日と迫ってしまったのだが、祇園はほとほと困っていた。

確かに徐々に気になる存在にはなってきているが、ただ自分に言い寄るから気になるだけだろうと、彼女は頑なに思い続けており、それ以上考えようとはしなかった。

だから、そんな相手と誕生日を一緒に過ごすことにはかなり抵抗があつたのだ。

しかし残念ながら七日の夜にアルバイトの予定はない。無理矢理予定を入れればよいのだが、何故か入れることも出来ずに居た。

さてどうしたものか……と祇園は実験室で考える。怪しそうな色と匂いの液体をガスバーナーで煮沸させ、もつひとつつの謎の液体に注ぎ、ぽんつという爆発音を立てその煙や音を調べるという。何かの爆薬にでも使うのだろうか、という恐ろしい作業を斯波の指示通り行つてはいるのだが、今日の彼女は突つ込むこともせずに悩んでいた。

一人きりで七夕の、彼の誕生日の夜を過ごすなどと、なんと恥ずかしいことだろうか。

七夕が誕生日だなんて、田のキラキラした、奴らしいなと中学生の時に思ったことを祇園は思い出した。

でも七夕なんて一年に一度恋人が会うとかいやらしい日なんだからロマンティックでもなんでもない、と心の中で毒づいた時、彼女は何かを思いついた。

そして勢いよく机に手をついて立ち上ると、謎の液体が実験室の机に飛び散り、そこがじゅわっと音を立てて溶けていくことも気にも留めず、用の済んだバーナーの火を止めて、斯波研究室に駆け込

んだ。

今日は光も弥栄も揃っている。相変わらずそれぞれに好きなことをやっているマイペースな彼らに祇園は、「ちょっと…聞いて…」と突然提案をした。

・・・・・

そして七夕当日がやってきた。

再び来ってきた祇園が、「分かった。祝つてやる」と突然言い出して来たことに、早海は驚いていた。しかし彼女があっさり承諾したことと、呼び出された先が理学部棟前であることに、彼は既に嫌な予感がしていた。

「ほんとーに祝つてくれるんですかー？」

まだ外は薄明るい夜七時。理学部棟の階段を昇りながら、不審そうな声を発する早海の前を歩く祇園は、「ああ」と短く答えた。

一人が着いた先はやはり、斯波研究室。

祇園がドアを開けるとそこには、狭い研究室に小さめの笹竹が置かれており、

「よくわからんねえけど、たんじょーびおめでとー！」

と光や斯波がビールを片手に既に出来上がっていた。笹の下では弥栄が未だに飾り付けを行つており、美幸までもがビールを手にその輪に加わっている。

「喜べ、祝つてやろー」

と祇園は偉そうに後輩の彼にそう言つたのだが、早海は珍しく引きつった笑顔で、言葉を失つて彼女を見下ろした。

「『ゼミ長』

弥栄が祇園に声を掛け、用意しておいた短冊を渡す。

「ほい、プレゼント」

祇園は更にその短冊を早海に渡した。

「願い事、全部書いていいから。この笹一つ分、早海のものだよ

「……」

たとえひくついていても笑顔は崩さない早海であったが、彼を見上げていた祇園は思わずやりと微笑んでしまった。

珍しく、そして今までの分　　、彼女は「してやつたり」という気分になっていた。

・・・・・

今は斯波研を卒業した上級生たちが、実は昨年も七夕に乗じた飲み会をしていたので、祇園はそれを思い出したのであった。

大学の裏庭にあつた笹を少々拝借し、細かい作業が好きで子供の遊びに詳しい弥栄に飾りの準備を頼み、光にビールを手配させ、面白そうだと興味を示した美幸と一緒につまみを用意すれば、「簡易七夕祭り」の完成である。

一体何で祇園がそんなことを指示してきたのか分からぬままノリで準備をしてきた面々であつたが、ビールを開けてからようやく事情を理解したらしい。最早斯波研メンバーと化している早海に、とりあえずビールと短冊用のペンを渡し、

「兄ちゃんも難儀だなあ……」

と光は同情したように呟いた。

「まつたくです」

早海も大きく頷くと、やけくそのようにビールを開け、用意された短冊の前でペンを握った。

「つうか、ゼミ長ひでえよー」

光がそう言いながら、祇園を横目で見ると、「同意」と書かれた

に弥栄や美幸が彼女を横目で見て頷いている。

……な、なんで私が悪者にならなきゃいけないんだよー！

その冷たい視線を浴びながら、してやつたりと思っていた筈が祇園は居心地悪くなってしまう。しかし、一人きりは嫌だと思うもの、他に用事を作るなりして拒絶することもしなかったのは事実である。

この前、パフェを奢つてもらつて話を聞いてもらつたからだ。
祇園はその貸しを返したいだけだ、だからこいつするしが一番いいことだと自分に言い聞かせて今日に至つた。

しかし斯波研の面々からはダメ出しのブーリングを受けてしまい、客観的に考えれば、早海が自分のことを本気で好きだった場合、確かに酷いよな、と彼女は自分でも思つた。だが「彼」という人間自体は信頼していても、彼の自分への気持ちが信じきれていないので、二人きりになることはやはり恐いのである。

そのくせ交際するかしないかの返事を先延ばしにして、このようなことをしているのも中途半端である。

……確かに、私つてひどいのかもしね……。

そう思つた祇園は罪悪感に胸をズキズキさせながら、誤魔化すようにビールを煽る。あつさりと皆と馴染んで話している早海を睨みながら、そもそもこんな風にいきなり言い寄つてきたこいつが悪いんだと、祇園はとりあえずハッ当たりのよつに彼自身の所為にしていた。

その視線に気付いたように早海が突然振り返つたので、祇園はど

きつとしてビールを呑そうになつてしまひ。しかし彼の口からは、そこでとんでもない言葉が出てきたのだった。

「じゃあ、そこまで言つなら、この短冊に、全部祇園さん絡みの願い事書いてもいいわけですね？」

そこで彼はいつもの笑みに変わり、と言つてもどこか悪意のある意地悪そうな笑みであつたが、それを浮かべて、遂に逆襲に出てきた。

「祇園さんとケツコンしたいとか子供は三人がいいとか、祇園さん可愛いとかむしろ今すぐ子供欲しきれども！」

祇園は持っていたビールを手放す（それを弥栄が受け止める）と、早海の減らず口を止めるべく、セクハラ発言を書こうとした短冊とペンを一気に取り上げた。

「えー。全部俺が書いてもいいって言つたじゃないですかー」

「そーゆーのは、ダメっー！」

口を尖らせる早海と顔を赤くする祇園の言い合いを外野は尻目に、「なんだかアツいねー」

「窓開けよっかー」

と呆れたように動き始め斯波はと言えば、「じゃあ後は若い者で楽しんでねー」と戸締りを頼んで帰つていった。

「つてまあ、俺ばかり書いても仕方ないですし。皆さんで書けばいいんじゃないですか？」

しばし仕返しに祇園を苛めていた早海であったが、やがて本当にいつもの笑顔に戻ると祇園の手から短冊とペンを取り戻してそう提案した。

短冊は確かに十枚以上あつたので、それもさうかと早海に短冊を渡された面々は、童心に戻つて何事が書くことにしたらしい。

「はい」と祇園もにっこりと笑つた早海に短冊を渡された。結局彼のペースに乗せられてしまつたな……と彼女は彼を上目遣いで睨みながら内心悔しく思つていた。

それにしても、と祇園は短冊に視線を移す。

願い事……とは言つが、一体、今の自分が願うことは何なのだろうか。

少し前ならば、彼女もこんな風に迷いはしなかつただろう。適当に勉強して、卒業して、就職して。こんな風に仲間とも遊び、密かに恋もし、その相手に少しでも会えたらいなとそれくらいのことしか望んでいなかつた。このように深い関係を求める相手が現れるとは、彼女は思つていなかつたのだ。

そうなつた今、自分は何を望むのか。

祇園がもう一度、自分をここまで悩ませておいて呑氣に笑つている早海を横目で睨んだ時、

「なんか賑やかだなー」

と聞き慣れた声が突然したので、その胸がどきんと高鳴つた。卒業研究の為にこの時間まで残つていたのだろうか。振り向けばそこに、青井と露花の姿があつた。

「今年もやつてんのかよ」

苦笑する青井に、光がビールを差し出そうとし、「今日は車だからいや」と彼はやんわり断つたが、美幸に渡された短冊とペンは受け取つた二人。

「卒研終わりますようこつて書いてとか」

就職も決まつている彼は、そう言つて露花と笑い合つている。

そんな一人をじいつと見ていた祇園であつたが青井が、「で、結局斯波研入つたの?」と早海に笑いかけたので、自然とそちらの方へと視線を移動させた。

「いや、バイト忙しいんで、やめときますよ」

首を振る彼を、祇園はぼんやりと眺めていた。青井たちの仲睦まじい姿を見ると、やはり何処か寂しい気持ちはあるが、以前と比べて心が恐ろしいほど落ち着いている。

それは以前感じたあの、女としての「優越感」によるものだらうか。

そんな祇園の視線に気付いたよう、「早海は彼女を振り返った。楽しげな喧騒の中、ふと視線を交わした一人だが、祇園は彼のその視線が全てを見透かしているような気がして、落ち着かないように眼を逸らしたのであつた。

一時間ほどして食べ物も尽き、宴を終わりにすることにした。光はこれから店の七夕イベントに行つてくる、といかがわしい店のアルバイトへと出かけていった。

発起人の祇園は、美幸と二人で茶碗などを片付けていた。実験室のシンクで残った飲み物を流しながら、ふと美幸に問い合わせる。

「……渡くんの方はいいの？」

七夕だからと言ってデートをするカップルも居ないだろうが、それこそカップル向けのイベントを行つている店もあるのだし、自分達と過ごしていくいいのだろうか、という意味で祇園は若干心配になつたのであつた。しかし、

「うふ……。やっぱね、じぱり距離を置くことにした」

手を止めて少し哀しそうに笑いながら美幸は言った。

「……」

「全部、話しちゃつた」

絶句している祇園に向けて、彼女は苦笑した。その内容は、森との関係に決まつてゐるだろう。

「別れるの……？」

声を潜めて祇園が尋ねると、美幸は首を傾げる。

「さあ。 そつなるかもしないけど、今は気持ちが整理出来ないから、しばらく距離を置きたいって言われたよ。 …… さつさと別れちゃえばいいのにね、こんなことしたんだから」

彼女はそう言って自嘲的に笑う。

美幸が彼に全てを話したのは、彼女なりのけじめや、謝ることも出来ない森の家族への罪滅ぼしのつもりなのだろうか、と祇園は想像していた。

それは美幸と渡が決める事なので、祇園には何も言えないし言つてもないが、このように切つても切れない、常に誰かを求めてしまうという「男女の業」というものをその言葉からなんとなく感じていた。

そしてそれは、片想いの相手から、自分を求めてくれる相手へと心が傾いてしまっている祇園自身にも繋がる言葉のよつた気がしていた。

第20話 ねがい」と

祇園が実験室から廊下に出ると、結局、笹の処分をすることになつてしまつた早海が、それを肩に乗せ廊下の壁に凭れて立つていた。

「そんじゃ、帰りますか」

「……って、何普通に言つてんだよ…」

祇園は思わず突つ込んでしまう。しかし彼女が一緒に帰ろうと当てにしていた美幸は、

「私、弥栄くんと帰るからー」

研究室の中にいた大柄な彼の元へと、駆け寄つていつてしまつではないか。

言われてみれば美幸と祇園の家は反対方向である。恋人の渡とは距離を置くという彼女もまた、今日は酒を飲んでしまつた以上車には乗れないでの、誰かが送つて欲しいのだが。

そして美幸同様、弥栄も祇園たちの邪魔はしてはならないと決めているらしく、彼も大人しくそれに合わせて頷いた。

「結局、俺がこれの処分するんですよー？」

早海はそう言うと、先に歩き出した。

「つて、それ早海への誕生日プレゼントなんだよ！ それゴミ箱とかに捨てるなよ。川に流すと願い事叶うんだぞ！」

「何ですか、その不法投棄」

七夕は日本の風流なお祭りで、発案した張本人の祇園にはこだわりがあった。勿論、酔つた勢いで言つているというのもあるが、七夕飾りを捨てそうな早海を彼女は思わず追いかけてしまい、「じゃあねー」と美幸たちが後ろから手を振つてきた。

戸締りは弥栄に任せ、祇園も仕方なく二人に手を振つた。ここでごねてもまた話がややこしくなるだけだと思ったからだ。

家を知られたくないなら、家の近くまでにしてもらえばいいだろ

う……きっとこれも酔っているから寛大になっているに違いない、と自身の心に言い聞かせながら、祇園は行きとは逆に早海を追いかながら階段を下りた。

ともあれ、理学部棟の外に出たところで早海はほっとしたように言った。

「やつと、一人になれた」

「

笛を肩にして星空を見上げた早海を、祇園はぐっと押し黙つて見上げる。

「これくらいのメリットがなければ、誕生日の上に、わざわざバイト休んだ俺が可哀想でしょうが」

自分で言うなよ！と祇園は思ったが、確かに美幸や弥栄も早海を可哀想に思つたので、最後は一人きりにしたのだろうか。皆で七夕祭りだなんだと言つても、最後にこうなることは予想出来なかつたわけではないので、結局自分の所為なのかと祇園は反論する気も失せ、彼の少し後ろを歩いていた。

「川に流すなら、夜のうちにこいつそり行きますか。不法投棄ですかね」「うつさいよ……」

多少寄り道すれば、大きめの支流が近くにあつた。整備がされているので人も降りやすく、かと言つて車では入れないので変な若者もいないうどうと思われる。サンダルの音を立てながら、祇園は早海の背中を追いかけた。

五年前の彼の誕生日は、図書室でにこにこと笑つて教えられただけであるのに、まさか五年後にこんな状況になるとは思つてもみなかつた。

第一、全てを捨てて昔住んでいた場所から消えたつもりの祇園はどうして違う県まで来て、違う土地で、青年になつたこの男と共に

過ごしてこのだらうかと、夜のじじまの中、不思議な気持ちに包まれていく。

やがて彼女は沈黙に耐え切れず口を開いた。

「結局、早海は願い事書いたの？」

「えー？」

早海は筆を担ぎ、前を見たまま首を傾げた。

結局、斯波研の皆で童心（？）に戻り、「サマージャンボ当たりますよ！」、「アート料賃上げ」、「新しい水着欲しい」、「ヤマナカ食堂復活して！」「ラーメン食べたい」「阪×優勝」「地質学Aの単位もらいますよ！」……と名々やけに現実的だったり、意味不明なことを書きなぐつて、七夕飾りに括りつけていた。

露花は卒業研究が無事に終わるよう願い事を書き、青井は笑つているだけで何も書かなかつた。

安上がりな誕生日プレゼントであるが、祇園は早海のことが決して嫌いなわけではない。願いがあるなら叶えればよいと思つてゐる。ただし、その実現に自分は関与するとは思つていながら。

しかし早海は、その質問を短く笑い飛ばした。

「書けるわけねーじゃん」

「……」

その言葉の真意が分からず、祇園は斜め後ろから彼の横顔を見上げた。

「まあ、ここに掛かってる皆そつだらうけど……ホントに叶つて欲しいことなんか、普通、皆の前で書けるわけないでしょ？」

苦笑しながら祇園を見下ろす彼に、彼女は黙つて俯いた。

「祇園さんは、書いたんですか？」

その質問に彼女は首を横に振つたが、「ほら、やつぱり」と

早海が言おうとしたのを察し、彼が口を開く前に訂正した。

「願い事なんか、ないから」「

そうだ。青井はもう諦めなくてはならない相手。だから願い事など自分には 、ない。

第一、願うことなど疾うの昔に彼女はやめていた。
四年で卒業したい、就職したいといつ望みはあるが、それは職を選ばなければ、自分の努力次第でどうにでも出来ることがだと祇園は思っていた。あえて言えば、「家内安全、健康第一」くらいであるが、そういうこととはあえて書く気にはならない。

「ふーん、ないんだ」「

しかし早海が不服そうに言い返していくので、彼女は戸惑つてしまつた。

「な、なんで？ 問題あるの？」

「……べつに」

また少し不機嫌になつてしまつた後輩に振り回され、祇園は手を焼いてしまう。しかしどうでもいい相手ならば、不機嫌にならうとも困りはしない筈だから、困つてしまつといふことは、やはり自分は相手が気になつているのだろう、とこつそりため息をつく。

そうは言つても早海は、怒つて何処かへ行つてしまつわけでもなく隣を歩いていたので、祇園も再び黙つてその隣を歩いた。

願い事など、ないのだ。隣を歩くこの相手にも、何も望まない。

祇園は改めて心の中でさう言い聞かせた。

五年前の卒業直前の時、「もしかしたら」この少年 今は青年だが のことを好きなのではないかと言われ、何かが彼女の中であがりそうになった。

それを懸命に否定しようと、彼女はその言葉と少年のこと話を

た。そして、それを偶然早海本人に聞かれてしまったが、そのままフォローすることなく、少女は逃げるようにならの土地を去つた。

それでも彼は、孤独で卑怯な少女 だつた女に、その手を再び差し伸べた。今度は子供の小さな手ではなく、大きな頼れる手で。更にして、そんな祇園が何故か突然思い出すのは、亡くなつた優しい母親のこと。

本当は、私は……。

心の奥で囁くその声を、祇園はまた必死で否定する。それを認めることができがどうしても恐かった。

何も求めない、何も望まない、何も願わない。ただひつそりと一人で静かに生きていければよい。

しかしこの青年はどうしてか彼女に優しくしてくれ、彼女を求めてくれるので、いつそそれに縋り付こうかどうしようかと、祇園の心は揺れている。だが、それを願つてしまわなければ、期待して裏切られ、辛くなることもないのだ。

もしかしたら、願いを持たないでいること それが自分の願いなのかもしないな、と祇園は思った。

では、早海の願いは何なのだろうか？ 祇園はまた会話が無くなつたので尋ねてみるとした。

「じゃあ、早海の此処に書けない願い事つて、何……？」

早海は祇園を振り向くと、少し間を置いて苦笑した。

「内緒です」

「どうして？」

祇園は己の本心は語らない割に、彼への疑問を口にする。

「かつこ悪いから言いません」

「なんなんだよ、それは……」

言つている意味が分からず祇園はため息をついた。

しかし陰の部分はあるものの、基本的に前向きなこの青年は、自分とは違つて何か望むことがあるからこそ、こうして様々なところで頑張つているのだろうと何処となく理解できた。そして自分に言い寄つてしていることが、彼の「願い」に関係しているかどうか、彼女には分からぬ。

結局彼のことを知りたいと思つても、最後の真意は未だに教えてもらえないのであるから、やはりどうしてよいか分からぬまま終わつてしまつた。

また何か妙な間になつてしまつたが、しばらく歩いたところで、川原に到着した。先月巡検で訪れた川よりは狭いが、流量はそれなりにある。この小さな飾りなら流すことも出来るだろう。

「でも早海の願い事書いてないなら、流しても意味なかつたじゃんね」

堤防に作られた階段を下りながら、祇園は少し申し訳なさそうに言った。

「心の中で願いながら流しますよ。それに」

「それに？」と祇園は尋ね返したが、彼はそこで言葉を区切つてしまい、彼女の前を歩いてるのでその表情も見えなかつた。

所詮七夕と言つてもお遊びであるが、最後の儀式として不法投棄でごめんなさい、と思いながら笹飾りを川へ流した。

それは浮いた沈んだり、引っかかつたりを繰り返し、梅雨で昨日まで雨が降り、流量が多くなつていて川を下降していつた。

「終わつたね……」

祇園はぽつりと呟いた。見上げると、明るい零等星が空にあつた。そこから視線で、夏の大三角形をなぞる。

先程までの楽しい宴からぼんやりと抜けたように川原に立つていた二人であったが、やがて水の音を聞いていた祇園は、川原の様相は違うものの先日の巡査で起きた出来事をふと思い出してしまい、

「帰るつか」

と慌てて踵を返した。

しかし、彼女に向けて突如として低くなつた声が掛かる。

「じゃあ、誕生日プレゼント結局あげてないつて思うなら」

嫌な予感に祇園はぎくりとしたが、その細い腕はあつという間に

早海に捕らえられた。

「俺の願い、今此処で、叶えてもらいましょうか」

彼は顔を近づけ、そう囁く。彼女は小さな橋の下へと彼に腕を引かれると、その背中を堤防に押し付けられた。

流すところを見られないようあえて大きな橋の下ではなく、小さな人の余り通らないような橋の下で、かつ車も入れない場所を選んでしまつたのだ。

予想出来ないことではなかつたのに。

しまつた！と祇園は思つたが、最早後の祭り。

だが不思議なことに、こんな状況であるにも関わらず、「襲われる」という恐怖は、何故か殆どと言つていいくほど祇園にはなかつた。それは一度変なことをされそうになつたから、だけの理由ではない。早海のこの行為が、己の意思に反し、強引に己を傷つけるものではない、と祇園自身が何処かで知つてゐるからであつた。

女性の一人暮らしということもあり、彼女は今まで慎重に生きてきた。それくらい警戒心の強い彼女が、本当は避けようと思えばいくらでも早海を避けられたのに、こんな夜にも関わらず、彼に従つたのは。

深層心理では、自分が、これを望んでいたからだつた。

理性では彼との関係を否定しようとしているのに、祇園は自分で驚くほどの状況を受け入れていた。

そして祇園はそんな自分自身に愕然としながら、真剣な顔で彼女を見つめ、その顔をゆっくりと近づけて来た早海を言葉もなく凝視していた。

第21話 何かが変わる夜

好きな人がいた筈だつた。

祇園はそう思つていた。それがいつの間にか過去形になつていて了。

もしかしたら、早海は本当は自分を騙そうとしているのかも知れない。

もしかしたら、早海は本当は自分が好きなのかかもしれない。
前者の「もしかしたら」でわざと不安を膨らますことで、後者の「もしかしたら」が膨らみそうになることを彼女は懸命に抑えていた。

あるひとつの中から、それだけはあつてはならないと、五年前から頑なに彼と自分の間に恋愛があるということを拒んでいたからであった。

しかし、触れてしまえばそつした理性など関係なく、全てが壊れる。そして積み重ねてきた自制が溶けるよつに無効になり本能が優先され、ただの男と女になつてしまつ。

もしも本当に相手が嫌いだつたり、行為自体にトラウマがあれば、拒絶反応を示す筈だつた。しかし彼女に、その行為への嫌悪感はない。

これは流れているのだろうか、それとも口が望んだことなのだろうか。

祇園は身動きもとれず、相手の深く暗い眼に魅入られたように、この先は未経験となる空氣に身を任せてしまつっていた。

唇が再び重なつた。

しばし静かに押し付けられていたが、それを割つて彼の舌が祇園の口内に侵入していく。

初めてのそれは、彼女にとつて決して気持ちのよい感触のものではなく、生暖かい唾液が混ざることに違和感もあつたが、逃げるそれを彼の舌は追い求め、執拗に絡めてくる。

そしてやはり、この捕食されているような「襲われている」という状況は初めてのことだというのもあり、祇園に恐怖を感じさせた。しかし何かに縋りつきたくとも、手首を握られそれを顔の横で押さえられているので、どうすることも出来ず、もどかしい。身体の中央が痺れて立つていられないが、腕を押さえられている以上、力が抜けてもその姿勢を維持せねばならず、堤防に凭れるところで辛うじて身体を支えている。

荒い息遣いで口を曇る早海が一体何を考えているのか、祇園には分からなかつた。

結局暗がりでその表情の細かい変化までよく見えない。彼女もまた、諦めるようつきゅっと目を閉じた。

彼のことをどう思えばいいのか、自分はどうすればよいのか、されるがままになつていたが、どのくらい経つた後か　その唇は解放された。

祇園は、はあ、とため息をついて早海と至近距離で言葉も無く見詰め合つ。

彼は子供の頃からいつも笑顔で、口数多く明るく喋つていいくせに、こういう時は凄く恐い表情に変わり、そして驚くほど無口になるんだな、と祇園は思つていた。それは彼の中の陰と陽のうち、今は陰の部分に支配されているからだろうと、そこまでは彼女にも理解できた。

ただし、その陰の感情の基が何であるのか。憎悪なのか欲望なのか、それ以外のものなのか、自分に向けられているものの正体

が祇園には掴めていなかつた。

手首を押さえていた早海の手が離れる。祇園はほつとしたようこそ手を下ろした。しかし、

「や、やだ……っ

離れた両手がそのまま下降し、「己の胸に触れてきたので、彼女は思わず悲鳴を上げた。

だが大声を上げることすら、恐くて出来なかつた。それなのに泣き叫んで抵抗し、逃げ出そうとも思えなかつた。

「己の眼を見据える早海と見つめ合いながら、祇園はTシャツと下着の上からその胸をゆっくりと揉まれていた。

生まれて初めて男に触れられ、彼女の呼吸も荒くなる。

こんなことをする彼の本心を聞き出そうとしたが、今は思考が働かない。ただ緊張に壊れそうなほど胸が高鳴つっていた。

そして祇園は今度こそ立つていることが出来なくなり、そして追い詰められているので逃げることも出来ず、背中を堤防のコンクリートに擦りながら地面に座り込む。早海も一緒に片膝を立てて腰を落としたものの、小さく口を開けて呼吸を逃がしていた祇園の顔をじっと見つめたまま、その手を動かし続けていた。

犯されている。

彼女の頭の中が、そう思つことでぼうつと痺れてくる。

やがて早海の手は彼女のTシャツの中に入り、その滑らかな肌に直接触れてきた。

大きく暖かな掌に愛撫され、背筋がぞくぞくとしてくる。これが感じるということだろうか……と思っていた祇園であつたが、程なく下着が上にずらされ、現われた乳房に服の中で直接触れられてしまった。

「 つ！」

恐くて恥ずかしい。それなのに、この先に何があるのかが好奇心で気になってしまい、止まる事が出来ない。

祇園は何も言えずにただ首を振つたが、はっきりと拒絶の姿勢も見せてはいないので、早海の指は止まることなく、彼女のその膨らみの頂点を捉えてきた。びくん、と身体が弓なりに反り、そしてその薄い唇からは悲鳴に似た、しかしたまらないような声が漏れてしまった。

祇園はそのまま彼女の眼を見据えながら、反応を観察するように彼女を甚振り続けた。

その都度祇園は身体を揺らし続け、漏れる声を掌の中に収めるよう懸命に堪える。勿論恥ずかしいからというものもあつたが、外でこのような行為をしていて誰かに声を聞かれてはならない、という理由もあつた。

「このよつな場所でも抵抗できず行為に翻弄されている、己のふしだらな一面を恨みたくなるが、家に早海を連れて行き、ベッドの上で最後までセックスをしてしまつ流れになることはもつと抵抗があつた。

それなのに初めての快感に止まることが出来ない。祇園は恥ずかしさに涙目になりながら、早海の方をちらりと見たが、逆に彼の真剣な眼差に困つてしまい視線を下に向けた。

「 家、行く？」

其処で早海が初めて口を開き、低く、熱を持った声で、案の定と言つたことを提案してきた。

祇園は必死で首を横に振る。しかしそれでは、外で「ううう」とがしたいのかと誤解されると思ったので、口を覆つていた手を外して、彼女もまた久しぶりにどうにか言葉を紡いだ。

「 するの、こわい……」

もう二十歳にもなり、周囲には経験している女性が殆どだと言う

のに、自分でも子供みたいなことを言つてゐるな、と祇園は情けなくなつた。

しかしもしも彼が本当に自分と恋人関係になりたいと思つてゐるならば、自分の意思は伝えないと対等な関係になれないだろうと思つたのだ。そして早海が本当に自分を騙そうとするのではなく、大切に思つてくれるならば、性欲だけで自分を無理矢理傷つける行為はしないだらうと思い、そうしてくれないならば、彼のことばは軽蔑し拒絶しようと彼女は決めていた。

何より、彼の全てがまだ分かっていない。そうである内は、完全に信頼はおけず結ばれることも恐かつた。

それでもこの「えられる女としての快感に、祇園の身体は身悶え、もつと味わいたいと思つてしまつてゐる。その間で葛藤していた。

しかし早海は、またいつものようにふつと優しく笑うとその手を祇園の胸から離した。

「分かりました」

その言葉に祇園はほつとしてしまうと同時に、余りにあっさりとした返事に意外なような、少しだけ残念なような気もして、自分でも訳が分からなくなっていた。

しかし早海は祇園の方に今一歩膝を進めると、彼女の耳元で囁いた。

「徐々に、慣れてけばいいから」

その言葉の指し示す意味を考え、思わず期待に胸が震えてしまつた。そんな自分に益々嫌気が差しそうになる。

そしてその言葉を実践するように、彼の指は今度は力の抜けきつた彼女の下半身へと伸びた。座り込んでいる彼女の、僅かに開いた脚の間をその指は進み、湿り気を帯びた熱い局部を下着の上からついつとなぞる。

最も疼いていた場所への刺激に、祇園は短い悲鳴を上げると身を

跳ねさせた。しかし彼は熟れたその場所を愛でる指を止めはしない。

もう、ダメだ……！

何かに陥落してしまったことを、彼女は悟り、観念した。再び手で口を押さえ、堪えながら悶える。

セックスは恐いからしたくない、しかしこの好いモノはもっと欲しいと彼女は思っていた。

もしかしたら彼は、この悦びを己に教え込んで、最終的に性行為をしようとしているのだろうか。

それは彼の性欲を叶える為だろうか。しかしこんな回りくどい方法で、自分の方だけが快感を得て、それで早海は楽しいのだろうか。

祇園には早海のことが全く理解出来なかつたが、最初の口付けの時からずっと主張をしていたその場所は、ようやく求めていたことを叶えられたというように浅ましい歓喜の音を立てる。

最早流されているのか、それとも自分で望んでいるのか。感情は何も整理されていないのに、身体だけを彼に任せてしまう。この感覚が「何」であるのか、正常な思考が出来なくなってしまった彼女には説明が出来なかつた。

しかし彼により「女」として完全に目覚めさせられる前に、
祇園は「現実」に引き戻されてしまったのであつた。

突然鳴り響いた、彼女のポケットの中の携帯電話の着信音。悶えていた祇園も、攻めていた早海も思わず動きを止めた。

「また、ですか」

早海は苦笑した。それは先日とは別の、有名時代劇の着信メロディだつた……。

「出な、さや」

そう言つと彼女は携帯電話を取り出そうとしたが、早海はそれを妨げるよつに敏感な場所に指を強く押し付けてくる。

「やめて……っ！」

祇園は早海の引き締まつた腕に手を添えて、その悪戯を止めようとしたが、その腕はやはりびくともしなかつた。

顔を赤くして首を横に振つてゐるが、そのうちに携帯電話は鳴り止んだ。一瞬、ほつとした祇園であったが、再び携帯電話は間抜けな着信メロディを鳴らし始め、彼女はその身体をびくんと震わせた。

「この着信メロディの相手は、一人だけであった。その「相手」は、こんな状態では決して電話に出たくない相手であったが、決して心配させたくも無い相手であつた。

早海の腕から逃れようとし、焦つて携帯電話を気にする彼女を見て彼は少々捻くれた声で囁く。

「この状態で、出れば？」

出来るわけないと祇園は大きく頭を振つた。早海の手は祇園の股に宛がわれたまだつたが、彼女はどうにか携帯電話を取り出し、訴えかけるように彼を涙目で睨んだ。

「相手……親父、さんだから……」

か細く懇願してきた祇園の言葉に、流石の青年も良心が残つていたか、その手をようやく離したのであった。

また着信音は止まつたが、早海の束縛からは逃れられた。

祇園は慌ててTシャツの中でずらされた下着を戻すと、スカートの乱れも直し、橋の下から外へようようと立ち上がり携帯電話を開く。

個別のメロディにしていたので確信していたが、やはり着信は、祇園の父親からだつた。遠く離れていても、もう別々の人生を歩き出していくても、たつた一人の肉親である。滅多に掛かつてこない

い電話は何かあつたのだろうかと心配になつてしまつ。

祇園は早海をちらりと振り返ると、彼は胡坐をかけて、不本意そうにどうぞ、と手を差し出した。彼女はひとつ頷くと彼に背を向け、父親に電話を掛け直した。

第22話 Wish Upon a Star

今し方、男とあのような事をしておいて父親に電話を掛ける
それには祇園も非常に罪悪感に苛まれたが、既に夜十一時に近く、
そんな時間に電話に出ないことも心配を掛けると思い直した。

それにそれこそ父親に何かあつたのではと、祇園自身も心配にな
つてしまい、こんな場所であつたが電話を掛け直したのであつた。
「ホール音で呼び出し始めて少し待つたが、父 義一ギイチの声が、電
話の向こうから程なく聞こえてきた。

『どうした！？ 祇園！ 大丈夫か！？ 変なのに襲われてないか
――！？』

「……」

久々のその大声は電話口から漏れ出し、祇園は少し離れた橋の下
に居る早海まで聞こえるのではないかと顔を顰める。この勢いとい
い、大声といい、彼は確かに斯波に似ていると改めて思った。

「大丈夫、だよ……」

対して祇園はぼそりと答えた。「襲われた」はあながち間違つ
ていないし、父親に嘘をついたとも言える状況だが、彼の言う「変な
の」に無理矢理襲われたわけではなく、自分の意思もあつてのこと
だ。なので「被害者」という立場ではなく、ここは嘘を突き通そう
と彼女は思ったのである。

「それで、どうしたの……？」

母親が亡くなつてから特に子供のようになつてしまつた父親にど
こか哀れみを感じながら、祇園は普段同様ため息交じりに尋ねた。

『ああ、明日だけど仕事でそつちの大学行く事になつたから
「はあ？？」』

正直なところ、彼女は子供の頃から父親が何の仕事をしているのか、よく分からなかつた。

借錢はしていないらしいし、普通に暮らせるだけの生活費を渡されている。怪しい人間も周囲に現れなければ、彼自身の風体も中肉中背の何処にでもいる中年男である。

子供の頃に聞いた母親の話からも併せて、フリーの営業マンのようなことだらうかと祇園は予想をつけていた（保険や扶養関係等の書類上は、「会社員」となつてゐるが）。時に外資系、時に印刷業界、時に保険契約、時に流通、時には農業……と父親の部屋にあつた本や資料をちらりと見た限りでは、一体何者かと思つ程である。

今度はある大学に、しかも沖縄の何処かの島から何をしに来るのだと思うが、警察に捕まらない限りはあまり干渉もしたくないので、

「そりなんだ」

と短く答えておいた。しかし、

『冷たいなあ！　おとーさんと一緒に飯食べようとか言つてくれないのか！』

また音が外へと漏れ出すほど電話口で喚かれ、

「分かった分かった！　じゃあ明日また電話して！」

と祇園まで思わず声が大きくなつてしまつた。

父親といい、斯波といい、青井といい、……早海といい。自分はこういう強引なまでに自分を引っ張ってくれる明るい男性をどこかで選んでいるのだろうか、と祇園はふと考へてしまいながら、父親との電話を切つた。

「終わりました？」

声を掛けられて、祇園がどきりとしながら後ろを振り返ると、いつの間に橋の下から出てきたのか、早海がいつもの口調でそう言いながら伸びをした。

先ほど彼に触れられたことを思い出し、その顔を見上げることが

出来ないまま、祇園は無言で頷く。

「大丈夫、だつたんですか？」

祇園は再び黙つて頷いた。彼が元のような雰囲気に戻ってくれたことに、彼女はほつとしていた。あのような彼を受け止められる器が、今の自分にあるとは思えなかつたから。

早海は祇園の方へと足を向け、そのまま横に立つた。そして俯いていた彼女の顔を覗き込んできたので、彼女はまた何をされるのかと緊張してしまつた。身を固ませた祇園に、彼は静かに問い合わせる。

「…………」

それは陰と陽、負と正の間の零状態の声だと祇園は思った。

彼がそうである内に、彼女は急いで首を横に振つた。一瞬、微かに迷いはしたが。

外であれ以上のことは恥ずかしくて出来なかつた、かと言つて明るいところで全てを晒すことも出来ない。

大人の女性なら 美幸や同級生なら、こういう時、どうするのだろうか。その手を取るのだろうか。

そう思いながら、祇園は父親との通話が終わつた携帯電話を握り締めて、早海が退くのを待つていた。じつと祇園を見ていた早海だつたが、ふつと苦笑して顔を上げたのが分かつたので、彼女も顔を上げた。

「行きますか」

そう言つと彼は歩き出したので、彼女もその後へと続いた。

不安定で恐いところもある彼であるが、やはり早海は自分に対しうは絶対的に優しいのだと言つことを、祇園は確信していた。三大欲求の極限状態でそれが証明されたことは、またひとつ自信に繋がる。

試しているようで彼に悪いことをしている、そしてそれには余りにも無鉄砲な証明の仕方だったなと思いながらも、彼女はこっそりと安堵のため息をついていた。

そこから祇園の家までは黙つて歩いた。

アパートが近づくにつれ、早海には絶対に家は教えたくないと思っていたことを思い出し、どうしようかと彼女は口をうずうずさせ始める。しかし彼に声を掛けることが恥ずかしかったこともあり、何も言うことが出来なかつた。

そして家の直ぐ前に来る頃には、彼女も「まあいいか」と思つようになつており、ここでも流されていることを感じさせられる。だが家の件に関しては、どちらかと言えば能動的な心の動きだつた。それこそ彼に対する「信頼度」だけは上がっており、何か危険なことがあれば駆けつけてもらえる、お守りのような存在であつてくれるのは心強いと思っている証拠であつた。

そんなことを考えて歩いているうちに、祇園の住むアパートの前に一人揃つて辿り着いた。

彼が住んでいるアパートは、此処から歩いて一時間ほどの場所にあるらしい。飲んだのはビール一杯、酔いも醒めたので学校からは原付で帰ると早海は言つていた。

祇園が「ふーん」と呟いた後、立ちすくむ一人にまた微妙な沈黙が訪れる。

ちらりと早海を見上げると、彼は祇園の視線に気付き、何かを言おうとしたのを彼女は慌てて遮つた。

「お、おやすみ！」

後は振り返ることなく、一階の部屋へと駆け上がつていった。

スカートは護岸の土で少し汚れていた。その汚れが気になり、祇

園は直ぐに浴室へと向かつた。

夏であるし、時間も遅いのでシャワーだけを浴びる。まだ誰の眼にも晒されていない白い肌の上を水滴が滑り、初めてキスをした夜以上に上昇していた体温と馴染んでいく。

石鹼の泡に濡れた手で身体に触れながら祇園は、彼の指で形を変えられていた乳房を、摘まれて甚振られていた小さな突起を、そして未だに驚くほどの粘液が溢れている秘部を、全て無かつたことのように清めていく。

こんな情欲に狂つた気持ちで、明日を迎えてはいけない。こんなことに、身を悶えさせた汚い自分は早く洗い流し、この七夕の夜に置いていかなくてはいけない。

触れるたびに早海の手や視線や息遣いを思い出しそうになってしまい、胸を締め付けられながらも、祇園は必死にあの快感を忘れようとしていた。

明日には父親も來るのであるから、尚更こんな穢れた自分を見られたくないとも思っていた。第一、父親がこのアパートに泊まるなら、前日に別の男を泊めるなどということは、やはり止めて正解だったのだ。

だがもし今宵限りでなく、また早海が自分を求めたりビリするのだろうか、と彼女は風呂上りのベッドの上で思う。

こんなの、まるで、恋人同士じゃないか……。

思わず両手でシーツを握り締めて、愕然とする。確かに同級生などは、交際をするよりも先に、デートやセックスをして相手を知り、いつの間にかそういう関係になっていることが多いようである。その例に漏れず、性に惑う自分に祇園は嫌悪感を抱く。

流されている、と思い込んだが、もしかしたら、そういうではないのかもしれない……？

もしかしたら、自分がそれを望んでいる、ということはないのか？

それは寂しいから？それとも、性欲から？それとも……。

よく分からぬ。分からぬ。からとりあえず、寝よう、と横になる祇園であったが、どうしても先ほどの出来事が頭をよぎり、結局明け方まで眠れなかつたのであつた。

・・・・・

次の日、祇園は大きな欠伸をしながら一限からの授業を受けた。授業の殆どを居眠りしてしまい美幸に、「昨夜は遅かつたの？」と意味深に笑われてしまった。

美幸にもきっと最後まで「してる」つて思われているんだろうな、と恥ずかしくなりながらも、自分の経験不足を吐露する必要も無いので、祇園は照れたように仏頂面をして話を変える。

そして午後、彼女は大学内の図書館へと向かつた。前期末試験が迫り、講義によつてはレポート提出を単位の条件にしている。それを書く為であつた。

表向きは飲食禁止の場所であるが、パンや飲み物程度は黙認されているので昼食としてそれらを持ち込む。美幸たちに食堂へ誘われたが、今日は早海に会いたくないと思つた祇園はレポートを理由に誘いを断つたのであつた。

お気に入りのパンを一つと無糖の紅茶を購入し、図書館の中でも隣との間が衝立で分かれている個別の机を陣取る。それに其処は、図書館でも本棚から遠い奥の方にあり、人も少ない場所であつた。腰を落ち着けた祇園は、たつた今借りてきたレポート用の本を読みながら、はくつとパンに齧り付いた。講義中によく寝たおいたので、頭は朝より冴えていた。

そして同じくお気に入りの、いつもの缶の紅茶を口にした瞬間、

「これが終われば楽しい夏休みですねー」

その声に、祇園は思い切り古典的に噴き出しあつになつた。神出鬼没。謎の最強、いや最凶ストーカー、早海は笑いながら、祇園の横の机にどっかりと座つた。

「というわけで、夏休みの楽しい予定を

「立てるかー！」

非常に楽しそうに笑つてゐる彼の顔など見られるわけもなく、祇園は赤い顔を逸らすと、彼に背を向けた姿勢でパンの続きを頬張り始めた。

「仕事は！？」

「終わりました」

といふが抜け出しました、といふ小さな声が祇園には聞こえた気がしたが、聞こえないふりをしておいた。

確かにパンは生協で買ったものなので、もしかしたら彼に自分の姿を目撃されていたのかもしれないが……。

昨夜の恥態を思い出せば非常に恥ずかしく、このようなセクハラをした早海を恨みたいほどである。

だが、昨晩のことは祇園にとつて初めてのことから不安に感じていた部分もあつたので、また元のように彼が笑い、接してくれることは本当は嬉しかつた。それを口にすることは決してなかつたが、「レポートやるんだから、邪魔しないでよー！」

「じゃあ俺もやるつかな

「別の所でやれー！」

「図書館ですよ、ここ。別にいいじゃないですか」

それこそ図書館なのでこそと言い合つ二人であつたが、早海の言葉に言い返せず、祇園はつい黙つてしまつ。

しかし彼が横に居る状態で、レポートなど落ち着いて出来る訳が

なかつた。その唇が、手が、笑顔の裏にある何かが、全てが気になつてしまつのに。

そこで突然早海が席を立つたので、祇園は少し安心した。が、彼はやがて本を手に戻つてしまつた。

祇園は諦めて、彼のことを一切無視してレポートに集中することにしたが、やはり頭には何も入つてくる筈がない。

彼女は大きなため息をついた。それと同時に、隣から大きな欠伸が聞こえてきた。と思うと、レポートでも書くかと思われた早海は、そのまま机に突つ伏してしまつたのであつた。

「居眠りかよ……」

思わず祇園が彼をじろりと睨み、呆れたようにそつ言つと、彼女の方に顔を向けていた早海は眼を少し開くと、うつすら笑つてこう言つた。

「だつて今日は朝イチからバイト入つてたし……むづべ、眠れなかつたし」

「

その挑発でもするような笑顔に、祇園はぞきりとしてしまつたが、彼は眼を閉じると直ぐに寝息を立て始めた。

「眠れなかつたつて……、こいつも、同じで、ずっとドキドキしてたのかな……。

思わずそんなことを想像してしまい、彼女の動悸が速まつてくる。そして本当に眠つてしまつた寝つきのよい彼を、祇園は再びちらりと見る。規則正しい気持ち良さそうな寝息が聞こえ、その広い肩が僅かに上下していた。

その安らかな呼吸に彼女も少し心を落ち着けると、彼の寝顔など初めて見るものであつたので、思わず見入つてしまつた。そこではつと気付き、またどきまぎしてしまつと、慌ててそこから眼を逸ら

した。

静かな空氣の中で、レポートに向かつ。口には隅の席の上に、隣や向かいの席は空いているので、祇園は一人だけの静かな異空間に居るような錯覚を起こしそうになつてた。

北側の窓からすうと気持ちのよい風が入り、まだ頬は少々熱かつたが、祇園は何処か穏やかな気分になりながらシャープペンシルを走らせた。

約四十五分後に、彼がまどろみから眼を覚ますまで。

・・・・・

眼を覚ましても、誰も居なかつた。

それは、聞。少年時代の。
忘れたい聞。

だけど、受け入れるしかなかつた聞。

それを取り込んで、それでも足搔いて、今、此処に居る。

そんな少年が、ただ一つ、願つたこと。

あの時感じた「救い」が、もう一度欲しい

願いなど持たないつもりであつたのに、六年前のあの日、あの少女に、変な魔法を掛けられたから。

まるで神様のようだ。

あんな感情にした少女が、憎らしいほどであった。
あんな感情を知らなければ、孤独など恐くなく、渴望することも
忘れていられたのに。

その、彼女に、もう一度出会えたなら。

・・・・・

青年がそんな昔の夢を見ながら眼を覚ますと、彼女は其処に居た。
仏頂面だが優しく綺麗な声で、「起きたの?」と尋ねてきた。

最後に別れた五年前と、変わらない。何もかもが変わり行く世界
で、ただひとつ変わらないで居てくれた、彼女。

良かった。ようやく会えたんだ。

絶大な安心感が青年を包む。

今は自分の傍に居る。もう、その手を離さないで

と願う。

「俺、どれくらい、寝ました?」

昨日十九歳の誕生日を迎えたばかりの青年は、気持ち良さそうに
伸びをしながら、隣の女性に尋ねた。

「四十五分……くらいじゃない?」

愛想のない隣の女性 祇園は、そんな彼 早海から照れくさ

そつに目を逸らしながら、つっけんどんにそつ答えた。

彼の心の奥底は未だ知らぬままに。

第23話 ふたりぼっち

早海が眠っていたおかげで、祇園のレポートは若干進んだ。本を借りていき、後ほど続きを書こうと思つた彼女は、父親からまだ連絡も無いので一応今日も斯波研究室へと向かつ。眞面目な弥栄に何かテスト対策を教えてもらえるかもしれない、期待したこともあるつてだ。

しかし早海は当たり前のようになんかの後ろを歩いてくる。これでは本当に恋人同士のように見えるだらう。

「何でついてくんんだよ！」
「御用聞き御用聞き」
「お前そればつかだな！」

「次のバイトまで少し時間あるもんでー！」

怒る祇園に早海は相変わらずしれっと笑い掛ける。

「え？」
「いつそ彼は付き合つた方が逆に距離を置いてくれるタイプかもしれないな、と祇園は痛む頭を押さえながら思つた。それならいつそ付き合つた方が……？などと内心では悶々と悩みながら、早海と軽口を叩きつつ賑やかな話しがしている研究室の扉を開けると

部屋の真ん中には、呑気に茶を飲んでいる中年男。祇園は思わず声を上げて、彼を凝視した。

その男も祇園の顔を見た瞬間、「お、」と呟くと彼女に向けて反応する。

「親父さん……」
「ややあつて、おおよそ若い女の子りじくない呼び方で、祇園はたつた一人の肉親を、呼んだ。

「おや、言われてみれば苗字一緒にでしたね」

奥の教授席に座っていた斯波が、今気がついた、という顔をする
とわざとらしく手を打つた。

「何、ゼニア長の父ちゃんだったの」

既に沖縄みやげのちんすこうを頬張っていた光が、隅のテーブル
のパソコンの前で、そのまま立ち去りしている祇園へ顔を向けると
そう言つた。

よれよれの背広姿の、何処から見てもただの中年サラリーマン、
といった風体の祇園の父親・義一は慌てて立ち上がり、机に足をぶ
つけつつ斯波に頭を下げる。

「これは先生、娘がお世話になつております」

「いやいやこちらこそ、大事な娘さんを預かつております」

思わず斯波も腰を上げて頭を下げる。

「何しに来たんだよ！？」と尋ねたい祇園だが、ペニペニと再び
頭を下げあう中年たちに口も挟めずにはいると、やがて義一はくるり
と祇園を振り向いた。ちなみに義一がいつも祇園は母親によく似て
いると繰り返すように、見詰め合つた親子の顔は余り似て居なかつ
た。

そして義一は、自分に緑茶のお変わりを入れる弥栄から、パソコン
の前に座る赤毛の光、そして祇園の隣に立つ早海を見比べると
、最後に祇園へと視線を戻した。

「まあ、理学部だから男の子ばかりなんだろうが……」

どうやら巡査の話でも斯波から聞いたのか、義一は複雑そうな表
情をしていたが、祇園が何かを言おうとする前に光がここはひとつ、
と立ち上がつた。

「実は娘さんとお付き合いしていまして……」

祇園がぎょっとして光を見ると、ノリなのかフォローなのか、

「いえ実は俺が」

弥栄まで言葉を続け、

「いや俺が、」

最後には早海がここは乗らなきやダメでしょとばかりに吉葉を繋ぎ、

「「ビーベビーベ」「

と光と弥栄に手を出されてくる。

何処かで見たコントのよつな三馬鹿に、祇園の手が怒りに震えた。

「こんの……、バカ…………！」

・・・・・・・・

……夕刻、祇園と父親は、彼女の住むアパート近くの居酒屋へと来ていた。彼が酒の好きなことは知っていたので、付き合つことにしたのだつた。

あれから彼女は光たちを叱り付け、「やつぱり変なのに変なことされたたのか！？」と涙目になる父親を宥めすかした。そして「仕事」とやらは終わつていた彼をどうにか連れ出すと、大学内を案内しつつ一度アパートへと連れて行つた。

祇園は昨夜の情事をこつそり思い出しながら、やはり早海を家に上げなくて正解だったと思つており、その早海が父親と対面してしまつたことには少しの罪悪感を覚えていた。

そして夜のアルバイトは予定になかったので、まだ宵の口であるが居酒屋へと向かつた次第であった。

「それにもしても、祇園が斯波教授の研究に絡んでいたとはなー」

義一が冷酒を飲みながら、頭を振つて言つた。

「こっちの方がびっくりだよ……」

祇園はため息交じりに焼きつくねを頬張つた。

「いや、社長が斯波教授の技術がぜひ欲しいって言つもんではな。開発中のばく……薬品もあるようだし」

祇園は先日の怪しげな爆発をする薬品のことを思い出していたが、それ以上父親を追及するのは恐いと口を閉ざした。

「頼むから、警察の世話にだけはならないで……」

「お前もな……」

斯波という一人の妖しげな人物を通して、父娘はあ、と同じようため息をつく。

母親が早くに亡くなつたからか、二人は親子というよりは対等な関係に近かつた。それは祇園がもう成人するからということもあるが、父親が母親の死後、「父」でありながらも子供のように「個」の彼に戻つてしまつたから、ということもあつた。

よつて、既に互いの人生は互いのものだと、これ以上関与し合わないのであつた。

しかし学業や仕事に関与はしないとは言つても、実際学費は彼が支払つており、年頃の娘を持つ一人の父親としては気がかりなこともあるらしい。酔つてきたのか、義一はやがて切り出した。

「それで……、さ、さつきの誰と……？」

先ほどの光を筆頭にした悪ふざけを思い出し、祇園は居酒屋の机に頭を打ち付けた。ガチャン、と空いた皿が音を立てた。

「べつに……、誰とも違うよ……」

昨夜の早海との出来事や、なんだかんだで彼が今一番親しい異性であることを祇園は思い出したもの、交際を約束したわけではないと、それを否定した。

何よりも父親とそういった話をしたことがないので、彼女は気恥ずかしかつたのだ。

「最後に、一緒に入つてきたやつか？ それとも……あんな赤毛はおとーさん嫌だぞ！ せめてもう一人の太っちょにしろ！」

光にも弥栄にも失礼なことを言う父親であるが、友達ならまだしも、あんな軽い調子で恋人と言われば心配になつてしまつのが親

心と言つものであつ。

……確かに、早海は愛想は三人の中で一番いいし、見目も悪くないもんな、と祇園はぼんやりと彼の胡散臭い笑顔を思い出していた。

「その二人は同級生。一緒に入ってきたのは……、ただの後輩だよ」サワーをあおると父親の顔を見ずに祇園はそう呟いたが、義一は充血してきた目を瞬かせると彼女を見た。

「そう言えば昔紹介してくれた子も、『後輩』だつたな」

祇園は彼のその言葉に、思わず目を点にして父親を見た。彼と視線が合い、その眼を見てようやくひとつ記憶を思い出した。

確かに昔 それこそ、五年前、三者面談の日に早海に話しかけられていたら、父親がやってきた ような出来事があつた気がした。しかしそれは祇園自身も忘れていた一瞬のことだが、確かに男性と一緒に居る所を父親に見られた経験はそれ以外に無かつた。

「何!? まさか、その時から 」

父親にしては鋭いと思うが、逆に想像力貧困な彼は、後輩というキーワードだけで短絡的に同一人物と思つたらしい。

「違―――う―――！」

祇園は思わず少し大きな声を出してしまい、周りの客の視線にごめんなさい、と頭を下げながら、とりあえず父親の杯に酒を注ぐ。

「た、確かにあの時の子だけどさ、ぐーぜんだよ、偶然。偶然大学が一緒だっただけ！」

そしてそのように否定するが、祇園は本当に偶然の再会だったのか と言いながら疑問も感じていた。偶然だとは思つてはいるものの、あの日からストーカーのように祇園にまとわり付く早海を省みれば、もしかしたら……、という気持ちに囚われる。しかし知りたいような、知るのが恐いような 。

祇園の複雑な気持ちは知らないままに、義一ははあ、とため息を

吐き出すと、ふと真顔で呟いた。

「まあ、祇園が選んだ奴なら、仕方ないんだけど……暴力とか振るわれない限りは」

酔っているとはいえ、父親の含みのある言ひ方に祇園は首を傾げて彼を見た。義一はちらりと祇園を見ると、また酒を煽つて眉を寄せながら何処か遠くを見るように唸つた。

「あの子、親御さんとか……ちゃんといいるのか？」

あの子、とは早海を指しているのだろうと祇園は思つた。祇園にとつては対等な青年でも父親にしてみれば子供同然である。祇園は首を横に振つた。

「うちと、……同じで、母親が居ないつて言つてた」

それは中学の頃の記憶で、それ以降彼に何があつたのかは、何も知らないが。

それを聞いた義一は、「そうか」と言ひよつと頷いた。

「分かるの？」

逆に祇園が彼に尋ねた。

「そりゃあね」

義一は苦笑した。

「斯波先生だつて分かつてるだろ、言わないだけで」

「……」

義一の言おうとしている事が分からず、祇園はじつと彼を見ていた。

「祇園はね、静子さんに似て、聰くて人の心に敏感な子だよ」
静子、とは祇園の母親の名前である。義一はそれこそ少年のよう
に妻を「女性」として、彼女の死後も慕つていた。
「だから、……ああいう子には、それが分かつて、居心地いいんじ
やないだろうか」

祇園は義一の言いたいことがやはりよく分からなかつたが、少し
分かるような気もしていた。

「祇園が、それで辛かつたり、苦しくなかつたらそれでいいんだ。
信じて、守つてあげればいい」

守る？自分が？早海を？

早海を頼りにしているのは自分の方だと、彼に少しの劣等感と安心感を抱いていた祇園は驚いたように父親を見上げた。

お父さんだつて、そうしてもらつてきた、と義一はぼそりと呟いた。

「彼は、優しいか？」

「……」

祇園は一瞬、それは恋人として尋ねられているのだろうか、と疑問に思つたが、それとは関係なく素直に頷いた。それ以外の答えはなかつたからだ。

再び「そうか」と義一は少し安心したようなため息をついた。彼もまた祇園の警戒心の強さを知つており、信頼しているからであつた。

「まあ危ない眼はしていなきけど……、あの子は、寂しいんだろうな」

核心をついた義一の言葉に、祇園は彼の方を黙つて見ていた。その言葉を何処かで聞いたような気がしながらも、「寂しい」のは自分だつて同じなのに、と彼女は思つていた。

だから、なのだろうか。だから自分は早海が気になるんだろううか。

『おそろいですね』

五年前、少年だつた彼が笑顔で言つていたのは、こいつの意味であつたのだろうか。

祇園がそう思つて義一を見ていると、彼もまた彼女を振り向いた。
二人はその時、互いに理解した。

義一は、祇園もまた寂しかったことを。だから娘はある少年青年の傍に居るのであることを。

祇園は自分自身が、そして同じくらいこの父親 男も寂しかつたであろうことを。

一人とも、最も愛していた家族の一人を失った日から。

「親父さんは、……再婚しないの？」

祇園はそこで再び酒を注ぎながら尋ねた。突然の質問に、彼は放り込んだばかりの刺身を咽た。

「な……っ」

心なしか、皺の刻まれた顔が赤い氣がするのは、酔つているだけではないだろう。寂しい、ならば彼もまた誰かを求める心があつてもおかしくはない、と祇園も今なら理解出来るからであった。

それは母親への裏切りだとは思わない。

「……静子さんは、大事だぞ、今でも」

「分かつてる」

酒を勢よくあおつて咳いた父親に、祇園は少し微笑んだ。

「本当に似てきたな」

父親がその笑顔に向けてしみじみと呟いたが、祇園は聞こえなかつたふりをした。

「帰りに墓参りしていくよ」

「そこで報告するの？」

「馬鹿」

決して格好よい父親ではないが、照れたような顔をすると、祇園の頭をぐしゃりと撫でた。

親子 であった一人だが、既にその閉鎖的な関係は、母親が死んだ時点で失くなっていた。

今はもう依存などせず、それぞれが個としてそれぞれの人生を歩み、幸せを探し、それにはもう互いが干渉すら出来ないような何処かしら遠慮が、この二人の寂しがり屋の間にはあった。

第24話 夏、開花

その晩、義一と祇園は久々に一つの部屋で就寝した。かなり酔つた父親は、その後は他愛ない話をし、ぐつすりと眠つていた。祇園も酔いが回り、その晩は何も考えずに眠つた。

そして次の日の朝、「まあ、学費は無駄にしてくれるな」「元気でやるんだぞ」、その二言を言い残し、義一は早々に電車と飛行機を乗り継ぎ、南の島へと帰つていった。

本当にあつれりとした親子の対面であった。しかしそれが高野親子らしいとも言えた。

そして祇園が学校へ行くと、授業がひとつ休講となつていた。その時間を使い、彼女がレポートの続きを生協食堂の空いた席で書いていると……、

「親父さん、帰っちゃったんですね」

食堂の仕事が終わつたのか、早海が現れたのであった。

最早それも慣れてしまつた祇園は、驚くことも怒ることもせずに彼が自分の横に座るのを黙認してしまつ。内心では未だに先日の情事を思い出し、彼の身体を意識してしまつているのだが。

「居てもすることないし、親父さんにも仕事あるし」

顔はレポートの方に向けたまま、彼女は照れ隠しのため、つづけんどんに答えた。

「折角だからきみちんどい挨拶させて欲しかつたのに

「何をだよー」

口を尖らせて残念そうに呻ひ嘆ひ早海の言葉に、祇園は思わず机に拳を叩きつけてしまう。

「だからお嬢さんと交際しますとか、お嬢さんと将来結……」

「あほかー」

そういうた「事実」はないが、既にペッティング……と言えるようなものまでは、関係が進んでいることは確かである。やつなるともう恋人と変わらないのではないかとか、結婚などと親に言い出そうとするほど先のことまで考えているのかとか、祇園の胸は騒ぎ出してしまつ。

流石にこの眼の前の青年は、父親を含めてまで自分を騙し、不幸にしようなどと企む悪人には思えなかつた。そうであれば、あの時点で自分は最後まで犯されてしまう。

それにそこまで自分も悪意を見抜けない人間ではない筈 祇園はそう考えていた。

何より早海が持つてゐる「裏」の顔は、悪意などではなく、「寂しさ」ではないだらうか？父親が彼の第一印象を教えてくれたことで、祇園はそのことに確信を持ちつつあつた。

そして自分も、彼に対しての第一印象がそれであつたよつた氣さえしててきた。それはもう、六年も前のことであるが。

その記憶を思い出そと、祇園は早海をちらりと見た。

彼は笑つて彼女を見ていた。眼が合い、祇園の鼓動が速くなる。しかその眼の奥には、やはり父親の言つとおりの何かが隠れている気が彼女にはした。

流石、年の功だな……。

おちやらけていて子供っぽい父親であつたが、祇園は少し見直していた。

そして自分の気付けなかつたことを教えて貰え、感謝もしていた。更に早海のそんな弱い部分も父親は否定せず、受け入れてくれてのこと、祇園の背中を押してくれたことに彼女は安堵していた。逆に言えばそれは父親に彼を認めて欲しいということだろうか

?

祇園は仏頂面でその動搖を隠すと、彼から眼を逸らした。

こんな風に、わざわざ別の学部まで会いに来てくれたり、メールの遣り取りをしたり、夜に送つてもらつたり、……あんないやらしいことをしたり。

恋人同士でなくとも大学生ならばそんなことをしている男女はいくらいでもいるが、逆に恋人関係であれば同様のことをするのだ。つまり祇園が認めさえすれば、自分達は「そういう関係」と言えてしまうのだろう。

だがそれには、あとひとつ何か答えが足りない気がし、彼女はそれを受け入れられなかつた。

「とりあえず、夏休み、どつか行きましょーうよー」

祇園は早海の言葉にびくりと反応した。

「どつか……つて?」

「飲みに行こうとかそういう問題じゃないですよ。まあそれも勿論ですけど。俺も車、中古で買つたし、折角だからどつか

「行かない……」

「冷たいですねー」

祇園の拒絕に早海はがつくんどうな垂れる。その姿に、彼が美幸たちから「格好良い」と言われていることを思い出し、やはりそんな男がどうして自分に、と祇園は今更ながら不思議な感じがしていた。

「海とか」

「美幸たちと行くし……」

それでもどうしても彼とこれ以上の関係になるのが恐く、二人きりになることを避けようとする祇園は思わず話題を変えた。

「早海は、実家に帰らないの?」

「 」

その一瞬、彼の表情が硬くなつた、気がした。そして彼の親が不倫をしていったという話を思い出し、祇園はしまつた、と思ったがもう遅い。

しかし早海はすぐに元通りの明るい笑顔に戻つた。

「特に、予定はありませんよ」

「……ふーん……」

「どうしてですか？ 家に挨拶にでも来てくれるんですか？」

そして「冗談染みた彼の言葉に、祇園はまた赤くなつて「馬鹿！」と怒鳴る。しかし先ほどから動かしても居ないシャープペンシルを机の上に置くと、足をぶらぶらとさせて答えた。

「私も母さんの墓参り行くからさ、早海はどうするのかなって思つて」

「……」

早海はきょとんとした顔で祇園を見た。

「位牌は今、親父さんが持つてるけど、骨はある市のお寺にあるか

「う

祇園も思わず早海を見た。それは何の感情もない ふりをした表情であった。

あの町に全てを捨ててきた祇園であったが、年に一度墓参りにだけは訪れていた。父親も一緒にいたのもあり、他の思い出には見向きもせずに、真っ直ぐ家に帰つていったが。

あの地で出会い、今此處で再会した早海と過いやすひに、怖いけれどあの土地が懐かしく思えてきたのだった。

「一緒に……行きます？」

真面目な顔でそう尋ねてきた早海を、祇園は上目遣いで見た。

恋人になるとかそういうことは関係なく、どうしようか、彼女は迷つた。出会つたその地に行けば、あの時感じた「もしかしたら」に惑わされた気持ちを、もう一度突きつけられる恐れがある。

それなのに自分をこんな気持ちにした、おそろいの「寂しさ」を持つ早海が、今は気に掛かっていた。

これは偶然の再会であったかもしれないが、五年前のあの場所に、もう一度戻れば この何か複雑な気持ちが晴れるかもしれない。

今まででそれを恐れていた筈なのに、早海の真意が少しだけ見えたからか、彼を少しずつ受け入れ始めたからか、祇園はそのようを考えたのであった。

だから祇園は、「こくんと頷いた。

早海はそんな彼女を眼を瞬かせて見ていた。もっと喜ぶかと思えばあつさりした反応だな、と思っていた祇園だったが、最後には彼も嬉しそうに笑った。

「それじゃ、お盆、バイト空けときますね。あ、でも、その前にもまだまだ時間は」「

「結構です」

早海と一人で県外まで行くだけでも恥ずかしいというのに しかも、日帰りかどうかはあまり考えたくもなく 、更に他にもお出かけだなんて、それこそ恋人になると決めたわけではないのだから、と祇園は彼の誘惑をやはり切り捨てた。

そんなことを「ちやーちや」と言い合つ二人の視界に、見知った人影が現れた。

「あ……」

祇園が思わず口を丸くして咳き、早海も彼女の視線を追うように生協食堂の入り口へと視線を走らせる。その先には身長差のある青井と露花が仲睦まじく歩いていた。

その視線に気付いた青井は祇園に手を振った。露花もその横で微笑みを見せる。

祇園はそんな二人に頭を下げ、早海も軽く下げた。

「……まだ、ショックだつたり、します?」

一人が視界から消えてしまらくの後、早海は静かに問い掛けた。
しかし祇園は彼の顔を見ることが出来なかつた。

「知らない」

再びシャープペンシルを手に持ち、何も考へられないが書くふりをする。

今でも青井の顔を見れば、確かに祇園は幸せな気持ちになれる。露花を羨ましく思う。

だが早海に触れられる時の高揚感や、彼の寂しげな顔を思つ時の妙に胸が締め付けられそうなそれとは全く違う感情であることを、彼女は自覚していた。

自分は幸せになりたいのだ。だから前者の暖かい感情の方がいいに決まつっていた。だがそれは諦めなければならない。

それを知つてゐる今、彼女が身を任せせる感情は 。

それを早海にも青井にも知られたくはなかつたが、何処か笑いを含んだような顔で祇園を見つめている早海には、自分の裸の心を見透かされているような気がして彼女は落ち着かなかつた。

だが確かに、ひとつの淡い恋は、自然に花が萎むように終わり、もつと色濃い何かが新しく、大きく咲き乱れようとしているのを感じた。

「ゼ!!、長、どうだつた……」

「なんとか終わつたーー！」

七月の終わりの斯波研究室にて 。祇園は尋ねてくれた弥栄に嬉しそうに答えながら、大きなため息を吐き出した。地質系の教官で最も気難しいとされる教授の出題するテストを最後に、祇園の全

ての前期テストが無事終了したのであった。

点数は分からぬが、白紙で出すこともなく一応答えて自信を持って書くことが出来た。単位はぎりぎりかかるだろつと、彼女は肩の荷が下りた思いであった。

これで祇園も晴れて夏休みに入れる。実を言えば昨日は彼女の二十歳の誕生日であり、早海がお祝いをしたいと以前から盛んに言つてきていたのだ。

しかしそれこそ、そこで何か変な関係になつてしまえば動搖してテストが酷い結果になつてしまつと、祇園は徹底的に撥ね付けた。それが原因で他の女に行くような節操のない男であれば、こちらから願い下げである、という程の勢いで。

早海もそれは理解したらしく、大人しく退いた。

しかし午前零時に、最後の追い込みで勉強をしている間に届いた誕生日メールには……思わず顔が熱くなつてしまつた。ということは、彼には絶対に伏せておくのだが。

それはさておき、夏休み中にいくつか集中講義はあるが、ここからもう氣楽なものである。

「でも弥栄氏とは夏期講習で会つんだよね」

祇園は大柄な彼を見上げた。

「搔き入れ時だから」

弥栄はそう言って大きく頷いた。

夏休みと言えば夏期講習で塾のアルバイトは忙しくなるものの、時給が高いうえに時間数がいつもより多く、何よりクーラーの効いた室内で働けるので十分、割りの良い仕事である。

日によつては気分的に子供たちの相手が乗り気でない時が祇園にあるが、それでも子供との対話は楽しい時間であり、教師を目指す弥栄の方はまさに天国であろう。

「光はどうか行くの？」

祇園はいつものように携帯電話を弄つてゐる光を見下ろした。

「んー。バイト三昧」

彼の場合、アルバイトと言つてもホスト業みたいなものなので、女性と何処かへ出かけるだらうと想像がつく。

「ちょっと海の向こうまで」

「お土産よろしく」

思わず弥栄と一人で声を揃えて言う。一人には相容れないオトナの世界？が光の背後には広がつてゐるようだつた。

「病気は持つて帰つてくるなよ……」

とりあえず祇園は光の肩にぽんと手を置き、弥栄もまた頷いている。

そんな彼らに奥の席で、のほほんと笑つた斯波から声が掛かつた。
「さてさて、楽しい夏休みの計画中のところ悪いけど、僕からのプレゼント 夏休みの宿題を君たちに授けてあげよう！」
「え――――――！」

思わず三人それぞれにブーイング。これまた相変わらずどこかの小学校のような雰囲気である。

「夏休み中に一度、ゼミを行いたいんだけど、今回は……『言霊のつかまえ方と飼育方法について』で行う！ 諸君、各自熟考してくれたまえ！」

斯波研は研究だけでなく、こつしたよく分からぬテーマでゼミを実施し、論文の提出をさせ各々の考えを討論するといつた実習もさせられる。その「発想」もまた彼の研究材料として、商品価値があるらしいのだ。一体どんな怪しい企業（そこに祇園の父親も勤めているのだが……）が取引に来るのかは知らないが。

「言霊、ねえ……」

「光は得意そうだけど」

眩ぐ光に祇園は氣の重そくなため息をついた。

言靈　　言の葉に宿ると信じられた、その意味が持つそのものの力。

口に出せば命を持ち、その意味行使するという見えない力。

抽象的な研究テーマに理系の祇園は頭を悩ませたものであるが、もしかしたら、自分が惑わされてきた「この言葉」も、そういう力と関係するのだろうか、とふと思つたのであった。

そして、彼女の人生で最も熱い一十歳の夏がやってきた。

第25話 憧れの終わり、恋のはじまり？

夏休み中ではあるが、斯波研究室に休みはない。それは言つても流石に学生たちには一度しかないその年の夏を満喫させようと、斯波もいつもほど無理難題は言わなかつた。祇園も放つておけばいいのだが、ゼミ長という名前を一応貰つている以上、数日に一度は御用聞きに訪れてしまうという貧乏性ぶり。

その結果、巡検ほど遠い場所ではないが、暑い中遺跡の発掘現場へ行かされ、その土をこつそり持ち帰り、人骨が何パーセント含まれているかと言う恐ろしい実験から、砂時計の砂を作つてみようと言つ小学生の夏の一研究のやうなものまで。

弥栄や光がアルバイト等で不在のことが多く、サークルにも所属していない祇園が黙々と働いているというわけである。

それこそ父親に少し似た雰囲気の斯波が嫌ではないからというのもあるが、こんな事でも自分の「役割」があることが嬉しいのかな……と、先日父親と早海の話をし、己の孤独を自覚した祇園はそう考えていた。

と言つても雑用ばかりこなしているのもどうかと思つが……。

今日は斯波が何やらいかがわしい学会に招待状を出すと言つので、その封筒詰めを頼まれている。

八月の上旬。真夏の暑い日であれば、頭も働かない。逆に今日はそういう仕事の方がよかつただろう。祇園はそう考えながら誰も居ない斯波研究室へと、手洗いから戻ってきた。

すると其処には短く赤い髪の上に日焼けをして、何処の海辺の遊び人かと見紛う程の光が座つていた。

「お、ゼミ長。そこにおみやげ置いといたから、コーヒー淹れて、アイスで」

「……たまには自分で淹れれば……」

祇園は思わず拳を握つて呴いた。土産は確かに嬉しいが、研究室のパソコンでこれまたいかがわしいサイトを見ているような非常識な男に、静かな怒りも感じてしまう。

しかしアイスコーヒーもたまにはいいな、と思つた彼女は、結局言われたとおりに淹れてしまった。

これだけ日焼けしている程なので、既に女と海外にでも行つたのかと思われるのに、光が土産と称して買つてきたものは、広島名物もみじまんじゅう それでも、ちんすこうでなくてよかつたと思いながら、それと共に光の前にアイスコーヒーを置いてやる。

彼は小さな眼を細め、憎めない笑顔で礼を言つた。

蝉の声が校舎の外から聞こえてくる研究室の中は、光がパソコンのキーボードを叩く音と、祇園がセロテープを千切り、封筒を揃える音がするのみであつた。時折アイスコーヒーの氷がぶつかる音や溶けて軋む音が聞こえてくる。

いつもどおり気を遣わず、特に会話をすることもなくそれぞれの作業を行つていた二人であつたが、やがて光が唐突に口を開いた。「ゼミ長は何処にも行かねえのー？」

元々彼は人懐っこい男である。逆に気分屋もあるので、話したいと思えば話していくし、そうでなければ一切話には乗つてこない。今回はたまたま素朴な疑問の矛先が、祇園に向いたらしい。

「……海行って来たよ」

流石に行つて来た次の日は真っ赤にひりひりと痛んだ彼女の肌も、一週間経つた今では少し小麦色になつて落ち着いている。光の日焼けには遠く及ばないが。

「ふーん。あの一年と?」

祇園は光の言葉にどきりとした。彼はパソコンの画面の方を頬杖を突いて見ていた。本当にただの素朴な疑問なのだろう。

彼が指示しているのは、無論、早海のことであろう。ここでとぼけても構わないのだが、今までの事からして余計に怪しまれそうだと思つた祇園。光はこちらを見てはいながら、首を横に振つた。

「違うよ。美幸たちと

赤毛の青年からは、「えー、そーなのー」という気の抜けたような声が返ってきた。どうやら彼の期待には沿わなかつたらしい。きっと、今まで祇園が遊び人風の彼をどやしつけてきたので、そういつた関係で冷やかせる隙を探しているのだな、と彼女は察した。誰が浮いた話など提供してやるか、と祇園はやはり何処か早海強いては男性と特別な関係になる事に対して抵抗を感じていたが、それでも身体は彼を求めていると言つても過言ではないと立証されているので弱つてしまつ。

確かに先日海に行つた時も、神出鬼没の早海のこと、密かに海の家にアルバイトとして現れるのではないかと、ヒヤヒヤしながら視線を走らせていた。しかしその日彼は別のアルバイトが入つていたのか、どちらにしろ流石に県外の海にまでは現れなかつた。だがその数日前、たまたま学校内で会つた彼に予定を尋ねられ、海に行く話をした時には確かに心配はされた。

「他の野郎に水着見せるなんて勿体無い。上にTシャツ着てくださいね。でもぶかぶかのTシャツだと下に何も着てないよう見えます……」

と真剣に悩む早海の背中を祇園は思わずはたいてしまつたものだ。

くれぐれも「知らない人にはついていかないよーに」とまるで子供のように心配され、自分なんか誰も声を掛けないだらうと言えば、「男なんて分かんないですから」

としみじみと一言。それはお前のことかよ……と祇園が早海を睨み上げると、彼は苦笑して祇園を見た。

「青井さんみたいのがいても、ふらふらついつひちゃ黙日ですよ」

「！」

まるで青井と早海の間で揺れていたことを揶揄されているようで急に羞恥が駆け巡り、祇園は再び早海の背中をはたいてしまった。そんな彼女に彼は声を上げて明るく笑い、結局は祇園を送り出したのだが。

恋人でもない男の許可など何故となる必要があると思いながらも、思わずそんな話になってしまった。

実際彼は海には現れなかつたのだが、でも居たら居たで困つてしまつただろうか、と祇園は後から思う。その時は意外にも少々残念……であつたのだが。それこそストーカーのように、そこまで自分に依存されてもきっと困つてしまつだ。

どのように彼のことを受け止めればよいのか、祇園には分からない。彼女自身の気持ちも受け止め切れていないので臆病であるのに。だから逆に冗談交じりに心配されたが、最終的には自分を信じて送り出してくれてよかつたな、と、その日は女友達との一日を楽しんだのであつた。途中彼女に声を掛けてきた奇特な若者も居たが、それはそそくさと、かつきつぱりと断りを入れ。

それでも夜になる頃、案の定早海から祇園を心配するメールが届き、やはりマメな男だな、と彼女は苦笑させられた。

しかし、正直不快ではなかつた。子供の頃から、父親が仕事で家に居なかつた寂しさからだろうか。誰かが常に自分を気にかけてくれる心地良さを、いつの間にか内心では実感していた。

もう二十歳の大人になったといふのに、心の何処かでは子供のように足りないものを求めている。思わずメールを返し、返信を待つ。

その後更に、うつかり男性に声を掛けられたことを聞かれるまま正直に答えてしまい、まだ美幸たち友人と一緒に居るのに彼から電

話が掛かってきて焦った、といつおまけつきだが。

『あんまり、心配掛けさせないでくださいよ』

その時の彼の声が、彼女の全身を妙な具合に痺れさせた。決して強くはない微弱電流のようなもので。

「彼氏でもないのに、何で早海が……」そう反論するよりも出来たのに、祇園は素直に「ごめん」と頷いていた。

錯覚かもしれない。それでも彼が自分を「見て」いる。祇園にはそのように感じたのだ。

勿論、優しくしてくれれば誰が相手でもよいわけではない。おそらく五年前に少し仲がよかつたことや、彼自身の考え方なども、彼女がそう思うことに影響している。

しかし自分を信じて、かつ案じてもらえる心地良さ、それがただの家族ではなく対等な男性から「えられることは、祇園にとつて初めての喜びであった。

彼が電話の向こうでどんな顔をして、その言葉を言っているのか。もつとその声を聞きたいと直感的に思った。そしてその少し真剣な声が一ヶ月前の七夕の夜にあつた出来事と重なり、暗がりで聞こえた息遣いや声を思い出してしまったのであった。

まだ恋人ではない。しかし、求めている。身体が、心が。

祇園はその矛盾に自分自身戸惑っていたが、その迷いに追い討ちを掛けるように光が再び不躾な発言をしてきた。

「よくわかんねーけど、結局ゼミ長はあの一年と付き合つてんの？」
その質問をした訳は光が祇園のことを特別に想っているからではなく、彼女の行動に矛盾が多いことに、この他人に興味があり恋多き男もまた、気付いているからであった。

祇園が思わず顔を上げると、彼もちらりと彼女を見た。 その眼は、彼女が青井に好意を持っていたことを知っていると言つているようであつた。

咎められたわけではないが心変わりをしたことを見透かされるようで恥ずかしく、祇園は眼を逸らして呟く。

「別、に、付き合つてない……」

でも身体の関係はないこともないけど と、まだ最後まで結ばれてもいよいよ恥じ入つてしまつ。

はつきりしない態度のくせに早海を意識している祇園の様子に、光も呆れたような顔をした。

「なんでー？ 他に……いいと思つてるのがいんの？」

流石に彼も其処まで鈍感でも意地が悪くもない。一応、祇園に気を遣つた言葉を選んだが、その「他にいいと思つている人」がやはり青井であると思っていることは、再び視線を合わせたことで彼女にも伝わった。

彼にとつては青井と祇園は先輩と同級生。 研究室内でどろどろした関係になることを囁し立てたいのか嫌がつてゐるのか、そこまでは視線だけでは分からなかつた。

今度はしばし黙つて眼を合わせる一人。

そうは言つても光はただ的好奇心で聞いているだけであろう。答える義務もないのだが、それとは関係なく祇園の中ではつきりさせたいと思うことがあつた。

「「これ」は少し前から、本当は分かつていたことだつた。 ただ彼女が認めなかつただけだつた。

だから初めて「これ」を口にしてみる。

そうすれば、この変なもやもやから解放されるかもしねり。 彼女はそう思い、何処かいけないと想いながらも、この何かを求めて始めている心に従つてみた。

祇園は光の問いに、首を横に振つてみる。

「そんな人、……いないよ」

他に、好きな人なんて、居ない。

片想いをしていたあの人は、もう好きじゃない。

彼女は遂にそう、口に出してしまった。

祇園がはつきりとそう答えたことは光には予想外であつたようであつた。彼は眼を丸くしたのだが、納得も出来たらしい。

「ふうーーん」

そう呟くと彼はもう興味を失つたのか、これ以上の追求は可哀想だと思ったのか、再びパソコンの画面に向き直るとその手を動かし始めた。

これで会話は終わりとばかりに、再び無言となる研究室。祇園は今更ドキドキと高鳴ってきた胸を落ち着かせるよう、土産のもみじまんじゅうに手を伸ばして放り込んだ。

遂に、はつきり言つてしまつた。「もつ青井のこととは好きではない」と。

では今、この心を占めているものは何なのか　それをまだ認めることは恐い。ただ単に、初めての性衝動に駆られているだけなんかかもしれない。

だが今の出来事は、仄かな片恋が終わつたことを彼女自身が認めた瞬間であった。

少女のように胸にずっと描いていた淡く温かい残像が消え、その跡に色濃い熱いものが現れているような気がしていた。それが、彼女を締め付けている。

いつからか分からぬが、ずっと心の奥に潜在していたそれが。

口にしてしまえば、何かが変わる。何かが動き出す。もづ、止まらない。

流石にこれ以上の事は恐くて口に出来ないものの、この青井への気持ちの終わりについては言葉にしたことで、「確定」してしまった。

「やよつなり」誰ともなく、心中で呟く声が聞こえる。この後の気持ちが、まだどうなるか分からぬが。そう思った瞬間、祇園は斯波の言っていた「言靈」のことを思い出していた。

口にすれば、言葉が命を持ち、それが現実になる。

少なくとも、ひとつの心に抱いていた「憧れ」については、これで「終わり」になってしまった。

逆にもしここで五年前から口を噤んでいる、早海に対しての「あの言葉」を言ってしまえば、自分はどうなってしまうのだろうか？それを想像し、祇園は恐ろしいような、それでいて甘い何かに心が蕩けそうな気分に、慌てて甘いもみじまんじゅうをブラックコーヒーで押し流したのであった。

盆まあと一週間、とこりの出来事だった。

第26話 五年間の空白

そして、約束の日を迎えた。その日も朝からとても暑く、焦げ付くような日差しが降り注いでいる。

夏休みの上に帰省している友人が多く、祇園も美幸とは海に行つて以来会っていない。帰省する場所もない祇園は、昨年同様ひとりで母親の墓参りをするつもりであつたが。

何の因果か、アパートの前でぼつねんと、一台の車の到着を待っていた。

彼女は何度も自問した。これは寂しいだけではないかと。

親を亡くしたことを既に割り切ることが出来ている知り合いもいるが、祇園の場合は未だに墓参りをするとどうしても母親のことを思い出し、言い様のない寂しさに見舞われてしまう。

自分でももう大人なのに情けないとは思うのだが、昨年などひとりで墓参りに行つた折には、帰りの電車で泣きそうになってしまったほどだ。

だからそんな彼女を気遣つてた早海の「一緒にこいつ」の一言に、祇園は素直に頷いてしまった。

それは自分がただ、弱いからだけなのだろうか。

迷つているうちに日は迫り、早海から時間を確認するメールが届き……、そして当日の朝八時。

まるでドライブに出かけるカップルのように、小さなバッグを手に持ち、祇園は早海の到着を待つていた。いつもならしないような、お気に入りのアクセサリーまで腕につけてしまい。

そして時間通りに彼はやつてきた。

最初、電車で移動するかと思っていたが、今住んでいる場所と昔

住んでいた場所を直通で繋ぐ電車はない。それだと乗換えやバスで六時間近くも掛かってしまう。金額的には鈍行よりは高くなるものの、車だと四時間ほどで行けると早海は予想を話してくれた。

実際祇園も車を運転するようになつてからは、その便利さを実感していたので、往復八時間以上も一人きりの空間に居るのは少々抵抗はあつたものの、便宜性をとることにしたのであつた。

それでもやはりデートのような感覚は拭えない。そこにも抵抗がある彼女だが、今更断ることも出来ない。祇園はアパートの前に止められた意外に大きな早海のRV車へと、結局素直に乗り込んだ。

中古で安かつたと彼は笑うが、正直長距離を乗るならばこうした形のものは楽ではある。それにしても、いつぞやの飯盒と言い、本当に野山が好きなヤツなんだなと祇園はぼんやり思つていた。

外の日差しが嘘のように、車の中は冷房で涼しく、混んでいる電車を使わないうことはやはり正解だったかと思う。それくらい今日は暑い一日であった。しかも地方都市から地方都市への移動で、大都市を通らない為、そして帰省ラッシュは流石に外しているので道も混まず進めそうであった。

早海は車中でも相変わらず会わない間にあつた出来事を、煩わしくなく、かつ退屈しない程度に話題として振つてくる。祇園にあしらつてはいるものの、彼女もいつの間にか彼に上手く会話するよう誘導されていた。

気が付けば、あつという間に時間が過ぎていく。途中、食事などもしたりして、二人は何処から見てもカップルそのものというよりも何よりも、この時間を曲りなりとも「楽しい」と感じている自分に祇園は気付いた。

中学の頃もまとわり付かれていたが、その時ともまた違う楽しさが其処にはあつた。ちょっとした仕草に自分が大事にされているよ

うな、包み込まれているような、妙な安心感が伴つてゐる。

「どーしました?」

不意に、サービスエリアの休憩で缶コーヒーを飲んでいた早海が自分を覗きこみ、そんなことを自覚していた祇園は、また変に胸を刺激された。

「なんでも、ない!」

そしていつもどおり怒ったように踵を返すと、折角なのでアーバン地名物の焼きはんぺんを買おうと座台へ向かつたのであった。

楽しくわらわらと過ごしてゐるうちに、一人は懐かしい土地へと辿り着いた。

昨年までの帰省では電車だったので見えなかつた子供の頃自転車で走つた畠の中の道や、遠足で出かけた時の風景などを見ながら通り過ぎる。祇園は懐かしさから、窓に張り付くようにそれらを見ていた。

「そーいや、あそこで宿泊研修しましたよね」

「そーそー。一階に幽靈出るとか噂があつて」

思わず会話に乗つてしまつた祇園であったが、はたと気付いた。

五年前に、彼に別れすら告げず、この土地にはもう何も思い出を残さないと決めたのに。

成長した彼と二人での風景に居るといつ、不思議な感覚と高揚感。

祇園はそれを一生懸命胸から追い出そう、何にも感じていいくふりをしようとしたが慌てて風景から眼を逸らし、自然に沸き起る郷愁も懸命に封じ込めようとした。

それから祇園の母親が眠る寺に着くまで、一人は無言になつてしまつた。

やがて寺に到着すると、駐車場に車を止め、祇園は早海と母親の

墓に向かつ。

小さな墓の前で、彼女は花を備え、手を合わせる。初めて此処に来た時は少女であったのに、今はこのよつたな青年と訪れていることを不思議に思いながら。

だがやはり、頼もしくもあつた。自分に付き合つて手を合わせてくれた早海にちらりと視線を向け、祇園はそんなことを思つていた。

「これで親父さんだけじゃなく、お袋さんにも挨拶できましたね」その余分なことには、ざるりと彼を睨みつけたものだが。

無論、早海のことは報告などしていない。家族でもない男性を此処に連れてきたことについては母親にも少し罪悪感を持つたが、過ぎてしまつた事を言つても仕方がない。

「さて、これからどうします?」

寺の駐車場で、早海が車のエンジンを掛けながら尋ねた。携帯電話の時計で時間を確認すると、午後一時であった。目的は果たし、彼と此処に泊まるつもりなど祇園には毛頭ない。今から帰れば夜には家に帰れる そう思ったのだが、

「中学とか、見に行きます? 五年ぶりなんでしょう?」

どうしてか、「彼」にそう言われた瞬間、頑なに断らなければならないのに、何かに思考を溶かされるように再び素直に頷いてしまつていた。

五年間の空白が祇園にはある。あの頃の自分と、今の自分は違うと彼女は思つている。

「あること」から逃れる為に、全てを取り残してきたからだ。だから早海の事も祇園にとつてはあの時間に置いてきた存在の筈なのに、彼はそれを飛び越えて彼女の前に現れた。しかも五年の時をしっかりと感じさせる姿で。

祇園はまるで魔法に掛かつたよう、その彼に誘われるままに、

今度は通っていた中学校へと向かつた。

彼女の身長はあるの頃と変わらない筈なのに、校舎がやけに小さく見えた、というのが五年ぶりに訪れた中学校に抱いた第一印象である。それは大学と比べているからか、少しなりとも人生経験を積み、精神的に成長したからなのか。

盆が近いので学校には誰も居ない。しかし日直の教師は居るかもしない、と早海は離れた駐車場に車を止め、祇園の声も無視し、閉ざされた裏門を飛び越えて中学校の構内に侵入してしまった。祇園も眉間に皺を寄せながらも、どうにか通れる門の隙間から、彼の後を追い中に入つてみる。

緊張しながら進むものの、中は案の定無人。そして祇園は思った以上に郷愁を感じなかつたことに、胸を撫で下ろしていた。

それはただの風景であり、学校であると、意外と客観的に彼女の心が受け止めていたからだ。

これなら、心を乱されなくて済む　　そう思つていたのだ。しかし。

誰も居ない暑くむせ返る学校の構内を、祇園はあるの頃とは違う、背の高い早海と思い出話をしながら歩く。

昇降口、当時建て直されたばかりの体育館、砂埃の舞うグラウンド、錆付いた倉庫、藻の匂いのする中庭　　どんな場所でも彼と会話を交わしていたことに彼女は今更ながら気付いた。其処に、幼い早海と祇園は居た。

だがそれは幻想でしかなかつた。もう一度と戻らない日々の、繰り返されることはない元「日常」。そこで祇園はふいに実感させられる。

もう、五年間の空白が埋まることはないのだと。何をしても。

これはただの校舎であり、「物」でしかない。 そう、自分が生きていた証は、もうこの地には何もないのだ。

それは予め分かつっていた筈であったのに、この場所でそれを自覚した瞬間、彼女は胸が締め付けられるように寂しく思われた。

「どう、しました？」

早海が急に立ち止まつた彼女を振り返り、祇園はそれを困つたような顔で見上げた。

しかし、彼女は考える。

全てを置いてきた、この取り返しのつかない五年間は祇園自身が作ったもの、そしてどうしようも出来なかつたことである。

だが証はなくとも、それは「記憶」として祇園の中に残つていた。そして彼女ひとりだけではない。この男の中にも、それが共有してある。

その男が今、彼女と一緒に此処に居る。その彼が、自分と一緒に居たいと言つ。

自分は、ひとつじやない。

そうした想いが寂しさを感じる祇園を自己保身させると、急速に優しく広がつてくる。おそらく意図的にこの感情を彼女に与えた早海の真意は、未だ分かつていない。

だが、五年間がもう空白のままでも今、彼と共に居る現実がある。それだけで十分幸せなことではないだろうか？ 欲しいものはもう、手に入つているのではないだろうか？

自分はただ、五年前のあの逃げ出してしまつた時の所為にしているだけではないだろうか。

そう思つた祇園はやはり困つた顔をしているのだが、早海はそんな彼女を見てふっと笑い掛けた。

「この上、図書館ですよね」

一人が立ち止まつたのは、丁度北校舎 職員室とは反対の位置にある　の一階部分の渡り廊下であつた。図書館はそれこそ、二人が一番言葉を交わした場所である。彼の意味深な笑顔に、祇園は恥ずかしくなり、ふいと顔を背けた。

しかしそこで早海は身を屈めてくると、軽く彼女に口づけてきた。

「な……っ……！」

祇園は真つ赤な顔をすると、一瞬で唇を離した早海を抗議するよに睨んだ。

「誰、かに見られたら、どーすんだ、よ……！」

「どうせもう、知り合いなんか居ないでしょーが」
せせら笑う早海に、「そういう問題じやない！」と彼女は本気で彼を張り倒したくなつた。まだ彼と交際すると決めていないのに、まるで恋人のように、自然にそんなことをしてきた早海が恨めしかつた。

その行為により、祇園はまた自分の存在を「確認」出来たわけなのだ。

彼は笑いながら、再び彼女の前を歩き始め、足を一步踏み出したところで、祇園を振り返る。

「中学の時は、出来なかつたから

」

更にその意味深な言葉に、彼女の言葉は奪われる。真夏の太陽にこのまま溶けてしまひそうだと思つた。

もしかして、ずっと、私とそういうことしたかったの……？

そんな事など恥ずかしくて聞けるわけもなく、しかしそのいつも言葉で仮定をした瞬間、「そつかもしれない」というきわどい幻覚に胸が甘く疼いてしまい、祇園は赤くなつて俯いた。

それでも彼の背中を追いかけて歩いてしまつた。引力にでもやられているように。

そしてそれをきっかけに、五年前のことなど忘れようとしていた祇園は、早海と中学校だけでなく、近くの買い物をした駄菓子屋（奇跡的にまだ残っていた）や、桜の名所であった公園、小さい頃いたずらをした神社、友達と遊んだ川、お気に入りの本屋、潰れてしまつたスーパーなど、重なつた思い出や重ならないそれぞれの思い出を辿りながら、巡つてしまつたのであつた。

それは祇園にとつて、昔のことを忘れないと頑なに拒んでいた割にはどこかすつきりさせられた、とても楽しい時間であつた。空白は埋められなくとも、思い出と一緒に受け止める相手がいる。五年前から因縁のある早海に付き合つてもらつていることに、彼女は感謝すら覚えそうになつた。

行きたい場所が次々に思いつく。確かに車でやってきてよかつたと彼女は思う。時間がどれだけあつても足りないほどだ。

……それでもやがて夕方になり、小腹が空いたところで、二人は古いけれど佇まいは小奇麗な喫茶店に入った。

「ここ美味しいって聞いてたけど、子供だから入れなかつたんだよ思わず祇園も興奮してそんなことを早海に言つてしまい、彼に、「そうだったんですね」と笑つて頷かれた。その笑顔に、祇園は当時此処に入つていくカップルを見てはこうしたことによしばかり憧れた少女時代を思い出し、やはり不思議な気分に陥つた。

ともあれ、真夏の照りつける太陽も徐々にその光を弱め始める。

「そんじゃ次は、なんか夕日の名所みたいなどころ、行つてみますか」

それもまた遠足で行つたことのある公園であつたので、祇園はまた懐かしさにあつさりと頷いてしまつた。

何かの熱に浮かされたように遊び回つてゐるが、夜の帳は祇園の後ろに近づいてきている。しかし彼女はそれを考へないようにしていた。

セコヒでふと、現実逃避のよつてある」といふて思ひ当たつたのだった。早海は中学時代の思い出話はやけにするが、他の時期……小学生や高校生の時の思い出話は しない、と。

祇園とて、此処で父や母と過ごした幼児期のことを懐かしく思い、幼稚園まで見てきたと言つた。彼のそれは、どうしてなのか。

早海は……、実家に帰らなくていいのかな?

「穢やか」そのものである青年の横顔を、助手席からじつそりと覗き見ながら、祇園は疑問に思つていた。

第27話 真実と叫ぶ名のまやかし

「」の高台のある場所に来たのは、祇園が小学五年生の時の遠足であつた。母親が亡くなる少し前のことであつたな、と傾く夕日を見ながら彼女は最後の幸せだった時を思い出していた。

そして当時はかなりの距離を歩かされ疲れた記憶があるが、車で来てみると小高い展望台まで楽に来られるもので、大人になるつてのはいいことだな、とも思いながら歩く。

駐車場からその展望台へと登る時、祇園はロングスカートを踏みつけ転びそうになつてしまい、それを見た早海に笑われた。恥ずかしそうに唇を噛んだ彼女だが、逆に大きな手でその手をとられ、先を歩く彼に引かれてしまった。

「やめろ」と祇園は言おうとしたが、握った手が熱く汗ばんでいて、その熱に何故か反論する気力を奪われる。

同じ寂しさを持つくせに男性と女性だからか、彼は祇園の先を堂々と歩いているような、祇園とは違う視点でその寂しさを見詰め、まだ五年前で時を止めている彼女を先で待つているような、そんなように感じた。

だからこそ、彼にリードされると反論する術が無くなってしまう。逆に言えば、その温かさにこの不安定な身を預けてしまった方が楽になれるかもしれない？そんな誘惑も彼女は感じていたのだろう。

夏休みといえども、平日の夕方。実際、此処は夜景が綺麗なところだと呟つので、今の時間は他にカップルの姿は見当たらなかつた。「土日の昼間と、いつも夜が混み合つそうです」

早海がわざと真面目な顔で解説したが、昼間の方は家族連れで、夜はカップルオンリーであることは言つまでもない。それに夏休

みならば、こんな地方都市の小さな公園になど来ず何処かへ行きそうである。

祇園は遠足で来て以来九年ぶりに、自分が生きていた土地の風景を鉄柵越しに見下ろした。下からの少し強い風に、スカートや髪が煽られる。

早海は一緒に風景を少し眺めた後、一度祇園の手を離し、後退してベンチに座った。

背後で彼がどうしているかは、前を向いて立っている祇園の視界には入らないが、どうやら彼は彼女が満足するまで待つつもりらしい。そう察した彼女は、今は何も考えずにただこの光景を目に焼き付けていた。

きっと、もう、一度と見ることはないかも知れないから。

今は彼と一緒に昔に戻れているような気がしているが、明日には早海の気まぐれが終わるかもしれない。祇園はそう刹那的に考えていた。

夕日で屋根が眩しい光を反射し、オレンジ色の空から雲が薄暗い影を落としていた。

いつまでも、浸っていても仕方ない。

もう、戻れないのだから。進むしか、ないのだから。

暫くその景色を眺め忘れないよう胸に仕舞った後、そう思つた祇園は背を向けた。もう、これでお終いにしようと思ひながら。

早海はベンチに座つたまま、振り返つた祇園を見上げていた。「帰ろうよ」と言おうともしたが、自然と彼の横に腰掛けてしまう形になる。それを待つた後、早海は口を開いた。

「気が済みましたか?」

祇園は黙つて頷いた後、ふと、隣の彼を見上げて問い掛けた。

「早海は、懐かしいとか思わないの? 私よりも長く此処に住んで

たのに……」

「うーん」と彼はわざとひっくり腕組みをして少し考えた。

「まあ、思に出がなこ」ことはないけど、別にこの町でなくともやりたいことは出来るし」

そのあたりのあつさつとしたところは、やはり男性と女性の違いなのかな、と祇園は淡々と答える早海を見て思つた。

「それに、祇園さんも屈ないし」

相変わらずしれつと余分なことまで答える彼に、どきつとこいつより最早がくん、と脱力してしまひや。

「お前は……また、そーゆーことを……！」

よく恥ずかしげもなくそいつこいつばかり言ひよな、と呆れて顔を顰める祇園。

「本当ですよ」

しかし早海は苦笑してそいつこいつ、隣に座つていた祇園の身体を不意に引き寄せた。

彼女の細い身体は、彼の鍛えてこむであらひ腕の中にすりほりと収まり、頑丈で少し汗臭い胸板に頬を寄せることとなる。

流石にこいついうことをされれば緊張し身を固くする祇園であるが、慣れとは恐ろしいもので、彼を突き飛ばして抵抗しようとした氣には、もうならなかつた。寧ろ一ヶ用ぶりのその温もりに、そしてこの懐かしい土地でという状況に、安堵してしまう自分を感じそれにショックすら受けていた。

求められ、支えられている安心感。本当は、自分はそれを求めている。

だが、まだ認められない。

恐いのだ。

「本当……って。まあまさか、大学も追っかけてきた、とかゆ

ーんじゅ……

今まで恐くて聞けなかつたそれを、彼に心を許し、信じ始めてきたからか、祇園は遂に確かめようと口にした。

「そのままか……って言つたら、どうします？」

予想に違わなかつた、早海の答え。

偶然、なんかでは無かつた！！

嗚呼、遂に、避けていた核心に触れてしまつた、踏み込んでしまつた、と祇園は思った。胸の触れ幅が瞬間的に大きくなる。

恐い！

早海の声の振動が、身体を伝わつて祇園に通じる。彼は彼女の背中を、肩を、髪を、耳を、優しく撫でてくる。

「つて、そりや恐いですよね」

早海は笑つた。

「……ツテがありましてね。引越した祇園さんの行つた高校は名簿で分かつたし、偶然部活の大会で友達になつたヤツが、その高校のヤツだつたし。あらゆる手段で調べましたよ」

それこそまさか、ストーカーですよね、と早海は申し訳なさそうに苦笑した。

祇園はどうしてよいか分からなかつた。

それは本当なのだろうか。彼は本当に自分にそこまで執着しているのだろうか。本当に、自分をそこまで求めていてくれたのだろうか。

そう思つ彼女は、彼の言ひ意味では「恐い」とは思わなかつた。

寧ろ、甘いものがまた全身に蔓延していく。

もしかしたら、自分も彼も感覚が異常なかもしれない。「寂しい」という気持ちが強すぎて、心が壊れているかもしれない。

祇園はたつた一年間だけ共に過ごしていた少年が、もうあの土地には何一つ形跡も、生きていた証もない自分なんかを覚えていて、

探してくれたことを心から嬉しいと思つていたのだ。

誰の心中にも自分は居ないと、ずっと孤独に思つていたか

ら。

寧ろ、「恐い」と感るのは、そんな早海を信じて裏切られたらどうしようかといふ不安からだった。

早海は早海で、それを遂に暴露してしまい しかし中々彼を信じない祇園相手には、どうしても避けて通れないことと判断したのだろう、彼女を抱く腕に力が籠る。

頑丈だが震えそうなその腕に、彼もまた「恐れて」いるのではないか、と祇園は思つていた。だが彼はそんな内心を表情には見せずに、いつもの口調で言い切つた。

「でも、安心してくださいよ。別に祇園さんが居なきや生きていけないほど、俺もヤワじやない。丁度この大学、総合大学で行きたい学部もあつたし、成績も合つてたし、 家も出たかつたし。フラン……たくはねーけど、一応、どーなつてもいよいよに、先は考えて手を打っていますから」

言ひ訳のような言葉であつたが、力強いそれに早海なりの覚悟が伝わつてくる。

彼の芯の強さは、祇園もそれこそ五年前から知つていた。やけに愛想はいいし、女の子のようであつたし、軽いところもあつたが、内心は負けん気が強く根性があり、地に足が付いた実直さや冷静さがあることに気付いていた。

それ故に早海は祇園だけでなく、誰に対しても常に穏やかで明るく、取り乱すことなく接することが出来るのだろう。彼女は彼のそういうところについては、嫌いではなく、逆に好感すら抱いていたのだ。

祇園は早海の言葉に、一くんと頷く。

拒絶されなかつたことに、早海もまた安心したような溜息をついていた。警戒心の強い彼女に納得してもらひには、再会して早々にこんな激白は出来ないと彼も思つていたからであつた。

早海は祇園が自分を信じてくれたことを確かめるように彼女の耳を撫で、髪をかき上げながらその顔を上げさせ、至近距離で尋ねた。耳への愛撫に祇園の身体はぞくぞくと感じていたが、その感覚を懸命に逃そつとしながら、彼に覗き込まれる。

「……そろそろ付き合つてゐるつて、思つてもいいですか？」　まだ、駄目ですか？

からかつている、といつわけではなく早海の声は真剣そのものであつた。それはもう疑いようもない本心なのか、それともそんなに演技が上手なのか　祇園はどう受け取つていいか、やはり分からなくなつてしまつた。

彼女は彼の仕掛けた魔法に、既に脳髄まで溶かされていたからだ。小さな胸は再びうるさいくらいに高鳴り、腰から下も既に熱く蕩けていいる。

祇園が彼の告白にきちんと返事をしたことは、結局一度もなく、逆に彼から付き合つたいとは言つていても、愛の言葉そのものを告げられたことはない（それに近いことは言つても、冗談だと思つてきていた）。

しかし彼女が他の男性に、ここまで気も身体も許していることはないのだ。ということはやはり、早海も感じてゐるよつて、祇園と彼のこの関係は「付き合つてゐる」イコール恋人同士の関係、と言つてもよいのだろうか。

逆にそれを認めれば、この彼を「お守り」にしてもよいのだらうか。

それは寂しがり屋の祇園にとつて、これ以上にない魅惑であった。

誰かに傍に、居て欲しい。この彼なら、申し分ない。「好き」の気持ちは分からぬまま、その欲求が先に立つ。

そして田の前の男を求める身体の欲求がそれを促進させ、彼女の正常な思考の邪魔をする。

祇園は返答に詰まり、潤んだような眼で早海を見詰めた。

どう答えてよいか分からなかつたが、彼が自分を裏切るようなことだけは、嫌だと思っていた。其処まで言うならば、自分をこの先もずっと誰よりも、大事にして欲しいと望んでしまつのが女であった。

答えない祇園を早海も見詰めていた。しかし彼は彼女の性格上、拒絶するならばもうとつぐに首を横に振つたり、何か言い返してくるだろうと、「自分」を大事にしている祇園の性質をよく知っていた。拒絶しないのは、決して自分を憎く思つているわけではないのでは、と早海もまた判断していたのだった。

そう思つた彼は、再び、その唇を、奪つた。

先ほどは五年ぶりの学校と言つ感慨と久々の逢瀬に耐えられなくなり、青年から悪戯のよつに重ねたそれだが、今度は感情の高ぶりが全く違つてゐる。

本当のことを格好悪くも話してしまつたが、祇園が自分を拒絶しなかつた そのことに、彼の胸は激しく揺さぶられている。

早海は祇園に長くその唇を押し付けた後、強く腕を握り、顎を抑え、ねとり、と厚い舌を彼女の口内に割り入れた。逃れようとする彼女を逃しはしないと、執拗に追い求め、歯茎や歯列までも舐り倒す。

祇園は首を振つて逃げようとしたが、それを青年は許さない。初めて川原で唇を重ねた時のような容赦は、もうしないつもりであつた。五年分の己の気が済むまで、彼女の身体から力が抜け息が自然

に荒くなるまで、いつまでもそれを攻め続けた。

二人分の唾液が、二人の喉を伝うほど激しく。

いつの間にか、自分の呼吸 鼻から漏れる息が荒くなっていることに祇園は気が付いた。それは何とも動物的な息遣いであり、羞恥に頬を益々染めた。

そして唇の端から漏れる彼の息もまた同様に、祇園は恥ずかしく思っていた。しかし早海の濃厚な接吻と生き物のような舌の動きには、彼女もいつの間にか興奮させられていた。

それに気付いた瞬間、彼女は彼のTシャツを縋るように掴むと、はしたないとと思いながらも、その舌をたどたどしく動かしてみる。

……やがて顎も疲れた頃、ようやく祇園は解放された。

七夕の夜にされた初めてのディープキスの比ではない。彼女は疲れ果て、唾液塗れのままぐつたりと早海の腕に身を任せた。
どくんどくんと、若い二人の身体が互いに聞こえそうなほど脈打つ。

遂にしてしまった と、二人共に思っていた。それは遂に「恋 人同士の合意の下に」という意味で。

そして例にも漏れず、愛の言葉を囁き合わないまま、身体の関係だけを結ぼうとしている。

やはり今時の若者のようだと、祇園自身も思いながら。しかしそうした言葉を確かめ合つ」の方が、彼女には恐かった。

そんなことをしてしまえば、本当に引き返せなくなるような気がしていたから。身体だけであれば、何処かまだ、間違いで終わらせられるような、一度きりで終わるような気が彼女にはしていたのだ。

はあ、と熱い溜息をつく祇園に早海は再び低く魅惑する声で囁いた。

「俺の実家 、 行きますか？」

祇園はぴくん、と反応した。その言葉の示す意味を一瞬考える。このまま野外で無理矢理されてしまうのか、ホテルにでも誘われてしまうのかと思っていたが、今までの会話から察するに彼が避けているであろう、彼の実家に誘われた。

突然の提案の真意はやはり祇園には分からなかつたが、彼の家には誰かが居るかも知れず、直接的な行為の目的を示していない選択肢にもとれることと、やはり早海のことをもつとよく知りたいと思つていたことから、彼女は素直に頷いてしまつた。

まるで魔法に掛けられたようだつた。生まれて初めての、甘い性の誘惑という名のまやかしに。

早海のトラウマを弾く琴線。彼はまだ、最後のそれを見せていかつた。

祇園は悪魔の誘惑に負け、その一番大事なことに気が付くことが出来ずに居た 。

第28話 境界線の向こう

身体の一部分はひどく熱く、濡れていたが、祇園はふらふらと再び早海に手を引かれ、車のシートに凭れこんだ。とても疲れている筈なのに、興奮して胸がどくどくと鳴っていた。

今まで拒否していたのに、遂に彼を受け入れ始めている。いつの間にか、彼女の心はそのように変化していた。

祇園は運転席の何も言わない早海の横顔をちらりと見ると、再び懐かしい風景を目にし、それを五年前とは全然違う気持ちで眺めながら、早海の意のままに連れていかれた。

やがて彼女が住んでいた街の筈なのに、見覚えのない風景となる。少し狭い道の住宅街は来たことがなかつたが、それは祇園が早海の家を知らず、その近所にも友達が居なかつたからである。

そして車は一軒の大きな家の前に止まつた。

「着きましたよ」

早海が祇園の顔を見ることなく、微笑むと呟いた。
着いたんだ。

いくら一人が中学生時代、比較的仲が良かつたと言つても付き合つていたわけではない。祇園は学校での早海しか知らなかつた。そして今でも大学での早海しか知らなかつた。

彼がどんな場所で育つたのか、何を考えていたのか、彼のプライベートの顔は知らない。彼女はそういう意味でも緊張して車から降りる。

早海の家族が居たらどうしようかと思つたが、彼は車の鍵にいくつかぶら下がつていた鍵のうちの一つで、家の鍵を開けていた。

「おつきい、家だね……」

思わず祇園は感嘆の溜息をついた。

彼女が住んでいた家は三人が住めるだけの小さなもので、その後父親と住んだ借家も同様であった。この家は少なくともその倍……敷地全体を入れれば三倍はあるだろう。

金持ち？の息子の割に、なんであんなたくさんバイトしたり、ボロいテント持ち歩いてたり、野宿が得意だったりするんだろう……。

祇園の溜息に苦笑している早海を見ながら、彼女は更に不思議に思っていた。

鍵を開けた早海に家の中に招き入れられる。確かに彼には母親がおらず、平日の夕方であれば父親は仕事にでも行っているのである。

その中に一步入った瞬間、祇園は己の住んでいた家とは全く違う空気を感じた。

人の、温かさが感じ取れない、という空氣。

言い換えれば空気が冷たく、薄暗く、無機質な匂いのする逆に言えば食べ物や人の匂いなど、有機的な匂いのない空間が広がっていた。

明るく、自分たちの笑い声が今にも何処からか聞こえてきそうな、祇園が手放したあの家とは全く違う雰囲気。

それは祇園に対して時々見せる、早海の「陰」の表情と、同じ空氣であるような気がした。

玄関で立ち竦む祇園を、早海が振り返った。彼女の心配が分かつのか、今度は彼女の眼を見ていつものように明るく、優しく笑う。「よかつたら、上がってください」

祇園はその笑顔を信じ、そして彼のことをもっと知りうると勇気を出して家の中に上がった。

人の気配はなくとも、小綺麗な広い居間に通され、大きなソファに祇園は座った。さすが、クッショーンもふわふわとしている。直ぐにエアコンも掛けられ、涼しく快適な空間となる。

「い、今、誰が住んでるの……？」

聞いてよいことと悪いことの区別がつかないが、彼女は台所でお茶を入れて戻ってきた早海に問い合わせた。

「……親父だけですよ」

淡々とした声が返つてくる。

「その割には、き、きれいだね」

祇園は手元の手触りのよいクッショーンを撫でながら取り繕うように言った。確かに中年男性が一人で住んでいる割には埃もなく、整頓された状態であったのは違和感を覚えたのだ。

「ああ、昔から清掃業者的人に来てもらつてましたから。あの、妙に綺麗好きだし。家には女は連れ込まない主義みたいだし……今でもそうみたいですね」

早海は笑いながら人事のようにそう言つと、祇園に冷たいグラスを渡した。

見上げたその笑顔は作り笑いかと思い祇園はどきりとしたが、意外にもいつおどおりの自然なものであつたので、こゝそりと胸を撫で下ろした。

また地雷を踏んだかと緊張している祇園の様子に気付いたようこそ、早海は屈託なく相好を崩す。

「前も言つたけど、親のことは気にしないでいいですよ。もうどうしようもないことなんだし、その人はその人、俺は俺だし　あと一年は保護下に居なきやいけねーんだけど」

早海は祇園の隣に座りながらそう言つと、最後は苦笑した。隣と言つても大きなソファなので、距離は身体ひとつ分以上空いている。祇園がお茶を飲みながら早海を見ると、彼は身体の力を抜くようにソファに凭れかかった。

その言葉から、彼と父親との確執を祇園は垣間見た気がした。しかし早海なりにある意味祇園の家と同様に、「個」として親も一人の男と考えることで、父親の生き方や上手くいかなかつた親子関係を、自分の存在を否定することなく受け入れようとしているのかな、と何処となく察した。

これは祇園の元からの勘のよさだけでなく、塾の講師として多くの子供たちと接してきたこともひとつにあるかも知れない。

しかし嫌いかもしない家であれ、早海にとっては幼少期から過ごした場所である。これまでにないリラックスした様子と、家族といふものへの複雑な思いを祇園は彼から感じていた。

五年前も含めて、自分は今まで彼の何を見てきたのだろう。あの明るさも優しさも、全てこうしたものに裏返しであったのかいや、裏でも表でもない、この現実を受け入れ耐えたからこそ、彼はああしていつも笑っていられたのではないか。

どんな彼でも、全部同じ「早海」である と彼女は信じているつもりであった。

早海は斜め上を見ながら息を吐き出した。

「こんな家庭環境のヤツじゃ、嫌だつて言うんなら仕方ねーけど…」でも、今まで誰も家ん中には連れてきてませんけどね

その少しそんざいな話し方が混じつてることからしても、今祇園に見せてているのは「素顔の彼」なのだろうと彼女は思っていた。まだ成人はしていないが中学校の時と違い大人びたその表情は、自分が今まで見たこともない「男性」となつた早海なのだと思うと、恐いと思うよりも、好奇心や嬉しい気持ちが僅かに勝つてくる。

今まで誰にも見せていない彼を、彼は自分に見せていく。

それが本当であれば、女性としてはそれだけで、ぐらりとくるものがあるが、あとは冷静に騙されているかいなかを判断せねばならない

らない。

「ううん……」

「とりあえず意に反する」とを言われたので、祇園は否定した。
「恋愛に限らず、付き合う人を選ぶのに、家族はそんなに関係ない。
『今』、どんなことを考へてるかとか、私やその人自身を大事に出
来るかとか、そういうので、人を選びたい……」

早海はそう言った祇園を、眼を細めて振り返った。

「なるほど。 祇園さんならそう言ってくれると思つたけど」
そのいつもどおりの嬉しそうな反応に、祇園もほっとしていた。
やはりこれは彼の本心なのだろう、と確信しながら。
そしてそれを更に確かめるために、祇園は尋ねる。

「で、でもさ、どうして私を此處につれてきたの……？」

早海は祇園をゆっくりと見た。何回もこの状況に陥り慣れてきた
のか、恐い、とはそれほど思わずにはいられた。

先程の大学まで追いかけてきたという激白といい、今はもつと多く
の真実が知りたいと、彼女は勇気を出して彼を見返す。グラスの中
の氷が音を立てて解けた。

「どうして、って」

早海は苦笑して肩を竦めた。

「付き合いたいって言つてるんだし、『好きだから』って言つ
たら、軽く聞こえますか？」

「……」

今までならまたおかしな冗談を、と言つてきたのに、この状況と
表情、先程のキスの後では否定をすることの方が空々しい気がして、
祇園は眼を伏せる。

「……まあ、それだけじゃないんですけどね」

しかし意味深な言葉が聞こえ、祇園は再び自分から顔を逸らした

早海の方をもう一度振り仰いだとした。

何故、自分なんかを大学まで追いかけてきたのか。

その「理由」もまだ聞いていない。求められたことは確かに嬉しくて彼を受け入れようとしているが、それがどうして、「自分」だったのか。

それを知るのが恐くとも、寂しさからずっと彼に想つていて欲しいと願うならば、それは当然知らねばならない、知りたいと思うこと。

「それだけじゃ、ないつて……？」

祇園は思い切って少し震える声で尋ねると、目の前のガラスのテーブルにグラスを置き、意を決して早海の方を見た。
明かされているようで、まだ明かされていない最後の真実。空白の五年間、彼は何をしていたのか、何を考えていたのか。

「それに、も、もしも、大学まで追いかけてきたってくらい、……なら、高校の時だって、同じ県内だから高校とか、会いにこれたじゃないか。早海の性格なら、それくらいやりそうなのに、どうして、今更。……そうだよ、それもあつて。だから最初から嘘つぽいって

」
その瞬間、祇園の身体が回転して、天井を振り仰ぐ格好となつた。背中に柔らかいものが当たり、驚きの余り言葉の続きを出でこない。大きなソファの上に、自分が早海に押し倒された、ということを、彼女を覗き込む彼の表情を見上げて理解した。

やつぱりこいつになつてしまつたか、と何処かで覚悟し、受け入れている自分が居る。そのこととこの体勢に、彼女の頭の中が、熱くなる。

「嘘つぽいって、まだ言つわけ？……こんなに――」

その後の言葉は続けてはもらえなかつた。「こんなに、……なのに」という間の言葉はそれくらい分かれ、といふことなのだろうか。

彼の身体がそのまま圧し掛かり、もつ堪えきれないほどばかりに唇を塞がれ、頬や首筋に口付けを降りられる。

「や……っ！」

顔を横に背けたが、男の身体の重みと、腕を封じられ身動きが取れない。今までのようにただ手で触れ合っだけではなく、本当にセックスしてしまうかもしれないという恐怖に祇園の身は凍る。

だが、もう逃げられない、逃げたくないと思っていた。

本能的に、彼女は察知していた。この同じように「寂しい」男が気になると、自分でもよくわからない部分で、本当はきっと最初から引かれ合っていたのではないかと。

だから己の寂しさを埋めるためにも、それを理解してくれるような錯覚を与えるこの男が不可欠ではないかと。何処までも己を追ってくれたこの男を、一度信じてみたとなると。

だからこそ裏切られたときのことが恐いのだと、様々な思いが祇園の中でぐちやぐちやにかき混ぜられる。

しかし彼に耳たぶや耳の中まで優しく口付けをされ、舌で舐られ、声を上げながらそれに溶かされしていくうちに、その思考もあやふやになっていく。

冷静な判断など出来なくなり、身体だけが眼の前の男性を求め始める。その欲望に従つてもよいものかどうか、祇園の理性は徐々に砕かれていき、ただ身体の中心が疼き出す。

この初めての性体験をもつともつとしてみたいという好奇心や別の本能が、過去の少しだけ味わった快感を思い出しては勝つてしまい、眼の前の快楽だけを欲してしまっている。

びひょひょ。

祇園はざわざと眼を閉じると緊張しつつも、圧し掛かる男に身を

預けていた。

第29話 激情

夏の夕暮れ時、薄暗くなつた家の中で、一組の男女が身体を重ねようとしていた。

玄関と離れているとはいえども、居間でそのまま行為に及ぼうとしている早海に祇園は慌てて、

「は、早海の親父さんが帰つてきたら、ジーするんだよ……！」
彼の息が首筋に掛かり、それにぞくぞくしてしまつことじどうとか堪えながら、そう口にするが、

「こんな時間に家に居たことなんかねえよ」

早海は低く、言い捨てるように呟いた。

その口調はつまらないことを気にするなという意味か、子供の頃彼がそれに対して不満を抱えていたことを表しているのか、今の祇園には判断がつかなかつた。

そうした小さなことに気が付いたとしても、彼の手がいよいよ口のエシャツをたくし上げれば、混乱が先に立ち、何も考えられなくなる。

本当にこの男に身を任せてよいのか、とう不安はまだ祇園の中に残つてゐる。

しかしそのまま下着まで外されれば、もう何も覆い隠すものなどなく、柔らかく白いそれが解放される。全てを見られて恥ずかしいと思つた祇園は慌てて胸を隠そうとしたが、その細い腕は難なく捕えられ、ソファの方に押し付けられる。

「見ないで……！」

早海がどんな顔で己を見つめているのか、祇園にはとても見られない。顔を背けて必死に訴えるその恥じらいに赤くなつた表情が、青年の劣情を益々煽つてることなど気付きもしない。

早海はふつと笑つたような息を漏らすと両手に収まるそれに、優

しく触れた。

男の手の動きに、祇園の細い腕では叶わない。最初はその引き締
まつた腕を静止のつもりで退けようとしたがやがて力の差に諦める
と、ただ顔だけを横に振った。

本当は自分でも身体の内側に火が点いてしまったことを、認めな
がら。

やがて、七夕の夜のように敏感な場所に触れられる。なぞられた
瞬間、あの夜以上にびくん！と強く身体を反応させた。声が出かけ
て、祇園は口を押さえた。しかし彼は彼女の耳元で囁く。

「 声、出していいですよ。聞きたい」

その淫靡な要求に、何もかもが初めての経験である祇園は狂いそ
うになる。現に下着は既に使い物にならないくらい熱いもので濡れ、
繰り返し攻められるたびに、鋭く甘美な刺激が祇園の神経を震わせ
る。

そのうえ薄明るい時間帯。口から手は退けたものの、唇を噛んで
必死に喘ぎを堪える祇園の表情も、早海にじっくり見られているの
だろう。

彼女にとつてはそれだけでも恥ずかしいといつて、果てにはそ
れに唇が押し当たられた。それだけでなく、舌も。

「 !？」

未経験のそのひとつひとつ行為に、彼女の身も心も最早溶かさ
れてしまい、今にもその快楽に理性を手放してしまってそうだった。
どうしようも出来ずに、彼の頭に手を回す。しかしこれでは自分
で押し付けて、彼にもつとせがんでいるようだと祇園は恥ずかし
くなるが、何かに縋らないと壊れそうな心は耐えることが出来ない
のだ。

やがて淫らな吐息と声も、堪えることは不可能になる。呼吸と一緒に
零れ出してしまうが、それでもよがる声を出したくないという

思いと、快樂に溺れ後から後悔したくないと、祇園はビックリ最後の力を振り絞つて口を開く。

「ずっと……私と、こう、いうこと、したかった、の……？」

それは不安だから尋ねたというのもあった。早海はただ女を抱きたいがために、甘言を並べているだけではないかと。

しかしそれには五年間という、余りに長い時間を彼は彼女に掛けていた。それに早海の外見と性格ならば、直ぐに性欲を満たせる相手の一人でも作れそうなものであると祇園は思っている。

もつとふさわしい相手がいるだろうに、こんなところまで追いかけてこなくていいのに、広い大学で毎日探さなくともいいのに

「自分なんかにここまで執着していること」。

それが祇園には意外であり信じられないこともあるが、逆に彼を信じざるを得ない根拠にもなっていた。

それを彼女は口にして確かめた。ただまだひとつ、「何故自分なのか」という疑問だけは埋まつていらないのだが。

早海は祇園の胸の上で苦笑すると、上目遣いに彼女を見上げて答えた。

「まあ、ね。少なくとも、大学で会つてからは。中学の時はガキだったし、祇園さんよりもチビだったし。せめて身体デカくなつてからじゃねえと、かつこ悪いじやん」

あんなに優しく笑っていた彼が、以前から自分をそんな対象に見ていたことを、祇園は初めて自覚し、その胸がまた甘く疼く。あの笑顔の裏で、どれほど自分を求めていたのかを想像すると、本当におかしくなつてしまいそうだった。

「で、でも、高校の時は、私のこと、忘れていたくせに。いまさら、し、信じろって言われても……」

早海が顔を完全に上げ胸への刺激がなくなつたことから、彼女は熱い息をつきながら、また疑問を投げかけた。早海は軽く溜息をつく。

「だからさ、中学の時はいくら好きでもガキだつたし、そつちもチビチビ言つもんでもコンプレックスもあつたから、どうじよつも出来なかつたの。だから高校一緒に通いたいって言つただろ。……背でも何でも追い越すまで、一緒に居ればなんとかなると思つてたし」身体を起こすと手を祇園の顔の横につき、彼女を下に見下ろして敬語も使わずそう吐き捨てる早海を、怒つているのかと祇園は心配して見上げた。胸が剥き出しになつていても忘れるくらい、彼の話に集中してしまつていた。

「そのくせ、そつちは俺のこと好きじゃねえとか言つしや」その言葉に祇園は五年前の卒業直前を思い出す。不安と羞恥に覆われて、彼を、全てを拒絶したあの日のことを。

覚えていたんだ、とやはり傷つけていたことを申し訳なく思ひながらも、自分の存在が彼の胸に五年間ずっとあつたことを浅ましくも嬉しく感じてしまう。

「だから余計にどうしようも出来なかつた。腹立つたから高校入つたら、あと少し背伸びたら、またつきまとつてやろうかと思つてたら、そのまま引越して居なくなつてんだもんな。名簿見てショックだつた」

早海はそこでまた深く溜息をつくと、祇園を真剣な表情でじいつと見据えた。それは例の「陰」の空気が強く出ていると祇園は思い、眼には少々怯えの色が浮かぶ。

「嫌われて、何も言つてもらえないで。急に祇園は消えるし、……あとは、思い出したくなーや

初めて名前を呼び捨てにされ、祇園の全身が何故か粟立つと同時に、自嘲的に笑い眼を逸らした早海が気になつた。

それはおそらく、あの可愛らしい笑顔から、この様々な表情を見せるようになった青年に成長するまでの空白の五年間。

心配そうに彼を見上げたままの祇園に、彼は珍しく続けて攻撃的

に微笑み掛けってきた。しかも、その手をスカートの中に侵入させ、彼女の柔らかな場所に不意に触れながら。

「人を『こんな気持ち』にさせといて、あんなひでえこと言つといで、さよならも行き先も言わずに消えちまつた。そんなに俺つてどうでもいいのかつて思つた。だからヤケになつて、もう忘れちまおうと思つた。嫌われてるんなら、仕方ねえだろ。つうか、忘れよつとした。こんな気持ちにさせられるくらいなら」

その時のこと思い出したくないと言つよう、そして彼女への報復のようじ、早海は下着の上を指で強く擦りつけてくる。七夕の夜よりも、荒々しく、踊るように。

祇園もその刺激に直ぐに反応した。彼の話に集中したいのに、その強烈な感覚には思わず声を上げて身体を『なりに』反らす。

早海を傷つけていた。

その罪悪感に祇園の心も痛んだ。『すればよいのか、何をすれば罪が償えるのか分からなかつた。』

「あるひとつの理由」から執着するようになった少女を失つた少年は、身体が成長期を迎え、バランスがとれず精神的に不安定になる中で、大事なものに拒絶されそれを失つたことで、益々危うくなつていた。

「だから、あの頃のことなんて、思い出したくねえんだよ。毎日なんかいライラとしてて」

忘れようと思つて、一時、他の女を適当に選んだ高校生時代。早海はそれすらも思い出したくなく、そのことは決して口にせず、彼女を指で攻める方に神経を傾けると話を続ける。

「それでも、忘れられなかつた。だから成長して、落ち着いたのか分からんけど、もう降参しよう、諦めて認めようつて思つた。祇園さんじやなきやダメなんだつて。そう思つたら、無性に会いたくなつた。嫌われたままでも、会つてスッキリしたかった。それな

のに、そつちはちつとも変わってなかつた

彼が悩み、成長する間にも、その時よりは女性らしくなつてはいたものの、ぶつきらぼうな仕草も少女のような純真さも時折見せる優しさも、大人になつた彼女は何一つ、変わっていなかつたのだ。まるで時を止めていたかのようだ。

その時に早海が感じたものは、絶大な安心感と純粋なままだつた彼女への愛しさ。

それに加えて密かに胸の内に抱いた、どこか憎悪にも似た、熱い激情。

「しかも、呑気に他の男のこと好きになつてやがるし。付き合つてたり、既に誰かにヤラれてたら、マジでどうじょうかと思つた」「つ！ やめて……つ！！」

その瞬間、激白に併せるよう上から何か敏感なものをきつく摘まれ、祇園の腰が跳ね上がつた。それにはさすがにバランスを崩してソファの上から転げ落ちそうになる。早海はそれを抱きかかえると、彼女の身体を起こし、自分の座つた上へと腰掛けさせた。そして後ろから無防備な姿の彼女を再び抱き締める。

「お、怒つてる……？」

乱暴な所作と口調の早海に、少々恐れを抱いた祇園は、恐る恐る後ろの彼に問い合わせるが、

「別に。 ようやく付き合つてるっぽくなつてきたから、いいけど」

その声もどこかぶすりとしたものであるが、抱き締めてきた腕は意外に優しく、彼女を痛めつけるようなものではないだろうと、祇園はほつとしていた。

そして彼のやるせなかつた激しい気持ちを初めて聞かされ、申し訳なさに胸が痛むと同時に、やはり「好きだから」という小さな言葉ひとつでは足りないのであろう、本当の「理由」が気に掛かつた。

そこまで彼が自分を求めるよう駆り立てたものは、何なのか。
寂しさ　？そして自分は、そこまで自分を想ってくれた彼をどう想つているのか。

祇園の答えが出ないまま、彼の中で五年分の我慢や鬱屈、彼女への思慕、そして憎悪に近いようなものすらが、強い征服欲へと形を変えて、彼女の身体を徐々に凌辱していく。勿論、いつものような彼女への絶対的優しさだけはどこかに残し、彼女の反応を確かめてやりながら。

「本気で嫌なら、そう言つてくださいよ」

最後の気遣いを言い残すと、彼はスカートの中から彼女の下着をずり下ろし、細い足を滑らせて床へと落とした。

そして遂に直接、後ろから触れてきた。反対の手は彼女が先ほど感じていた、小さな胸へと宛がう。

祇園は再び悲鳴のような声を上げ、彼女は早海の胸に後頭部を押し付けた。

しかしソファの背凭れも更に後ろにあり、頑丈な腕で抱きかかえられているので、彼女はどうにも逃れ出来ない。彼の魔手から、胸が壊れそうな刺激から。

正直、自慰とまではいかないが、七夕の夜以降、時折思い出しては祇園の身体は火照り、その部位を触りそうになつては手を引っ込めていた。しかし今はそんな生易しい刺激の比ではない。激しいそれに、初めての深い快感を味わされている。　彼のたつた一本の指により。

そんな風に「はじめて」の相手となつてしまえば、絶対に彼が忘れられなくなる。早海のことだけを考えてしまいそうになる。それすらも彼の企みなのだろうか。

それは本当の愛なのか、ただの刷り込みや性欲なのか、頭の中も

一緒に搔き混ぜられている祇園には分からない。

分からぬことが不安で泣きそうになるが、それ以上に享樂により別の意味で泣かされそうになつてゐる。

「ふあっ！！」

やがてあらぬところに指を入れられ、初めての異物感に祇園は驚き、腰を引く。

しかし彼女の身体の準備は整つていたことと、彼の所作も優しいものであつたことから、痛みはなかつた。そのまま感じたことのない魅惑の世界に突き落とされる。

しかしそうした祇園の反応を、視線で、指で確かめるたびに、早海は嬉しそうな、そして辛そうな熱い溜息をついた。

最早羞恥も飛び、素直に悶えていた祇園であつたが、早海が彼女の身体を横に向けたので、彼の方を恥ずかしくも至近距離で見上げることとなつた。しかし既に理性を粉々にされている彼女は、それを逸らすことなく真っ赤な顔で見詰め返した。

じつと互いの瞳を見ていた二人は、やがて再び唇を重ねる。自然に互いに舌を動かし、絡め合ひ。早海は祇園の唇を吸つた後、手は動かしながらも唾液に濡れた口を離し、そのまま彼女の眼を覗き込む。

そして遂に彼からの口から、祇園の中で封印していたあの言葉が紡がれてしまった。

至近距離で、動物のよひな息の中。あの日、彼女の心を碎いた言葉を。

魔法のように。彼女を壊し、そして新しく思い通りに構築するよう

「もしかして、俺のこと、好きになつてくれました？」

「う。

第30話 愛情？

五年前、同じことを尋ねられ祇園は拒絕した。それは、恐か

つたからだ。それは、今でも変わらない。

だが、相手は五年の時をかけてそれでも彼女の前に現れた。それを拒絶する理由はあるのか。

五年前、「もしかしたら、早海のことが好きじゃないのか」と問われ、それまで考えようとした仮定が少女の中に広がった。本当は随分前から、そういうふた気持ちであつたような気がするほど、簡単に。

もしかしたら、それは錯覚かもしれない。今もこの雰囲気に流れているだけかもしれない。

だがそのまま、まやかされそうになる。気持ちだけでない、初めての行為に身体を高められることで、その言葉が麻薬のように彼女を麻痺させている。

これだけ自分を「よく」してもらつて、これだけ身を任せていってその相手を、嫌いなわけがない。

だがそれは、「本当の愛情」なのだろうか。

彼に見詰められる。囁かれる。

指で感じるところに触れられ、祇園は壊されていく。

つまりは、興奮状態にさせられている。田頃冷静で臆病な彼女であるが、気の高ぶりに合わせて気が大きくなっている。いつもの彼女でなくなってしまうほどに。

祇園の眼の前には頑丈な肉体があつた。この青年は一見軽薄そうにも見えるが、きっと本心では頑固で責任感が強く、頼りがいのある男だらうと今までのことから想像出来る。

その彼が、孤独で寂しがり屋の少女だつた女に手を差し伸べた。それだけでもう、縋りつきたくなつてしまふのだ。

だがそんな受身の気持ちが、彼への「愛情」と呼べるのだろうか？ 祇園にとつて早海への気持ちは分からぬままであるが、再会して彼と触れ合つてしまつてから、そして今日のこの行為の中で、本当は幾度も、この男を「欲しい」と思った。己の本能がそう訴えていた。

祇園は自ら手を伸ばすと、汗ばんだ早海に倒れこむように抱きついた。いつも彼女からは考えられない行動だが、彼の頬に、耳元に唇を寄せ、性的に興奮したまま「その言葉」を生まれて初めて他人に対して唱えてみる。何も考えず、ただ胸を、震わせながら。

「 すき」

その言葉に、びくん、と早海が強く反応した。

この姿勢では祇園から彼の表情は見えず、代わりにひどく、低く掠れた声だけが聞こえてきた。

「もう一回、言って」

同時に彼の片手で強く抱き締められながら、片手では最も深いところまで指を突き立てられ、祇園は身体を反らして呻く。

「す、すき……？ かも……？」

感覚の波が収まつた後、もう一度呟いた。言いながら祇園は恥ずかしくなるが、彼女の中で何かが満たされ、益々彼の指の動きを中心地良く感じてしまう。

そんな快感が欲しくて、彼女はその言葉を繰り返しただけかもしれない。実はそれを感じたいが為に、こんなことを言つてゐるのか？

己の気持ちに疑問を感じた祇園は、高ぶつた心に冷や水をかけられたような気分になる。本当に自分は彼のことが好きなのだろうか、

と分からなくなつてくる。

「本当に？」

早海は指を引き抜くと、彼に密着させてくる祇園の身を起こしてその眼を覗き込んだ。

全ての嘘を見抜かれそうな、恐いくらいに真つ直ぐな少年のような瞳。祇園はそれを逸らさなかつた。何故ならこれから言つ「このこと」は、情けなくも今の正直な気持ちだつたからだ。

「でも……『めん……ほんとは、分からぬ』……き、気持ちいいからこいつこいつ気分になるだけかも、しれないし……。早海が、好きなのか、『こうこうのこと』、が好きなのか。……でもつ、誰ともこうなりたいわけじゃなくて……」

つまりは「ペッティングが好きだ」と言つてしまつたことと同じになり、祇園は恥ずかしさに再び俯いたが、早海の真剣な問い掛けに対して、彼女もまた正直に答えたのだった。

逆にこんな状況でなければ、まだ彼のことは好きではないと意地を張つたのではないだろうか。この言葉はただ興奮してそう言つただけなのか、どうなのか。

行為 자체が初めてなので、祇園にはそれが判断出来なかつた。その困つたような、馬鹿正直な彼女の答えに早海は苦笑した。

「う、ごめん……」

祇園も早海にはつきり「好きだ」と言われたわけではないが、先ほどの彼の激白に対してもこの答えは失礼であろうと、思わず謝つた。「でもまあ、そう口にしてくれただけ、あの頃よりは進歩、ですけどね」

怒つた声ではないが、溜息混じりに早海は言つた。

それは五年前に彼を罵倒しながら拒絶したことと比較してのことだろう。祇園はその時のことも申し訳なく思い、下を向く。

その眼の前に、彼の右手が差し出された。早海は人差し指と中指

を動かしわざと音を立てる、

「凄い、……っすね」

それが「何」であるかを察した祇園は、思わず彼の膝から逃れようとした。彼の今までの性的に苛めるような行動は、全てあの日から彼を傷つけてきた彼女への報復なのだろうか。しかし早海はその身体を抱き締めて動きを封じると、問題の一本の指を彼女の口に無理矢理ねじ込んだ。

「やら……っ！」

酸っぱいような苦いような味がし、それが何の味であるか分かつた祇園は、嫌悪感に早海の指に歯を立てて抵抗し、顔を思い切り横に背ける。

痛え、と言いながら肩を竦めて笑う早海は、その指を今度は自らぺろりと舐め取ると、その行動に眼を丸くする祇園を膝からソファの上に降ろし、彼自身はソファの下に座った。

ぽかんとしていた祇園は、そのまま白い膝を横に開かれる。

それによりどういう状態になるか理解した彼女は、さすがに「いや！」と反抗するものの、相手の力にはやはり敵わない。

「だから、見ないで……っ！」

そう言いながらもぞくぞくとするような、身体の内側から何かが這い上がってくるような、自分が自分でないような感覚がある。「だつて、俺が好きなのか、こーゆーことするのが好きなのか、分かんねえくらい、こーゆーことが好きになっちまつたんだろ？」だつたら

オモイキリ、キモチヨクサセテヤル

という下卑た言葉が遠くで聞こえた気がした。

「つっ！」

生暖かい粘膜の感触。

ソファのクッションを握った祇園が背もたれに凭れて悶え、しばらく躊躇された後に弱々しく彼を見下ろせば、早海の上目遣いの眼と合い、この状況を自覚して更に悶えることとなる。逃げようと腰を引くも、両腕で柔らかで滑らかなそれをしっかりと抱きかかえられる。

高い声で彼女は叫んだ。まるで狂ったように祇園は「好きなの」と叫び出したくなる。眼の前の男に対し。その心理状態は不明なものだが、「今、自分をここまで幸せに高めてくれるこの男」を、確かに愛しく思うのだ。

だが、それなら風俗店の男性店員であつても、こんな風にしてくれば同じことを感じるのだろうか？

いや、それはないと祇園は思っている。相手との信頼関係、それがなければこの未知の恐ろしい行為に自分が身を委ね、満たされるわけがないからだ。ここに至るまでに、自分は早海に何らかの信頼を置いたのだろう、と彼女は思った。

その信頼が正しいものは分からぬが。ただ単に、憧れていた青井が自分を必要としてくれないので一番手で、という意味でかもしれないが。

もしこんな関係を先に結ばなかつたら、こんな気持ちにはならなかつただろうか。

しかし、現にこんな関係にもつなってしまった。逆に何か特別な感情があつたから、こんな関係になつたのかもしれない？

いつしか祇園は何も考えられなくなり、頭の中で真っ白な光が弾ける。

彼の名を呼び、「好き」と何度も叫んでしまい、最高の気分で砕け散る。

その感覚もまた恐ろしく逃れようとしたが、彼に抱き締められた。身体を痙攣させ、低く、吼えた。

・・・・・

初めての衝撃に、無言ではあ、はあ、と息をつき放心状態になつている祇園を、早海は立ち上がって見下ろした。

確かにこの手堅い女を自分の方に向ける為には、慣れていなことを逆手にとり、身体の関係も同時に結んでしまうことは、青年も画策していたことだった。しかし、

「今度は、ヤツてる時じやなく、シリフの時に好きって言ってくださいね」

早海はもう一度苦笑しながら、呆然としている彼女にそう言った。

「好き」、と彼女からようやくその言葉を手に入れ、彼の心はさざめいたが、性交渉に酔い痴れ、それと秤にかけられた上での言葉であった。この状況に持ち込んだのは自分の選択であったものの、

早海の心は余計に渴望した。

まだ、足りない。まだ一番欲しいものが手に入つていない。
彼女にも俺と同じくらい、激しく俺を渴望して欲しい。

早海はそう望んでいた。

だがそれを望む割に、彼もまたプライドが邪魔をして彼女にもうひとつだけ告げていない真実があった。

それをしないのに、祇園からそう求めて欲しいといつのは自分こそ卑怯であるとも彼は思うが、これだけ長い間狂おしい想いをさせられた分、不安も大きく、「祇園の方から」欲してほしいと強く思つてしまっていた。

そうした早海の思惑に気付くことのない祇園は、ただ疲れたように力が抜けていたが、ここまでくれば最後に何が待つているかは分かる。

彼が祇園の眼を見据えながら、ズボンのベルトに手を掛けた。緊張する中、おぞましい形状のものが取り出される。己を狙うその姿を見た時、祇園はいよいよ「そう」なつてしまふのだろうか、

とひどく不安になった。

「自分の気持ちはよく分からぬけれど、相手を信じていたし、キモチいいから」、彼女はその理由で抵抗せずに、彼の行為を受け入れていた。もちろん抵抗しても敵わなかつたということもあったが。

しかし最後のこの行為は意味が違う。子供が出来るかもしない、ということだけでなく、まだ未経験の祇園には「その先」は深い何かがあるような気がしていたのだ。

ソファの上で脚をだらしなく開いたままの祇園に、早海がゆっくりと覆い被さってきた。

「ま、待って！！」

彼女は自分に压し掛かってきた早海の胸を押した。そして意外なほどはつきりとした声でこう告げた。

「や、やつぱり、私が早海のことどう思つてるか、まだはつきり分かつてないし、何より どうして『私』なのか、なんで五年も経つてのに追いかけて来てくれたのか、早海もまだ教えてくれてないし」

祇園は膝を閉じながら、真っ赤な顔で真っ直ぐに早海を見た。彼は少し眼を見開いて彼女を見ていた。

「だから、最後は、も、もう少しだけ待つて……。それがもつと見えて私が、私自身と早海をもつと信じられるようになつてからが、いい……。」「ここまでしてちぢつて……だめかも、しれないけど……ほんと、悪いんだけれど……」

真剣にそう言つ祇園を見ていた早海は、やがて声を立てて笑つた。笑いながら、虚しく固立していた己の象徴に、彼女の手を掴んで無理矢理触れさせた。想像以上に固く温かいそれに、祇園の手が驚きと恐怖に竦む。

「なんだよ、それ。フザけてんの？」「ここまでさせといて、そんな

格好してて、それでヤラれねえとでも思つてんのかよ

冷笑しながら早海は言つと、嫌がる祇園の手を強引に動かす。早海の言葉に祇園は俯いた。

確かに今日、彼と二人きりで出かけた時点で、どのような目に遭わされても文句は言えないのだ。その状況を作つたのは無防備な彼女自身なのだから。

やつぱり、最後まで、されちやうのかな……。

自分が愚かで浅はかだったと思いながらも、まだ早海と完全に分かり合つていない、自分の中でも覚悟を決めるついで何かが足りないと思う祇園は、怒つてしているのだろう彼のされるがままになりながら、唇を噛んだ。

しかし次の瞬間、早海は溜息をつくと、ふっと声のトーンを和らげた。

「ほつんと、呆れる…………けど、いいよ」

祇園が触れているものを見ないよう視線を上げると、静かな笑顔の早海とまた眼が合つた。

「ここまで、待つたんだ。こんなところで、嫌われたくねえから、仕方ねーよ。それで、いい

「……」

祇園は要求しておいた割には信じられないように、早海を見上げていた。

十九歳の青年の性欲の強さくらい、祇園のような奥手でも耳にしたことはある。自分ばかりが快感に身悶えていたのに、彼は彼の欲望を祇園の幼稚な気持ちのために抑えるといつのか?

もしかして、大事に、されてるのかな……?

そんな仮定を抱けば、今度はこれまでになく、心がふわりと温くなる。それは先ほどまでの快感で得られた悦びとは全く異なる幸せであった。

そしてそんな喜びこそ、彼女が本来求めていたものであり、彼女

が早海をどう思つてゐるか、の答えに繋がるように見えた。それが見せ掛けの優しさであつたとしても、眼の前で股を広げている女を抱かない、と言い切つた彼の判断は、凄いことなのではないかと祇園は思つていた。

ただ彼にしてみれば、それはただの良心だけでなく、自分が全てを話していない負い目や、彼女を一度を失いたくないという恐怖心があつてのことなのが。

それでも彼に無茶な要求を言つてしまつた以上、彼の手の導くままになつてしまつ祇園。そんな彼女に、早海は喉の奥で笑い声を立てながら言つた。

「その代わり　いつも收まりが付かないんで、手伝つてもらえますか？」

何のことかは、彼が彼女の手を離さないことで直ぐに分かつた。達するまで丁寧に祇園の身体の隅々を愛してもらつた。それこそ、汚いところまで。

そこまでされたのに、自分の要求は通つたのに、相手は気持ちよくなさせないなんて悪いな、と素直に思つた祇園は　これもまた挿入することだけを目的とした他の男であつたら、してあげたいとは思わないだろう、と内心思いながら、ためらいつつも小さく頷いた。そして細い指と、抵抗はあつたが時には口を、早海に教えられるがままに動かした。　挿入を断念してくれた、彼の望むままに。

そんな汚れた場所でもこんなことが出来る自分は、やはりこの男を想像以上に深く想つてゐるのではないか、と彼女は考えてしまう。しかし肝心な言葉はやはり聞いてはいない。息が荒くなつてきた早海に向かい、祇園は上田遣いで問い合わせた。

「は、早海こそ私のこと、どう想つてるの……？　どうして『私』だつたの？」

早海の心に連動したように、祇園の掌の中のものがびくん、と反

応した。だが彼は頭を搔くとその衝動を抑えるように、あえて静かな声で答える。

「五年も経ってるのに、わざわざ追いかけてきたつたつただるーが……。つて、それがなんで祇園さんだつたかつてことが聞きたいワケだよな。 そんなん、今のこの状況で聞くなよ」

彼もまた先ほどの自分のように、脳髄まで痺れるあのふわふわした頂点に辿り着きたいのだろう、ということが祇園にも理解できた。だとすれば、確かにまともな精神状態で話など出来るわけないだろう。それは確かに納得がいく。

「あとで、話してよ……？」

祇園は唇を這わせた先端の上で、それこそ恋人同士のように甘く優しい声で囁くと、その行為を続行した。

五年間想い続けた相手によろやかに触れてもらつた早海が、悦びと興奮の余り 彼女の顔や手を淫らに汚してしまうまでも。

第31話 そして彼氏彼女へ

祇園は不思議な気持ちに陥っていた。

男物のTシャツとぶかぶかのハーフパンツに身を包み、肩の上にバスタオルを掛け、先ほどまで己が乱れていたソファの上に膝を抱えて座っている。

眼の前の大好きなテレビでは、彼女が子供の頃観ていた懐かしい地元旅館のCMが軽快な音楽と共に、虚しく流れている。

……なんで、私、こんなところで、こんな格好してるんだろ？…

…。

祇園は思わず、今日一日の出来事を振り返る。

今日は大切な母親に会いに来た日であった。だがそれはとても寂しく哀しいことであつたので、一人では耐え切れないと、眼の前に居た男に縋つた。

その男 早海は昔馴染みであつたので、五年ぶりに彼女が育つた街を案内してくれた。それはまさに夢のような時間であった。

そしてその時間の最後に、夢の続きで思わず彼にこの身を委ねてしまつたのであつた。彼の秘密を、本心を少しずつ明かされ、その魔法に掛けられたように。

結局、抵抗もなく祇園は自分の身体を開いてしまつた。最後の最後で恐くなりそれを拒絶し、彼は彼女の気持ちを尊重してくれたもの。

そして彼の体液で、髪も顔も服さえも汚され、早海に薦められるままにシャワーを借りることにした。服もその間に洗濯をしておくとの言葉にも甘えてしまう。

更には「一緒に来りますか？」などと恥ずかしいことを早海はにこやかに言つてきたのだが、祇園は「知らない！」といつもの調子で怒鳴り返した。

しかし彼の家のシャワーで裸の身体を清めれば、あらゆる場所を男の眼前に晒し、愛撫されていたことが蘇り、祇園の胸が痛むほど疼き出す。

彼から「えられた刺激に正体なく酔い痴れ、絶頂にまで達してしまった。あの瞬間を思い出すだけで、再び身体が痺れそうになる。それだけでなく、「好き」「しかも早海が好きかセックスが好きか分からない」などと蕩けた声で口走った己の痴態も同時に思い出し、祇園は浴室の壁に頭を打ち付けたくなるほどの羞恥を覚える。

早海はあんな自分をどう思つたのだろうか。馬鹿で淫乱な女だとは思っていないだろうか。

欲望を吐き出した後は口付けだけを軽く交わし、あえて明るく入浴を勧めてくれたり、服を準備してくれたりと、優しく接してくれた彼には感謝するもの……。

そして祇園は浴室を出て、彼の用意してくれた、高校時代着ていたという大きなTシャツを着た。下着は恥ずかしさに直視できないほど濡れてしまい洗濯中の為、彼女は下着も穿かずに彼のハーフパンツを身につける羽目になってしまっている。

服からはどこか彼の匂いがし、今あつた出来事を思い出してしまい、思わず赤くなる。

入れ替わりに早海がシャワーを浴びに行き、祇園はこうして一人で居間のテレビを観ながらぼんやりと考え事をしているのであった。

本当に先ほど、ここに押し倒され、最後にはソファに座らせた股を開かれ、日頃の早海や自分からは想像も出来ないような淫らなことをしていたことは思えない。

だが、あれは事実なのだ。そして、今こうしていることも。

こんなのは本当に、恋人同士、みたいじゃないか……。

彼の実家までドライブして、いじやいじやして、と普通のカップルのしていふ」と変わらない。

「付き合つて思つていひですか？」の問いと「俺のこと好きになつてくれましたか？」の問い合わせをして、今度はソファに頭を打ち付けたいほど、胸が苦しくなる祇園。はつきりと答えなくとも、抵抗もせずにあんなことをしていたならば、もう「答え」と同義なのではないか。

だが、「最後の一線」には抵抗を示した。それには「付き合つ」や「恋人」という形だけのものでなく、祇園と早海の「心」が必要だと思ったからだ。

子供が出来るかもしれないほどの、祇園にとっては自分の身を傷つけることにもなる行為なのだから。

単純な言葉で表現すれば、「愛し合つ」「信じ合つ」「証が形だけでなく心で感じ取れるか。

祇園自身、自分の気持ちが分かつていいのだ。きっとまだ何か大切なものから目を背けてしまつていて。だから彼を受け入れる勇気がない。

しかしそんな勝手な彼女を受け入れ、あの状況で我慢をしてくれた早海には正直祇園もぐらりと来てしまい、あのよつた汚れた場所でも……とこう、はしたないことが出来たのだが。

つて、やっぱり、恥ずかしい……！――

己の痴態の全てがフラッシュバックしてしまい、何から今まで身悶えするよつた思い出の連續に、祇園は本当にソファのクッションの上に頭を打ち付け始めた。

その時だった。音もなく近づいてきた何者かが、居間のドアを開

けた。

そして低く、火照つた身も凍るような硬く冷たい声で、祇園に問い合わせる。

「誰だ」

勿論聞いたこともない年齢を重ねた男性の、まるで見下したような声に祇園は慌てて飛び起きた。

心臓が跳ね上がるかと思うほど驚いたが、眼の合った中年男の、警戒と侮蔑をしたような冷酷な眼差しに、彼がこの家の主であるということは祇園にもすぐに分かった。

時間は午後八時。こうしたことになつてもおかしくないと、密かに心配していたが。

「す、すみません！ 勝手にお邪魔して。あの、早海さんご、大学でお世話になつている、高野と申します」

祇園はソファから立ち上がり、深々と、勢いよく頭を下げておそらく家主……早海の父親と思われる男に謝った。男はふっと息を漏らすと、何も言わずに踵を返した。

その時、タオルで短い髪を拭きつつ、早海が居間に入ってきた。

「あ……」

彼は短く呟いた。

祇園が思わず見上げた早海は笑顔の消えた、彼の父親と同じようにな冷たい眼をしており しかし直ぐに父親から眼を逸らすと、

「待たせてすみません」

と祇園の方へ歩み寄り、優しく声を掛けた。

男もまた早海の方を見ることなく、まるで其処に誰も居ないかのよくな顔をして、居間から出て行つた。

・・・・・

甘い空気も一転し、針の筵のような空氣の中、それでも早海は「元の」笑顔に戻り、生乾きの洗濯物を片付けると、祇園をそのぶかぶかの格好のまま車に乗せた。

一応彼も「泊まつていきます?」と尋ねてきたが、あの親子関係を見て泊まるうと思えるほど祇園もふてぶてしくはない。早海もそれを理解したらしく、「変なところ見せて、すみませんでした」と運転しつつ謝つてきた。

祇園は対向車のライトに照らされた青年の横顔を見上げた。

「縁切りてえなら、もう家に戻らなきゃいいのに、祇園さんと中学に戻つたりして昔の話して抱き締めてたら、あの家に連れて行きたくなつた。……俺もガキの頃に、戻りたかつたんでしょうね。勝手して、嫌な想いさせて、すみません」

確かに父親と……しかもとても厳しそうな……と、バッティングしてしまった時は早海を恨みそうになつた祇園だが、そんな風に寂しそうな顔で素直に謝られると何も言えなくなつてしまつ。

これは後輩に甘い先輩としての心なのか、彼を愛しく想う女の心なのか、よく分からぬ。

だが祇園が早海の父親と会いたくなかったと思つた一番の理由は、家主の不在の時に上がり込み、ふしだらなことをしていたと「彼の父親に思われたからだ。

きっと第一印象から軽蔑されてしまったであろう。それが恥ずかしく、申し訳ないのであり……早海には言いたくないが、偶然でも彼の唯一の肉親に会わせてもらつたことには、どこか安心した部分もあつたのだった。

しかしやはりそこまで早海があの家を憎んでいる理由と、嫌いな家に足を踏み入れてまで子供の頃に戻ろうとした彼の真意が気にな

り、祇園は再び彼を見上げた。

今は優しく笑っていたものの、冷たく寂しい横顔はその空気を残していた。祇園がどう問い合わせればよいか分からず悩んでいた、彼はふつと相好を崩した。

「そんじゃ、もー遅いし、服も乾いてないし、ホテルにでも泊まつていきま……」

「私運転してもいいから、帰ろう！」

いつものように冗談染みたことを明るく言つてくれたことにはほつとしたものの、それこそ冗談じやない！と祇園は即座にそのセクハラ発言を遮つた。

今から戻れば日付が変わる頃には帰ることが出来る。飲み会などで遅くなつたくらいの時間と同じだ。

疲れているだろう早海には悪いと祇園は思つが、流石にホテルに行くことは抵抗を感じていた。

あそこまでしてしまつたことと、今この、早海の冷たい表情。もしも今そんな場所へと行けば、間違ひなく流されるままに、そして同情心だけで彼に抱かれてしまうだろう。しかしそれこそなんことをすれば、間違ひなく後悔する。

彼には可哀想なことをしていると思つていても、本当に彼が自分がなんかのことを好きで五年間追いかけてきた、恋人になりたい、と言つながら、自分も身体だけでなく心も伴つた状態で早海の気持ちに応えたい。祇園はそう思うようになつていた。
だからこそ、今は彼を拒絶するのだ。

早海はやはり祇園の意思を尊重したのか　　その我慢強さに、否が応でも彼女の中で彼への信頼度だけは上昇するのだが、何も言わずに高速道路へ向かつて車を走らせた。

夕食の話題にもなつたが、早海の家に行く前に軽食を済ませていたので祇園は腹が減つているというほどではなかつた。何よりも彼

と一線を超えてしまつた今、もうこれ以上流れざりたい、早く元の空間に戻りたいと思う一心で、彼女は直帰することを希望した。

元はと言えば祇園も未経験の性交渉に興味を持ち、寂しさゆえに彼にされるがままになっていたことが原因であるのに、早海に甘える形で彼女の気持ちを優先してもらつていい。

「ごめん……」

そう思つた祇園は、ただ謝ることしか出来ないのだが、

「別に、いいですよ」

早海は肩を竦めると、やはり苦笑して彼女を許した。

嘘ばかりついていると、そのうち何が本当で、何が嘘なのか、分からなくなつてくる。

だがやはり早海が常に見せる、嘘のようなほど自分に対しても優しい「彼」は、もしかしたら「本物」の彼であるのかもしれないな、と今日一日の出来事を通して祇園は確信しつつあった。

冷たい表情の早海が寧ろ本当の彼ではないかと気に掛かっていたが、父親と会つた瞬間の彼と彼の父親の表情を思い出せば、どうして彼があんな表情になるのか、祇園にも少し分かつた気がした。確かにあの表情も本当の彼であるが、どちらが裏や表といふことでは、きつとない。明るく、優しくあらうとする強い彼も、心を閉ざした寂しがり屋の彼も、葛藤と苦悩の末に、それでも生きていかねばならないと「早海」という一人の人格を作り上げたのだろう。

理屈っぽく考えてしまつたが、ひとつ結論に達したところで、

祇園はほっとしたのか眠気が襲つてきた。

何かを話そうにも、気まずくなつてしまい話すことが見つからず、彼女は朝からの疲れにいつの間にか、こくこくと深い眠りに落ちていった。

それこそ、隣の相手を信頼して。

・・・・・

途中トイレ休憩を挟み、到着する一時間ほど前に彼女は起きたが、結局殆ど言葉を交わすことなく、早海は祇園を彼女の家の前に無事送り届けた。

「お疲れ様……。今日は、色々、ありがとうございました」

いやらしいことはされてしまつたが、それでも親切にしてもらつたことの方がずっと多かった。そう思った祇園は、真夜中に運転をしてくれたことも含め、早海に素直に礼を言った。

「じゃあ、お礼、してくれるなら」

早海は笑つてそう言つと、祇園の方を意味ありげに見た。そして助手席に腕を付き、体重をそちらへと掛ける。

「……」

早海の顔が彼女に近づく。

彼が何を求めているか察した祇園は、「お礼」のだから、仕方なく言うことを聞いてやるのだと自分に言い聞かせながらも、それでもそうしてあげたくなるほど、そして彼の孤独に同情を抱くほど、彼を今まで以上に愛しく思い、恐る恐る自分からその唇に自分の唇を重ねてみた。

羞恥と緊張の中、ほんの一瞬、とても軽く。

「お、おやすみ!!」

顔を離した祇園は車の中で思わず大声で叫ぶと、背の高いRV車から転がるように降り、ぶかぶかの格好のまま家に駆け込んでいった。

そしてそのままベッドに倒れ込む。

本当に、恋人同士、みたい……って、そうなっちゃったのか……?

彼女には何もかもが初めてのことであつて、不安になり根拠を求めるようをしてしまう。だがただの性欲であつたとしても、今、自分からキスしようなどと思つ男は、やはりひとりしかいないんだろうな……と何処か観念し、祇園は再びくたびれたように眠りについた。車と違い揺れないベッドで、今度こそ深く深く、何も考えないようだ。

・・・・・

次の日、昼夜近くに起きた祇園は一日中、家でぼーっと呆けていたが、早海からは珍しく連絡が来なかつた。

やはりあの甘かつた時間は夢ではないか、恋人になつたなどといふことも幻想で、彼は自分をもう見捨てたのではないか。祇園の心が不安の雲に覆われる。

しかし夕方、待ち望んだメール着信音が、よじやく携帯電話から鳴り、思わず飛びついてそれを確認してしまう。相手は勿論、早海からであつた。

『旅館で割のいい住み込みバイトを紹介されたから、しばらく家、空けます』のこと。

『何かあつたら連絡ください。変なのにはつからないでくださいね』と注意書きまで添えてあり。

あのような関係になつておきながら、直ぐに長い時間離れることは祇園にとって不安であったが、それでも自分を心配してくれる様子が伝わり、やはり彼の存在がお守りのようであることに安堵する。

『了解、気をつけて』とメールを返す。出来たばかりの「彼氏」に向けてにしては素つ氣無いかなと思つてみたり、誰も見ていないのに恥ずかしくなつてみたりしながら。

携帯電話を閉じて、祇園はまた膝を抱えてぼんやりと考える。

再会してからずつと付きまとってきた早海と初めて少し距離を置くこの機会に、彼女は一人でしっかりと向かい合ってみようと思つていたのだ。自身の、気持ちと。

「子供の頃に戻りたかったから」と避けていた実家に祇園を誘い、父親と眼を合わせようとしたしなかつた冷たい早海の横顔に、失われていた思い出の欠片を今度こそ掘り起こせそうになりながら。

そしてパズルの最後のピースが、謎めく想いを、今、解かんとする。

第32話 初恋

何かが決定的に変わり、様々な既成事実から「彼と付き合っている」ということを祇園自身が認めてしまったあの不思議な一日から、一週間が過ぎた。

三ヶ月前に再会して以来、これほどの期間、早海に会わないと云うことはなかつた。

今までどおりの静かな日常の筈なのに、祇園の中でぽかりと穴が空いたような気がしてしまつていて。

その上、今までの彼からすれば、やれ浮氣していないか、やれ変なに絡まれていなかと連絡をよこしそうであるのに、遠く離れたところでアルバイトをしている彼からはメールすら送られてこなかつた。

忙しいのだらうと思いつつも不安になるが、祇園から連絡することにも照れがある。そうすることで、彼のことを「好きなのだ」と感情的に認めてしまつようで怖かつたのだ。

あの日、途中までは性交渉という形で愛し合つた。

本来、挿入までを果たして初めて、「それ」として成り立つのだろうし、またさせない女は男に嫌がられるという話も祇園は聞いたことがある。

そう思うと余計に不安に覆われる反面、そんなことで嫌いになるような男は願い下げだと開き直る気持ちも彼女に生じる。

いざれにせよ、一線を超えてしまつたことと、早海が連絡をくれないこと、気になるくせに祇園が素直に連絡できないことが、今現在、二人の置かれた状況であることだけは確かだつた。

もしかしたら、彼は連絡しないことでこつして自分を気に掛けさせている？

あの早海のことならばそれくらいの戦略は練りそうで、尙更意地になつて連絡するものかと祇園は思つてしまつてゐるものあつた。そのくせ、今日「」を連絡はないかと携帯電話を「」まめにチェックしているのだが。

祇園は溜息をついて電話を閉じた。

「どうしたのよ？」

そんな彼女に眼の前の美幸が問い合わせる。

夏休みはまだ続くが、今日は久々に斯波研究室に顔を出した祇園は、誰も居ない研究室で、『誰か来たらやつといてねー』のメモと一緒に机の上に置いてあつた書類の山などを思わず片付けていた。そこに学校に居るという美幸から連絡が入り、久しぶりに彼女と昼下がりのお茶の時間を楽しんだのだ。

学校帰りに寄つたのは、近くの常春堂。祇園の眼の前には、「」つてりとボリュームのあるあんみつプリンチョコレートパフェがでん、と置かれている。

この気持ち悪いほどの甘さは余分なことを考えたくない時には丁度よいと思い注文したが、以前此処に来てこれを食べたのは、この美幸の件で早海が慰めに連れて來てくれた時なので、彼のことを図らずとも思い出してしまつ。

そもそも彼を忘れてくてこの極甘パフェを注文したのであるが、その時彼が優しくしてくれたこと、居心地がよかつたことすら思い出してしまう、甘いパフェなのに祇園には苦々しさすら感じられてきた。

確かに、もう「彼女」みたいなものなのだから、全てを認めてしまえばよいのだが……。

祇園が思案しながら眉間に皺を寄せ、パフェをつついでいると、美幸が呆れたように笑つた。

「なに、早海くんから連絡来なくてすねてんの？」

「……」

祇園は上田遣いで美幸を見た。図星だと察した美幸は、長い睫毛を艶やかに揺らしながら、目を瞬かせた。

「どうせ祇園の方からしないだけのくせに」

またもや図星である。祇園は益々味のよく分からなくなつてくるパフェを口に放り込んだ。

「喧嘩でもしたの？」

美幸はフルーツ入りのアイスティーを口にして、むつりとしている祇園に続けて問いかける。祇園は黙つたまま首を横に振った。

「だよねえ。早海くん優しそうだし、なんか一人あつあつだし。夏休みはどこか行つたの？」

美幸のあえて古臭い言い方をするといひに、余計に恥ずかしくなりながら祇園は、

「実家……に行つた」

と呴いた。途端に美幸の目が嬉しそうに更に輝く。

「へーそーなんだー。もうじゅあ、親公認で挨拶とかしたんだー！」
結婚でもするのではないかといつ期待と興味に溢れた様子で、美幸は身を乗り出していく。

「ち、違う！ やうこうんじゃない！ お墓参りとか、中学に行つたりとかしただけ。あと、やつのお父さんには偶然会つやつただけだし！」

情事の後の自分を、彼の厳しそうな父親に見られてしまった時の氣まずさをまた思い出し、祇園の顔が自然と赤くなつてくる。なんだか話が飛躍しすぎだと思つた祇園だが、やがてふと美幸に尋ね返した。

「ねえ……私たちって……その、やつぱ、付き合つてゐみたいに、見える……？」

それこそ美幸は一瞬きょとん、と動きを止めると、「はあ？」と

今度こそ心底呆れ返つた表情をした。

「つていうか、そうじゃなかつたの？ だつたら一体なんのよ…
…ですよねー、と祇園はうな垂れた。自分がぐだぐだと二の足を踏んでいるだけで、実際周囲や現実にはそつ受け入れられているようだ。

そして早海も、そつ思つていたのだろうか。だが最後の最後まで「付き合つてこると思つていいか」と彼女に確認をしたということは、彼は祇園のこの捻くれた心を分かつてくれているのかもしれないが。

「だ、だつて、再会してからずっと、なんか、いつ、なし崩し的だつたから…」

どろどろに溶けてしまつたパフェをぐりぐりと搔き回すと、祇園は一気に最後まで喉に流し込んだ。腹を壊すかもしれないが、口直しにブラックコーヒーを追加注文する。

その言葉もまた本心であつたのだ。美幸もそれには納得したようになるほど、と頷く。

「祇園は頭が固いから、特にそつ思つのかもね。でも早海くんだつて、嫌いな相手をわざわざ手間隙掛けてこんなところまで追つかけてこないだらうじ、祇園だつて嫌いだつたら本氣で嫌がつて逃げるでしょ？」

美幸の言葉に、祇園は少し考えた後、素直に頷いた。確かにあんないやらしことは、好意を抱いていない相手にさせるわけもない。

だが、それだけだらうか。そんな理由だけで、再会したばかりの相手に全てを委ねられるものだらうか。
何故か自分に関わつてくる、あの男を信じてよいのだらうか。
何故、早海のことがこんなに気になるのだらうか。

訝然としない祇園の表情を見て、美幸は両手で頬杖をつくと少し

微笑んで大人っぽくこう言つた。

「再会して数ヶ月つて言つてもさ、もしかして、お互い中学の時からずっと好きだったりしたんじゃないの？だから期間が短くとも、すぐにこんだけ盛り上がり上がっちゃったんじゃないの？」

もしかして　じゃないの？

その言葉が鍵となり、祇園の記憶の扉がもう一度かちやりと音を立てて開く。

最初にこの言葉で、早海のことを好きではないかと投げ掛けられたのは中学の時、五年前。早春の夕暮れ。

しかし祇園はそれを認めず、逃げた。恐かったからだ。

本当は、どうして恐かったか、当時子供だった彼女も分かっていたのだ。

ただ、勇気がなかつただけだ。彼を好きになつて、彼に拒絶されたらどうしようと。それが自分の一方的な望みだけで、彼がそんな風に思つて居なかつたらどうしようと。

相手を想うだけで幸せになれるほど、自分は強くない、と。

母親が死んでから、中学生の少女には心に埋まることのない穴が空いていた。寂しかつた。誰か、何か、唯一の存在を彼女は強く望んでいた。

だがそんな望みは簡単に叶うものではない。望みが叶わなかつた時、期待した分、それ以上の絶望と孤独に突き落とされる。それだけは絶対に嫌だと怯えていた。

だから祇園はそんな望みなど自分は持つてなどいないと言つよう、朴訥としていた。無表情で、無感動のふりをしていたのだ。

なのに、彼女の心に触れた幼かつた、彼。

まるで彼女を誰よりも必要とし、好意を抱き、理解しているように接してきた。彼女よりも年下なのに、彼女の孤独を包み込むように。

本当はずつと、彼と過「」した五年前の柔らかな時間、少女は絶大な安心感に包まれていたのだった。本当はそれが永遠に続くようになると、少女はただ願っていたのだった。

ずつとこの時間が続いて欲しい！と大声で叫びたいほど手放したくなかったのだ。

だがまだ子供である一人は、親の事情で物理的に引き離され、その願いは叶わなくなる。

その時に、それは嫌だ、一緒に居たいと自身の声で吼える勇気は祇園にはなかった。求めて拒絶される　それがとても恐かったからだ。

だから、「自分の早海への想い」を拒絶した。「それ」自体を、なかつたことにすればいいと思った。

それが一番、寂しくない。そうでないと、彼と離れてしまう寂しさに耐えられない。

彼に興味のないふりをし冷たくし続けたのも、本当は彼の心に近づくことが恐かったからなのだ。彼と離れることが寂しくて寂しくて狂いそうになってしまったことに、心のどこかで気付いており、少女はあの時、そして今もなお自己防衛をしているのであった。

しかし今の美幸の言葉に、二十歳と少しだけ大人になった祇園は、真っ直ぐ彼女を見返した。

あの時拒絕した言葉はこの前の出来事があつたからか、彼と再会してからその離れていた時間を埋めるように、たどたどしくも時と身体を重ねてきたからか、彼女の心に今は素直に落ちてきた。

やはり自分は卑怯なのかもしれない。これだけ信じたくなるような事実を作らせた後に、それを認めようとするのは。祇

園はそんな風にも思い、罪悪感を抱く。

大人に近くなつた彼に心から大切にされていること、もう物理的に別たれることを、何度も試すように確認してから初めて自分の思いを受け入れようとするのだから。

そんな自分はとても臆病でするいものだと、祇園は自己嫌悪に陥る。

だからと書いて、気持ちを止められるものではなかつた。
もう動き出しているのだから。もう一度出会つてしまつたのは事実なのだから。

それに、これ以上逃げ続けるのが得策だとも思わなかつた。卑怯かもしれないが、それでも認めることが間違つてゐる、認めるのにもう遅い、ということは きつとない筈なのだ。

「うん、……好き、……だつたのかも」

祇園は長い沈黙を置いた後、運ばれてきたホットコーヒーを手に、初めてその言葉を呪文のように呴いてみた。

先日の性交渉の時の、高ぶりのままにとは違う、五年前に戻つた純真な気持ちから。自然な、心の成り行きのままに。

ぽろりと言葉にしてみた祇園はとても恥ずかしくなつたが、何処かとてもすつきりしてきた。そして遂にもづ、逃げられないのだから、と何処か勇氣も湧いてきた。

斯波の言つていた「言靈」の話を彼女は思い出していた。恐がり、逃げ続けていたことでも、一度言葉にしてしまえば嫌でも現実になる。想いが命を持ち、自分の中で息吹き始める。

そうか、私は、もう五年も前から、早海のことが好きだつたのか。

それはまるで初恋のよつで、とても恥ずかしいものであったが、今の祇園の心に一番しつくりとくるものであった。今ようやく、彼女は初恋の頃に戻れ、あの時の感情を認められたのかも知れなかつた。

大人になりゆく今、あんな関係になつた今、その感情をどう受け止め、どう相手に伝えればよいのかは未だに分からず恐いままなのが。

相手がこの場に居なくてよかつた、と祇園は思つていた。居ればきっと、また恐れて逃げ出してしまつたかもしない。今度は相手も何処までも追つてくるかもしないが。

それに早海相手には恥ずかしくて認めたくなかったことでも、友人相手になら素直に認められたことに、感謝もしていた。

そう思つた祇園が、今までになく晴れやかな、まるで十五の少女のように瑞々しい気持ちのようになり、ブラックコーヒーの味も妙に苦く感じていると、

「あーもー、いいなあ、そっちは。初々しくて、らぶらぶで」

美幸は再び両手で頬杖をつくと、ふう、と溜息をつく。

……な、なんか、ごめんなさい、と別に祇園が悪いわけではないのだが、彼氏と距離を置いてしまつた美幸に対し心の中で居たためれなく思つていたが、美幸はもう一度溜息をつくとふつと優しく微笑んだ。

「なんかね、ぼちぼち連絡取り始めたよ」

「……渡くんと？」

美幸はこくりと頷いた。

祇園は眼を瞬かせていたが、やがてほつとしたように笑う。

「そつか、よかつたね」

心からそう思つた。よかつた、と。

時に迷つたり、間違つた道を行けども、誰しも自分が満たされた

いつもがいでいる。間違つていれば、何度もやり直せばいい、謝ればいい。

それくらいでは許されなかつたとしても、それでもまた歩き出してやり直せばいい。誰の為でなく、自分の為に。強欲な醜い女と言われても。

それは、祇園も、美幸も、そしてまたきっと別の女性であつても、男性であつても。

そうした道であつたとしても、祇園はこの友人に「幸せに」なつて欲しい、後悔して欲しくないと思っていた。また自分も汚いと言われてもそうあることを願い、早海を選んだのだと思つた。

それが恋愛といつものなのだろうか、と初めてそんな風に誰かを強く欲した祇園は考えていた。

「なんかね、向こうから、連絡くれたの。今度、一緒に遊びに行つてくる 馬鹿だね、あいつは」

どれほど渡が美幸を想つっていたかは、話だけで十分伝わつてくる。そして美幸もそう言って苦笑するが、今度こそ相手を大事にしようとしていることが十分に伝わってきたので、祇園は笑つて頷いた。どうすることが正しかつたのか、その人にとって何が一番よかつたのか、きっとそれは誰にも分からぬことだろう。ただ自分の心の赴くその先へと、後悔しないように、誰もが我が假に生きていくだけのことだ。

だがそれは、当人たちにとつては決して気分の悪くはないものであつた。開き直りと言われてもどこか清清しく、これから自分の自分を夢見させるものだつた。

一人の女性は、自分に正直すぎる己にこれでよかつたのかと後ろめたさもありながらも、それでもすつきりとした、どこか嬉しいような気持ちで別れた。

・・・・・

夜。祇園はベッドの今日の話を思い返し、早海のことを思い出していた。すると、不意に彼の声が聴きたくなつた。

電話の一本でも入れようかと思つたが……それでも、こんなに相手を必要としているのは自分だけで、相手が自分を必要としているから連絡も来ないのかもしれないと想像すると、やはり恐くなる。結局、彼女がその電話を繋ぐことは今夜も出来なかつた。

だが、ベッドの上で思わず火照った身体を自身の指でなぞつてしまふ。あの日の、暑い夕暮れの出来事を、何度も思い出してしまう。

彼の手や指や、唇や舌が自分の至る所に触れ、快感を上げ高めてくれたことと、自分が彼を高めたことを。

もう一度彼に触れてほしい、彼に触れたい、彼の気持ちを心と身体中で確かめたいと、独り眠れば夜のじじまに彼のことで心がいっぱいになつてしまつ。

子供の頃の優しい少年の笑顔が、大人になつたそれに、そして自分を真剣に見つめていた顔に、彼女の頭の中で作り出した幻影は塗り潰されていった。

「今」の彼は、私をどう想つているのだろう。

一人の少女が女として、恋に目覚めた夜が更けていく……。

それから更に、三日が過ぎ。

第33話 好き、でした。

残暑は厳しいが、立秋、そして盆を過ぎると焦げ付ける太陽も僅かばかり力を弱めたように見える。逆にその分、蜻蛉の赤や露草の青、コスモスの紅色などの鮮やかさがその光の中に映え、移ろいゆく季節への感傷すら与える。

真夏のぎらぎらした暑さも嫌いではない祇園であるが、こういう郷愁もいいものだな、と呑気なことを考えながら、斯波研究室を訪れた。

斯波研究室の夏休み中のゼミは九月の上旬、大学の長い夏休みも後半に入つたところで行われる予定だ。

八月も後半に入り流石に皆、ゼミの準備でもするのだろうか、今日は久々に光も弥栄も揃っていた。と言つても彼らには単位になるわけでもない、斯波の怪しげな研究の成果になるだけであるが。

そして彼らの机の上に散らかっているものも、例によつてアルバイト先のテストの採点であつたり、就職情報誌であつたり、ケータイ小説やら時代小説やらの文庫本であつたり、パソコン画面には如何わしい画像が映つっていたり……とそのゼミの準備をしていくようには見えなかつた。

「おー、ゼミ長ー、なんか一週間ぶりくらい?」

顔を上げた光は、二週間前に会つた時以上に日焼けしており、手に持つたアイスコーヒーのように焦げた肌の色をしている。そして淹れたらばかりのアイスコーヒーを、「まだ口つけてないから」と言ひ祇園に渡す弥栄もまた、光ほどではないが夏休み前よりは日に焼けている。

海に行つたり、早海と故郷で一日外で過ごした祇園もまた、それなりに日焼けはしているだろう。それに二十歳の夏を満喫して

いるようである。

「だね。弥栄氏とも、それくらい」

祇園はありがとう、とそれを受け取って口にした。夏期講習の間、祇園とアルバイト先の塾で毎日顔を突き合わせていた弥栄だが、それ以降は塾もお盆休みに入りシフトも合わず、今に至る。

そう言つてふつと笑つた祇園を、じつと見ていた弥栄が呟いた。

「ゼミ長、元気ない？」

鋭い指摘に祇園はどきりとした。弥栄は弥栄で他人の心によく気付き、光は光で色恋沙汰に敏感である。

なんでこの研究室のメンバーは、こんなに鋭いんだ、ただ一人例外
祇園の恋心に気付いていなかつた、あの先輩の青年 を除いてだが、と彼女は久々のこの緊張感と居づらさに、頭を抱えてしまいそうになつた。

案の定、光も、

「なんでえ、あの一年にふられたの？」

などと明るい口調で悪態をついてくる。

「ち、違う！　たぶん……」

早海とは不思議な関係にはなつたが、ふられたわけではないと思いたく祇園は光に言い返すが、これだけ連絡が来ないのは実は嫌われているかもしない、という気持ちにもなり、最後は力なく黙る。それを見ていた弥栄が弟妹にするように、祇園の頭をぽんぽんと軽く撫でるが、その慰める様子からしても早海から連絡が来ないという不安は、彼らに見抜かれてしまつてはいるのだなと彼女は悟る。しかしそんな祇園に、伸びをしながら椅子に凭れた光が、とんでもないことを提案してきたのであつた。

それはまさに彼女にとつても晴天の霹靂の一言であつた。

「だつて、ゼミ長、あの一年とは付き合つてねえつて言つてたじやん。　もういつそ、弥栄とでも付き合つたら

「 「……は？」」

光の突然の提案に、祇園と弥栄は一人声を合わせて間抜けに聞き返すと、光を見た。その後、思わず互いの顔を見合わせる。

美形というわけでは決してないが、頼れる大きな身体とよくよく見れば人懐っこい可愛い顔をしている、何よりも精神的に安定していて性格も非常によい弥栄　　と、きょとんとした祇園の眼が合つた。

しかし祇園が驚いたことに、なんと弥栄は少し頬を赤くして彼女から顔を逸らすではないか。

うおおおい！　ちょっと待てーーー！

思わず祇園は眼を剥いてしまう。そしてとりあえず、確信犯のか、せせら笑つている黒い顔の赤髪男　　光をぎん！と睨み付けた。笑う男と愕然とする女と照れる男の構図に、研究室内はなんとも気まずい空気になってしまつ。

なんなんだ、突然、この展開は！
ええ！？　っていうか、もしかして、弥栄って　　？

また、例の言葉が祇園に甘い魔法を掛けようとする。祇園は一瞬心の内で、ひやりとした。

しかし、その魔法を今の彼女は跳ね除けた。逆に言えば、その言葉の持つまやかしに引っ掛からなかつた。

それに惑わされないくらい確かな想いが、既にもうあつたから。

「そつ」だとしても……、ごめん、弥栄氏。

戸惑う祇園の心に浮かんだ言葉は、それ以外に無かつた。今度は思つたよりも早く落ち着けた自分に、祇園は内心安堵する。本当に自分なんかに好意を持っていたならば大切な友達にはとて

も悪く思つが、逆に言えば今まであれだけの時間一緒に居たのに祇園に手出しあせす、早海にも親切にしていた弥栄は、彼自身の想いを遂げることよりも、祇園の気持ちを優先してくれていたのではないかと考えられた。

そして大切な友達だからこそ、そう信じたいと思っていた。

そう思つと、誇れる友人にそこまでしてもらつているのに受け入れられないことを申し訳なく思つ。そんな弥栄と比べると、自分は自分の幸せばかりを考えており、なんてずるい女なんだろ、と祇園はまた自分が嫌になる。

しかし祇園の我が侶であるうとも、彼女は斯波研究室が好きだつた。このまま後腐れなく、笑つて楽しいまま卒業したい 今ならまだ、間に合ひ、まだ友達に戻れると思つた。

そう思つた彼女は、その顔をすっと上げると一人の男性の方を振り向いた。

「や、ごめん。やっぱ、その、あの一年生と付き合つてる……っぽいから、それは、ない」

きつぱりと、弥栄との交際の可能性を否定してしまつ。

それは彼が自分に好意を寄せていることが本当ならば、なんと酷いことを言つているのだろうと祇園も思つものの、一脇を掛けるなどはもつてのほかなので、それ以外に言つてもなかつた。

弥栄の瞳が一瞬揺らいだ ような気がしたが、彼はいつものようになに優しく苦笑すると頷いた。

「そりやそーでしょ」

その優しい笑顔に祇園の心はずきんと痛む。しかし彼女もまた無理に笑つて頷くと、

「ごめん、ちょっと私、行くところある」

と言つて、そそくさと研究室を後にした。

「めぐ、『めぐ』と心中で何度も謝りながら。

「……」

残された男一人は無言だったが、やがて光が悪びれた様子もなく、口を開いた。

「弥栄くん、怒ったー？」

「……別に」

弥栄はそう言いながら飲み終わったコップなどを洗つて片付けているが、いつもなら光の空いたコップにコーヒーを注ぐなり片付けるなりしてくれる男なので、やはりいつもよりは不機嫌、またはシヨックであるのだろう、と光は思つた。

「まあ、もしかして、万に一つでも上手いくかなーとも思つたけれど、やっぱダメだつたか。でも弥栄もこれで、ふんぎりついたでしょー」

余計なお世話だとわれそ�であるが、しかし光はいつかはこうなるだろ?と思つていたことなので、悪びれる様子もない。

性格上、光は前々から祇園にも弥栄にも業を煮やしていた。何故二人共それに、好きな相手に対してもウジウジとしているのか、彼には到底理解出来なかつたのだ。

すつきりしないならすつきりさせればいいのに、一人がどうしてはつきりと結論を出さないのか不思議であつたし、面倒くさいヤツらだなと思つていたものであつた。

よつて光としては傍観者としてもどかしいだけでなく、これで祇園や弥栄も色々とリセットでき、新しい気持ちでそれぞれやり直せるのではないかと、おせつかいながら思わず口出しあしてしまつたのである。

正直、光自身、常に女との修羅場を抱えている為、この居心地の良い研究室ではそういうた男と女の『ざじざわ』があるようなことは避

けたいと思っていた…… ようでもある。

「まあ、ね」

弥栄は一瞬光をじろりと見たが、結論として光に同意したのだろう。どつかと椅子を揺らしながら乱暴に腰掛け、刈り上げた髪を荒々しく搔いた。

弥栄とて、知っていた。早海が現れてから、いつもしつかりしていたゼミ長である祇園の様子がおかしくなった。

今まで自分たちに、それに何より憧れているだろう、青井の前でも見せていない表情をし、あの後輩に翻弄されていた時点での片想いはもう叶わないだろうと諦めていたのだった。

その表情を見れば少々複雑な感情にはなった。しかし彼女の性格上、自分がそんな感情を見せられると弥栄は想定していたし、それは今でも間違つていなかつたと思える。

だから祇園と早海が「付き合つてている」ならば、これ以上どうしようもないのである。…… それこそ、祇園が青井に密かに憧れていたように、身を引くしかないのだ。

別に狂おしいほどのものではなかつた、どこか「いいな」と思つていた青年の仄かな恋心は、あつさりと終わりを告げた。

おそらく誰の為にも「最初から無かつたことにした」方がいいのだろうと弥栄自身思つており、逆に祇園に手出しをしなかつたことで深みに嵌ることもなく、彼もまたそうすることで防波堤を作つていたのであつた。

この男に恥をかかされたようなものではあるが、確かに区切りをつけられた、と感謝できない…… こともない、かもしない…… と何處までもお人よしの弥栄は、とりあえずその方向に自分を納得させた。

それでも、はあ、と思わず溜息をついてしまつた弥栄の広い背中

を定規でぐりぐりと突きながら、光は流石に同情したように言った。

「なー、今晚おごるからさー。元気出せよー。おねえちゃんの居るお店がいい？ それともソー……」

「普通の居酒屋でいい」

弥栄は光の言葉をきつぱりと遮ると、いや、居酒屋などでなくて今夜はこのトラブルメイカーに高級寿司でも奢らせようかと、女性が苦手な大食漢はそれだけを楽しみに思つたものだった。

・・・・・

祇園は理学部棟を歩きながら考えていた。

五年前、「もしかして祇園は早海のことが好きなんじゃないか」「もしかして早海も祇園のことが好きなんじゃないか」と言われ、心が乱れた。その思いに驚くほど支配され、狂いそうになつた。

しかし今、「もしかして弥栄は祇園のことが好きなんじゃないか」と言われても、動搖はしたもの祇園の心はそこまでは乱れなかつた。

それは彼女自身が大人になつたから、といつこともあるが、既に別の魔法に掛かっていたからだ。もう早海のことが好きだと、それも一方的なものでなく彼にも想われているという双方向の「絆」として、彼女の心が定まつてゐるからだつた。

今は姿が見えない分だけ、余計に想いが募つてゐるだけかもしれないが。

だからこそ、まだ恐くて弥栄に「好きな人がいるから」という言葉は出来なかつた。逆に「付き合つてゐる人」と、早海の存在を盾としてアピールしたのは、早海のようにこれ以上弥栄に踏み入れられることも、また恐れたからだ。

それに、今度は青井を想つてゐた時と違つ。

五年前から好きだつた男なのだ。このようやく気付くことが出来た初恋を、誰にも邪魔されたくなかった。一人で静かに温めていたかつた。

青井に憧れていが報われず、早海に告白をされたり優しくされたり身体の関係になる内に、彼に想いを寄せていることを自覚した。しかし今、同じことを弥栄がしたとしても、祇園はそれに縋ろうとは思えなかつた。

それは早海と自分の恋が実つてゐるかもしぬないということもあるが、やはり五年前から、という初恋の理由は大きかつた。あの頃の彼女を救つた、ただひとつ存在であるからだ。

だがそう言つて、実は早海に愛想をつかされていた場合は、祇園の方が恥をかくことになるのだが……。そんな事態となつた時、今度は弥栄の方にあつさりとなびいてしまうのか、そんな不実なことではいけないと独り身を選ぶかは今は考えられない。

今はただ他のどの男にも感じられない、早海へのこの感情を大切にしたいと彼女は思つていた。それこそ、自分の為に。

それにしても早海以外の男に好意を寄せられて揺らがなかつたことには、祇園は胸を撫で下ろしていた。

そしてそんな彼女は、理学部棟を出たところである人物に出会つた。

「よお、」

その久しぶりに出会う長身の人物は、手を上げて子供っぽく笑う。

その笑顔を、何より眩しいと思っていた。

それを見ているだけで幸せになれた。もしかしたら、それが欲しかつたのかもしれない。だがもしも、それが本当に手に入つていたら、どうなつっていたのだろうか。

「先輩……」

夏休み前に会つて以来出会う、その「好きだつた」男 青井を、

祇園は妙に感慨深く見上げた。

「好きだった」と言つても、その想いがゼロになるわけではない。やはり申し訳ないが彼の顔を見ると、弥栄たちとは（とりあえず光よりはずっと）また違つた甘さに胸がくすぐられる。

だが、今なら何となく分かる。この甘く優しい想いは早海に抱いているものとも、きっと違う、と。

「光たち居た？　土産持つてきたけど」

「あ、はい」

土産の入つた袋を揺らして笑う青井に、祇園はこくこくと頷く。

「祇園は帰つちまつの？」

気に掛けてくれる一言も、やはり今でも祇園には嬉しい。だが、今は一人になりたかった。寧ろ、別の存在に会いたかった。

「は、はい、ちょっと用事あるんで……」

「そつか、じゃあ残しとくように言つとへー」と青井はまた笑つた。一年前から、その笑顔に憧れてやまなかつたことを祇園は思い出す。

しかしそれは、心の空白である寂しさを埋める唯一無二のものとして、ではない。勿論、青井が彼女のこと愛することがあつたなら、擬似的には埋められたかもしれない。

だが、きっとたとえ青井にどれほど大切にされたとしても、「五年前からの空白」は埋まらなかつただろうと、今なら祇園にも分か る。

きっといつまでも、何処かに何か大事なものを置き忘れたような気がしたのだろう。「早海」でなければ、おそらく一生何かが足りない気がしていたのだろう。早海に再会しなければ、その違和感も分からぬままであつただろうが。

だから祇園が青井の明るい笑顔に惹かれた理由は　きっと、そ

の寂しさを「忘れる為」なのだ。彼の明るさに縋ることで、早海でないと埋まらなかつた孤独を「無かつたこと」にしたかつたのだ。

こんな風に笑えるようになりたいと、この年上の男に心から憧れた。それはそれで、ひとつ恋だつた。

じつと青井を見上げていた祇園であったが、それらの想いを確信した後に、ぽつりと呟く。

「先輩」

青井が祇園の方を見た。

「好き、でした」

風が流れ、コスモスを揺らした。

「先輩と、倉崎さんみたいに、なりたいです」

これは相手を欲しいが故の切ない告白ではなく、今の祇園が自然に思つていてことを口に出しただけであつた。だから彼女は少しも照れることなく、思つたままの言葉を伝えることが出来た。

青井はきょとんと祇園を見ていたが、彼もまた彼女の最後の言葉からそれを「告白」とまでは重く捉えなかつたようだ。それは、あえて捉えようとしたなかつただけかもしれないが、快活に笑うと祇園の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「祇園はやつぱり、変わつてんなあ」

その大きな手に今まで何度も何度、後輩として安心させられてきただろうか。

まだ二年も経つていなが、この安心感の中で馬鹿なことをしながら仲間たちと笑つてこれた。

それは恋愛とは別の意味で、彼女の孤独を埋め、これから社会に出て本当に自分一人の力で生きていく上での糧となるもの。彼らとの出会いに感謝したいと、祇園は心から思つていた。

「彼氏と仲良くやれよー」

そして手を離すと、青井は最後に眼を細めてそう言った。祇園はその言葉に少々心配になりぴくりと動きを止めたが、青井を心配させないよう笑つて頷いた。

この連絡のない間、早海は他の女と……といふことはないだろつか。ここまで彼への想いを確かにし、周囲にも応援されておきながら、いきなりふられたりはしないだろつか。

その不安が、祇園にはまだあったからだ。

青井に頭を下げ、家へと歩き出した祇園は、弥栄や光や青井にこれまでになくきっぱりと早海の交際を宣言し、心が徐々に決まりつつあるものの、後でそれを訂正することにならないかと不安になつてしまつ。

だがあそこまで自分にしておいて、自分を信じさせておいて裏切る　早海がもしもそんな男ならば、それはとても恐いことだが彼を選ぶ必要はないだろうと祇園は思った。

信じたい気持ちと不安な気持ち。そして自分を支えてくれた人々の想いに触れることで、自分の深いところにある隠れた心を見つめ直すことが出来た今。

もう、受身のまま彼からの連絡や、自分に会いに来てくれるることを待つていてはいけないのではないか。

五年前からずっと逃げ続けていたが、今度こそ自分から勇気を出して想いをぶつけ、確かめなくてはいけないのではないか。そうではないと、彼を本当の意味で手に入れることは出来ないのではないか。

夏が少しづつ終わりに向かつて歩き出す高い空を見上げ、臆病な少女だった　今は一人の女性としての恋に身を焦がす祇園は、拳を握つてこくんと強く、頷いた。

第34話 会いたい、ただそれだけ。

たくさんの事実や出来事、己の記憶やトラウマ、そして周囲の仲間の想いや考え方。そうしたものから、祇園はひとつつの答えを導こうとしていた。

それは二十歳の女性の恋愛にしてみれば幼稚なものかもしないが、逆にその年齢であつたからこそ深く考え見誤らず、覚悟を固めることが出来たのだろう。

しかし相手と大人として過ごした時間がまだ短いため、実際、将来のことまでは分からぬが……。

それはさておき、いよいよ固まつた決意と残る不安 つまりは早海への恋愛感情の自覚があつたはよいものの祇園はござ、どうすればよいのか分からず困惑っていた。

まず彼に、電話をしようと思った。しかしそれでも何かが足りない気がしていた。そんな行動でも足りないと、最後の見えない何かが彼女に違和感を抱かせている。

それは何なのか。

昨日、光が暴いた弥栄の気持ちに逆に背中を押され、青井への気持ちへもふんぎりをつけることが出来た祇園。後は早海に素直に伝えればよいだけのことである。

それでも電話のボタンを押すだけの勇気にはまだ至らず、彼女は再びふらりと斯波研究室へと向かつた。

斯波からのメモで分析のデータ作成を一件、誰かやつておいてと書かれてあつたので、どうせ誰もやらないだろうと、現実逃避にそれを引き受けることにしたのであつた。もしかしたら、逆に光達に会つて、「まだ連絡とつてねえの?」と言つてもられることを期待

しているのかもしぬなかつた。

だが祇園の思惑と裏腹に、流石に夏休み中、二人が一日連続で研究室に来ることとなかつた。

室内では斯波が教授席に座つて、のんびりとパソコンで仕事などしており、珍しく彼と二人きりになる。

「データの整理に来ましたー」

「はーい、ごくろーさまー」

祇園は入り口でぺこりと頭を下げるが、研究室のパソコンの前に座つた。その後は互いに口もきかず黙々と作業をし、二つのキーボードの音だけが部屋に響いていた。斯波も何を熱心に打ち込んでいるかは不明だが、集中している間は口数も減るようである。

祇園も斯波が居たおかげで作業に集中でき、昨日からの焦りをしばし忘れることが出来た。

……と言つてもその現実逃避は一時間ほどのものであり、ややあつてデータをグラフ等にまとめたり、注釈を書き入れたりなどしたものを見リントアウトした。

「教授、こんな感じでいいですか？」

祇園からチェックを頼まれたそれにとりあえず眼を通した斯波だが、「いいんじゃない」

といとも簡単に投げ出した。その上、

「参考のところにさ、なんか適当な論文いくつか挙げといて。そこに最新の置いてあるから」と論文の山を指差し、更に適当なことを言うではないか。

実際論文の拾い読みは勉強になると、斯波研でこき使われた卒業生が嘆きつつも言つていたのでやぶさかではないものの、本当にこの親父は教授として大丈夫なのかと、久々に祇園の頭が痛くなる。何もない上司の元では部下が育つという説があるが、斯波研究室はまさにそうかもしれないな……と彼女は思つていた。

「はい、喜んでー」と声の声もおかしいが、勉強にはなるのだからさすに嫌そうな顔をするのはやめておくかと、祇園は結果的に無表情で大人しく頷いた。そんな祇園に、「急いでないから、ぼちぼちよろしくねー」と呑気な笑顔を向けた斯波は、仕事が一段落したのかいつもの調子で彼女に話しかける。

「で、次のゼミの言霊のレポートはどう? みんなやつてくれてそう?」

祇園は言葉に詰まった。時間が全く無いわけではなかつたが、空き時間は彼女自身も自分で呆れるほど色恋沙汰で悩んでしまい、昨日までその存在を忘れてしまっていたのだ。

その昨日も弥栄や青井との一幕で、結局レポート自体は何も進まなかつた。期限が近いのでそろそろ本腰を入れねばならないが、発想力が必要そうなその謎の主題は、光と違ひ祇園にはとても難しいものである。

「私は、全然です……他の二人は分かりませんが」

祇園が首を振つて苦笑したのを見ると、斯波は両手を頭の後ろにやり、ぎしりと音を立てて肘掛のある大きな椅子に凭れた。

「まあそういう研究は本来、文系畠の仕事だし、そういう論文も読本もいくらでも出てるけどさ。それでも僕が手え出すのは、あえてそれを理学的にこじつけて解明してほしいと頼まれたからで」

……こじつけなのかよ、頼まれたって誰にだよ、等々祇園には突つ込みたいことが山のようにあつたが、微笑む斯波の話を黙つて聞いていた。

「だからまあ、君たちの得意な範囲でやつてよ」

あなたの道楽の手伝いだらうがー!と最後にやはり突つ込みたくなつたが、結局押しに弱い祇園は、斯波のにつこりとした笑顔に黙つて頷いてしまつのであった。彼女はそのまま、思わず溜息をついて呟く。

「でも、眞面目って、本當にあるんでしょうかね……意味、違うかも
しないですが、口に出してしまつと、それまで思つてもいなかつ
た言葉なのに、そういう気持ちになつてしまつじゃないですか、そ
れと同じですかね……」

それは彼女が今悩んでいることが、自然に口を突いて出てきてし
まつものであつた。

今まで「もしかしたら」と惑わされてきた多くの言葉や仮定
があつた。

そして先日、美幸との会話で思わず口にしたことで、早海への想
いが祇園の中で命を持ち始めた。

口にするたびそれらが広がつていき、祇園自身にも収集がつかな
くなつてゐる。もつ押し留められないほど、否定する余地が無いほ
ど、最初からそうであつたような気がするほど、その感情に覆われ
ている。

もし誰かが最初にそれを口にしなければ、こんな想いにはならな
かつたのだろうか。

それは口の深層心理を、言葉の持つ魔力の所為にしようとしてい
るだけなのか、本当に言葉自体に魔力があるのか、祇園には分から
ない。

しかしきつと、本当はその「答え」はこんな風に考へる必要のな
いほどシンプルなものだろうが、祇園は最後の一歩を踏み出すこと
が出来ず、未だこんな所に留まつてゐるのである。

斯波は珍しく情感を込めて言つ祇園を、眼を瞬かせて見上げると
苦笑した。

「うーん、青春、してるねえ……」

彼はとしては、学生の人間関係まで介入するつもりなどない。し
かし人間そのものには興味があった。だから最近の祇園の変化が面

白いとは、彼もまた思つていたのである。

そしてその変化が、あの不思議な生協アルバイトの男子学生が研究室に現れるようになつてからだといつことも、斯波は理解していた。

たくさんの若者たちを今まで見てきたが、祇園に対し飄々としながらも躍起になつてゐるその青年が、明るさの裏側に危険なものを持えていることは何處と無く分かつた。だが、それが祇園に害を為すものではない、彼女を傷つけようとはしていない、という善意のものであることは分かつてゐたので、冷やかす以上の口出しさはしなかつた。

第一、彼が現れるようになつてから、祇園が可愛い表情をするようになったのだ。それは、この女子学生にとつて決して悪い影響ではないだろう。

うーん、夏休みだし、こんなこと言つなんて何かあつたな、と祇園の質問から斯波は察したが、それ以上のこととはやはり言わない。若いのだし、何も考えず同世代の皆のようになつて溺れてしまえばいいのに、この固い女子学生は中々そはならない。斯波も一度会つたあの父親の育て方がよかつたのだろうか。

勿論、若い女性が自分を大事にしていることは見ていて安心だが、何もそこまで頑なにならなくてもいいの……と光と同様に、斯波も思つていた。

なのでまだ何か悩んでいる祇園に対し、彼は言靈の話に関連してこんな言葉を贈つてやることにした。

「元々そういう思想だよね、口にした言葉が命を持つって。あと、音そのものとか同じ音を持つものは同じ意味や命を持つとも聞くから、やっぱり音を発するつて行為自体に何かあるつて考えてるんだろ? うね」

祇園はなるほど、と思いながら斯波の話に聞き入つていたが、次

の唐突な言葉に思わずどきりとせすにはいられなかつた。

「たとえば僕は思うんだけビ、『会いたい』とかつてさあ、」
斯波は祇園の動搖に気付いていないよつこ、禁煙の研究室にも関わらず煙草を取り出して口に咥えた。

「『会いたい』ってたつた四文字で、凄くシンプルな言葉だし、気持ちだよねえ。さつきの話でその『会いたい』の『会い』は、きっと愛情の『愛』と同じだろうって僕は考えるんだ。『あい』は言葉の始めもあるし、もしかしたら、一番基になる感情かもしけないね……ってこれは、僕の持論ね。あ、みんなに内緒でレポートのネタに使ってもいいよ」

「……」

臭い煙草の煙と共に吐き出す[冗談染みた言葉と共に、斯波は祇園の眼を見た。

彼女は一瞬きょとんとした表情をすると、次に真剣な表情に変わり、拳を握つて唾を『じく』りと飲み込んだ。

どくんどくんと心臓が拍動する。　その言葉が、命を持つた、からだ。

それだ、と祇園は直感で思った。

何かずっと自分に足りないと思つていた、たつたひとつの言葉、気持ち。

自分の想いを具体的にどうしてよいか分からなかつた、その答え。「好き」だという抽象的な言葉以上に分かりやすい、根幹となる欲求。

そうか、ただそれだけのことなのか。それだけでいいのか。この「愛情」をどう表現すればいいかに、言葉など要らなかつたのだ。ただそれだけのことだつた。

ただ「会いたい」、それだけでいいのだ。一人の男の間で揺れたとか、利己的な幸福の追求をしているだけではないかとか、たくさん理屈を並べて答えを求める自身を責めていたが、こんな簡単なことでもよかつたのだ。

確かに今、これほど「会いたい」と思える相手は、この世でたつた一人しか居なかつた。

この気持ちを語るのに、伝えるのに、認めるのに、たつたそれだけのことじでよいのだ。きっと一番最初に、早海が彼女の元に現れた理由と同じように。

祇園の最後のパズルのピースが手に入る。それこそが真に、今の彼女の気持ちにぴたりと当てはまる鍵であつた。

彼女の封印されていた扉が開ききり、見たことのない光が溢れ出す。驚くほど真っ白なそれで、今はもう何も見えなくなっている。あとは、早海のそれを見てみたいと思った。確かめようと思つた。

会つて顔を見て、声を聴いて、確かめよう。いや、ただ顔が見れれば、声が聴ければ。それだけでもう、構わない。

「 そう、ですね……ありがとうございます」

あまりにも心臓がばくばくと言うので祇園は、たどたどしく笑い礼を言うと、よろめく足で研究室の席に戻り、まとめたデータを片付け始めた。

「 つ、続きはまた今度しますね」

そしてこの衝動を斯波に見透かされそうな気がして、彼の方を見ずに片付けをすると、居てもたつてもいられずに、彼女は唐突に研究室を飛び出した。

「うん、いいよー。」苦労さん。レポートもよろしくねー

斯波は煙草をふかしながら、のんびりとそれを見送り手を振るが、ばたばたとけたまましく足音を立てて去っていく音を聞きながら、

またぽつりと呟いた。

「青春だねえ……」

とりあえず家庭環境や諸々から頑なだったのだろうあの生徒が何かふつきたならそれでいいや、と斯波は思っていた。

・・・・・

最後の、いや最初の一歩が踏み出せなかつた祇園は、それでいいのか、そんな簡単なことでよかつたのか、と眼から鱗が落ちたようになにすつきりとしていた。素直にそう思えたのは、内心では信頼している斯波からの言葉だつたから、といつもあるかもしれないだろう。

そして斯波といい昨日の光たちといい、もしかしたらそれぞれにはつきりしない自分にやきもきしていたのかな、と今更ながら祇園は気が付く。

そう思うと早海の気持ちにも、自分の気持ちにも、周囲の視線にも鈍感であった自分に恥ずかしさが込み上げるが、まだ夏休みなどし、しばしどんなには会わないのだ。もうこの恥については忘れてしまおうと、彼女はふてぶてしく開き直つた。

今は色々なことを気にするよりも、生まれて初めて発見した、今ようやく分かったこの単純な欲求　　早海に会いたいと思う自然な気持ちに、本能に従いたいのだ。

己の気持ちを認めたものの、どうしてよいか分からず困つてたが、こうすればいいのだ。心の赴くまことに、そう行動することだけでよかつたのだ。

これできつと、今度こそ五年間の全てが清算される。たとえ受け入れられても、拒絶されても。

祇園は一田家に戻り、そわそわと落ち着かない様子で出掛け準備をする。

先に彼に電話を掛けた会いたい、と伝えようかと思ったが、今はきっとアルバイト中であろうし、出てもらえないかも知れないとも彼女は思った。

何よりも、彼は会いたくないと思っているかも知れない。玉砕してしまいかもしない可能性も残っていると思うと、本当は今でも恐かった。

だが一度はつきりと認めてしまったからか、今は不思議なほど会いたくて会いたくて堪らなくなってしまった。

だから門前払いを食らつても、迷惑になろうとも（アルバイトが終わるまでは待つが）、直接会いに行つて確かめようと祇園は強引なことを思つたのであつた。会つて駄目なら、哀しいが諦めようと覚悟も決めて。

ただ、今は進みたい　長いこと苦しんだ、全ての決着をつけるために。

そんな風に考えることは冷静で臆病な祇園にしてはとても珍しいことであつたが、彼女なりに勇気を出し、全てを受け入れた結果であつた。

もしかしたら、最初に早海が来ててくれた時も、もし自分なんかを本気で追いかけってくれたのだとしたら、こんな気持ちだったのかな、と祇園は思っていた。

そうであれば、くすぐったいが、とても嬉しい。とても尊い感情であると、今なら思える。

アルバイト先の旅館の名前と所在地の市町村名は聞いていたので、後はインターネットで場所を調べた祇園は、車を発進させた。

優しい早海のこと、自分が嫌いでなければ邪険にはしない

だろう、と今までの祇園には有り得ないほど、自己中心的に前向きに考えていた。よく言えば恋をして精神的に強くなり、度胸がついたのかもしかなかつた。他人の心を手に入れたいと切望するまでに。彼女がここまで他人のことで情熱的になるのは、初めてのことであらう。おそらく、五年前からの苦しかつた想いが今、爆発しているのだ。

そしてこの先もこんな想いをするはないであろう。何よりこんな切ない想いをすることは、もう御免だと思つていた。

会いたい。ただ、それだけ叶えればいい。

祇園は車を走らせながら、思い出していた。五年前、彼と一度別れた時、本当は心の中でそう必死に叫んでいたことを。

本当は早海に、会いたい、と。

自分の傍にずっと居てくれたあの少年と、離れ離れになりたくなかつた、と。

今日までその言葉を封印していたのは、口に出してそれを認めてしまえば、そう出来ない孤独な現実にもつと苦しくなると思つたから。

十五の少女にそれはどうしても出来なかつたのだ。

会いたい、離れたくない、そう素直に口に出し、相手に拒絕されることを恐れていたから。だから少女は大切な少年に、「さよなら」すらも恐くて言えなかつた。「さよなら」と、相手に言われたくないかつたから。そんな想いをするくらいならば、「自分」が消えてしまえばいいと思つたから。最初から全てを無かつたことにすれば、楽になれると思っていたから。

それが積み重なり、こんなにまで膨れ上がつていても気が付かずには。

それに言霊の話ではないが、「死ぬほど会いたい」なんて思つたら、本当に会つたら死んでしまうじゃないか、とあの頃の祇園は真剣に思つていた。

だから早海には会つてはいけない、それだけのために死ぬ覚悟などないと、思つていた。今なら、それを笑い飛ばせるし、そんな覚悟もあるよと言つてのけられる気がしていただが。

だが時を経た今、そんな自分を過去から探しにきてくれ、包み込むような安心感を同時にくれた相手と彼女は再会出来た。その大人としての深い感情を信じられるようになつたからこそ、祇園はようやく一步踏み出せたのだ。

そう思えるほど自分を大切にしてくれた早海には感謝したいが、そこに至るまでは全て受身なことばかりであったので、今度は自分が自発的に相手に向かつて発信しなくては、彼は手に入らないだろうと祇園は思つた。

賭けでしかない恋愛成就の為にこの慎重だった自分が動いていることを、彼女はとても不思議に感じている。

それでも今は、「会いたい」というたつたひとつの一氣持ちに従つ以外に考えられなかつた。ただ顔を見て、声を聴きたかつた。泣きたかつた五年前のあの日に戻つて、全てをやり直したかつた。

そして彼が自分に心を向けてくれた、と思つたあの熱い夜の悦びをもう一度感じたかつた。それが永く続くものかを彼の口から確かめたかつた。

心のどこかで、今、彼の元に飛び込んでしまつたら、きっとレポートなんて間に合わないんだろうな、などと祇園は未だに現実的なことも考えてしまつっていたが、それさえも後回しにしてしまうほど、今や恋に狂つてしまつていて。

真面目な彼女はそれを恥ずかしいと思いながらも、やはり外の夏

の日のみひのみの日が清清しく晴れやかな気持ちになつっていた。

……そんな祇園が海辺の旅館に到着したのは、夕方、日が傾き始める頃のことだった。

第35話 一度目の再会

県内ではあるが、高速を使って一時間以上掛かる県境の海沿いの町で、早海は住み込みで旅館のアルバイトをしていると言つ。本当にその旅館が見つかるのかと緊張していた祇園だが、高速を降りた後に分かりやすい大きな看板があつたため、意外と呆氣なく辿り着いた。

高鳴る胸を押さえつつ一度目はその旅館の前を素通りし、駐車場が見当たらなかつたので近くの体育館に止めるとそこから歩く。

時刻は夕方、五時を過ぎたところ。これから夕食と言つ最も忙しい時間だろうから、感情に任せて飛び出したはいいもの、今会いに行つても相手を困らせるだけではないか、と今更祇園は気が付いた。嫌われてもいけない、顔を見ただけで帰ろうと思つた。彼の気持ちを確かめるのは、帰つてきてからでも十分である。

今はただ、彼に会いたかった。顔が見られたならそれで嬉しい。それだけで帰ろう。

だがそれだけでも迷惑がられ、重いと思われ引かれてしまうだろうか。逆に、万が一にも相手が優しい言葉のひとつでも掛けてくれるだろうか。

恋をした自分のひとりよがりな考え方や無鉄砲さに、祇園は自分でも呆れていた。

いつその旅館に何気ない顔をして泊まり、明日顔を見せようとも考えてしまつたが、夏休み中の今はきっと混雑しているだろうし、金もないことだしその考えを取り消す。

祇園は更に緊張しながら、それほど大きくないが綺麗に改装された入り口をちらりと覗き込む。早海の姿は見えなかつたので、裏口へと散歩のふりをして歩いていった。

それにしてもここから先どうするつもりなのか、彼女にしては珍しく何も考えていない。やはり夜まで待つべきだろうか、と考え直しつつもとりあえず旅館の周りを一周してみる。

この町はちよつとした観光地であることから隣にも旅館が建つており、土産物屋も近くにある。海に面する裏口に近づくにつれ、観光客の声が遠のき、ざざんといつ波の音が大きくなる。

怒られないかなあと思いつつ、祇園が裏をひよいと覗き込むとガシャン、と何か重い物を置く音がした。其処では丁度、頭にタオルを巻いた若い男が一人、裏口からビール瓶の入った箱を下に置いたところであった。

祇園はその人に思い切つて尋ねてみると一歩近づいたところで、息を飲む。彼は祇園に背を向けたまま、また中に入ろうとしたが、その背中にはしっかりと見覚えがあった。

いつの間にか、広くなっていた背中。もう何度か、追いかけて歩いたそれ。

いつの間にか、追い求めていた　それ。

会え、ちゃつた……。

本当に自分は「彼」に会いたかったのだ、ということをその姿を見た瞬間、安堵で身体中の力が抜けそうになることで自覚する。

忙しいとは分かつていながら、今声を掛けねば会えないまま帰ることになってしまふかもしれない、あれだけ長い間自分の気持ちから逃げ続けていたくせに、祇園は躍起になつて叫ぶ。

「早海……っ！」

その細い声に、Tシャツにカーゴパンツとラフで動きやすい服装

をしている青年は振り向いた。彼の動きが今はスローモーションのように、祇園の眼に映る。

その声に、眼に入った女性の姿に、彼 早海はぽかんとした顔をした。

眼をくじくじとさせ、不意打ちを食らった早海のその表情には、今まで祇園に見せてきた余裕の態度は全く無かつた。心の隙をつかれたような、まるで中学生の時に戻つたかのような、あどけなさが出ている。

その顔を見て祇園は思わず、吹き出してしまった。そんな気分になつた。こんな状況でありながら、そんな彼の表情が懐かしく、可愛らしくすら見えたからだ。

「つて……、なんで、居んの……」

そして搾り出された早海の声もまた、「素」のそれなのである。あまり聞かない掠れたような困惑したものであり、その反応には逆に祇園も不安を覚えてしまい、何も言えなくなってしまった。

しかし彼女以上に畠山とし、言葉を失つてしまつたのは彼の方である。早海はしばしほかんと祇園を見ていたが、やがてぐしゃりと右手で前髪をかき上げると、顔を半分隠した状態のまま、その場にうずくまつてしまつたではないか。

それを見た祇園は、流石に驚かせすぎたか、それとも自分なんかこんなところまで追いかけて来たことが、それほど重く迷惑で困つているのか、と更に不安になつてしまつた。

拒絶の言葉を言われる前に、仕事の邪魔にもなつてゐるし帰ろうとして、出発前の意気込みは何処へやら、

「仕事中に、『めん！』

祇園はそつと踵を返そつとした。が、一旦は背を向けた彼女に向かつて早海は一言。

「　待てよ」

ぐぐもつてはいたが真剣な低い声が飛び、彼女の身体は釘を打たれたように静止した。

むつくりと彼を振り返ると、彼は手を当てていないほつの眼で、ふてくされたような上目遣いをして祇園を見上げた。夕日でよく分からぬが、その頬が赤くなっているような気がするのは、日焼けの所為だけだろうかと彼女は首を傾げる。

それでも引き止めもらつたことは嬉しい。少しだけでも話が出来ればそれでいいと、祇園は口早に話す。

「ごめん、ね。迷惑かけて、忙しいのに。もう、帰るから」「こんな場所でこんな短い時間で、自分が此処に来た理由など言えるわけもないが、祇園の今までの行動パターンと早海のこの反応から彼女がどれほど珍しいことをしているか、そしてそれが何を意味しているかは、彼も分かつているのだろう。祇園は恥ずかしさに居たたまれなくなり、眼を逸らした。

「いや、迷惑、なんて、んなワケ つつうか、この一番忙しい時聞じやなきや……」

早海は顔に手を当てたまま、はあーっと深いため息をひとつつべと、少し落ち着きが戻ったのか立ち上がった。

一番忙しい時間じやなきや、どうしたんだろう?と祇園は不思議に思いつつ、彼の常でない素の、本性を剥き出しにした喋り方に、これまで密かにぞぎまぎしている。そして彼もまた何かを決意したよにその手を外すと、今度は真っ直ぐに祇園に視線を送ってきた。祇園がおずおずとそれを見返すと、それは今までのような穏やかな笑顔とまるで正反対の 彼女に真剣に言い寄つてきたり、彼の本心を話す時の表情に似たものであつたので、今から彼が言うことに「嘘」はないんだろうな、と彼女は思った。

「もう、帰るの？」

「え……つと」

何も考えずただ飛び出してきた祇園は、返答に詰まる。一応知らない土地なので、何が起こってもいよいよ今回は着替えだけは持つてきてしまふ。

なので、彼に会えた後のこととは考へていなかつた。祇園は困つたようにTシャツの裾をいじつた。そんな彼女に早海の方から話し掛ける。

「悪いけど、こつから終わる時間までもう抜けられねえから……もし待つてくれんなら、部屋ひとつくらい空いてたと思つから、聞いてくる?」

困らせているのはこちらであるのに、彼はこんな時でも気配りを見せてくれ、祇園は好きな男にこれ以上迷惑は掛けられないと大きく首と手を横に振る。

「つうん、いい！自分のことは、自分でなんとかするから！」だから早海は、仕事戻つて

一步後ずさる祇園に早海は少々心配そうな顔をすると、彼女に言ひ聞かせるよう低い声を出した。

「終わつたら、連絡するから」

祇園は氣恥ずかしさはあつたものの、素直にこくつと頷いた。

「だから、帰るなよ」

彼からもこれだけでは物足りない、傍に居たいと言ひ気持ちが伝わつてくる。そのことに身体中を熱くながらもやはり嬉しく思い、祇園は再び黙つて頷いた。

それを最後に、「じゃ、戻るから」「めん」と早海が言い残し彼女に背を向けた時、不意に裏口の戸から、何かを取りに来たらしい身体の大きな青年が姿を現した。突然のことに祇園は驚いてしまい、逃げ出すことも間に合わない。

「なんだ白川、ここに居たのか……って、まさか、彼女！？」

「すみません」と頭を下げる早海に青年は咎める様子もなく、嬉しそうにこわいと笑つて尋ねてくる。

「あー……、まあ」

流石にアルバイト仲間の前では照れるのか、早海は言葉を濁しながらも「肯定」すると、ちらりと祇園を見た。祇園もそれを見上げ、一人の眼が合った。

しかし初めて彼女はそれを「否定」しなかつた。早海にもそれは伝わつただろう。

今このこれで、このよくなとこひままで押しかけてきた「理由」を、早海に対し確証づけてしまつたな……、と祇園は「彼女」という甘い響きにくらべりくらべしながら、ぽんやり考えていた。

・・・・・

せつと、会えたんだ……。

一時間後、宿の畳の上でぐらりと寝そべりながら、祇園は夢の中のよくな気分にたゆたつていた。

フロントで尋ねたところ、夏休みと言えども本田は水曜日であり、またキャンセルもあつたことから空き部屋があるとのこと。流石に財布に余裕がないので食事は断つたが、祇園は急遽一泊の宿を頼んでしまつた。

早海の仕事が終わるのは、早くとも九時を過ぎてしまうのではないか。遠い土地でもあり、それまで時間を潰すのは祇園も辛いと思い、部屋で休んで待つことにした。この旅館には温泉もあり、うつてつけである。

彼に会え、話が出来てほっとしたといひで、ゆくべりと風呂に漫かつてきた。着替えも持つてゐるが、一度宿の涼しげな浴衣に袖を

通し、祇園は思いがけず一人旅を満喫することになつてゐる。

久々に聞けた早海の声。いつも彼とは違つた素の話し方。驚いた時の可愛い表情。迷惑を掛けたのに、自分を気遣つてくれたこと。待つていろいろと言われたこと。

それらひとつひとつを思い出すと、悦びとときめきに胸が疼いてしまい、祇園は我慢出来ずじろじろと畳の上を転がつた。今住んでいる家はフローリングであるため、いぐさの穠かしい匂いが彼女の鼻を心地良いくすぐる。

でも今夜会つて、何を話せばいいんだろうか……？

先程、「彼女」だと紹介してくれたように、既に「そういう関係」は成立しているようであるので、今更そういう話をする必要はない。だがそれはただ既成事実としてだけであり、やつと氣付いたこの想いを、祇園は彼にまだきちんと伝えていないのだ。

そうしないと本当の意味で彼は手に入らない、こんな形だけの関係はいつか崩れてしまうと思って、此処までやつてきたのであつた。また五年経つたのにそれでも祇園を追いかけてきたという早海の真意も、どうして自分なんかがよいのか、彼の隠された最後の本心も、きちんと聞いてみないと祇園は思つていた。

咲田、することになるのかなあ……。

祇園は緊張を誤魔化すように、じろりと転がり天井を仰いだ。浴衣が多少肌蹴るが、誰も見ていないので気にしない。窓の外の夕日の沈んだ海から、波の音が聞こえてくる。

「会いたい」という愛情のはじまりの気持ちに従つてみたものの、これで終わったのではなくこれから始まるのだと、祇園は改めて思つたのであった。

・・・・・

そうして少し休憩してから洋服に着替えると、祇園は適当な場所で夕食を済ませるために外出する。その後も訪れたことのない土地なので、珍しさに車を走らせたりしていると、あつという間に時間は過ぎていった。

早海の仕事は何時に終わるか分からぬものの、それこそ知らない土地でもあるのでこれ以上徘徊することは止め、宿の部屋でテレビでも観ながら連絡を待つことにした。

九時を回った頃、まだ寝巻きに着替えることなく、敷かれた布団の上で暇そうにじっくりとしていた祇園の携帯電話が、遂に着信メロディを鳴らした。がばっと起き上ると、彼女は手を震わせてその電話に出る。

『よひやく、抜けられました』

第一声に聽こえてきた「元」に戻った早海の明るく優しい声に、祇園はほっとしたような気持ちになる。本当に連絡をくれたことが、何よりも嬉しかった。

「ごめん、無理させて」

『いや、別にいいですよ』

何この会話、本当に恋人同士じやんか……、と祇園はまだ慣れないことに恥ずかしくなるが、その後の言葉を言ひよどむ彼女に早海から問い合わせてきた。

『今、何処に居るんですか?』

『えっと……結局、ここ、泊まってる……』

『それは知っていますけど、今、部屋に居ますか?』

『あ、うん……』

それもさうかと思いながら祇園は頷いた。そして早海は声のトーンを少し落とすと言った。彼は外に居るのだろう、波か車か何かのノイズに混じつてしまつが、どうにかそれを聞き取る。

『じゃあ、今からそつち行きます

』

早海に聞こえないよひ、祇園は小さく息を飲んだ。

一体これから何を何処から話せばよいか分からなかつたが、確かに五年間の空白も、上手く伝えられない気持ちも、電話などを通して話すよりも、眼を見て傍に居ればそれだけで分かり合えるような気がした。

既に彼には全て見透かされているような氣もあるが、会わない間に祇園が彼女の中で考えたり自覚した全てを、今夜伝えることになるのだろうと思っていた。そして彼からも同じように聞かせて欲しいと思つていた。

そのような想いを交わし合つたために、一番手っ取り早く確実に伝えられる「手段」が何であるかを、途中まで「それ」を経験したことがある祇園は本当は知つているのだが、あえて「それ」を考えないよう、しかし覺悟だけは心に決めながら、彼がドアをノックする瞬間を待つた。

第36話 もしかしたらの神様（前編）（前書き）

不倫など家庭不和を取り扱う表現がある章ですので、予めご了承ください。

第36話 もしかしたらの神様（前編）

決して安くはない一泊の料金が表すように、一人で泊まるには広すぎる部屋は静まりかえっている。その静寂の中、緊張に高鳴る心音が祇園にはやけに大きく感じられた。十分ほどの時間が一時間にも思える。

ふと先程の電話は夢ではないか、とすら思った時、静寂は、破られた。

閉められた襖の向こうのドアを、ノックする音。

この旅館でアルバイトをしている以上、声を出すのが憚られたのか、同時に手元の携帯電話にメールが届き、「彼」が部屋の前に居ることを知らされる。

来た！

何かが始まる予感がし、祇園の胸が更に波打つ。足をもつれさせながら立ち上ると、慌ててドアを開けた。

「

笑顔で其処に立っていたのは、彼女が誰よりも会いたかった男。祇園は一瞬、中学生の時の小さな彼を思い出そうとしてみたが、大きな手が素早くドアを閉め鍵まで掛けたことに視線が奪われ、残像は消えた。

「すみません、あんまり汗かいてたんで、流すだけしてきました」それに突っ込む隙を与える、そう言つた早海の黒く短い髪はまだ湿つており、ふわりと石鹼の香りが漂つた。祇園が入浴した温泉にあつたものと同じものだろう。

「入つていですか？」の彼の問いに、「び、びうわ」と、追い返すこともなく祇園はぎこちない動きで部屋へと戻る。冷房の為完全に四方を締め切った状況は、まるで自宅の部屋に案内したかのような雰囲気である。

入ると同時に部屋の真ん中に敷いてある布団が視界に入りどきりとする祇園だが、一人では広い部屋のこと、早海はそこから少し離れた場所に腰掛けると壁に凭れた。その様子に少しほっとしながら、その横にちょこんと座る。

お茶でも要るかと、また立ち上がりうつする彼女に、「あ、おかまいなく」と笑う早海は、昼間の動搖したような子供っぽい表情や、本性を露にしたよう乱暴な態度は何処へやら、いつもの愛想だけがやたらよい飄々とした姿に戻っていた。

安心したように小さく息をつきながら、祇園はもう一度腰を下ろす。しかしそんな彼女の耳に聴こえてきた言葉は、再び彼女をどぎまきさせるに十分なものであった。

「でも、本当に来るのは思いませんでしたよ」

早海は両手を頭の後ろに回すとまた苦笑して、ちらりと祇園の方を見た。

「……め、迷惑だった?」

「いや、全然。寧ろすげえ、嬉しい」

彼はそう言うと更に、

「こっちも意地になつて連絡しなかつたんですけど」と言いつつ本当に嬉しそうに、眼を細めて笑う。

この臆病で意地つ張りであつた祇園がこんな行動をとるとは、いつの間にかそんなに彼が好きだったのかと彼自身に見透かされるように思い、彼女は恥じらつて俯いた。

しかし此處まで追いかけて来たのも、彼を一人きりの部屋に招き入れたのも、己の選択したことであるとも彼女は自覚している。だからこそ何も言い返すことが出来ずについた。

会いたかつたから。

答えはその一言に尽きるのだが。

恥ずかしくてそれが言えない代わりに、祇園は少し不安げに相手

を見上げた。一人の眼が合つ。

早海はじつと祇園を見ていた。祇園の訴えかけるような視線が珍しいからだろう、言葉にしない想いを探り取ろうとするよつに。

彼の腕が彼の頭から離れ、胡坐をかいしている脚の前に置かれた。重心が前に傾き、祇園の方に顔が近づく。

伝わつてしまつただろうか。

そうあつて欲しいような、知られたくないような不思議な感情を抱く祇園は、近づいてきた早海に思わず身体をびくんと震わせる。彼はそれを見るとまたふつと笑い、その腕を組みながらもう一度壁に凭れ直した。そして、一言。

「なんで、此処まで来たの？」

……また敬語じやないし、と祇園は心の中で突つ込みつつ再び俯いた。

今の視線で分かつて欲しいのに、と彼女は早海に対し心憎さを感じながらも、確かに彼に己の想いを告げる為に此処まで来たのであり、今度は自分から言う番だとも思つていた。しかし彼にもまだ、祇園に教えてくれていないことがある。

それはどちらも、二人の最後のパズルのピースにあたるものだ。

どちらが先に必要かは、この絵を描き終えるのに関係ないだろう。確かに彼は一度、祇園に会いたくて大学まで追つてきたという話をしてくれているが、「どうして彼がそうしたかが分からぬから」と祇園は自分の想いを告げていない。

しかし祇園とて理由などなく、会いたいから此処に来たのだ。

それだけが互いにとつての真実。それを認めて、勇気を持つて口にするだけのことだ。

たかだか恋愛、であつたとしても、それでも奪われれば苦しく狂おしくて息が詰まるようなものであり、何よりも大切なものであるのだ。

祇園の顔は疾うに熱く、赤くなっていた。胸の高鳴りは痛いとすら感じるほどだ。

それでも、言わねばならないと思つた。自分が、もう一度と五年前のようならぬせない想いをしない為に。

変わる、為に。

「は、早海に　あ……、」

彼女は震える声を発しながら、斯波の言葉を思い出す。

「……あ、い……」

『「会いたい」の「あい」は』

「会いたかった、から……」

それは、原の感情。

五年前からの、少女の切望。

傍に居たい！　もう一度と、離れないで！

遂に想いを告げた祇園は早海の顔など、恥ずかしくてとても見られない。たつた一言のこれが、生まれて初めて心から欲した男への「告白」だと思つていたからだ。

「それ、だけ、だよ！　わ、悪かつたね！」

もしかしたら、相手に嫌がられるかもしれない、その不安からわざと口汚く言い終えた祇園であったが、早海の顔が更に近づき、どうりとする間もなく細い肩の上にこつんと彼の額が置かれた。

「は……」

「良かつた」

「……」

深い安堵のため息と共に呴かれたのは、おそらく彼の心からの本音であるづ。

どうにか会いたいと、途中諦めようとしたながらも足掻き、結局五年もの間追い求め続け、手をすり抜けられながらも、それでもその手を伸ばし続けた少年の。

まるで泣いてしまうのではないかと 実際彼は笑っているようであったが 思われたその声に、祇園は思わず「ごめんね」と呴こうとしたが、彼の腕が自分の背中に回り、強く抱き締めてきたので、それに焦ってしまった。

「ま、待って……！」

隣には敷かれた布団。一人きりの部屋。彼を追いかけてきた自分。気持ちの高ぶつた彼。

この条件が揃えばどういったことになってしまつか祇園にも想像され、今度こそ最後まで結ばれるとすれば、尚更うやむやにされたくないと、彼女は彼の胸を押した。

「早海こはどうして、『良かつた』って思つの……？」

下から覗き込む祇園の真剣な視線に、早海も顔を上げると彼女を見下ろした。

「どうして、『私』なの？ どうして、私なんかを、五年もずっと、ううん、五年も経つてたのに、今更……」

「じゃあ祇園さんは、どうして『俺』だったの」

肩を掴んで覗き込む彼の問いに、祇園はやはり眼を泳がせてしまふ。

少女であつたあの時、とても寂しかつたから。その時に己を受け入れてくれ、誰よりも自分を理解し、必要としてくれるふりをしてくれた、ただ一人の相手だから。

どれだけ邪険にしてもめげずに懐いてきた後輩に、母親が死に父親が忙しく、誰かにストレートに好意を投げ掛けられたことのなかつた少女は、彼の優しさに心動かされてしまつていた。

その時、もしかしたら自分が愛してもらえるかもしれないという幻想と憧憬、救われた悦び。祇園こそそれを五年間、ずっと引き摺つていたのであった。

この気持ちを「恋愛感情」と言ひてよいのか、彼とこれからを過ごすことを望む理由には幼稚すぎやしないかと彼女はまた不安になり、言葉を躊躇む。

しかし早海にとつては、先程の「会いたい」と素直に言われただけで十分であったのだろう。彼は彼女の照れた様子に声も出さずに笑うと、祇園の身体を横向きに持ち上げ、胡坐をかいした膝の上にちよこんと座らせた。

「あや……」

祇園は驚いた声も出したものの、十口ばかりしか会わなかつただけなのに、ときめくと同時に身を寄せ合つことに安堵してしまう。

まるで人形を抱く男の子といった図で、彼は祇園を軽く抱くとウエーブでふわふわとしている黒髪に顔を寄せ、満足と觀念した様子が混ざつたような苦笑でぽつりと呟いた。

「なんでこんなに執着してんのかつて……、かつこ悪い話だけどな

ー……」

だから話したくなかった、と彼は頭を搔いた。祇園はすぐ横にある早海の顔を見上げると、彼は珍しく少々渋い顔をしていた。

「しかも、祇園は覚えてねえみたいだし」

祇園が再びの呼び捨てにぞきりとしながら、尚も眼を丸くした顔をしていると、早海は今度こそ大きなため息をわざとらしくついた。

そして忘れたくても忘れられなかつた、彼にとつてある意味トラウマであり何かを大きく変える瞬間であつた、この女性に心を揺さぶられた日のことを、ぽつりぽつりと語り始めたのであつた。

・・・・・

それはある孤独な少年の話であつた。

少年の両親は、どうして結婚をしたのか分からぬほど不仲であつた。少年が物心ついた時から喧嘩どころか、口をきいたところすら見た覚えがなかつた。

仕事が遅くいつも家に居ない父親。それが寂しかつたと他所に男を作つた母親。幼い頃から三人で揃つていたことはない。それでも家に居る時の母親は優しかつたような記憶が何処かに残つていた。保育園に通う頃から母親の姿をほとんど家で見なくなり、少年のことは当時まだ生きていた祖母が面倒を看ていた。

父親は仕事、母親は不倫、自分の面倒を見るのは祖母、という図式が、寂しくはあつたが何も分からぬ少年の頭には、心が押し潰されないよう「これが自分の家庭の当たり前」として、自己保身のために刷り込まれていつた。

不倫という言葉は知らなかつたが、母親が父親以外の男と会つていることは、近所の噂や祖母の話から聞かされていた。

「その」事実が彼を取り巻く世界の全てであつたので、驚くことはないものの、周りの友達は父親と母親と揃つて過ごしているのであったので、自分の家が「おかしい」のだということをがて少年は気が付く。

しかし彼は賢い子供であつた。自分の家が変だといふことは、苛

められる可能性があるということにも気付く。

幸い、虐待をされているのではなく、生活環境だけは保護者によって整えられていた彼は、友達を多く作り、笑顔で敵を作らず、喧嘩に負けない身体を作り、誰の問いにもすぐ答えられるよう勉強にも励むことで、周りから苛められることもなく学校では皆に好かれて過ごすことが出来た。

時に酷い事を言つ子供もや大人も居たが、友達が庇ってくれるなど、環境にも恵まれた。少年は放課後が近づくと、家に帰ることを内心では嫌がるようになってきた。

彼自身、冷たく暗い雰囲気の誰にも相手にされない家よりも、学校で笑つている方が楽しいと思えた。しかし毎日、夜になれば「現実」に戻らねばならない。

そんなんある日、辛うじて一週間に一度は姿を見ていた母親が、全く家に帰つてこなくなる。

父親が珍しく少年に話し掛け、母親はもう帰つてこないと話をした。離婚したのだと幼い彼にも分かった。

彼は妙に納得していた。物心ついた時から彼女のことは諦めていたので、捨てられた、という絶望すら感じなかつた。逆に不自然な「家族」であることよりも、寧ろ氣を遣つことが必要なくなり安心した。

母は居なくなり、祖母は徐々に年老いて行き、少年はいつか自分は一人で生きていかなければならないだろうと悟り、家事全般をすることを覚えた。

生活費だけは父親が祖母に与えていたので、年を取つた彼女に代わつて彼はそれをやりくりしていた。それは彼にとって自分の糧の全てであり、自分で食事を用意せねば自分の命は守れないという本能が働き、子供らしい玩具などに消費したり不良行動に走るということは、一切なかつたのである。

そして小学校高学年に上がる頃、祖母は病氣で亡くなつた。末期癌であつたといつ。

最後まで少年の面倒を看ようと、苦しさを我慢していらっしゃい。今まで優しく育ててくれた彼女には、彼は心から感謝した。

父親と二人きりになつた家は、益々冷たく感じられる。綺麗好きな父親は、ハウスクリー二ングは定期的に発注しているようで広い家はいつも美しかつたが、人の生きている気配は常に感じられなかつた。

がらんどうの暗い家に、最後は帰らなくてはならないといつ、底の見えない孤独と恐怖。

少年はそれに耐えられず、家に帰るのが嫌だとテントや飯盒を上手に溜めた貯金で買い揃え、よく遊んでいる広い公園で野営などする始末であつた。

外で虫の声の中、星でも眺めているほうが余程心が慰められた。毎日ではなかつたといえ、今思えばよく警察の世話にもならず、暴漢に襲われたりしなかつたものだと、後に彼も思い返すのだが。

中学校に入学し、少年の身体は少し大きくなつた。しかし成長が人より遅いのか、成長期を迎える少年達の中、声変わりもせず相変わらず可愛らしい容姿のままであつた。それでも父親の身長は高かつたので、そのうちもつと大きくなるだろうと彼は信じていたのだが。

だが成長が遅れていたことは、運が良かつたかもしない。中学生になれば、荒れる少年も出てくる。彼もまた身体の変化の中で、何か言い知れない憤りや衝動のようなものも感じることもあつた。

しかし人に不要とされたくない、という切実な願いがあるからか、彼がそういうものに身を任せることはしないでいた。

そんな彼がまもなく出会つたのが、無表情なひとつ年上の少

女である。

見目の可愛い女の子と付き合いたい、などそういう色気のあることをまだ考えない幼い彼は、図書委員長として眞面目に委員会の仕事をし、後輩である自分や皆の面倒を裏表なく看ている彼女に、直ぐに好感を持った。

もしかしたら、彼の家で欠乏していた「母性」を彼女に求めたのかもしれない。「冗談のようにわざと怒らせる」ことを言つてみたり、素直に好意を示して照れさせてみたり、と氣を引く為に常に彼女に話し掛けていた。

話せば話すほど、人と少し違つ彼女の反応を可愛らしく思い、楽しみにするようになつた。

それだけでなく、何処か彼女は自分の心の奥底の暗いものを察知してくれているような、そんな瞳で時折自分を見るような気がしていたのであった。

二人きりの　と言つても彼がペアになるよう仕組んだ図書当番の時に、偶然彼女が小学校高学年の時に母親を亡くしたという話になつた。

「おそろいですね」

少年　早海は、嬉しそうに笑つた。何処か遠くを見るような眼で。

ああ、なるほどな、と彼は納得する。だから自分は彼女に惹かれ、彼女は自分のことを他の人よりも分かってくれるのだろう、と。

その同属意識が彼に益々、彼女を愛しく、そして手に入れたいと思わせた。

もしかしたら、この優しくお人よしな子ならば自分を

見放したりせずに、最後まで大切にしてくれるのではないかと。

少年はいつしかその少女に対し、淡い期待を抱くようになつてい
た。

そのほんのりと温かな気持ちが、現在の憎悪にも似た執着に変わ
つたのは、少女と出会いつてから半年ほど経つた晩秋の、ある何気な
い彼女との会話がきっかけだった。

第37話 もしかしたらの神様（中編）

中庭では枯葉が冷たい風に舞う。十一月の終わりの今はテスト期間でもなく、放課後は殆どの生徒が部活動に参加している。

中学校の放課後の図書館には人がまばらであったが、当番である祇園と早海は閉館時間までは大人しく座っていた。閉館時間が訪れると、利用者人数などの日誌を書き、担当の先生に提出して帰宅するという日課になつていていた。

その間も、開館中は生徒の邪魔にならない音量と頻度で、閉館後は憚ることなく祇園に話しかける早海。

無表情で必要以上に他人に干渉せず、反面、言葉少なでも面倒見はよく、他人の感情にも敏感な彼女の隣は彼にとつて居心地がよかつた。自分に眼を向けて欲しいということもあり、常に話しかけた。他の友達といふことも楽しかつたが、彼女の傍はまた違つた温かさを感じていたのであつた。

そして「その日」の放課後。当番日誌を書きながら、祇園が珍しく早海に話し掛けてきた。

「期末テスト終わったら二者面談だよね。日程決まつたら一年の方、取りまとめて。それで当番組むから」

委員長としての仕事を真面目にこなす彼女は、いくら邪険にしていると言つても必要なことは早海にも指示を出している。彼は軽く見えて頭がよく責任感もあるので、一年生全体の取りまとめなどは祇園も彼に任せているのであつた。

「はーい」と彼は答えた後、頬杖をつき、彼女の動かすシャープペンシルの音を聞きながら思わず嫌そうに呟いた。

「二者面談、か……」

祖母が亡くなつてからというもの特に、三者面談と家庭訪問は早海にとつて大嫌いな学校行事となつた。授業参観など、通知を見せたことすらない。

自分のことを何も知らず興味もないであらう、あの父親と親子ごつこを人前でするなど真つ平御免である。幸いにも彼は人間関係を円滑にするため品行方正をモットーとしていたため、得意の天使の笑顔で、「父は急に仕事が入りました」などと嘘をつき切り抜けたことも数度あつたが、度重なれば教師もやはりそれは困るということになるらしい。

家に教師から電話が掛かってきていたが、父親は冷たく、「学業のことは学校に一任します」と一言。若い教師は早海の成績も優秀であつたため言い返すことも出来ず、益々困っているようであつた。

夏の二者面談はそうして電話で済ませたが、冬はどう切り抜けるかと十二歳の少年は悪知恵を働くかさせていたのだが。

祇園と一人きりでいることで気が緩んだか、ふとそんなことを考え始めてしまつた早海のことを、日誌を書き終わつた彼女が切れ長の眼でじっと見ていて、彼は気がついた。

シャープペンシルで顎を搔く、三年生にも見える少し大人びた顔立ちの彼女は、真つ直ぐに早海を見ている。

「終わったんですか？ ジャ、一緒に帰ります

「親父さん、来れないの？」

中学一年生の女子らしくない呼び方だが、彼女は家で父親をそう呼んでいるのだろう。祇園は早海の方を見たまま、少し首を傾げた。

早海は一瞬返す言葉が出てこなかつた。彼女の察しのよいところは早海も気に入つていたのだが、それが裏目に出たらしい。

確かに、最初に「おそろいですね」と彼女に言つたのは彼の方だ。その言葉通り父親しかいないという「同属」の仲間として、今の彼女は彼を見ていた。

「そーだよね、無理に学校も呼び寄せないで欲しいよ。うちの親父さんなんて、来ても何言つてくれるわけでもないし」

シャープペンシルを片付けながら偉そうにぶつぶつと呟く祇園にてた。

「どーでも、いいからー。」

聞いたことのない早海の声と見たことのない顔を顰めた表情に、祇園はきょとんと彼を見た。いつもなら相手に無関心を決める彼女であつたが懐いてくれた後輩に、そして同属に、流石に少しば同情心も湧くのかいつもと違う彼が気になるようであった。

また彼女にもまた彼を特別に思つ気持ちが少しづつ芽生え始めていたのかもしく、まだ精神的に幼さの残る十四歳の少女は、心配になつたことをついそのまま口にしてしまつた。

「もしかして 親と、上手くいつてない？」

早海の様子からして、まさか虐待といふことまでは彼女は思つていなかつた。中学生の思考では、同性の親に反抗しているのだろうとこうくらいの考え方で、そんな一言を口にしたのであつた。

「べつに、関係ないだろ！」

早海は祇園から顔を背けると再び乱暴に言い捨てる。いつものわざとらしいほどの一寧な口調でないことが、「異常」を彼女に知らせていることにも気付かないほど、彼はこんな話題になつてしまつたことを焦つていた。早海とて、まだ幼い少年に過ぎないのであるから。

それに彼は幼い頃から家族に大事にされていた祇園と違い、自分の家庭が上手くいっていないことを「恥ずかしい」とだと思つている。

他の人間に対してはそうでもないが、憧れの、そして似た立場の祇園にだけは劣等感を抱き、こんなみつともない自分は格好悪いから知られたくない、と思っていたのであった。

しかしその日に限って祇園は、様子の違う早海が気になるようでおせっかいにも言葉を掛ける。再び彼に元のように笑って欲しいと、寂しがり屋の少女もまた焦っていたのかもしれない。

そして早くこの嫌な話題から逃れようとすると少年にとつて、決定的な、瞬間が訪れる。

「もしかして…… もみしかつたり、する？」

早海は弾かれたように祇園を見た。
その胸が激しく波打つ。

『もしかして

その時の早海の表情を見た祇園は、直ぐに「しまった」、という顔をした。自分が「同属」なのに「禁句」を言ってしまい、踏み込んではならない領域に入ってしまったことを今更悟ったのであった。

祇園の口にした「その仮定」は、少年が今まで笑顔で隠してきたもの。

彼の家では親戚付き合いもない。だから「強いね」と褒めることはあるても、周囲の誰も早海に確認してやることはなかった、その一言。

なんということはない、ふとした会話の中でそれをあつさつと口にされ、無防備だった心をえぐられた。

うるせえ！ そう言おうとした声も張り付いて出でこない早

海の強張った表情に祇園は益々焦り、墓穴を掘るよつにフォローを続ける。

「い、いやでももしかして、早海の親父さんも、早海と同じかもしれないじゃないか。どうしていいか、分からぬだけかも、しれないじゃないか」

やめろ　！

そう、思うのに言葉が出ない。唇が震える。

それは彼の心が、ふわりと何かに攫われたからであった。それは何処か、甘い誘惑にも似ていた。

「もしかしたら」の言葉に包まれた、今まで想像もしたことのなかつた、「仮定」という名の幻想。

彼女の言葉が創り出した、有り得ない、見たこともない、自分や自分の父親の弱く温かな姿が、早海の胸の中に急速に広がる。それまるで、波紋のように。何もなかつた乾いた場所に初めて水が、色が、染み込むように。

一人で生きてきたつもりであった。幼少の頃から。それが当たり前だと思っていた。

それが　「さみしかつた」？

そして、父親は？

母親がどれほど男の影をちらつかせても、彼は女性の影は見せなかつた。それは今でも変わらない。他所で何をしているかは分からぬが、外泊はほとんどせず、家に帰つてくる　男。

何が、眞実なのか。

それが、眞実なのか。

自分は、何を信じたいのか。

本当の自分は 何処に在るのか。

この世で自分以外に、唯一信じられるかもしないと淡い期待を抱いていた少女に、脆くも崩され、そして創り上げられた幻想。信じかけていた彼女の言葉だからこそ、呆気なくまやかしに心奪われた十三歳の少年。

絶句してしまった早海に、余程まずいことを言つてしまつたかと祇園の方が驚く。純真な少女の心中に少年の黒い影が映つたか、正直と言つ残酷さで見えたそれを口にし、少年に現実を突きつけてしまつた。

そしてそのことから少年は心の中で、憧れだつた筈の少女を今は滅茶苦茶にしてやりたい、その心を踏み荒らし、汚してやりたいとすら思い始めた。

早海が彼女にどう言えればいいのか迷い、いつそ実力行使に出ようかと衝動にすら駆りられたその時 、

「おーい、まだ残つてゐるのかー？」

担当の教師が、姿を現した。

緊迫していた空気が一気に解け、祇園はほつとしたように、「あ、今帰ります」と立ち上がる。早海もはつと目覚めたような表情をした後、濁つた視線を祇園から逸らした。そして、

「おれ、先帰ります」

といつもの軽さなどなく、ぼそりとその場から走り去つていった。

祇園は呆然とそれを見送るばかりであった。

・・・・・

祇園の傍にはこれ以上居たくない、と早海は思った。だが一人になり何かの感情に飲み込まれるのも恐く、そのまま終わりかけていた部活に参加する。いつも以上に明るく笑い、一心不乱に走った。

それでも晩秋の日はすぐに沈み、木枯らしの吹く薄暗い中、皆それぞれに帰宅していく。

それこそ同じ学校には、寂しいからと夜の街に繰り出す荒れた上級生も居たが、彼はまだそこまでには至らなかつた。

暗い家に足を向ける。

帰りたくはなかつた。だが、「何か」を確かめたかつた。

真つ暗な、家。には、誰も居なかつた。

今日も、昨日も、一昨日も、明日も、明後日も、一年前も、それより前も　闇が其処にあるだけ。

くらり、と目眩のような絶望に彼は力なく膝をつく。
やばいと思つたが、もう遅い。

子供の頃から押し殺してきた、自分でも気付かなかつたひとつ的情感が、祇園の言葉をきっかけに、胸にじんわりと哀しくくらいに広がつてしまつ。

寂しい、と。

そう今、初めて思つた。

第38話 もしかしたらの神様（後編）

誰かが言葉にしなければ一生隠し通せたかも知れない感情が、言靈として命を持ち、とめどなく溢れ出して少年を飲み込んでいく。たつた一言、「もしかしたら」と仮定されただけなのに。その後に言われた、「もしかしたら相手も同じ気持ちなのではないか」という仮定までもが、早海の胸を驚掴みにし、本当は昔からそれが事実であつたかのような優しい幻覚で惑わせる。

その時、ぽろり、と彼の眼から涙が零れた。

一度落ちるとそれは止まらない。物心ついでから泣いた覚えなどなかつた早海であったが、溢れ出した熱いものはとめどなく流れ落ちてくる。

その日彼は、何年かぶりに、大声を上げて泣いた。

・・・・・

……そして、泣いて、泣いて、泣いて　。

どれくらいの時が経つたのか、早海は泣き腫らした眼の上に冷たい氷嚢^{ひょうのう}を乗せ、暗い自分の部屋に寝転び考えていた。

自分の気持ちが、父親の気持ちが、祇園の言つとおりであるかは早海自身にも分からない。

だが一度それを認めて泣いた彼は、何処かすつきりしていた。そして実はプライドの高い彼は、こんな醜態はもう一度と晒したくなとも思っていた。

八つ当たりだと言われても、人の隠していた気持ちを暴き出すよ

うな、「もしかしたら」「のまやかしを見せた、あの少女が憎いと思つた。こんな気持ちにした彼女を恨んだ。

逆にそうして憎む「対象」として「彼女」に感情のベクトルを向けることでしか、自覚したこの深い寂しさを葬り去ることが少年には出来なかつたのだ。

こんな気持ちになつてしまつた自分を消し去ることが、他の方法では出来なかつた。早海は彼女の所為で、無理矢理そんな気持ちにさせられたことにした。

だからその原因である彼女にこの寂しさを埋めさせようと、彼は密かに歪んだ心の内に決める。

余分なことを言わなければただの憧れの先輩で終わつたかもしない少女は、この日から彼にとつて忘れられない存在となる。

「己の心を残酷に破壊し、まやかしで包んだ者として。やはり唯一の己の心に触れてきた相手として。

「もしかしたら」の魔法を使使した、絶対的な存在として。

そのように自分を操られたことが悔しく、だからこそ早海は次日の日から再び元通りの笑顔に戻つた。絶対に彼女にだけは、昨日のように寂しさから泣きじやくつたことを悟られたくはなかつたからだ。

祇園は昨日の出来事で早海を怒らせたのではないかと緊張していたが、彼の態度がいつもどおりに戻つていたので、安心したようであつた。いつもと変わらず、その軽口に心じ、彼を怒鳴り始める。よつて昨日のことは気のせいか、と彼女もまた早海を失いたくないという深層心理から、その気まずい出来事をなかつたことにしようとした。彼女への彼の笑顔の裏側が、もう昨日までと違つ」とも知らずに。

自分がされたように、いつかその清らかな心を破壊してやるうといふ

彼が抱いた黒い願望も知らずに。

・・・・・

「つて、俺が一年の時の話、覚えてねーだろ」

早海は祇園の頭の上で苦笑した。その腕は、現在の大人になつた彼女を閉じ込めている。

「えつと……は、早海が急に不機嫌になつてびっくりしたことがあつたのは、なんとなく、覚えてる……」

パニックになるとよくわからないうことを直感のままに口走ってしまう癖を反省する祇園だが、ここまで彼の感情を左右し、五年間も自分を想わせ、執着されることになるとは思わず、ただ驚くばかりであった。

「「」、「ごめんね……」

その太い腕に触れながら、身を小さくして謝るが、彼の嘲笑がそれを一蹴する。

「今更」

祇園は益々居たまれなくなる。そして彼を傷つけ続けた自分は、彼により何をされてももう仕方ないのだな、と觀念もしていた。早海の話は続く。

「今度は、俺が祇園のことを滅茶苦茶にしてやりたい、ゼロになるまで壊したい、俺がそうされたみたいに祇園も俺じゃなきゃ駄目なようにしてやりたい。そう思つていつかどうにかしてやろうつてまとわりついてたし、だからこれでもかつてほど、優しくした。逆にもしかして俺のこと好きなかなつて、馬鹿みてーに期待したこともあった。実際、こっぴどくフランクされたけど」

三年の終わりの昇降口での出来事を思い出し、祇園は再び罪悪感で首を竦め、慌ててフォローする。

「き、嫌いじゃなかつたよ？ なかつたけど

恐くて……。私な

んか、男の子に好かれるわけないって思つてたし。早海だつて冗談みたいにしか言つてなかつたし、引越しもするし。これで終わりになるから、それが寂しいから、最初からなかつたことにしようつて……その時は、そう思つてた

だが、今は違う。今度は勇気を出して彼を求めるよつと思ひやつてきたのだ。それを証明したく、祇園は早海の方を振り向くと彼の胸のシャツをぎゅっと握る。

「ほ、本当は、その頃から、好き　だつたかも知れなかつた。だから、恐くて　」

まるで今更の言い訳のようであるが、彼女がそう口にするとき早海は苦笑して彼女の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。そしてその上に顎を乗せると、今一度彼女を抱き締める。

「うん、分かる。でもそん時は俺もガキで分かんなかったからさ、

祇園が彼の前から姿を消した後、早海の身体が成長期に入る。高校に入る頃には彼も急激に背が伸び、同世代の女子の殆どを見下ろすようになつていた。

精神面、外見、両方の変化から高校生になつてからは、中学生までと女子の男子への態度が違うということを、彼も周囲の少年と同様感じ取る。

それ以外は彼を取り巻く状況は変わらないままであり、そのまま祇園の居ない日々を送ろうとしていた　が、それは出来なかつた。そしてそれはあの少女以外為しえない、と幾人もの女子と知り合い付き合つこともあつたが誰もその穴を埋めることができず、余計にそう確信するよつになつていた。

欲しいのに、彼女は自分を拒絶した。自分の前から何も言わずに姿を消した。

会いたくとも、会えない。

その鬱屈とした日々は、早海にとっては非常に辛く、今となれば忘れないほどである。

祇園のことを忘れようと、付き合っていた女を抱いたこともあります。そんなことをしても、尚更虚しくなるだけであったが。誰でもうつともあの時のように彼をあつさうと切り崩せるような、そんな絶対的な存在は現れなかつたのだつた。

そう思うことと実物の顔が見えないことで感情は悪循環となり、彼女の存在は彼の中で神格化されてしまい、より絶対的なものとなる。

「それ」でなければならぬ、と彼は何かに取り付かれた様に思い込み、そんな気持ちになつてしまつことに苛立つた。

何故ならその存在は自分の前から去り、手の届くところではないのだから。だからそのジレンマを忘れようと何度も何度も試みたが、結局はどうにも出来なかつた。

その苛立ちから心がさされ立ち、父親との関係が希薄であつたこともあり、早海も当時は人には言えない後ろ暗い行為もしていた。しかしあの眞面目な彼女にもう一度会いたいならば、胸を張れる生き方をしていくことはならないと何処かで思つており、警察の世話になるような犯罪には手を出さず、ただ攻撃的に、悶々と日々を過ごしていたのであつた。

「そん時は、思い出したくも言いたくもないくれえに荒れてたけど、ある日ふつと、思つたんだ。祇園に会いたいって。それ以外に、もうスッキリする方法はないつて。だからもう、諦めて従うことになつた。やつやつて認めた方が、楽になれるつてようやく気がついた

意地を張つていた高校生時代だが、ある冬の終わりの夕暮れ時

あの日拒絕されたのと同じ、誰も居ないオレンジの色彩に染まる昇降口で、彼はふと彼女の幻影を見て、自然にそう思つた。

後は以前に説明したとおり。一度口にするとその言葉は命を持ち、彼はその覚悟をあつさりと固めることが出来た。

既に早海も高校三年生。彼女にもう逃げられないよう、将来的なことも考え大学を追うこととした。様々な手段で調べたところ、彼女の通うことになった大学が近県の国立大学でレベルの低くない総合大学であったのは、彼にとっても幸いであった。

また父親や学校の世話になりたくない一心で、心が荒れても学校の成績は悪くなかったため、それほど困らずに受験も無事終わる。

そしてようやく再会出来た彼女は、早海がここまで悩み苦しんだにも関わらず、あの日から変わらない、「少女」のままであったのだ。それには愛しさを通り越し、いつも呆れてしまうほどだ。だが彼女が変わらないで居てくれたことには、自分の長年の想いを否定されたような気分にならず、そこには安堵した。

呆れ返つて、ほつとして　彼は久しぶりに、心から笑つた。

そして散々笑つた後、少年の時よりも激しい憎惡のような愛情のような感情を、彼女に對して改めて抱いたのであった。

再会した後は、己の方に眼を向けさせようとして、彼は彼女にひたすら優しく接する。

彼女は別の男のところに逃れようとしたが、それが出来なかつたので、彼を求めるようになつていぐ。そしてその気持ちが彼の思惑通り次第に能動的なものになり、五年間や否定していた当時の想いまでも彼女は肯定するようになる。

彼の望みは叶い、彼女は彼女なりに早海により心の中の何かを壊され、新しいものを構築したようであつた。

そして大人になった今は、「身体」と言う確かなものをこうして寄せ合うことですれ違っていた二つの想いを徐々に重ね、ようやく今、一本の線に繋がろうとしていた。

欠けていたパズルのピースを全て埋め、相手の気持ちを理解し、一人でそれを現実に共有しようとしている。

ただ、傍に居たかった。

五年も掛かつたが、本当はずっと互いにそれだけを望んでいた。「それ」以外に代わりがないと、互いに愚かなほどに妄信して。

「だから、私も会いたかったって、言つたじゃん……」

申し訳ないようには祇園はそう言つと、早海の憎悪も含んだような深い想いは少々恐くはあったが、それでも今度こそそれを受け止めようとその胸に寄り添つた。

ほんの小さな願いが子供のままであった二人を何年も苦しめ、渴望させていた。互いに「もしかしたら」で始まったほんのひとひらの幻想が、ここまで深い想いになつてしまつとは、その時、二人共に思わなかつたことであろう。

何が一人にとつて正しかつたのか、誰にも分からない。

だが、今はその存在が、もう腕の中にある。触れられる距離にある。

まだ足りないものはあるかもしけれないが、そのように信じられるもの、心を解放するものがあり、それを手に出来たことは、孤独であつた一人にとって幸運であり、「救い」と呼べるものではないだろうか。

もしかしたら、ただ一筋の光を探して足搔いていただけかもしれない。

もしかしたら、それは幻想かもしれない。ただ若いから、むきになつてそう信じ込んでいるだけかもしれない。

それでも今は、それでいいと思えた。後悔はしないと決めて、その手を伸ばしている。

その手を握り返されたならば、それに救われたと思つた瞬間があつたならば、それを妄信するだけだ。

自分が信じていれば、恐くない。自分を信じることを、恐れなければ、よい。

・・・・・

静寂が、訪れた。

海辺の旅館であるが窓を閉め切つているので、外の音は遮断され、一人きりの部屋は冷房の人工的な音が微かに聞こえるばかりである。早海が話した最後の本心を夢中になつて聞いていた祇園が、ふと我に返つてみると、自分が男の膝の上で抱き留められ、その胸にひとりと寄り添つている姿であることに気付いた。

自覚すると途端に恥ずかしくなるが、彼女が身をすらそつとしても、今度こそ逃すものかといづみづに早海に抱き返されてしまい身動きがとれない。

部屋は涼しいのに、触れている部分は服の上からでも熱く感じられた。

結局、両想いつてやつになつたのかな……。

「一歳まで男性と付き合つた経験が無い祇園は、こうした駆け引きをすることも初めてである。だからこの会話の結果を「そつ」言ってよいのか分からず、何よりそんな簡単な言葉で済む関係なのだろうかと、今までの話から思つてしまつ。

しかし、どのような想いから始まつていたとしても、結論的に早海の要求するものは「恋人関係」であるのだし、その想いの正体が「何」であろうと一人が互いを想い合つてゐるという「双方の関係」つまりは両想いであることは確かなのだろう、と祇園は考えた。

その眼には今までと同様の、暗い色は残つていた。そして思い上がりかもしれないが、「祇園」を求めて頼つてゐることも、彼女には感じられた。それが女性としてなのか、家族の代わりとしてなのか、祇園にも分からぬ。

だが、迷惑だと重いとかは思わなかつた。寧ろ「自分」を必要とされていることが嬉しいと彼女は思つてゐる。

逆に早海を頼つても、彼もまた祇園を受け止めてくれることを、今までのことから知つてゐるからだ。

決して彼女だけが彼のお守り役になつてゐるのではない。祇園も彼の優しさに甘えてきた。

その、双方の関係。寂しがり屋だからか、「おそれい」の孤独だつた子供だからか。甘えることがよいことは分からぬが、彼女が求めるものと、彼が求めるものが一致してゐた。

少なくとも、一人はそう信じてゐる。だから五年経つても諦め切れず、今、こうして分かり合えたことに安堵してゐる。

祇園がもしも、今この気持ちに一生を賭けられるか、と問われれば、少し返答に悩むがどちらかしか答えがないならば、「是」と答

えてしまつだらけ。それくらい、この相手には救われた。

うん。早海が、いいな。

祇園はその結論に達し、彼のTシャツに縋りついた。恐れはあるが自分を信じ、相手を求める勇気を出そうと決めた。

誰もがそうして迷つたり一歩踏み出したりして生きているのだろうと、ふと斯波研や友人の面々が思い出された。知らない土地まで一人で、緊張してやつてきたからか、妙に彼らが懐かしくなる。

そして胸を張つて笑つて生きている彼らと同様、色恋沙汰であろうそういう「勇気」が出せた自分を誇らしいものだと彼女は感じていた。

常に何処か自信のなかつた祇園がそう思うことは珍しいことで、そんな想いにさせてくれた早海のこともまた誇らしいものだと思い、彼に感謝したい気分であった。

それでもこの先彼に裏切られることがあれば、絶望に叩き落されなのだろうが、そんな時でも自分自身を信じていられるくらい、強くなりたいと今の彼女は思つていた。

早海が父親とこの先、どのような関係を築くのか誰にも分からぬ。幼さゆえに無神経なことを言つてしまつた過去も消せない。親子関係の溝は大きいようであるが、それも支えてやりたいな、と祇園は思つた。それは同情心だけではないだろう。

早海が傍に居てくれたことに安心出来たように、頼つているばかりでなく彼を支えてやりたいと、この相手だからこそ思うのだ。

祇園はそんなことを考えながら早海に寄り添つていたが、彼も同じように両想いになれたのか疑問に思つていたようで、遂に動きを仕掛けてきた。身体を起こされ、確かめるように顔を覗き込まれる。先程伝えたので、早海には祇園の気持ちを伝わっているだろう。

瞳がまた、それを物語つている。

見詰められてどぎまぎしてしまい、祇園は顔を背けた。身体は相手の腕に閉じ込められたままに。

この状況で、「そういうこと」にならない、という選択肢などないのだろうが、それに流されてもいいと思う彼女が、祇園の中で確かに存在している。逆にこんな想いの中では結ばれたらどんな気持ちになるだろうと、本能的に期待している部分もある。

何かに心を奪われることを恐れていた少女時代。「それ」もただの生殖行為で、呆気ないものだと斜に構えていた。

しかし行為自体は三大欲求や種の保存の為であつたとしても、相手のことを肉体を通して知りたいと、自分の身体ひとつで自己主張してみるのも、一度きりの人生、悪くないかなと今の祇園には思えた。早海となれば大丈夫だろうという、信頼もあった。

「私のこと、好き？」とありきたりながら確かめようとも祇園は思つたが、今の話からすれば単純に頷いてもらえない可能性もあり、余計に混乱しそうである。相手の所作や自分への態度から、それも含んだものであると思うしかないのだろう、と彼女は判断した。

実際のところ、そんな二文字では表したくないと思うほど、早海の中では深い感情であるのだが、そこまでは彼女もまだ理解していない。

しかし、それはこれから時間や様々なものを重ねていく中で気付いてやり、理解していくのだろう。今の祇園にはその覚悟が備わっていた。

「本当にいいですか？」と言いたいよに、元通りに、早海も黙つて苦笑している。

もつといつものように甘い言葉でぺらぺらと語り掛けてくるかと思つたが、本性を現した彼は意外なほど静かなものだつた。

余分な言葉も無く、祇園の肩を引き寄せ顔を屈めると、彼女

の唇を、万感の想いを込めて奪つてくる。

それを受け止める祇園も、「幸せ」だと自然に感じた。そんな自分で、呆れてしまいながらも。

想いを交わした上で、初めて身体を重ねられる。

それは十九と二十の男女にとって、初めての経験であった。

・・・・・

今までとはまた違つた意味合いで、祇園の胸が期待に高鳴つていた。

敷かれていた柔らかい布団に押し倒され、衣服が全て剥ぎ取られる。現れた肌を、早海の指が辿る。

頭もぼうつとしてしまい冷静になどなれないが、その一瞬一瞬は、尊いものであると彼女はぼんやり感じていた。

ただの肉欲だと言われようとも、それでもこれだけ胸の震えるセックスは一度と経験することはないのではないか。一人共に、そう思つていた。

赤い刻印を刻み込んでいく。同時にそれを、相手の心と、自分の心にも刻む。

互いに相手へと腕を回す。もう一度と離さないでと祈るように。それを抱き返されることを期待して。そしてその願いは、叶う。

あたたかい。

身体のぬるい温度と匂いに、自分も相手も生きていることを実感する。

心が解放されているからか、感じる場所を刺激されれば、祇園の口から高い声が自然に溢れ出す。もう、我慢出来ないと思つた。

単なる快樂以外の何かに突き動かされ、まるで麻薬に漬けられたように、心を狂わされている。恋の魔力とは、恐ろしいものである。

声を出してはならないと戸惑う彼女に、「部屋広いし。聴こえても明日には帰るんだし」とあつさり言うアルバイト生の早海。この時ばかりは彼に蹴りのひとつでも入れたくはなつたが、そんな理性も直ぐにかき消されるような、身も蕩ける行為が続行される。

心を相手に解放するから、身体も好くなるのだということを、祇園はこの夜覚えた。

今までの彼女はそうすることに抵抗があつたが、この悦びはこれから「大人」になりゆく特権として思い切って飛び込んでしまえと、ひとつつの殻を破つた結論にむこひの時達していた。

そして、彼に溶かされていく。あの、中学生までを過ぐした土地に、一人で行つた日のよう。

初めて通された、早海の家での出来事を思い出す。しかし今日のこれには、その時以上の感慨がある。

ちなみにあの日彼が家に祇園を通したのは、勿論彼女に自分を理解して欲しかつたということもあるようだが、中学生の時、祇園の言葉で涙を零すことになったあの暗い家で、彼女を犯したくなつたという濁つた願望があつたことを、後に聽かされることになるのである……。

・・・・・

そんな思いを胸に、どれくらいの時、愛撫されていたのか。

初めて異性の前で生まれたままの姿となつた祇園が、早海に散々屠られ、痙攣しながら縋りつき、本性を暴かれ それこそ放心状態にされた後、遂に彼女の身体が彼の欲望を叶える瞬間がやつて来る。

「恐い……」

眼の前を過ぎる大きな赤い影に、祇園は不安を素直に零した。痛みを伴うことと、自分が自分でなくなりそうなことが。

早海は一呼吸置いた後、どうしたいのかと落ち着いて祇園に尋ねてきた。そんな彼を、祇園の方が驚いて見上げる。

今度こそ、結ばれたいだろうに。得意の適当な甘言を囁き、自分の恐怖を麻痺させてしまえばいいのに、何故そんな無骨なことをするのだろうか。逆にそんな風に優しくされるほうが、ほだされてしまうではないか……。

早海の心配そうな顔に、祇園は苦笑してしまってやつになつた。そして恐怖も和らいでいく。

彼はとんでもなく不器用か、策略家のどちらかだろう。いや、どちらもかもしれない。しかし、自分に無いその部分も彼女には愛しいと思われた。

その一線を超える勇氣くらい自己責任でなんとかしよう、と祇園は決めた。もう観念して欲求と彼に身を任せようと、不安や貞操觀念など皆になつているもの全てのものを、彼女自身の心の中で壊していく。

固い彼女がそう決断する瞬間を、早海はずつと待ちわびていた。「いいよ」と彼女の濡れた唇が動くところを、切ないほどの表情で彼は凝視している。

その顔を見上げる祇園には、「もしかしたら」の言葉に心を揺らがせたという中学生の純真な少年が重なつて見える気がした。

しかしその幻影は一瞬のことと、その後、祇園の脚を押し広げ、彼女が少しでも苦しまないよう配慮しながらも理性をかなぐり捨て暴走し始めた彼は、「男」として認識された。

そして、「その時」が訪れる。

「いたい……っ！」と、祇園は正直に悲鳴を上げてしまつ。体験したことの無い痛みであるからだ。

それでも愛しい相手がそれを何よりも望んでおり、それを自分の身が叶えていることをやはり幸せに思つ。苦しくとも、他の人間とは為し得ないことをしている。他の人間とはここまで気持ちにはならない。それもひとつ愛情の形であり、自己顯示のひとつであるのだろう。

行為の最中であるが逆に痛みから逃れたい一心で、本懐を成就し興奮した早海に腰を揺すられ唇を吸われながら、祇園はこの痛みを別のものに変換しようと、懸命に考えていた。勿論、無理矢理そう考えたわけではなく、自然と心に浮かんだことなのだが。

痛かつた。それでも繋がつたまま一糸纏わぬ早海と抱き合い囁き合う瞬間は、これまでの人生には体験したことの無い、至高の瞬間であると祇園には思われた。それは相手も同じであると、彼女の名を呼ぶその表情と声色から信じたかった。

互いの身体は別々のものなので、感じることは痛みと快感という男女では間違のものだが、「本能」という部分でひとつになつてゐる。そしてこの瞬間をこの先も何度も重ねられるよう、永遠に続くよう、それこそ若さゆえの思い込みでも幻想でも 途切れそうな意識の中、願つていた。

それが互いに抱いている願いであることに、まだ二人は気付いていなかった。

それを互いに口にし合えば、簡単に叶うのだといふことに気が付くのは、もう少し先のこと。

•
•
•
•
•
•
•
•
•

Hペローグ 忘れやはするへ完結

一人がその夜、初めての熱い情事を何度も繰り返し、碎け散つた瞬間から時は遡り、一年半前。

三月を迎えるとしている夕暮れ時は、空気はまだ冷たくとも、オレンジ色の陽光が長く伸びていた。

いつもは友人やいわゆる「カノジョ」などが一緒なのだが、珍しく誰も居ない昇降口で、高校二年生の少年　白川早海は靴を履き替える。その身体は決して華奢ではなく、女の子にも間違えられた中学一、二年生の頃よりも二十センチ近く背が伸びている。

まだ未成年であるが身体も環境も変化しており、色々な経験もしてみた。少年は、それで自分は変わったつもりでいた。

人当たりがよく空気も読むようになっていたので、友人でも女でも常に誰かが傍におり、嫌な感情に飲み込まれないよう自分を保っていた。

それでもこうして一人きりになれば、何かが心に引っかかり、逃げようとする彼の心を闇で覆わんとする。

自分は変わったつもりで居た。

それなのに、早海は常に胸に穴が空いた気分であった。たとえば女を抱いた、その時に快感を得る。それなのに終わった後、何か虚しい。

中学の時から続いているが、特に力は入れていない部活動。それでも友人と笑い合っている。夜の街に繰り出すアルバイトでも、人の世界を垣間見ることが出来、自分が大きくなつたような気分にさせられる。

それなのに、常に何かが足りないと思わされた。

それが三年前のことと起因することを彼は知っていた。

思い出にせねばならない。「相手」は自分を拒絶したのだから。忘れよう。何も無かつた。自分は元々一人だった。

誰にも救われたことなど、無かつた。何も求めたことは、無かつた。

あの時のもやかしに、もう一度嘘でもいいから助けられたい。そんな感傷など、抱いたつもりは無かつた。自分はこれからも一人で居ればいいのだ。

幾度ついたか分からぬ、乾いたため息を十七歳の少年がついた時、

ふと、一陣の風が迷い込んだ。

季節は三月になる頃。日差しが徐々に柔らかくなるが、風は冷たい夕暮れ時。

しかし、その風はほんのりと温かかった。外からの砂埃の匂いが、何か懐かしいもの思い出させる。

少年は顔を上げた。

其処にはセーラー服姿の三つ編みの少女が、無表情で立っていた。

『あんなチビ、好きな、わけ、ないっ！』

拒絶された、冬の終わりの日。

『もしかして……たみしかつたり、する？』

救われた、秋の終わりの日。

一体彼女は、自分のことをどう見ていたのか、彼は知りたかった。彼女だって寂しかった筈だ。彼女にも自分と同じ気持ちになつて自分を求めて欲しいと思っていた。

独りよがりの、少年の強引な欲求。

その眼は、俺を見ているのか？

少年はふと氣付く。そう、自分からはつきりと要求したことはなかつた、と。

その少女の幻影は、一瞬で消えた。

少年は唇を歪め、声も無く、笑つた。

三年経つても、なお。いつして、忘れられない。

あと一年経てば、忘れられるだらうか。あと十年経てば、忘れられるだらうか。

それまで、こんな気持ちで居なくてはいけないのか。

会いたい。

そんな幻覚を見るほどに。心に浮かんだ言葉は、ただひとつだけであった。

恐がっていたのは、きっと自分の方なのだろうと、風が通り過ぎた後の少年の心は、自然とその結論に至つた。

拒絶されるのを恐れていたのは、自分だ。

こんな気持ちが、あと十年も続くくらいなら、何処までも追いかけよう。

自分の気持ちを認めて、相手に伝えよう。拒絶が恐いなら逆らえない環境を、彼女を作ってしまえばいい。

どす黒く、仄かにあたたかい。そんな覚悟が、この時、少年の心の中に生まれる。

その一年と数ヶ月後に、一人は再び出会いのであった。

・・・・・

「今回、中々よく出来てるね」

斯波はレポートから顔を上げ、三人の学生を教授席から見渡すとそう言った。

九月に入り、件の「言靈」の飼育方法云々のレポートを提出しろという、夏休み中の斯波研ゼミの日がやってきた。この大学は十月から後期授業が始まる為、まだ休みは続いている。

ほぼ徹夜でレポートを書いたと見られる祇園、光、弥栄の三人は、それぞれに「遊び倒した」という黒い顔をぐつたりとさせて、それ机に伏したり、無気力にパソコンの画面をスクロールしたりとしている。

「夏休み、なんか楽しいことあったからかなー？」

朗らかに笑う斯波に、三人は顔を見合わせると、「は、は、ははははは」と微妙な表情で笑い合つ。

「祇園ちゃんと弥栄くんが、じついう内容で書いてくるとは思わなかつたし」

斯波は先程発表させた二人のレポートを再び一瞥する。祇園は弥栄と顔を見合わせると、少し氣まずいが、はにかんだような笑顔を浮かべた。

彼もまた、これまでと変わらない人の良さそうな顔で苦笑する。その向こうで光が大きな欠伸をした。

「言葉」というものの持つ見えない力のよつなものについて、祇園は自分の感じたことを斯波の言うように、強引な理学的展開に持

つていつただけなのだが、やはりこの夏の出来事から視野が少し変わったのだろうか、と首を傾げる。

それは同じように大学一年の一夏を終えた、弥栄も光も同じである。

「『もしかしたらの神様』って、祇園ちゃんにしてみれば意外な表現だけど、面白いじゃない」

斯波はそう言うと、レポートを書類の上に置いて笑った。それは祇園が例として挙げたものだが、その言葉は早海の話からふと思つたことであつた。しかし内容に困つて書いたはよいものの、まるで彼への想いそのものをあからさまに綴つてしまつたようで、改めて言われると祇園は恥ずかしくなつてくる。

「ほんとーに、居るんですかねー。その神様とやらは

光が欠伸をかみ殺しながら机に伏し、眠いので適当に話題を拾つて問いかける。

「言葉にしたんだから、『居る』んじゃないのかな。少なくとも、祇園ちゃんの中には

斯波の笑顔に、祇園はかしかしと頭を搔く。

眼に見えないもの、形の無いもの、それを自分が生きていいく為に信じる。それはある意味、宗教と変わらないようだが、そうすることによって、どうにか自分を保つている。

絶対的な存在や信条を眼に見えなくとも心の中に持つことで、自分の生き方を決めようとする。無ければそれを一生賭けて、捜し求めてしまつのかもしれない。

「まいどー！　『笑うじじみの味噌汁定食』、お持ちしましたー」

其処へ、今しがた考えていた人物の声が疲れ切つた空気の研究室にはつらつと響き、祇園はぎくりとしてしまつた。一線を超えたと、いうのに、いや逆に超えたからこそ、恥ずかしくて皆の前で彼には

会いたくない　が、思わず習性で突っ込んでしまう。

「夏休みって、生協休みじゃないのかよ！」

「あ、生協じゃなくて近くの定食屋。賄い出るからたまにバイトしてますよ」

「わーい、おなかすいたー」と斯波が呑気に箸を割る音を聞きながら、一週間も住み込みのアルバイトをしていた後に、またアルバイト三昧の毎日に戻ったくせに、毎日やたら元気のよい後輩を祇園は睨み上げる。

未だ確信犯的にこんな場所へと現れるこの相手に、後でどう制裁を加えてやろうかと思うのだが、

「だつて誰かが祇園さんに手え出したら困るから」と笑って呟くと、これまで、そしてこれからも祇園の前に現れる

だろう様子を見せるのだ。傍に居られなかつた五年分の空白を、埋めようとしているにしろ。

毎晩ではないものの、夜になれば会えるだらうがーと、そんな早海に突っ込みを入れたくなる祇園。この男を選んだのは自分であるものの、一見爽やかなように見えて歪んだ青年の扱いには手を焼いてしまう。

それが嫌ではない　といつ自分自身にも呆れるのだが。

男と女の抗えない業のようなものを何処かに感じながら、祇園がにやにやと笑う早海を睨みつけてくると、

「夏が終わったのに、暑いねえー」

机に寝そべる光から冷やかしが飛び、そちらにぎりりと視線を向ければ背後から早海に、

「でしよう？」

と皿慢げに言われ、また怒りをぶつけんと忙しく後ろを振り向く。

呑気に昼食を摂り続ける斯波と一人の相手で忙しい祇園へと、弥栄がご丁寧に早海の分も併せてアイスコーヒーを淹れ、「あー、や

つぱりたったー」と美幸が現れ。

「ひして、日々は過ぎていくのだから。

乗り越えなければならぬ問題は、これから更に社会に出て、歳を取ることに増えていくのだろうが。

しかしあだひとつ、自分にとって掛け替えがないと思えるものを信じて、この先もその手を離すことも離されることも無ければ、それはどんなに幸せなことであろうか。

「もしかしたらの神様」は、今、此処にいるのみ。

～END～

Hプローグ 忘れやはするく完結》(後書き)

終わりました…。約5ヶ月に渡り連載いたしましたが、お付き合いくださいました皆様、誠にありがとうございました! いただく感想や応援メッセージ等に大変励まされてまいりました。皆様には心より感謝申し上げます。

この作品は10何年前に生まれたキャラクターやお話などをリメイクして完成させたものなので、内容は別として自分としては頭の中についたものを形に出来てとても楽しかったです。

そして現在もなお、らぶらぶな2人のその後がまだ書きたくて、続編「かみさまの。」を連載しております。続編はより2人の仲を深く描こうとR18作品として、ムーンライトノベルスさんにて連載しております。

<http://novel118.syosetu.com/n1942k/>

禁指定が違うことから直リンクをあえて貼りませんので、興味のある方はお手数ですが個人サイトの18禁コンテンツの方から作品リンクを張つておりますので、そちらから探して読んでやってくださいませ(ムーンライトノベルズさんでタイトルやtakaoで検索していただいても読めます)。前半は本編よりも甘くえろい2人の様子を、そして後半では早海の過去や家族のことにも触れています。

とともにかくにも、この長いお話を最後まで読んでくださった皆様に、深く御礼申し上げます。本当にありがとうございます!!

社大(takao)

この作品にもしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手

メッセ（非公開／ブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開／感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1568e/>

もしかしたらの神様。

2011年5月10日09時03分発行